仙台市文化財調査報告書第236集

後河原遺跡

―第3次・4次発掘調査報告書―

1999年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第236集

後河原遺跡

―第3次・4次発掘調査報告書―

1999年3月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、まことに感謝に堪えません。

近年、中田地区もとみに住宅化が進み、昔の面影はだいぶ失われてまいりました。今回の後河原遺跡の調査もそのような流れの中で実施されました。本書では、調査地点も近いことから２つの調査の成果をまとめて報告しております。大きな柱穴を持つ建物跡や旧地形の様子など、今回も多くの情報を得ることが出来ました。

21世紀も間近に迫り、先達らの残した貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら未来へと継承していくことが私達にとっての責務であると考えます。

本書は、このような調査成果を収録したものであり、多くの方々に積極的に活用され学術研究の場で役立てば幸いに思います。また、この調査成果が研究者のみならず、地域の皆様にも地元の歴史を解きあかす貴重な資料であることを感じて頂ければと思います。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行に際してご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成11年３月

仙台市教育委員会
教育長　小　松　弥　生

例　　言

1．本書は宅地造成に先立って行った後河原遺跡第３次調査・第４次調査の発掘調査報告書であり、すでに公表された発表会資料等に優先するものである。

2．出土遺物の整理と本文の執筆・編集は、第３次調査が平間亮輔、第４次調査が五十嵐康洋が担当したが、プラント・オパール分析とその報告に関しては㈱古環境研究所に依頼した。

3．発掘調査および報告書作成に関しては次の方々から協力を受けた。
　大和団地株式会社東北支店、福仙興業株式会社、桂島建設株式会社、東北歴史資料館

4．本調査における出土遺物・実測図・写真などの資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1．本書中の土色及び色調については「新版標準土色帖」小山、竹原1997を使用した。

2．本書使用の地形図は国土地理院発行５万分の１「仙台」（平成８年）である。

3．本書中の北は真北を示している。

4．遺構の略称は次の通りで、それぞれに通しNo.を付けた。
　ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＤ：溝跡、ＳＫ：土坑、Ｐ：柱穴等のピット

5．竪穴住居跡や掘立柱建物跡の柱痕跡はスクリーントーンで示した。

6．掘立柱建物跡模式図中の数字は柱間隔（cm単位）、（　）内は間尺を示す。

7．畦畔計測表及び水田区画計測表の数値のうち（　）は完全には検出できなかった畦畔等の現存の値である。

8．図上復元した遺物実測図は、中心線を一点鎖線（－・－）で示した。

9．遺物実測図のうち、土師器の黒色処理はスクリーントーンで示した。

10．遺物の法量のうち（　）は図上復元値である。

11．鉄製品・石製品の長さのうち（　）は現存値を示す。

12．遺物観察表において胎土中の白色針状物質（海綿状骨針）は白針と表示した。

13．第１編の註は各節ごと、引用・参考文献は巻末にまとめた。なお、第２編の引用・参考文献は第１編に準ずるため割愛した。

目　　次

第１編　後河原遺跡第３次調査

第１章　はじめに……1
第１節　調査にいたる経緯……1
第２節　調査要項……1
第３節　遺跡の概要……2
１．地理的環境……2　２．歴史的環境……4
第４節　調査方法……6
１．調査区の設定……6　２．調査方法……7
第５節　基本層序……7
第２章　検出された遺構と遺物……11
第１節　各層上面における遺構の確認状況……11
１．基本層の欠落と遺構の確認面……11　２．耕作による攪拌と遺構の確認面……11
第２節　Ⅳ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅲ層除去後）……11
Ⅰ．Ⅰ～Ⅲ層除去後の状況……11
Ⅱ．遺構と遺物……13
１．竪穴住居跡……13　２．掘立柱建物跡……14　３．溝跡……19
４．土坑……28　５．ピット……34　６．小溝状遺構群……36
第３節　Ⅴａ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅳ層除去後）……38
Ⅰ．Ⅰ～Ⅳ層除去後の状況……38
Ⅱ．遺構と遺物……39
１．掘立柱建物跡……39　２．小溝状遺構群……40
第４節　Ⅴｂ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅴａ層除去後）……42
Ⅰ．Ⅰ～Ⅴａ層除去後の状況……42
Ⅱ．遺構と遺物……43
１．掘立柱建物跡……43　２．溝跡……46　３．小溝状遺構群……48
第５節　Ⅵａ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅴｂ層除去後）……49
Ⅰ．Ⅰ～Ⅴｂ層除去後の状況……49
Ⅱ．遺構と遺物……50
１．竪穴住居跡……50　２．掘立柱建物跡……52　３．小溝状遺構群……55
第６節　Ⅰ～Ⅳ層・その他の出土遺物……56
第７節　Ⅶａ1層水田跡……57
Ⅰ．水田の構成と概要……57
１．水田の構成……57　２．検出・遺存状況……57　３．耕作土……59
４．水田域……59
Ⅱ．遺構の状況……59
１．畦畔……59　２．水田区画……60　３．水田面の標高と傾斜……63
４．水口……63　５．溝跡……64
Ⅲ．出土遺物……67
第８節　Ⅶａ2層水田跡……67
Ⅰ．水田の構成と概要……67

1．水田の構成……67　2．検出・遺存状況……67　3．耕作土……69
4．水田域……69
II．遺構の状況……69
1．畦畔……69　2．水田区画……69　3．水田面の標高と傾斜……69
4．水口……70　5．溝跡……70
III．出土遺物……70
第9節　VIIb層水田跡……73
I．水田の構成と概要……73
1．水田の構成……73　2．検出・遺存状況……73　3．耕作土……73
4．水田域……73
II．遺構の状況……74
1．畦畔……74　2．水田区画……74　3．水田面の標高と傾斜……76
4．水口……76　5．溝跡……79
III．出土遺物……79
IV．耕作土下面の状況……80
第3章　プラント・オパール分析……81
第4章　まとめ……88
第1節　遺物について……88
1．SI出土土器群……88　2．SK1出土土器群……88　3．その他の出土土器……90
第2節　遺構について……90
1．本来の掘り込み面の推定……90　2．遺構の変遷……90
3．掘立柱建物跡について……93　4．水田跡について……93
引用・参考文献……94
写真図版……95

第2編　後河原遺跡第4次調査

第1章　はじめに……143
第1節　調査にいたる経緯……143
第2節　調査要項……143
第3節　遺跡の概要……143
第4節　調査方法……143
第5節　基本層序……144
第2章　検出した遺構と遺物……146
第1節　調査の概要……146
第2節　検出した遺構……146
1．II層……146　2．IV層……146　3．Va層……148
4．VIIa層……148　5．あ層……148　6．VIII層・「い」層……151
7．VIII層・「お」層……151
第3節　出土遺物……154
第4章　まとめ……155
写真図版……157
報告書抄録……160

第１編　後河原遺跡第３次調査

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

後河原遺跡は仙台市の南端に位置する。昭和50年代後半に遺跡東半部の約1/3が宅地として開発されているが、開発に先立って昭和56年に第１次調査、昭和58年に第２次調査、昭和59年に民間の調査団による発掘調査が行われている（第３図、表１）。

平成８年、大和団地株式会社東北支店によって遺跡の西半部における宅地開発の計画が出されたため、協議の上同年５月４日に試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居跡や溝跡等が検出されたため本調査を行うこととなった。

調査主体	調査次数	調査年	調査面積	主な遺構・遺物	備考	文献
仙台市教育委員会	第１次調査	昭和56年	75m²	土坑・焼土・ピット、土師器・須恵器	下層は未調査	加藤他：1981
仙台市教育委員会	第２次調査	昭和58年	1,998m²	平安時代以前の水田跡、平安時代の溝跡・小溝状遺構群・中世の水田跡、石鏃、中世陶器、土師器・須恵器		佐藤・青沼 1984
埋蔵文化財発掘調査研究所	―――	昭和59年	1,023m²	中世後半～近世初頭の掘立柱建物跡・井戸跡・火葬場跡 土師器、須恵器、中世の陶器・磁器・漆器・中国銭	下層の大部分は未調査	佐藤・兼田 1985

表１　後河原遺跡における調査一覧

第２節　調査要項

遺跡名　：後河原遺跡（仙台市文化財登録番号 C-208、宮城県遺跡登録番号01273）

調査名　：後河原遺跡第３次調査

所在地　：仙台市太白区中田町字後河原18番-1外

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

担当職員　平間亮輔、根本光一

調査期間：平成10年４月13日～８月６日

調査面積：1,467m²

表土除去作業

発掘調査参加者

相原妥各子　青木　吉次
浅見　禮子　阿部すえ子
阿部　美香　阿部美枝子　阿部みのる　井筒　孝子　伊藤　薫
伊深みつ子　大友とし子　大沼みさほ　小澤　洋子　小田嶋祥子
加藤　友治　斎藤　慶子　佐竹志女子　佐藤とき子　佐藤　弘子
須賀　栄子　菅井きみ子　鈴木　いし　鈴木ちさ子　竹森　光子
只木恵美子　橘　英子　田中さと子　津谷　貞子　中村　昇
二本木年男　服部　和恵　福山　幸子　本間しづえ　谷津　和子
山田　惣次　山田千代子　渡辺かほる

整理作業参加者

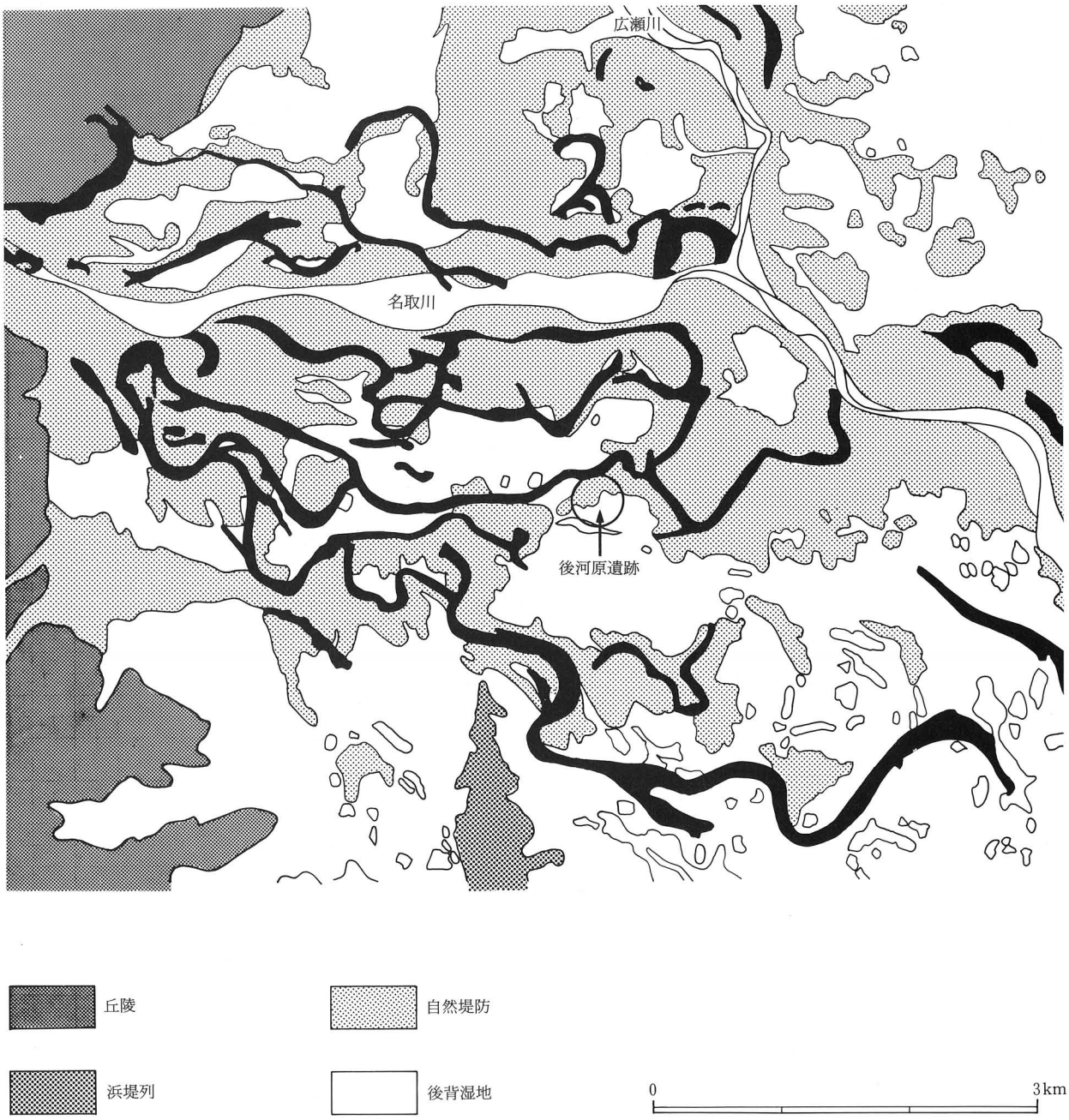
相沢美佐子　井上里映子　小林　由美　小山つるよ　佐藤　悦子
高橋　弘子

第３節　遺跡の概要

１．地理的環境

後河原遺跡は仙台市南端の太白区中田町にあり、JR 南仙台駅の南東１㎞、名取川の川岸から1.5㎞南に位置している。仙台市南東部の地形環境については当遺跡の西方約500m に位置する中田南遺跡の報文（太田：1994）に詳しいので、ここでは遺跡の位置する自然堤防とその周辺の状況についてのみ触れることとする。

名取川両岸には多数の旧河道と自然堤防が発達しているが、当遺跡周辺にも旧河道・自然堤防・後背湿地が入り組んで複雑な地形を形成している。遺跡は北側を旧河道で画された南北幅100～200m、東西長約1,000m の弧状の自然堤防の西端部上に位置しており、遺跡の一部は南側の後背湿地にもかかっている（第１図）。



第１図　遺跡周辺の地形分類図（松本：1994 を基に作成）

第２図　周辺の遺跡（1/50000）

No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	後河原遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防～後背湿地	古墳～近世	17	宮下遺跡	集落跡	丘陵	縄文～平安
2	戸ノ内遺跡	集落跡・周溝墓	自然堤防	弥生～中世	18	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
3	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	19	野田山遺跡	集落跡	丘陵斜面	弥生～平安
4	昭和北遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	20	耕谷遺跡	包含地	自然堤防	古墳
5	四郎丸館跡	集落跡・周溝墓・城館	自然堤防	古墳・平安～中世	21	鶴巻前遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
6	中田南遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～中世	22	金剛寺貝塚	貝塚	丘陵	縄文前・後・晩
7	安久東遺跡	集落跡・周溝墓	自然堤防	弥生～近世	23	十三塚遺跡	貝塚・集落跡	丘陵	縄文～古墳中
8	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安	24	雷神山古墳	古墳	丘陵	古墳
9	前田館跡	城館	自然堤防	中世	25	飯野坂古墳群	古墳	丘陵	古墳前
10	松木遺跡	屋敷跡	自然堤防	中世・近世	26	宇賀崎古墳	古墳	丘陵	古墳中・後
11	弁天囲古墳	古墳	自然堤防	古墳	27	高館城跡	城館	丘陵	中世
12	城丸古墳	古墳	自然堤防	古墳	28	前沖中遺跡	包含地	沖積平野	古墳～平安
13	仙台大塚山古墳	古墳	河川敷	古墳	29	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
14	今熊野遺跡	貝塚・集落跡・周溝墓	丘陵	縄文早・前、弥生～平安	30	下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
15	五郎市遺跡	集落跡・周溝墓	丘陵	縄文～古墳前	31	富沢館跡	城館	自然堤防	中世
16	西野田遺跡	集落跡・周溝墓	丘陵	旧石器・縄文・古墳～平安	32	富沢遺跡	集落跡・水田跡	後背湿地	旧石器～近世
					33	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防～後背湿地	縄文～中世
					34	大野田古墳群	古墳群他	自然堤防	古墳
					35	郡山遺跡	官衙跡・水田跡	自然堤防	弥生～平安

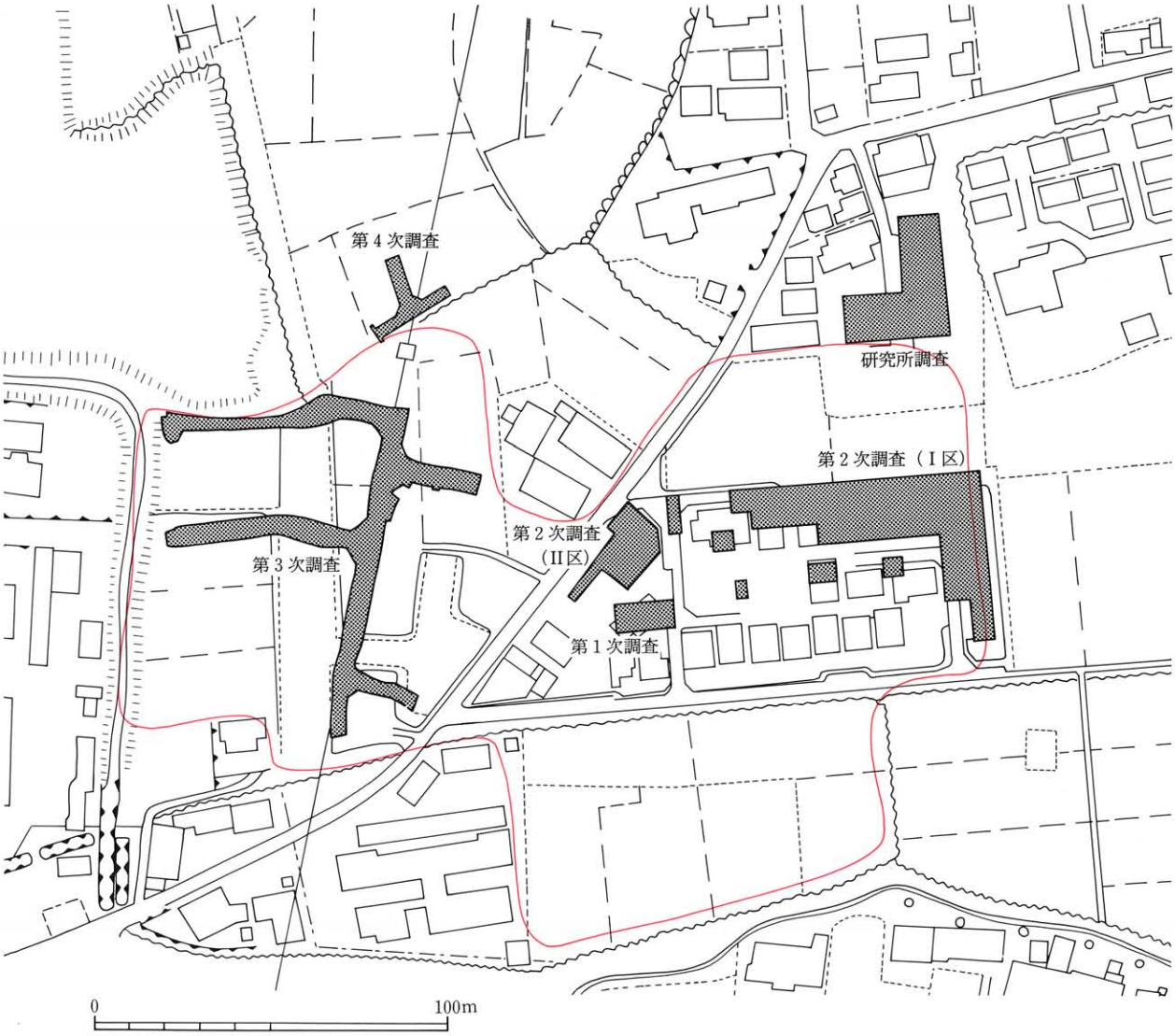
表２　周辺の遺跡地名表

第３次調査区は遺跡の西半部に位置し、自然堤防の末端に近いことから、調査区付近の自然堤防の幅は極めて狭く50m 前後と予想される。基本層の項でも述べるが調査区は南北方向の傾斜が顕著で、北側から南側に向かって標高が低くなっており（北側の畑と南側の盛土下の水田面との比高差が約１ m)、ちょうど自然堤防上から南側の後背湿地にかけて位置していると推定される。

なお、第４次調査区は第３次調査区北端から北へ30m 離れているが、この付近は自然堤防の北斜面からさらに北側の旧河道部分に相当する可能性が高い。

２．歴史的環境

名取川下流の平野部および西側の高館丘陵には各時代を通して多数の遺跡が確認されている。ここでは川の南岸部において、今回の調査に関連する古墳時代以降の遺跡を中心に概観してみたい。



第３図　遺跡全体図

古墳時代前期の集落跡は、平野の南西丘陵上に今熊野遺跡、西野田遺跡、野田山遺跡などがあり、低地の自然堤防上にも当遺跡の北東～東方1.5～２kmにかけて中田畑中遺跡、戸ノ内遺跡、昭和北遺跡、北西約1.5kmに安久東遺跡、南方約３kmに鶴巻前遺跡などがある。集落の生産基盤である水田は集落に近接する後背湿地に営まれたと考えられるが、名取川の南側ではまだこの時代の水田跡は確認されていない。さらにこれらの集落遺跡のうち今熊野、西野田、戸ノ内、四郎丸館跡、安久東の各遺跡と、西野田遺跡の南方1.5kmに位置する五郎市遺跡では方形周溝墓が発見されており、方形周溝墓と集落が密接な関係を持ちながら平野の各地に散在している様子がみてとれる。またこのころの高塚古墳としては、雷神山古墳、飯野坂古墳群、高館山古墳、宇賀崎古墳などがあるが、これらは西側の丘陵上に位置している。

この他の古墳時代の集落としては西方0.5～２kmの自然堤防上に中田南遺跡、清水遺跡、栗遺跡などがあり、このうち清水遺跡、栗遺跡では後期の遺構が数多く検出されている。

奈良・平安時代には清水遺跡、中田南遺跡などで集落の拡大が認められる他、中田畑中遺跡、安久遺跡、安久東遺跡、四郎丸館跡、鶴巻前遺跡などで集落跡が検出されている。当遺跡では畑跡の痕跡と考えられる小溝状遺構群が検出されている。

第４図　調査区配置図

中世になると平野西側の高館丘陵の上には高館城跡、熊野堂大館跡、川上大館跡など大規模な山城が築かれ、丘陵の麓に位置する大門山遺跡付近は中世を通じて大規模な信仰の場であったことが明らかにされている。

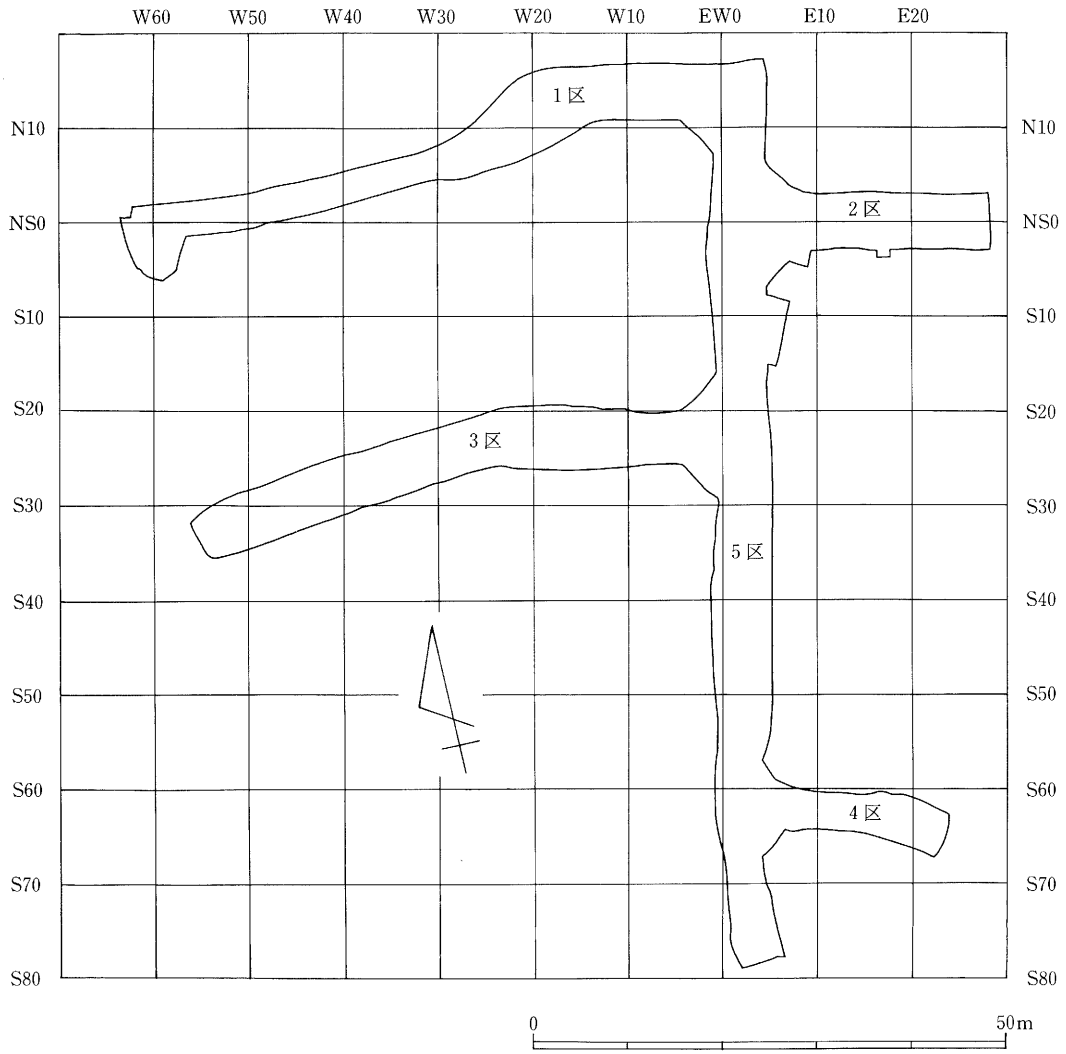
平地には松木遺跡、安久東遺跡、前田館跡、中田南遺跡、四郎丸館跡など、城館や居館・屋敷が数多く造られるようになり、当遺跡でも自然堤防上で掘立柱建物跡や井戸跡さらに火葬場跡などが検出されていて、武士階級の屋敷跡があったと考えられている。なお、南部の後背湿地部分では水田跡も検出されている。

第４節　調査方法

１．調査区の設定

調査区は幅６ｍの道路予定地に設定し、調査区のうち東西道路部分を北から１区、２区、３区、４区とし、中央の長い南北道路部分を５区とした。

また２区と５区の道路方向にあわせて直交する基準線を設け、これを遺構実測の基準線とした。基準線の名称は２区と５区の交点を通る南北方向の中心線をＥＷ０、これより東をＥ、西をＷで示し、東西方向の中心線をＮＳ０、これより北をＮ、南をＳで示した。数値の単位はｍである。なお、南北基準線の方位は真北から約12°東に振れている。平面直角座標系Ｘにおける座標値は以下のとおりである。



第５図　グリッド配置図

（ＮＳ０，ＥＷ０）Ｘ＝－201.065589km，　Ｙ＝＋5.519327677km
（Ｓ　40，ＥＷ０）Ｘ＝－201.104735km，　Ｙ＝＋5.511108677km

２．調査方法

調査予定地の大部分は水田あるいは畑で、５区の南部から４区にかけての部分のみが水田上に盛土整地されて駐車場として利用されていた。

調査においては、まず重機で盛土および現水田や畑の耕作土（Ｉ層）やその直下の旧耕作土（II層）を除去し、精査はIII層上面から行った。ただしIII層は遺存状況が悪く、５区中央部に部分的に残るのみであったので、実質の遺構確認作業はIV層からである。IV層以下はすべて人力で掘り下げてIV・Ｖａ・Ｖｂ・VI・VII a1・VII a2・VII ｂ・VIII層において各層ごとの精査を行った。なお、VI層上面までは調査区全面の精査を行ったが、VII a1 層以下については５区南半部において一部調査面積を縮小している。VIII層以下については特に試掘区を設けての調査は行わなかったが、側溝の壁面観察では文化層らしい層が確認できなかったことからこれ以下は無遺物層と推定し、掘り下げは行わなかった。

遺構の平面図は基準杭を利用して簡易遣り方を組み、1/40あるいは1/20で作成した。断面図は1/20で作成した。写真は35㎜モノクロとリバーサルで撮影している。

遺物は各遺構ごとに取り上げたが、遺構に伴わない基本層中の遺物は、層ごとに10m グリッド別に取上げた。

第５節　基本層序

今回の調査ではＩ～Ｘ層まで、大別して計10層を確認した。各層の傾きは、東西方向はほぼ水平であるが南北方向では北から南に向かって傾斜している。これは、前節でも述べたが、調査区が東西に延びる自然堤防上から南側の後背湿地にかけて位置するためと考えられる。第７図は５区の北壁と東壁の基本層序模式図であるが、おおよそ５区の北東コーナー付近が最も標高が高く、そこから南に向かって傾斜してＳ40付近で水平になっているのが判る。

Ｉ層　にぶい黄褐色～暗褐色のシルトを主とする層でＩａ～Ｉｆ層に細分される。
現代の畑あるいは水田の耕作土である。

Ｉａ層　10ＹＲ3/3 暗褐色粘土質シルト。

Ｉｂ層　10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色シルトブロックを少量含む。

Ｉｃ層　10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色シルト。10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを多量に含む。

Ｉｄ層　10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色シルト。層下部に部分的に10ＹＲ3/2 黒褐色シルトブロックを多量に含む。

Ｉｅ層　10ＹＲ3/3 暗褐色シルト。10ＹＲ3/2 黒褐色シルトブロックを多量に含む。

Ｉｆ層　10ＹＲ3/4 暗褐色粘土質シルト。10ＹＲ2/1 黒色泥炭質粘土ブロックを多量に含む。

II層　10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト。３区西部ではやや黄色が強くなる。厚さは20～30㎝で、下面は比較的平坦である。
現代以前の畑の耕作土と推定される。

III層　10ＹＲ3/2 黒褐色粘土質シルト。10ＹＲ4/2 にぶい黄褐色砂質シルトを少量含む。
３区W24から西と５区Ｓ30～50付近にのみ部分的に遺存する。厚さは 5～10㎝、下面は５区では比較的平坦であるが３区では細かな起伏があり、IV層上面に小溝状遺構群を残す。
平安時代以降の畑の耕作土である。

IV層　10ＹＲ3/3 暗褐色シルト。３区西部では10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色シルト質砂となる。10ＹＲ3/2 黒褐色粘土質シルトブロックを少量含む。なお、灰白色火山灰の小ブロックを微量含むが、断面図を作成した地点には灰白色火山灰が認められなかったので図中では示せなかった。３区W24から西とＷ８から東、５区Ｓ20～Ｓ50付

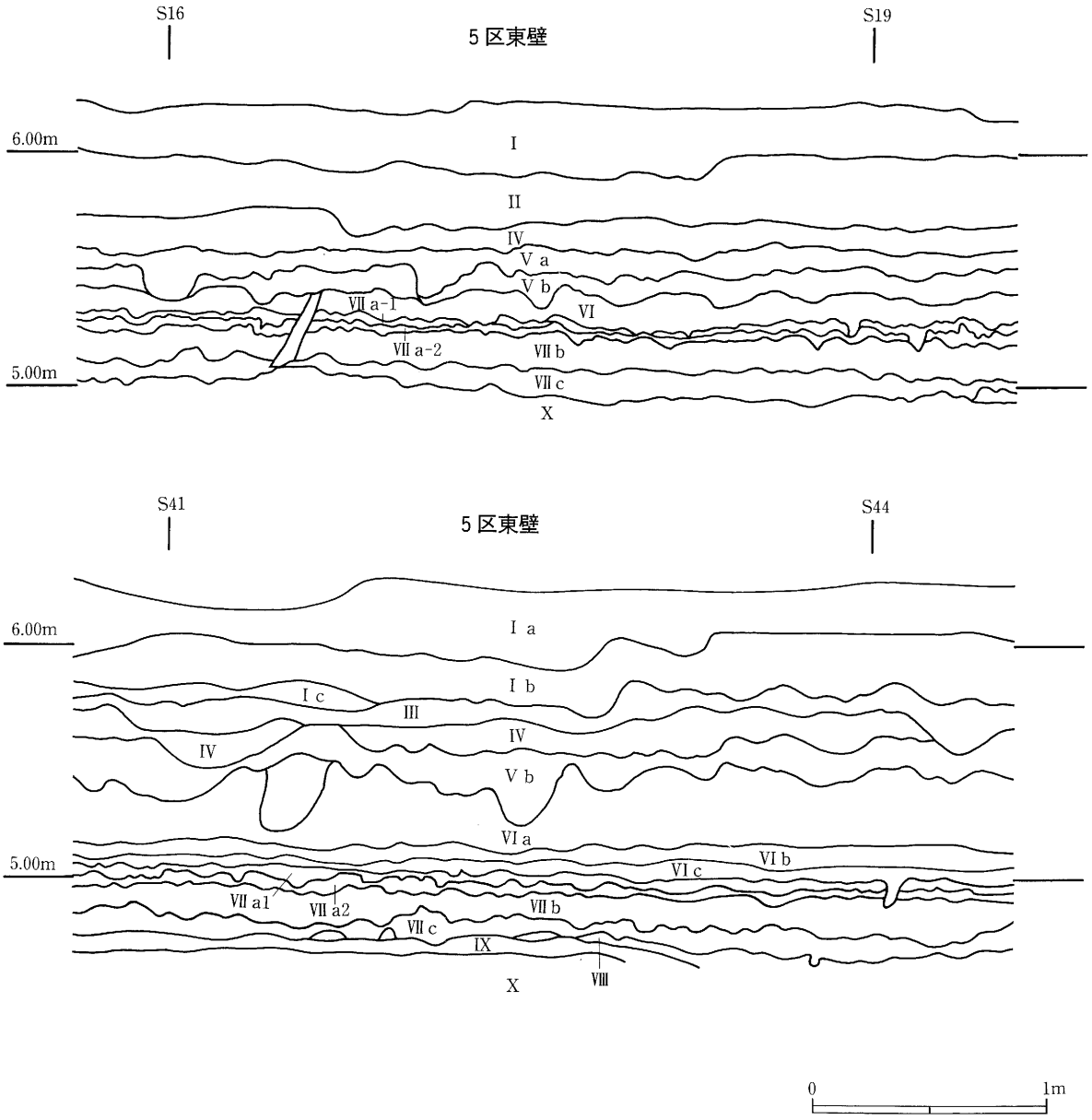
近にのみ遺存する。厚さは20～30cm、下面は比較的凹凸があり、Ｖａ～Ｖｂ層上面に小溝状遺構群を残す。

平安時代の畑の耕作土である。

Ｖ層　黒褐色のやや粘性のあるシルトを主とする。Ｖａ・Ｖｂ層に細分され、いずれも平安時代の畑の耕作土である。

Ｖａ層　10ＹＲ3/2 黒褐色粘土質シルト。10ＹＲ3/3 暗褐色シルトブロックを少量含む。 3区W24から西とＷ８から東、５区ＮＳ ０～Ｓ50付近にのみ遺存する。なお、５区の東壁際の遺存状況が良くないために断面図（第６図）や模式図にＶａ層の記載がないが、平面では確認している。厚さは10cm前後、下面はやや凹凸があり、一部のＶｂ層上面に小溝状遺構群を残す。

Ｖｂ層　10ＹＲ3/2 黒褐色シルト質粘土。10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。分布範囲はＶａ層とほぼ同じで、３区W24から西とＷ８から東、５区ＮＳ0～Ｓ50付近にのみ遺存する。厚さは10～20cm、下面は比較的凹凸があり、VIａ層上面に小溝状遺構群を残す。



第６図　基本層序

Ⅵ層　にぶい黄褐色の砂あるいはシルトを主とし、Ⅵａ～Ⅵｃ層に細分される自然堆積層である。

Ⅵａ層　10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色砂質シルト。10ＹＲ3/1 黒褐色粘土ブロック・10ＹＲ4/1 褐灰色粘土ブロックを少量含む。３区西部と５区Ｓ20～50付近にのみ遺存する。厚さは15～35cm、下面はゆるやかな起伏がある。

Ⅵｂ層　10ＹＲ4/2 灰黄褐色シルト質粘土。３区全域と５区Ｓ７～50付近にのみ遺存する。厚さは10～20　、下面はゆるやかな起伏がある。

Ⅵｃ層　10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色細砂。10ＹＲ3/3 暗褐色粗砂を少量、10ＹＲ2/1 黒色粘土ブロックを微量に含む。３区西部と４区全域、５区Ｓ７付近から南側に遺存する。厚さは 5～10cm、下面はゆるやかな起伏がある。

Ⅶ層　暗褐～黒褐色の粘土層である。当初はⅦａ・Ⅶｂ・Ⅶｃ層の３層に分層していたが、後にⅦａ層がさらに２層に細分されることが判明したためⅦａ層をⅦa1 層とⅦa2 層とに分けた。Ⅶa1・Ⅶa2・Ⅶｂ層は古墳時代の水田耕作土、Ⅶｃ層は自然堆積層である。

Ⅶa1 層　10ＹＲ3/3 暗褐色粘土。５区南部では 2.5Ｙ5/1 黄灰色シルト質粘土となる。３・４区全域と、５区ＮＳ０付近から南に遺存する。厚さは２～10cmで平均６cm前後、下面は凹凸が激しい。

Ⅶa2 層　10ＹＲ2/2 黒褐色粘土。10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色シルトブロックを少量、酸化鉄粒を微量含む。３・４区全域と、５区ＮＳ０付近から南に遺存する。厚さは２～８で平均４cm前後、下面は凹凸が激しい。

Ⅶｂ層　10ＹＲ2/1 黒色粘土。５区北部では泥炭質粘土となる。１区を除き、２～５区の全域に遺存するが、２区と５区ＮＳ０付近から北ではＩ層の耕作土によって上面が攪乱されている。厚さは12～20cmで平均15cm前後、下面は凹凸が激しい。

Ⅶｃ層　10ＹＲ3/2 黒褐色シルト質粘土。10ＹＲ3/3 暗褐色砂粒を多量に含む。１ 区を除き、２～５区のほぼ全域に遺存する。厚さは10cm前後で、下面は比較的凹凸がある。

Ⅷ層　10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色粘土。10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色粘土ブロックを少量・酸化鉄粒を多量に含む。３・４区全域と、５区Ｓ20付近から南に遺存する。厚さは５～10前後で、下面は比較的平坦である。

自然堆積層である。

Ⅸ層　10ＹＲ3/1 黒褐色粘土。分布域はⅧ層とほぼ同じで、３・４区のほぼ全域と、５区Ｓ20付近から南に遺存する。厚さは５cm前後で、下面は比較的平坦である。

自然堆積層である。

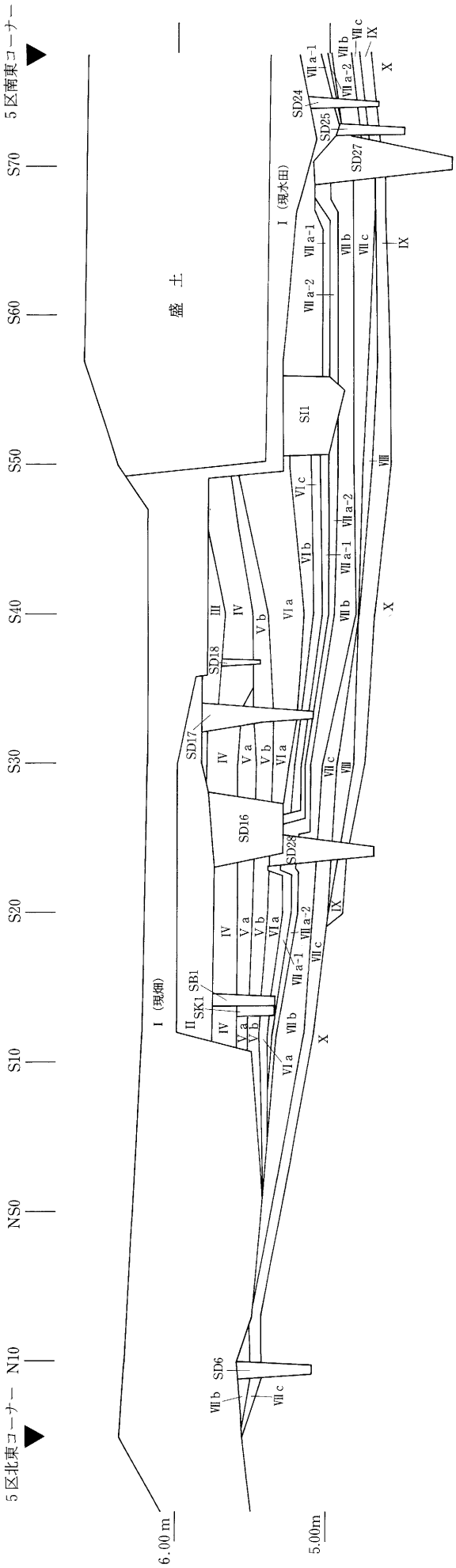
Ｘ層　10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。５区南部では粘土となる。酸化鉄斑文を多量に含む。調査区の全域に安定して分布する。

自然堆積層である。

なお、以前に行われた調査のうち第 2次調査は調査区も比較的広く、層位的に検出されている遺構も中世の水田跡・平安時代以降の溝・平安時代の小溝状遺構群・平安時代以前の水田跡などで、中世の水田跡を除くと今回の調査と共通点が多い。このため、両調査区における基本層序の対応を試みてみたが、表土～下層の水田耕作土までの基本的な色調の変化は類似するものの土質が一致しない場合もあり、明確にはできなかった。層の対応が困難な理由としては、両調査区間の距離が離れている（註１）ことと、立地も微妙にも異なっている（註２）ことが考えられるので、今回は対応関係の明示は控えておきたい。

註１　第３次調査区のほぼ中央にあたる５区から第２次調査の西部のⅡ区までは約60m、東部のＩ区西端までは約100m ある。

註２　現地表面の標高は第２次調査区のＩ区中央部で約4.8m、今回の第３次調査区５区中央部で約6.2m で、第２次調査区の方が約1.4m 低い。このことと周辺の微地形を考慮すると第２次調査区の中心はほとんど後背湿地にかかっていると推定される。



第７図　基本層序模式図

５区北壁～東壁

（深さ 1/40、長さ 1/400）

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　各層上面における遺構の確認状況

精査は各層位ごとに順次行ったが、基本層の欠落と耕作による層上面の攪拌等によって遺構の本来の掘り込み面が確定できない場合が多かったので、これらの点について簡単に触れておく。

１．基本層の欠落と遺構の確認面

前章で述べたように、調査区が自然堤防上から南側の後背湿地にかけて位置するため、各基本層は北から南に向かって傾斜している。言いかえれば、調査区の北部にいくほど下の層の標高が高くなっているので、その分Ⅰ・Ⅱ層によって攪拌されて失われる結果となっている。５区のＳ20以北ではⅠ・Ⅱ層を除去した直下にＸ層・Ⅶｂ層・Ⅴ層などの下部の基本層が現れて、その面が最初の遺構確認面となっている（第７図の基本層序模式図、第８図の平面図参照）。

また、３区のＷ８～24の間・４区・５区のＳ50以南は水田として利用された際に削平を受けたためⅠ層の直下はⅥ層となっており、この面が最初の遺構確認面となっている。

このように遺構の確認面の直上の基本層が欠落する場合は、遺構の本来の掘り込み面は不明であり、実際このような遺構が多い。

２．耕作による攪拌と遺構の確認面

遺構の廃絶後にその周辺が畑として利用された場合、層上面は攪拌されて畑以前にあった遺構のプランは確認できないことが十分予想される。畑の耕作深度が直下層にまで及ぶ場合は、実際の遺構確認面は畑の耕作土を除去した後の面となり、本来の掘り込み面よりも１層分下層となる。

本来の掘り込み面の検討にあたっては、他の遺構や出土遺物とも関係してくるのでここでは詳細には触れないが、後述するＳＩ１やＳＢ３・４・５・６の一部がこの例に相当すると考えられる。

以上の１・２で述べた理由によって本来の掘り込み面が不明な遺構が多いため、調査時の遺構の確認面の違いをもってそのまま遺構の変遷に結び付けることはできない。そこで各遺構の説明にあたっては、とりあえず調査時に確認できたまま記述していくこととし、本来の遺構掘り込み面と実際の確認面とのずれは第４章で修正していくこととする。

第２節　Ⅳ～Ｘ層上面（Ⅰ～Ⅲ層除去後）

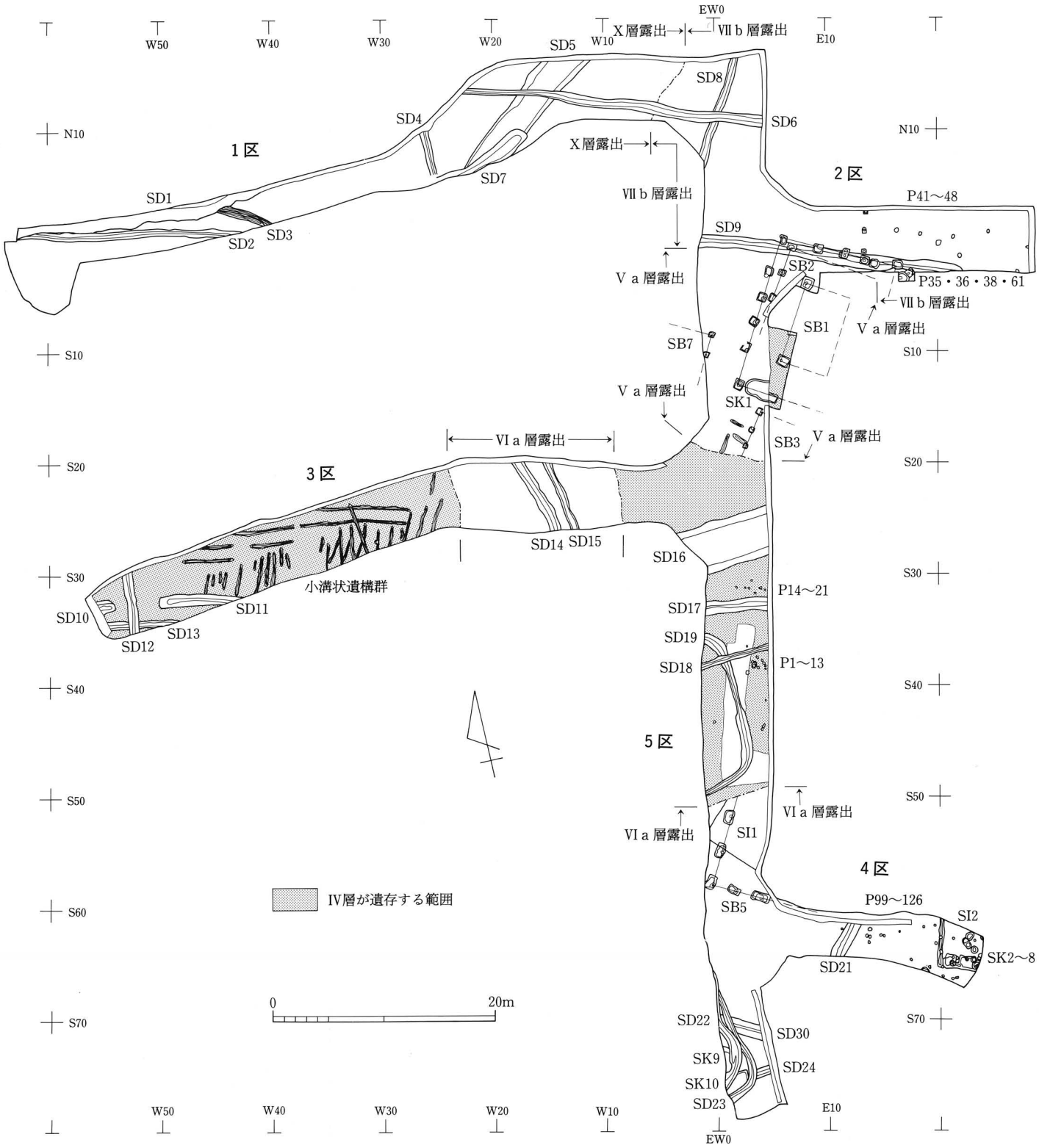
１．Ⅰ～Ⅲ層除去後の状況（第８図）

１区の東端部を除く部分は水田であったが、ここでは水田耕作土を除去するとにぶい黄褐色のＸ層上面が現れ、ＳＤ１～５・７とＳＤ６の西半部を確認している。

１区東端部～５区北部および２区は畑として利用されていたが、畑の耕作土と直下のⅡ層を除去すると、ＮＳ０以北は黒色のⅦｂ層、ＮＳ０～Ｓ20付近は黒褐色のＶａ層となり、Ｓ20以南の区域では暗褐色のⅣ層が現れた。ここではＳＤ６の東半部、ＳＤ８・９、ＳＢ１・２・７、ＳＫ１、ピット群、小溝状遺構群の一部を確認したが、ＳＢ３はＰ52～54が確認できたのみで南側の柱穴はまだ確認できない段階であり、小溝状遺構群もＳＢ３の付近でごく一部を確認したのみで、その大部分はⅣ層に覆われていて未確認の状況であった。

３区～５区の中央部にかけては、３区の一部の水田部分を除いて畑であったが、畑の部分では耕作土と直下のⅡ層および部分的に遺存していたⅢ層を除去すると暗褐色のⅣ層となり、一方水田として利用されていた場所では耕

作土下に黄褐色のⅥａ層が現れる。３区西部ではⅣ層上面でＳＤ10～13と小溝状遺構群の他にＳＤ20に伴う土手の上面プランを確認したが、この土手はＶｂ層上面に構築されたもので、Ⅳ層には伴わない。また、東部の水田で削平されたⅥａ層上面ではＳＤ14・15を確認している。５区のⅣ層上面ではＳＤ16～19とピット群を確認している。



第８図　Ⅳ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅲ層除去後）平面図

４区と５区南部は水田で削平されており、耕作土を除去して検出したVIａ層上面ではＳＩ２、SD21～24・30、ＳＫ２～10、ピット群などを確認している。またこの他にＳＩ１の大部分とＳＢ５－Ｐ71～75も確認したが、ＳＩ１の北側とＳＢ５の柱穴２個は上にIV層が被っているためまだ確認できない状況であった。

II．遺構と遺物

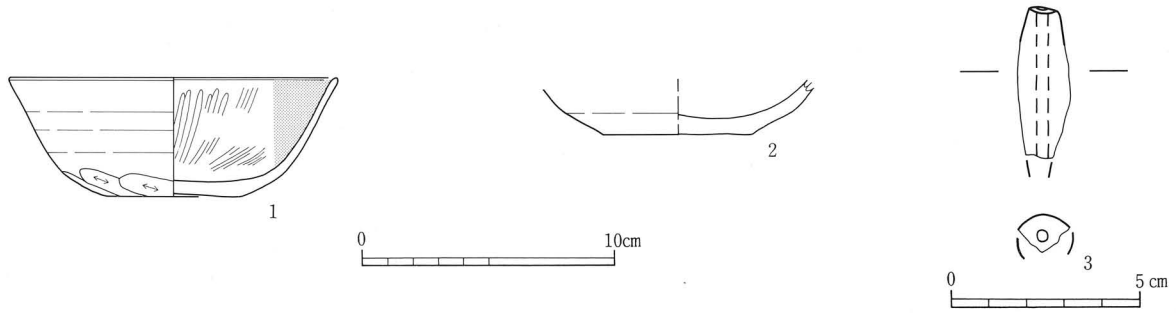
１．竪穴住居跡

２号住居跡－ＳＩ２－（第９図）

４区東端に位置する。床面は削平されVI層上面で掘り方のみを確認したものである。主軸方向はＮ－16°Ｅ、北～東部が調査区外のため大きさは不明であるが、南北4.4m以上、東西４ｍ以上ある。掘り方のみのため床面・壁などは不明で、カマドは確認できなかった。西側に幅約40cm、深さ約30cmの周溝があり、南側には堀り方がやや幅広い部分も認められる。なお住居のプラン内側にあるＳＫ２～８はこの住居に伴う土坑であった可能性があるが、断定できないため一応住居とは別の独立した遺構として扱っている。

層位	色　　調	土　　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	周溝堆積土、灰黄褐色砂質シルトブロック多量
2	2.5 Ｙ4/2 暗灰黄色	シルト質粘土	周溝堆積土、炭化物粒少量
3	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	住居掘り方、灰黄褐色粘土質シルトブロック少量
4	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土	住居掘り方、にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量

第９図　SI2 平面・断面図



No.	写真図版	出土層位	種　別	器種	遺存度	法　量(cm) 口　径	底　径	器　高	底径 口径	外面色調 内面色調	胎　土	焼成	外　面　調　整　・　特　徴 内　面　調　整　・　特　徴
1	158－1	掘り方	土師器	坏	1/4	(13.0)	5.2	(4.8)	0.40	にぶい橙色 暗灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、体部下端～底部手持ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理
2	158－2	掘り方	須恵器	坏	1/3	?	6.0	?	?	灰白色 灰白色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 ロクロ調整

No.	写真図版	出土層位	種　別	遺存度	長　さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色　調	胎　土	焼　成
3	158－3	掘り方	土製品・土錘	約1/2	(4.2)	1.4	——	——	にぶい黄橙色	良好	良好

第10図　SI2 出土遺物

遺物は掘り方から土師器片38点、須恵器片12点、土錘１点が出土し、このうち土師器坏１点、須恵器坏１点、土錘１点が図化できた(第10図)。土師器坏はロクロ調整で体部がやや内湾し、体部下端～底部にかけて手持ちヘラケズリが施されるものである。

２．掘立柱建物跡

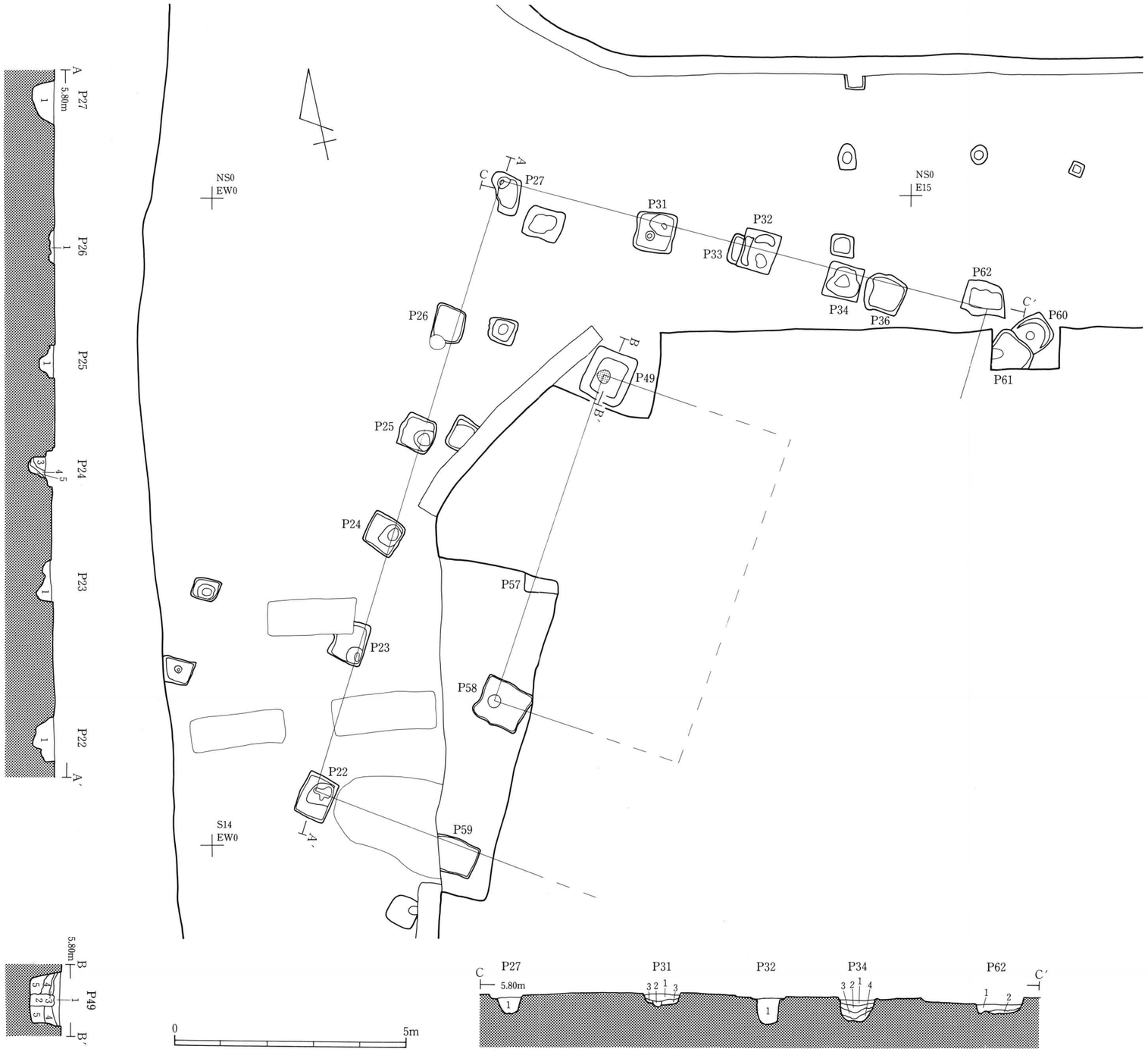
（１）１号掘立柱建物跡－ＳＢ１－（第11・12図）

５区北部～２区にかけて位置する。当初、２区で東西方向に並ぶ柱穴列（Ｐ27・31～34・36・62）をⅦｂ層～ＳＤ９堆積土上面で、それに直交して南北方向に並ぶ柱穴列（Ｐ22～26）を５区のＶａ層上面で確認した。この段階では２区の東西方向の柱穴列の間隔が狭い箇所があるために他の掘立柱建物跡などとの切り合いも考慮され、さらに建物の大部分が調査区外のために不明な点が多かった。このため調査区東側の一部を拡張した結果、柱穴Ｐ49・57～59を確認した。このうちＰ49はＶａ層上面での確認であるが、Ｐ57～59は付近のⅠ・Ⅱ層の耕作深度が浅かったため、Ⅳ層上面で確認できた。さらに、Ｐ59については調査区壁面にかかっていたため、断面観察によっても本来はⅣ層上面から掘り込まれていることが再確認できた。

拡張して確認した柱穴４基とその他の柱穴との位置関係を見てみると、Ｐ31－Ｐ49－(Ｐ57)－Ｐ58－Ｐ59の柱筋が通ること、この柱筋に直交してＰ49とＰ58を通るラインの西側線上にＰ26とＰ23がそれぞれ位置することから、これらは同じ建物を構成する柱穴である可能性が高いと考えられる。なお、Ｐ57はプランの一部のみの確認なので判然としないが、Ｐ49とＰ58は掘り方が一辺１ｍ前後で深さが約75cmと他のピットよりもひと回り大きくて深く

ＳＢ１調査風景

拡張区で確認したＳＢ１－Ｐ58・59



第 11 図　SB1 平面・断面図

ＳＢ　１（廂）

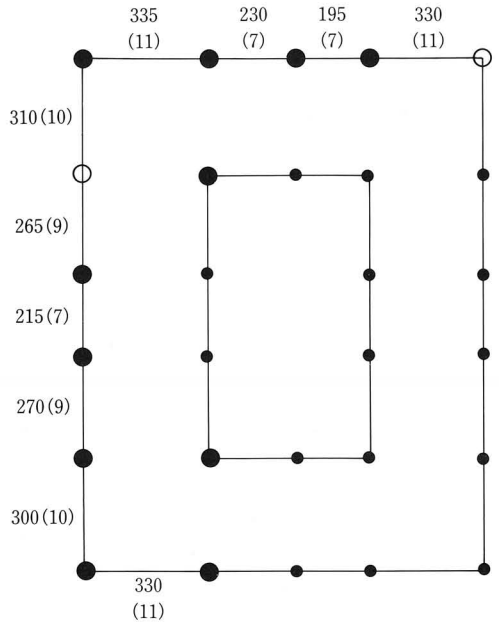
層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R3/3 暗褐色	シルト	
2	10Ｙ R4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物粒子微量
3	2.5 Ｙ4/2 暗灰黄色	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
4	2.5 Ｙ4/1 黄灰色	粘土	黄褐色シルトブロック少量
5	2.5 Ｙ3/2 黒褐色	シルト	黄褐色シルトブロック多量
6	2.5 Ｙ3/1 黒褐色	粘土	黄褐色シルトブロック少量

ＳＢ　１（身舎）

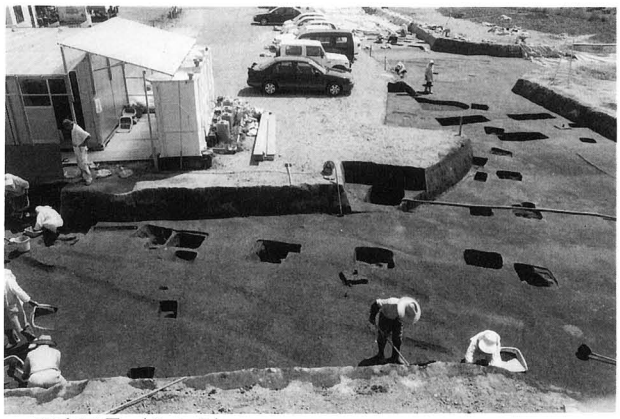
層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色	シルト	明黄褐色シルトブロック・黒褐色粘土ブロック少量
2	2.5 Ｙ3/2 黒褐色	シルト質粘土	柱痕跡
3	10Ｙ R3/3 暗褐色	シルト	明黄褐色粘土ブロック・黒褐色粘土ブロック多量
4	10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色	シルト	明黄褐色シルトブロック・黒褐色シルトブロック少量、褐灰色粘土を縞状に挟む
5	10Ｙ R4/2 灰黄褐色	砂質シルト	

ピット No.	堀り方 大きさ	堀り方 深さ	柱痕跡 径	柱痕跡 深さ	備　　考
5 8	110 × 95	?	28	?	身舎、拡張区でプラン確認のみ
5 7	?	?	?	?	身舎、拡張区でプラン確認のみ、大部分が調査区外
4 9	110 ×100	73	28	73	身舎、拡張区で完掘
5 9	(90)× 70	44	20	?	廂、拡張区でプラン確認のみ、深さは調査区壁面で確認
2 2	95 × 70	28	?	45	廂、堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
2 3	85 × 70	16	?	33	廂、堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
2 4	75 × 75	10	?	48	廂、堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
2 5	75 × 75	20	?	36	廂、堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
2 6	75 × 65	18	?	?	廂
2 7	80 × 65	33	?	35	廂、堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
3 1	85 × 80	23	?	34	廂、堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
3 2	90 × 75	60	?	?	廂
3 4	75 × 75	56	?	?	廂
6 2	90 × 75	44	?	?	廂

表３　SB １柱穴一覧表



第12図　SB1模式図



調査風景（北から）

（註１）、柱の径も太いことから異なる性格を持つことが予想される。このことからＰ49・57・58は身舎の柱穴で（註２）、Ｐ49と58はその北西と南西のコーナーにあたり、その他は廂の柱穴であると推定される。

このようにＰ49と58が身舎の北西と南西コーナーの柱穴で、その他は廂の柱穴であるとすると、廂は少なくとも北・西・南の３面に付くこととなるが、次に東側の廂の有無も含めて、建物の構造について見てみたい。

廂の柱穴は、上面や断面では柱痕跡が確認できなかったが、柱穴の底面に窪みを持つものが多く、この部分が柱痕跡であると推定できる。このことから廂北西コーナーＰ27と南西コーナーＰ22の柱との芯々距離を復元すると南北が13.60m（45尺）となる。柱間は北から10尺・９尺・７尺・９尺・10 尺で中央のＰ24とＰ25の間が７尺と最も狭く、南北両端（南北の廂部分）が10尺で最も広い。

なお、身舎の西側柱列の柱間隔もこれに対応すると考えられ、北西コーナーのＰ49とＰ58の柱の芯々の距離を復元すると南北が7.45m（25尺）となる。そしてＰ49とＰ57との間に未調査の柱穴が１基入るとすると、この場合の柱間は９尺・７尺・９尺となる。

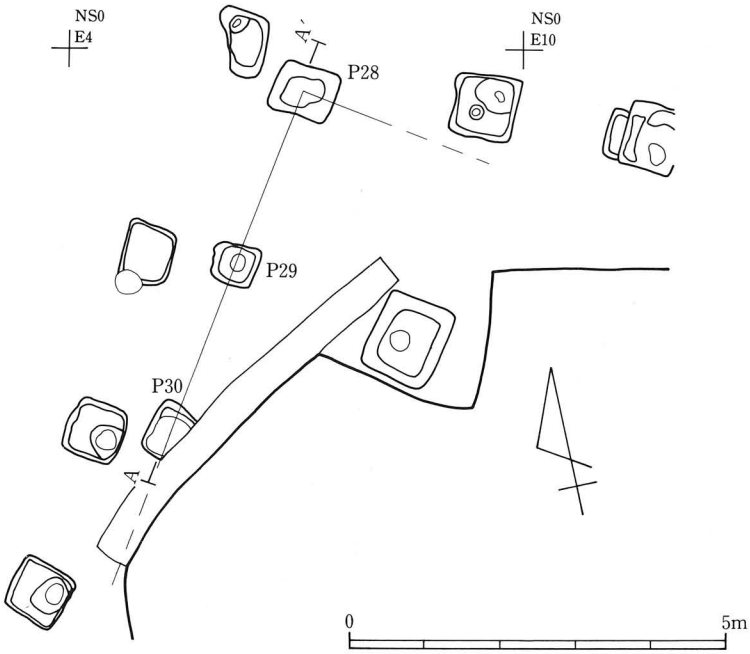
次に建物の東西方向を見てみると、南側の廂の柱穴はＰ22とＰ59の２基で、柱間は11尺である。北側の柱穴列についてはＰ27－Ｐ31－Ｐ32－Ｐ34までの柱間を見てみると、11尺・７尺・７尺となっているのに対してＰ34の東側はＰ34－Ｐ36が３尺、Ｐ36－Ｐ62が７～８尺となっている。身舎の大部分が調査区外のために断定はできないが、西側・南側の廂の様相からすると柱間は等間隔ではなく、廂部分が10～11尺と広いのに対して、身舎の部分はやや狭く、さらに中央部は最も狭くて７尺程度である可能性がある。この視点でみると、Ｐ34－Ｐ36の３尺は極端に狭い柱間となり不自然であるが、Ｐ36を外して考えるとＰ34－Ｐ62が10～11尺であるので、ほぼ他の廂部分と同様の柱間となり、Ｐ34－Ｐ62部分は東側の廂である可能性が考えられる。

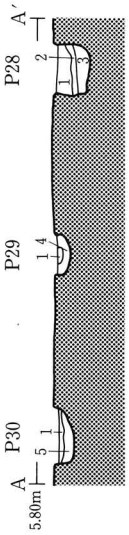
以上のようなことから、ＳＢ１は南北13.60m（45尺）、東西10.90m（36尺）の南北棟で、四面に廂が付く建物であると推定されるが、北側の廂の柱列の中にＳＢ１とは組み合わないＰ36とＰ33があることなど不明な点も残るので別な解釈がある可能性も留めておきたい。方向は西側の廂の柱列で見るとＮ－31°－Ｅで、柱間は前述したように身舎の南北が９尺と７尺、東西が７尺、廂の出は南北が10尺、東西が11尺である（第12図）。

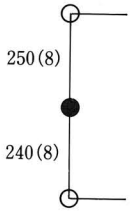
遺物は柱穴の堀り方から土師器片105点、須恵器片39点、土錘１点が出土した。土師器は大部分がロクロ調整のものであるが、いずれも細片で図化できたものはない。

（２）２号掘立柱建物跡－ＳＢ２－（第13・14図）

ＳＢ１の西廂の脇のＶａ層上面で、南北方向に並ぶ柱穴を３基確認した。他に組み合う柱穴が確認できなかったが、東側の調査区外に展開する可能性を考えてＳＢ２とした。柱穴は表の通りで、柱痕跡は確認できなかった。南







第 14 図
SB2 模式図

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	2.5 Y4/3 オリーブ褐色	シルト	
2	10Y R2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
3	10Y R5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	
4	10Y R4/2 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロック少量
5	2.5 Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	

第 13 図　SB2 平面・断面図

ピット No.	堀　り　方		柱痕跡		備　　考
	大きさ	深さ	径	深さ	
3 0	75 ×(50)	35	?	?	
2 9	65 × 55	20	?	26	堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
2 8	80 × 65	50	?	?	

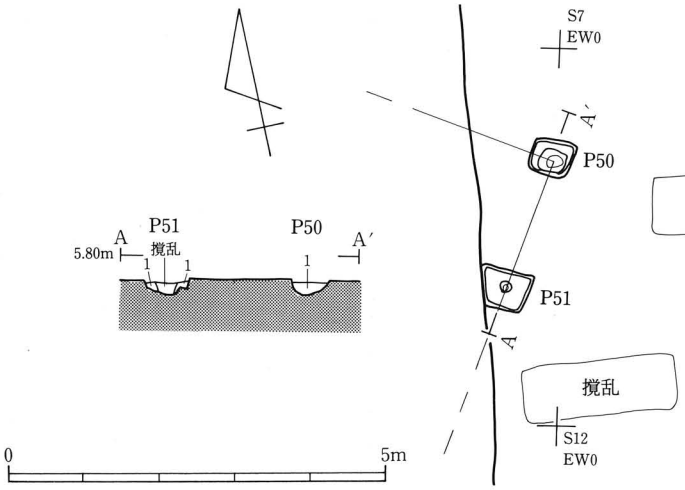
表 4　SB 2 柱穴一覧表

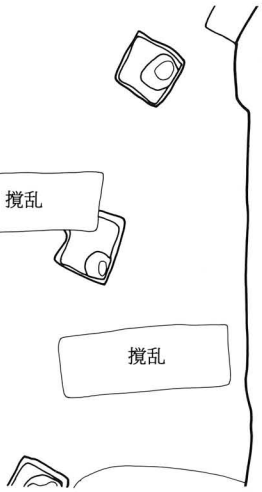
北長は4.9m、柱間は８尺で、方向はＮ－32°－Ｅである。なお、南西側に近接するＳＢ７と方向が一致していることから両者が接続する可能性はあるが、間尺が異なるので一応別な建物とした。

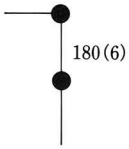
遺物は柱穴の堀り方から土師器片２点、須恵器片２点が出土したが、いずれも細片で図化できたものはない。

（３）７号掘立柱建物跡－ＳＢ７－（第15・16図）

ＳＢ１西側のＶａ層上面で、南北方向に並ぶ柱穴を２基確認した。他に組み合う柱穴が確認できなかったが、西側の調査区外に展開する可能性を考えてＳＢ７とした。柱穴は表の通りで、柱痕跡は確認できなかった。２基の柱の間隔は1.8m(6尺）で、方向はＮ－32°－Ｅである。前述したよう







第 16 図
SB7 模式図

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Y R3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック・炭化物粒少量

第 15 図　SB7 平面・断面図

ピット No.	堀　り　方		柱痕跡		備　　考
	大きさ	深さ	径	深さ	
5 0	55×50	16	?	24	底面の窪みが柱痕跡と推定
5 1	70×55	22	?	30	底面の窪みが柱痕跡と推定

表 5　SB 7 柱穴一覧表

にＳＢ２と方向が一致するが別な建物とした。

遺物は出土しなかった。

３．溝跡

（１）１号溝跡－ＳＤ１－（第17図）

１区西部の水田直下のＸ層上面で確認し、ＳＤ２・３を切っている。方向はほぼ東西に延び、確認できた長さは約22m である。大部分は調査区外のため確認できたのは南岸のみで、このため幅は不明、深さも部分的な調査のため不確実であるが、調査できた箇所では約80cmである。堆積土は現水田耕作土に似たオリーブ褐色粘土の単層である。

遺物は土師器４点、須恵器３点の他に現代の製品が出土しており、現代まで使われていたことが判る。

溝の位置はちょうど自然堤防の北側の縁に当たり、方向も自然堤防に沿っているが性格は断定できない。

（２）２号溝跡－ＳＤ２－（第17図）

１区西部の水田直下のＸ層上面で確認した東西方向の溝で、ＳＤ１に切られている。上部はかなり削平されていると考えられる。方向はＮ－78°－Ｗ、確認できた長さは約20m、幅は約80cm、断面形は「Ｕ」字形で深さは約15cmである。堆積土は自然堆積層である。底面は比較的平坦で底面のレベルは東側がやや低く、東西の高低差は約５cmである。

方向や断面形からすると５区北部のＳＤ９と同一の遺構である可能性がある。性格は断定できない。なお、遺物は出土しなかった。

（３）３号溝跡－ＳＤ３－（第17図）

１区西部の水田直下のＸ層上面で確認した。ＳＤ２のやや北に位置し、ＳＤ１に切られている。確認した段階では幅約80cmの１条の溝であったが、掘りあげた結果幅30～40cmの２条の溝が平行する状況となった。２条の溝が切り合っていた可能性があるが、上部がかなり削平されているため検証できず、このため一応１条の溝として扱っている。方向は、確認できた長さが約4.5m と短いこととやや湾曲していることから明確ではないがＮ－63°－Ｗである。深さは約５cmで、底面はやや凹凸があり溝が途切れる箇所もある。底面の高低差は不明である。

なお、このまま南東からやや南向きに湾曲していくと３区東部のＳＤ14につながる可能性がある。遺物は出土せず、性格は不明である。

（４）４号溝跡－ＳＤ４－（第18図）

１区中央部の水田直下のＸ層上面で確認した南北方向の溝で、南端部を攪乱で切られている。方向はＮ－１°－Ｗで、確認できた長さは約４ m、幅は約60cm、深さは約30cmである。堆積土は現水田耕作土に近いオリーブ褐色粘土の単層である。底面は平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

方向や断面形からすると３区東部のＳＤ15につながる可能性がある。遺物は出土せず、性格は不明であるが、年代は堆積土からすると現代に近いと考えられる。

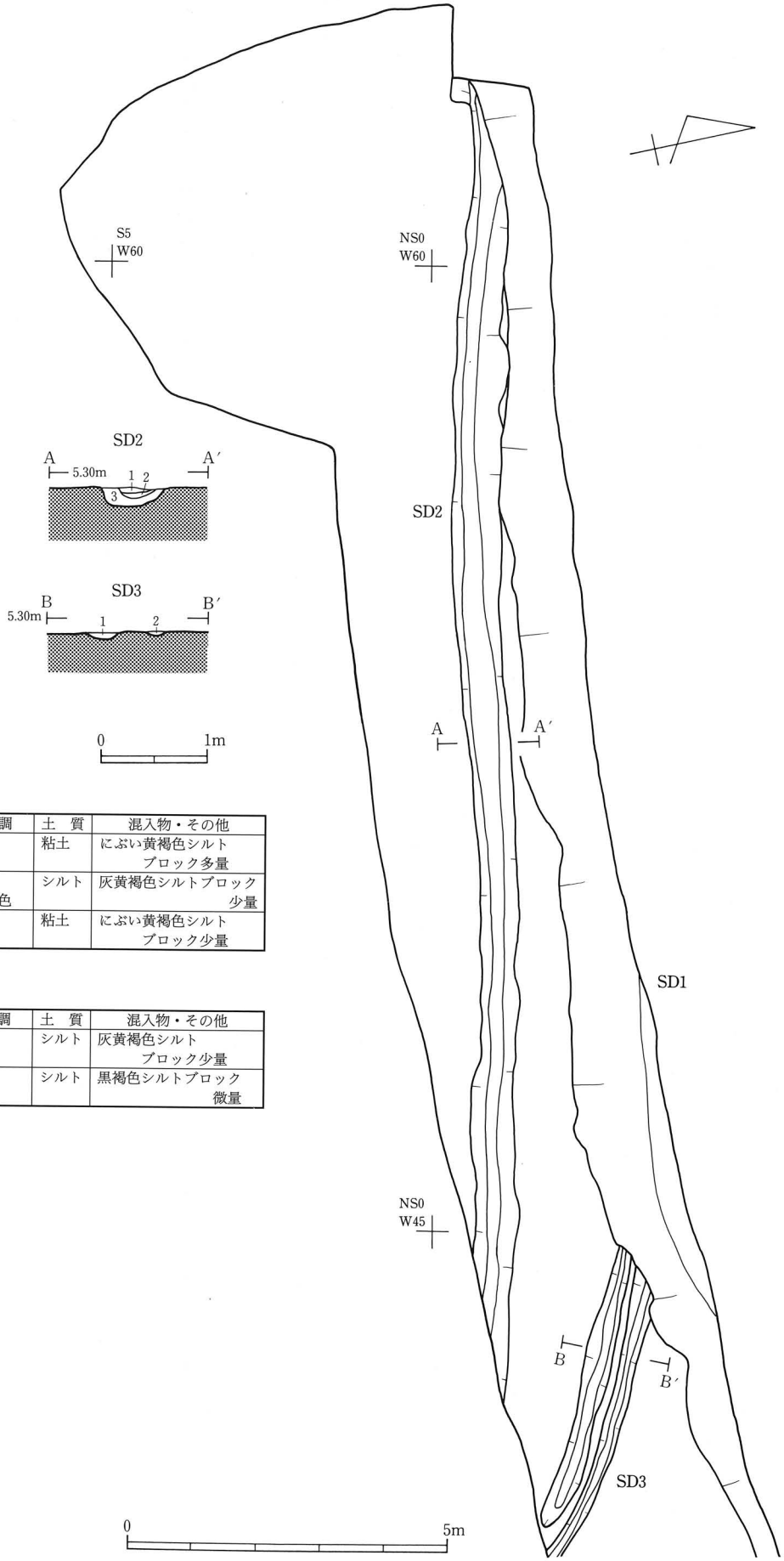
（５）５号溝跡－ＳＤ５－（第18図）

１区中央部の畑と水田にまたがる場所に位置し、現耕作土直下のＸ層上面で確認した。ＳＤ６・７に切られている。方向はＮ－52°－Ｅで、確認できた長さは約12m、幅は約2.8m、断面形は浅い逆台形で深さは約15～25cmである。堆積土は自然堆積層と推定される。底面は平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片４点、須恵器片２点が出土したが、いずれも細片で図化できたものはない。溝の性格は不明である。

（６）６号溝跡－ＳＤ６－（第18図）

１区中央部から東端部の畑から水田部分にかけて位置する東西方向の溝で、耕作土直下のＸ層およびⅦｂ層上面



ＳＤ　2

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト ブロック多量
2	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	シルト	灰黄褐色シルトブロック 少量
3	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト ブロック少量

ＳＤ′　3

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ3/2 黒褐色	シルト	灰黄褐色シルト ブロック少量
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	シルト	黒褐色シルトブロック 微量

第 17 図　SD1～3 平面・断面図

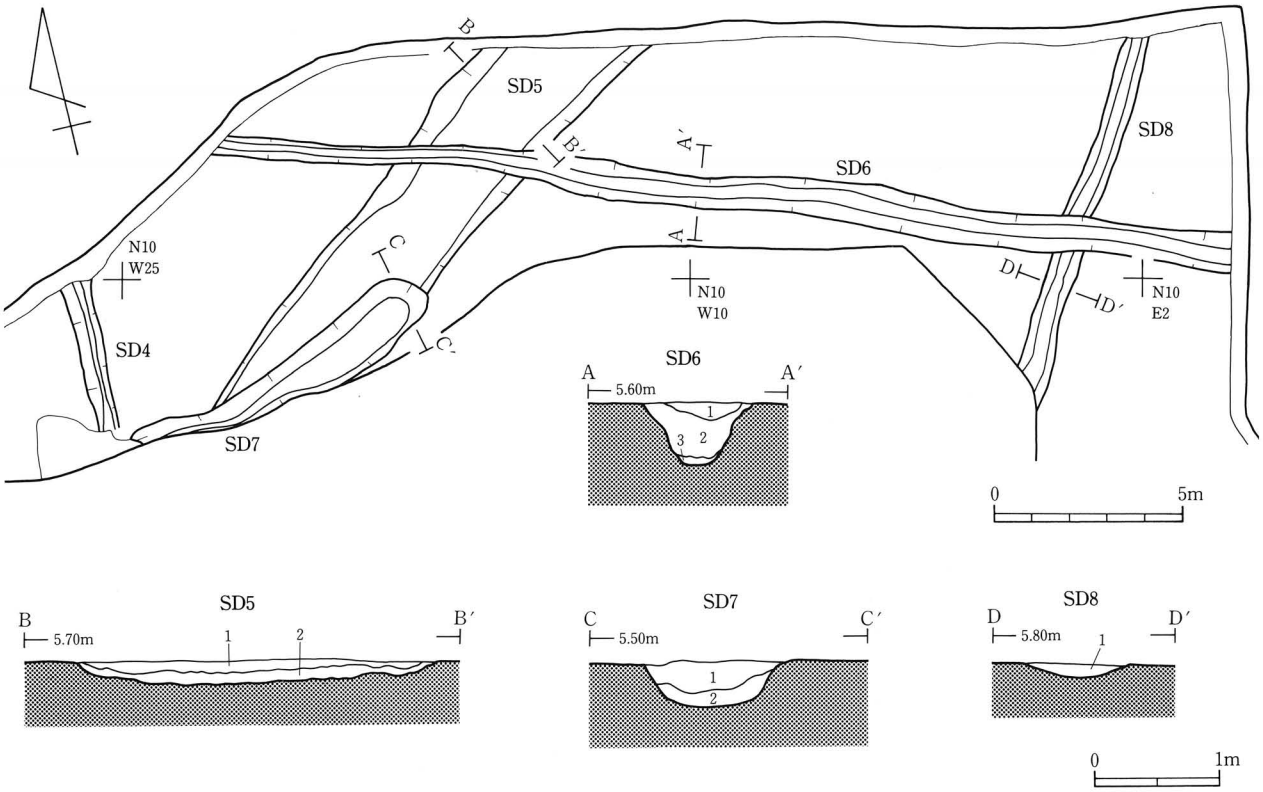
で確認した。ＳＤ５・８を切っている。方向はＮ－71°－Ｗ、確認できた長さは約27m、幅は40～100cm、断面形は「Ｕ」字形で深さは約50cmである。堆積土のうちの大部分がブロックを多く含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差もほとんど認められない。

遺物は出土せず、性格も不明である。

（７）７号溝跡－ＳＤ７－（第18図）

１区中央部に位置し、水田直下のＸ層上面で確認した。ＳＤ５を切っている。平面形がやや湾曲しているが方向はほぼＮ－64°－Ｅで、北東部で途切れている。確認できた長さは約8.5m、幅は約1.5m、断面形は浅い「Ｕ」字形で深さは約40cmである。堆積土は２層に分層できるがブ

ＳＤ６作業風景



SD 5

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄斑文少量
2	2.5 Ｙ3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄斑文少量

SD 6

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ2/2 黒褐色	シルト	炭化物粒微量
2	10ＹＲ3/3 暗褐色	シルト	黒褐色シルト・灰黄褐色粘土ブロック多量
3	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土ブロック微量

SD 7

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土ブロック少量
2	10ＹＲ2/3 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック多量、酸化鉄管状少量

SD 8

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	シルト	黒褐色粘土質シルトブロック多量

第18図　SD4～8 平面・断面図

ロックを多く含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片が２点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格は不明である。

（８）８号溝跡－ＳＤ８－（第18図）

５区北部に位置する南北の溝で、畑の耕作土直下のⅦｂ層上面で確認した。ＳＤ６に切られている。方向はＮ－30°－Ｅで、確認できた長さは約9.5ｍ、幅は約70～80㎝、断面形は浅い「Ｕ」字形で深さは10㎝前後である。堆積土は単層であるがブロックを多く含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベルは南側が３～４㎝低い。

遺物は土師器片が１点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格は不明である。

（９）９号溝跡－ＳＤ９－（第19図）

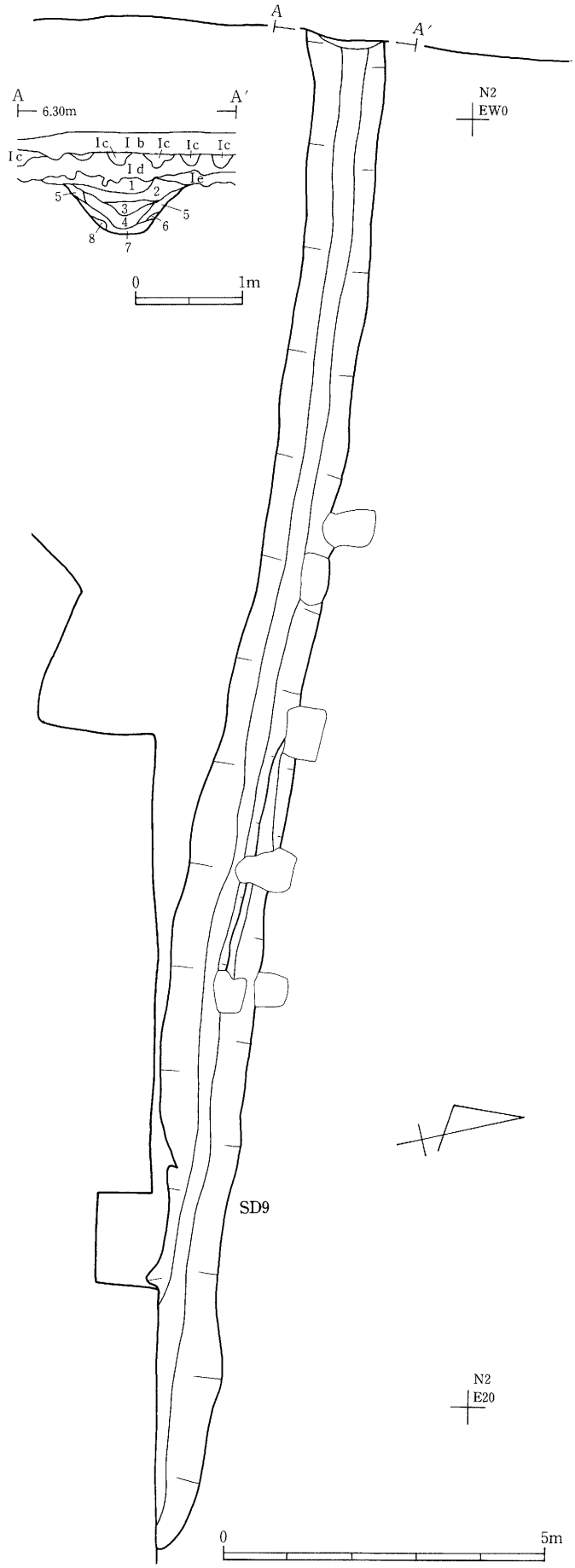
５区北部から２区にかけて位置する東西方向の溝で、畑の耕作土直下のⅦｂ層上面で確認した。ＳＢ１－Ｐ27・Ｐ31・Ｐ32・Ｐ34・Ｐ62、ＳＢ２－Ｐ28の他、Ｐ33・Ｐ35・Ｐ36・Ｐ38・Ｐ60に切られている。方向はＮ－71°－Ｗで、確認できた長さは23.5ｍ、幅は１～1.4ｍである。断面形は「Ｕ」字形で深さは約50㎝、堆積土は自然堆積層である。底面はやや凹凸があり、底面の傾きは不明である。

遺物は土師器片７点、砥石１点が出土したのみで、砥石が図化できた（第20図）。溝の性格は不明であるが、前述したようにＳＤ2 とつながる可能性がある。

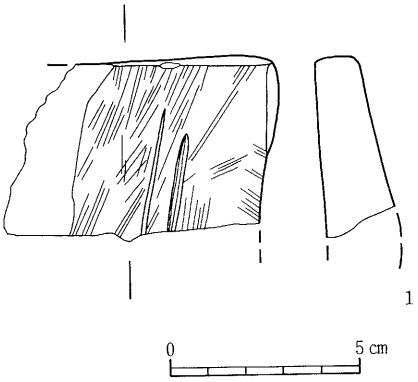
（10）10号溝跡－ＳＤ10－（第22図）

３区西端部に位置し、断片的に残るⅢ層を除去した後のⅣ層上面で確認した。確認できた長さは約2.2ｍで、南北方向に延びるＳＤ12に１ｍの地

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック微量
2	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	粘土	
3	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック微量
4	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック少量
5	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック微量
6	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック少量
7	10ＹＲ2/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土ブロック少量
8	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック多量



第19図　SD9 平面・断面図



No.	写真図版	出土層位	種　別	遺存度	長　さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色　調	胎　土	焼　成
1	159－１	堆積土	石製品・砥石	部分	(7.3)	(4.8)	1.8	——	——	—	—

第20図　SD9 出土遺物

点で途切れている。ＳＤ12をはさんだ東側にも幅や断面形態が類似する溝があって東方に延びていくが、一度途切れるので別な名称とした（ＳＤ11）。溝の幅は約1.2m、方向はＮ－84°－Ｗ、断面形は逆台形で深さは約50cmである。堆積土はブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差は確認した長さが短いため不明である。

遺物は土師器片が４点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格は断定できないが、ＳＤ11やＳＤ12と関連する区画の溝である可能性が考えられる。

(11) 11号溝跡－ＳＤ11－（第22図）

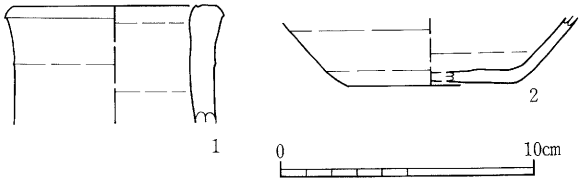
３区西端部に位置し、断片的に残るⅢ層を除去した後のⅣ層上面で確認した。小溝状遺構群を切っている。確認できた長さは約７ｍで、前述したＳＤ10と同様に南北方向に延びるＳＤ12側で途切れている。幅は約1.2m、方向はやや湾曲しているたる明確ではないがほぼＮ－80°－Ｗ、断面形は逆台形で深さは約50cmである。堆積土は下層にブロックを多量に含むことから一部は人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差もほとんどない。

遺物は土師器片が７点、須恵器片が８点出土したが、図化できたものは須恵器の壺と考えられる１点のみである（第21図１）。溝の性格はＳＤ10やＳＤ12と関連する区画の溝である可能性が考えられる。

(12) 12号溝跡－ＳＤ12－（第22図）

３区西端部に位置し、断片的に残るⅢ層を除去した後のⅣ層上面で確認した。ＳＤ13を切っている。確認できた長さは約5.5mで、ＳＤ10・11が途切れている幅４ｍの部分を通って南北に延びている。幅は約80cm、方向はＮ－７°－Ｅである。断面形は「Ｕ」字形をしており深さは約40cm、堆積土は自然堆積と考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベルは南側が約10cm低い。

遺物は土師器片が１点出土したのみで図化できたものはない。溝の性格はＳＤ10やＳＤ11と関連する区画の溝で



No.	写真図版	出土遺構 出土層位	種　別	器種	遺存度	法　量(cm) 口　径	底　径	器　高	底径 口径	外面色調 内面色調	胎　土	焼成	外　面　調　整　・　特　徴 内　面　調　整　・　特　徴
1	159－2	ＳＤ１１ 堆積土	須恵器	壺？	口縁部 1/4	(8.5)	?	?	—	灰色 灰色	やや不良 砂粒やや多	良好	ロクロ調整 ロクロ調整
2	159－3	ＳＤ１３ 堆積土	須恵器	坏	底部 1/3	?	(6.6)	?	?	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ ロクロ調整

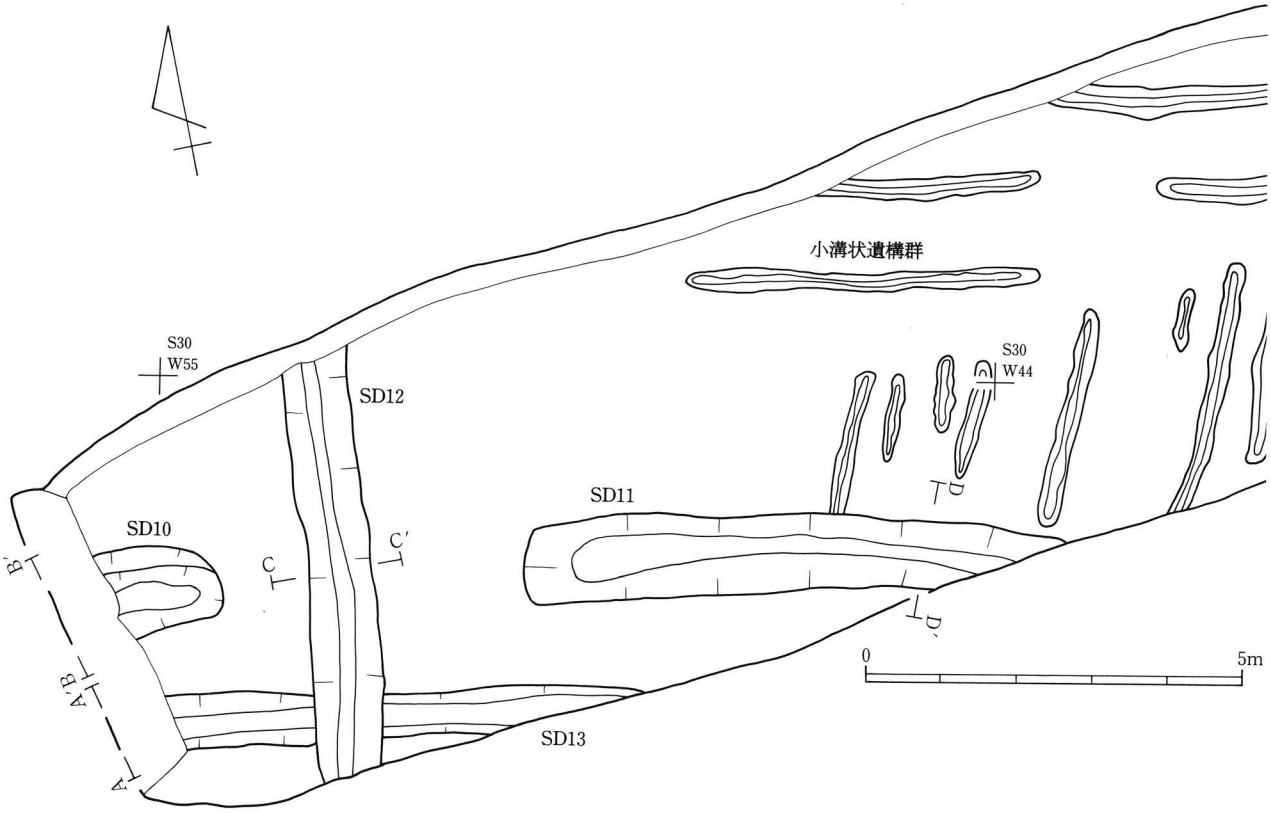
第21図　SD11・13 出土遺物

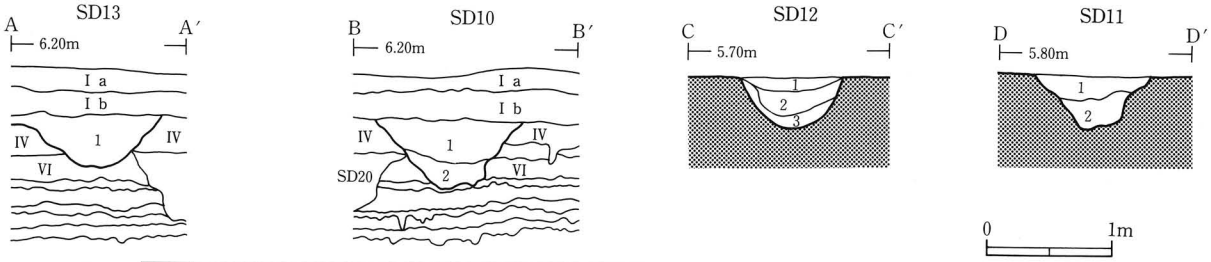
ある可能性が考えられる。

(13) 13号溝跡－ＳＤ13－（第22図）

３区西端部に位置し、断片的に残るⅢ層を除去した後のⅣ層上面で確認した。ＳＤ12に切られている。確認できた長さは約７ｍで、幅は50～90cm、方向は前述したＳＤ10やＳＤ11と並行するＮ－82°－Ｗである。断面形は「Ｕ」字形で深さは約30cmである。堆積土は単層で、ブロックを含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差は南側が約10cm低い。

遺物は土師器片が12点、須恵器片が３点出土したが、図化できたものは須恵器坏１点のみである（第21図２）。溝の性格はＳＤ10～ＳＤ12と関連する区画の溝である可能性が考えられる。





SD10

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土	褐灰色粘土ブロック多量
2	10ＹＲ3/2 黒褐色 10ＹＲ4/1 褐灰色 10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土 粘土 シルト	ブロックの混合

SD11

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロック微量
2	10ＹＲ3/3 暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック多量、黒褐色砂質シルトブロック少量

SD12

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土質シルト	
2	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土質シルト	暗灰黄色砂質シルトブロック少量
3	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色シルト・暗灰黄色砂質シルトブロック少量

SD13

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量、黒褐色粘土ブロック微量

第22図　SD10～13 平面・断面図

(14) 14号溝跡－ＳＤ14－（第23図）

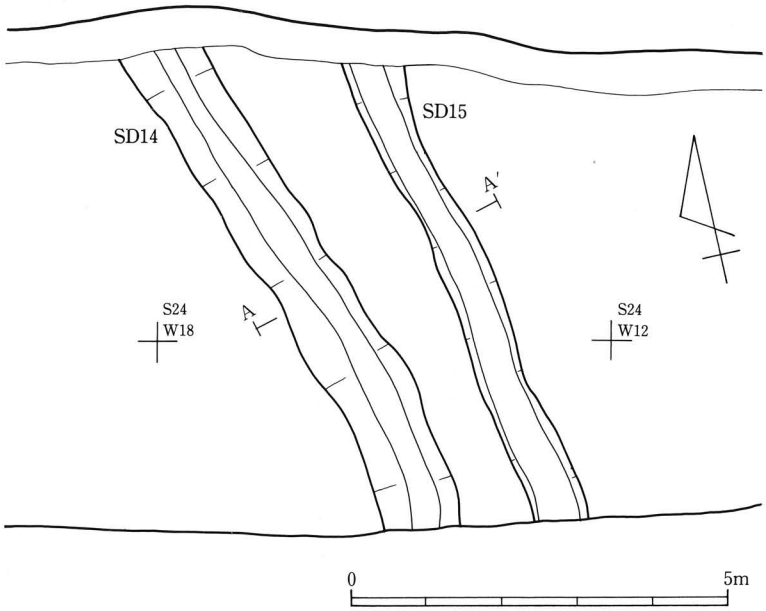
３区東部の現水田耕作土直下、VIａ層上面で確認した。確認できた長さは約7.5mで、幅は約１ m、方向はＮ－18°－Ｗである。断面形は途中で段が付く逆台形をしており、深さは約45cm、堆積土にはブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されている可能性がある。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

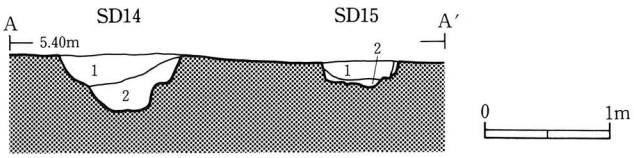
遺物は常滑産の甕の破片が１点出土したが図化はできなかった。前述したように１区のＳＤ３とつながる可能性があるが、溝の性格は不明である。

(15) 15号溝跡－ＳＤ15－（第24図）

３区東部の現水田耕作土直下、VI層上面においてＳＤ14と並んで確認した。確認できた長さは約6.5m、幅は約70cm、方向はＮ－12°－Ｗである。断面形は逆台形で深さは約20cm、堆積土にはブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されていると考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は出土せず、前述したように１区のＳＤ４とつながる可能性はあるが、溝の性格は不明である。





SD14

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	褐灰色シルトブロック・にぶい黄褐色砂質シルトブロック多量
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ4/1 褐灰色	粘土質シルト シルト	ブロックの混合 にぶい黄褐色砂質シルトブロック多量

SD15

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ4/1 褐灰色	粘土質シルト シルト	ブロックの混合
2	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色 10ＹＲ2/1 黒色	砂質シルト 粘土	ブロックの混合

第23図　SD14・15平面・断面図

(16) 16号溝跡－ＳＤ16－（第24図）

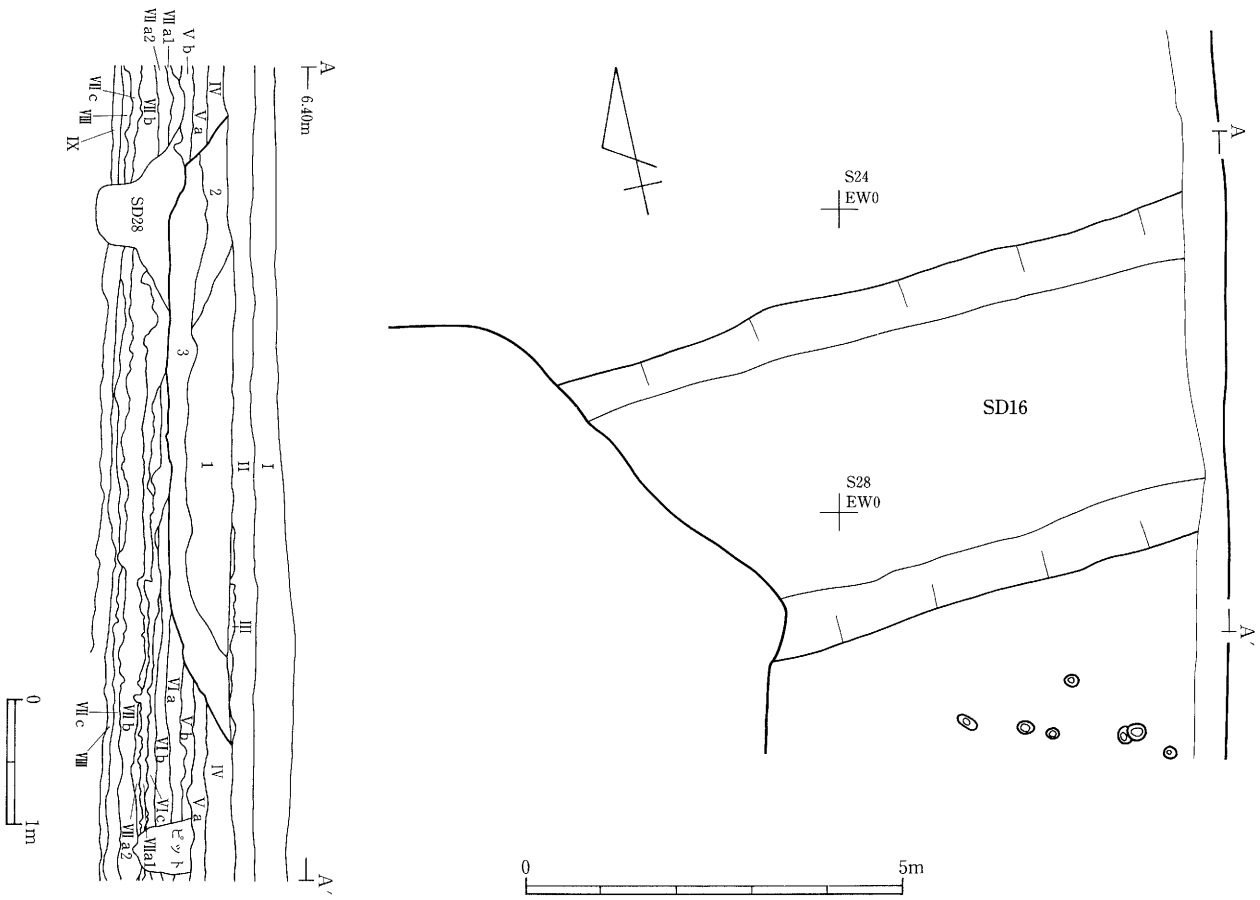
５区のほぼ中央部、III層除去後のIV層上面において確認した。確認できた長さは約8.5m、幅は約4.5m、方向はＮ－84°－Ｅである。断面形は逆台形で深さは約50cm、堆積土下層は自然堆積と推定されるが、上層にはブロックを多量に含むことからある程度埋没したのちに埋め戻されたと考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片77点、須恵器片35点などが出土したがいずれも細片で、図化できたものはない。溝の性格は不明である。

(17) 17号溝跡－ＳＤ17－（第25図）

５区のほぼ中央部、III層除去後のIV層上面においてＳＤ16の南側に並んで確認した。確認できた長さは約６ m、幅は約1.2m、方向はＮ－81°－Ｗである。断面形は「Ｖ」字形をしており、深さは約50cmである。堆積土は基本層III層に類似した黒褐色シルトであることから、本来は確認面よりも１層分上位のIII層上面から掘り込まれていたと推定される。底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片37点、須恵器片18点が出土したがいずれも細片で、図化できたものはない。溝の性格は不明である。



層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロック・褐色粘土ブロック多量
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土ブロック少量
3	2.5 Y4/1 黄灰色	粘土	酸化鉄斑文状多量

第24図　SD16平面・断面図

(18) 18号溝跡－ＳＤ18－（第25図）

５区のほぼ中央部、Ⅲ層除去後のⅣ層上面においてＳＤ16・17の南側に並んで確認した溝で、ＳＤ19を切っている。確認できた長さは約６ｍ、幅は40～70cm、方向はＳＤ16に近いＮ－87°－Ｅである。断面形はやや丸みを帯びているが「Ｖ」字形に近く、深さは約30cm、堆積土は単層である。底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片13点、須恵器片６点が出土したがいずれも細片で、図化できたものはない。溝の性格は不明である。

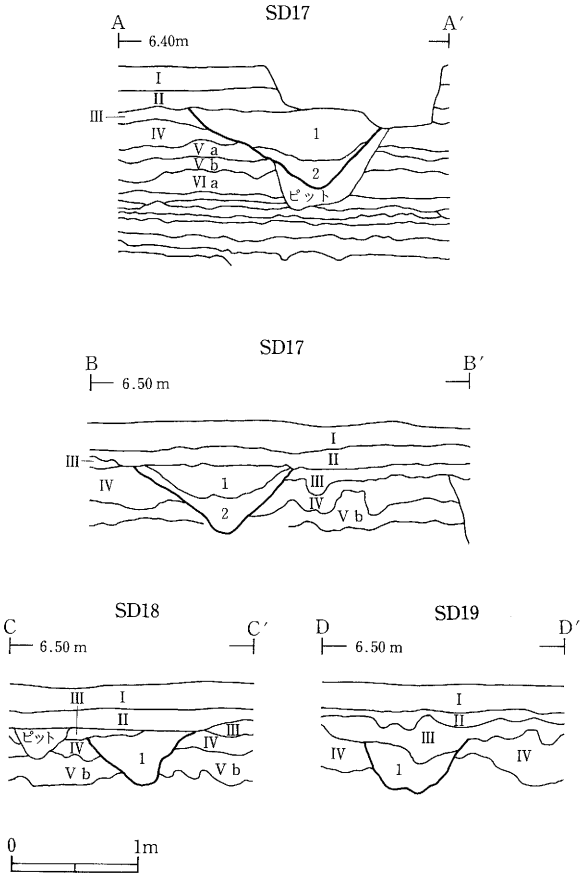
(19) 19号溝跡－ＳＤ19－（第25図）

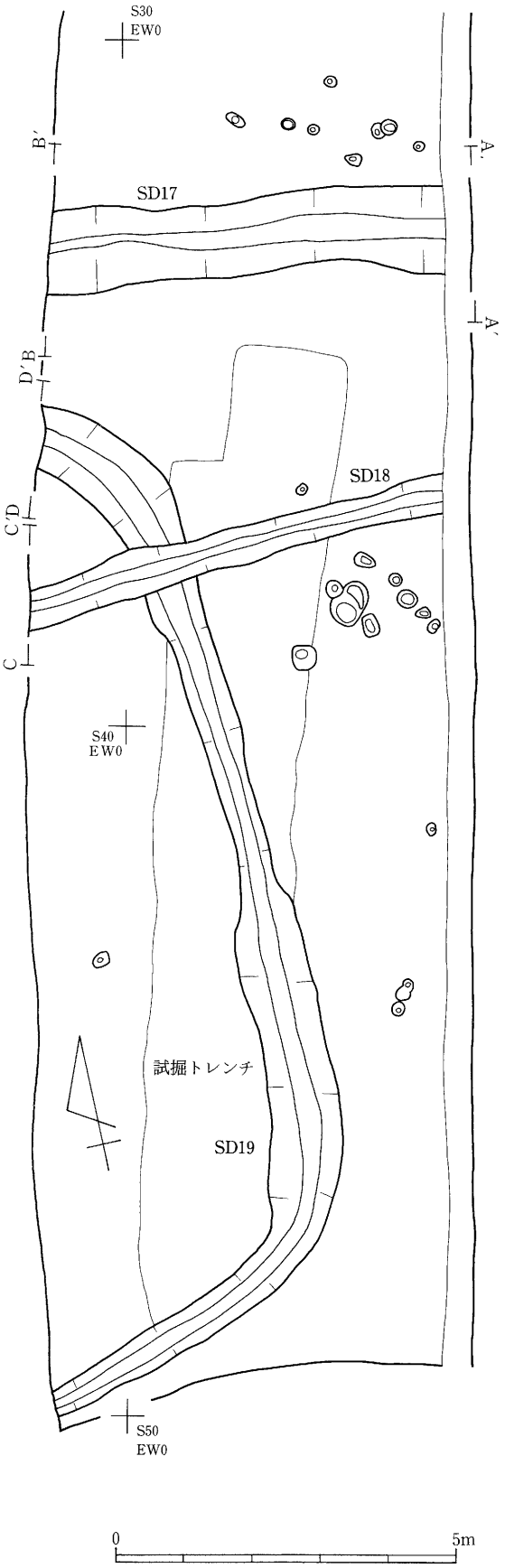
５区中央部、Ⅲ層除去後のⅣ層上面で確認した「コ」字状に巡る溝で、ＳＤ18に切られている。確認できた長さは約17m、幅は50～100cm、断面形はやや開いた「Ｕ」字形で深さは30～45cm、堆積土は単層である。底面はやや凹凸があるがレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片63点、須恵器片17点、鉄釘１点が出土した。図化できたのは土師器坏１点、鉄釘１点のみで（第26図）、土師器坏は底部～体部下端に手持ちヘラケズリが施されるものである。なお、溝の性格は不明である。

(20) 21号溝跡－ＳＤ21－（第27図）

４区中央部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、Ⅵ層上面で確認した。確認できた長さは約 3.5m で、幅は約1.2m、方向はＮ－38°－Ｅである。断面形は逆台形をしており、深さは約60cm、堆積土は自然堆積層と考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。





ＳＤ　17

層位	色　　調	土　質	混 入 物 ・ そ の 他
1	10ＹＲ3/1 黒褐色	シルト	
2	10ＹＲ3/1 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量

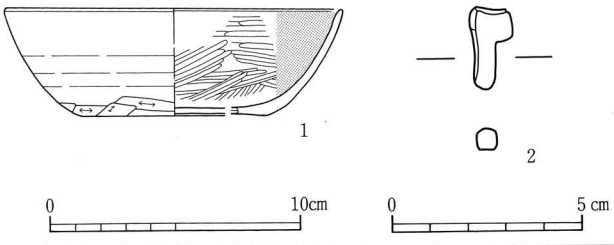
ＳＤ　18

層位	色　　調	土　質	混 入 物 ・ そ の 他
1	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄褐色粘土ブロック微量

ＳＤ　19

層位	色　　調	土　質	混 入 物 ・ そ の 他
1	10ＹＲ3/3 暗褐色	砂質シルト	層下部に灰黄褐色粘土質シルトブロック少量

第 25 図　SD17～19 平面・断面図



No.	写真図版	出土層位	種　別	器種	遺存度	法　量(cm) 口　径	底　径	器　高	底径 口径	外面色調 内面色調	胎　土	焼成	外　面　調　整　・　特　徴 内　面　調　整　・　特　徴
1	159－4	堆積土	土師器	坏	1/7	(13.5)	(7.4)	4.4	0.55	灰白色 暗灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部～体部下端手持ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理

No.	写真図版	出土層位	種　別	遺存度	長　さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色　調	胎　土	焼　成
2	159－5	堆積土	鉄製品・釘	端部欠損	(2.2)	0.9	0.6		――	―	―

第26図　SD19 出土遺物

遺物は土師器６点と須恵器片５点が出土したのみで、図化できたものはない。溝の性格は不明である。

(21) 22号溝跡－ＳＤ22－（第27図）

５区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、Ⅵ層上面で確認した。ＳＤ23と共に南北から南西方向に屈曲する溝で、ＳＤ23･30、ＳＫ９･10を切っている。確認できた長さは約11m、幅は60～100cmである。断面形は「Ｕ」字形をしており深さは約50cm、堆積土は現代水田耕作土に類似した灰黄褐色粘土で自然堆積層と考えられる。底面はほぼ平坦で、底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は出土せず、溝の性格は不明である。

(22) 23号溝跡－ＳＤ23－（第27図）

５区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、Ⅵ層上面で確認した。ＳＤ22と共に南北から南西方向に屈曲する溝で、ＳＤ24･30、ＳＫ10を切り、ＳＤ22に切られている。確認できた長さは約11m、幅は40～70cmである。断面形は「Ｕ」字形をしており深さは約20～30cm、堆積土は現代水田耕作土に類似した灰黄褐色シルト質粘土で自然堆積層と考えられる。底面は凹凸があるが底面のレベル差はほとんど認められない。

遺物は土師器片10点、須恵器片２点が出土したが、図化できるものはない。溝の性格は不明である。

(23) 24号溝跡－ＳＤ24－（第27図）

５区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、Ⅵ層上面で確認した。ＳＤ23とＳＫ10に切られている。確認できた長さは約1.5m、幅は約80cmである。断面形は逆台形をしており深さは約50cm、堆積土は自然堆積層と考えられる。底面は凹凸があり、底面のレベル差は調査範囲が狭いために不明である。

遺物は土師器片10点、須恵器片５点が出土したが、図化できるものはない。溝の性格は不明である。

(24) 30号溝跡－ＳＤ30－（第27図）

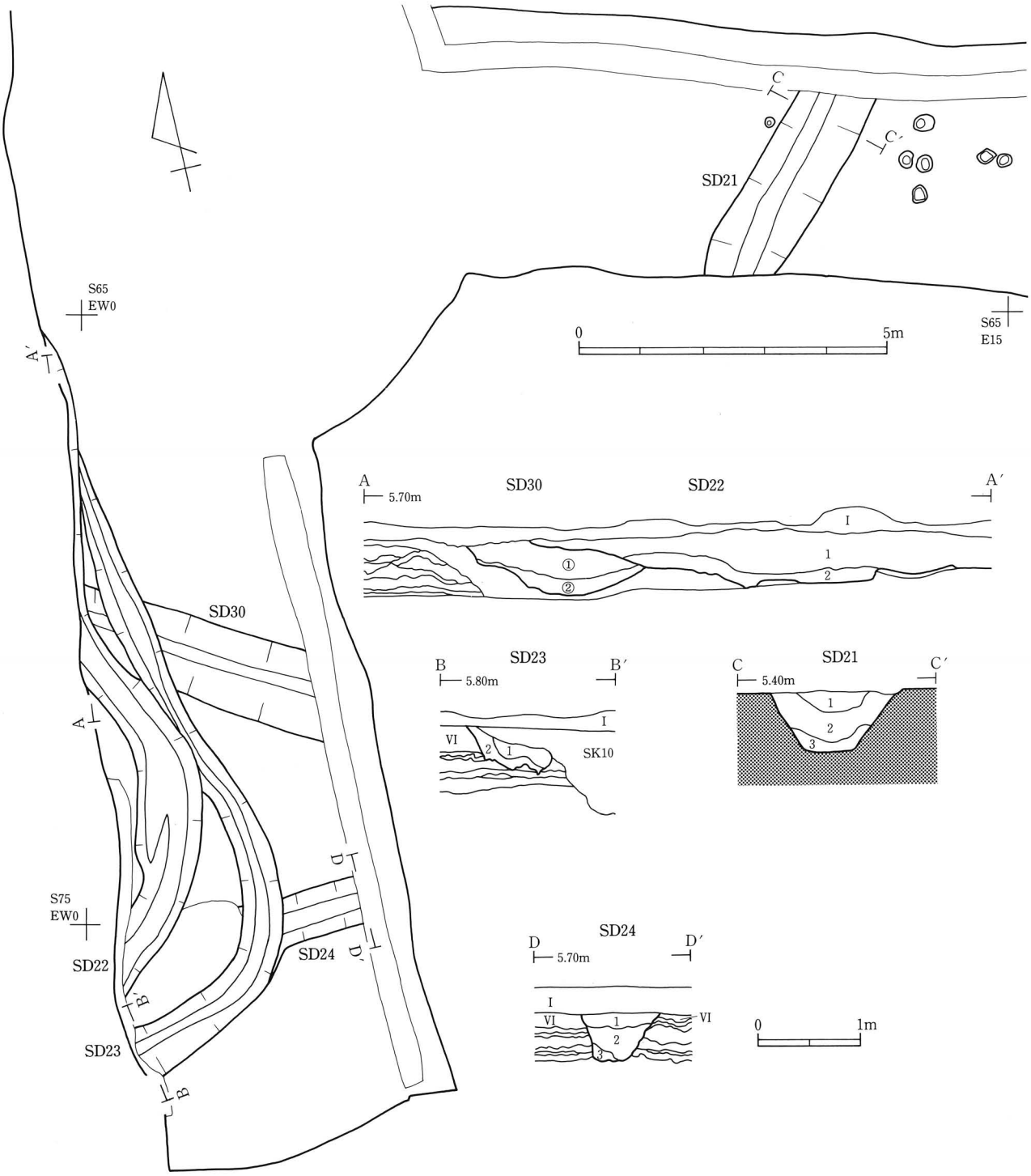
５区南部に位置し、盛土下の現代水田耕作土直下、Ⅵ層上面で確認した。ＳＤ22・23に切られている。確認できた長さは約４ｍ、幅は約1.3ｍである。断面形は浅い「Ｕ」字形をしており深さは約35cm、堆積土は自然堆積層で下層は水成堆積層である。底面は平坦で底面のレベル差は調査範囲が狭いために不明である。遺物は出土しなかった。

溝の位置はちょうど下層のⅦa1 層水田跡に伴うＳＤ27が埋没した直上にあたることから、ＳＤ27の埋没過程の最終段階にできた自然流路の可能性がある。

４．土坑

（１）１号土坑－ＳＫ１－（第28図）

５区北部に位置する。Ⅱ層直下のＶａ層上面で確認したが、調査区の東壁面でもＶａ層上面から掘り込まれていることを検証できた。東側が調査区外のため規模は明確ではないが、東西2.７ｍ以上、南北2.0ｍの楕円形で、主



SD21

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック少量
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック微量
3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量

SD22

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック多量・黒色粘土ブロック微量
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒色粘土ブロック・にぶい黄褐色砂質シルトブロック・褐灰色粘土ブロック少量

SD23

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロック・にぶい黄褐色シルトブロック微量

SD24

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10YR3/2 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック微量、マンガン粒・酸化鉄粒少量
2	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色シルト質粘土ブロック・黒色粘土ブロック多量、酸化鉄管状少量
3	10YR2/1 黒色 10YR3/1 黒色	粘土 粘土	} ブロックの混合

SD30

層位	色　調	土　質	混入物・その他
①	10YR3/2 黒褐色	粘土	褐灰色粘土ブロック少量
②	10YR2/1 黒色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/1 褐灰色	粘土 シルト 粘土	} 互層

第27図　SD21～24・30 平面・断面図

軸方向はＮ－64°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約20cm、底面は平坦である。堆積土は自然堆積層で、層中からは多くの土器が廃棄された状況で出土した。

遺物は土師器片102 点、須恵器片51点、土製品１点、金属製品１点で、このうち土師器７点、須恵器６点、土錘１点が図化できた（第29・30図）。

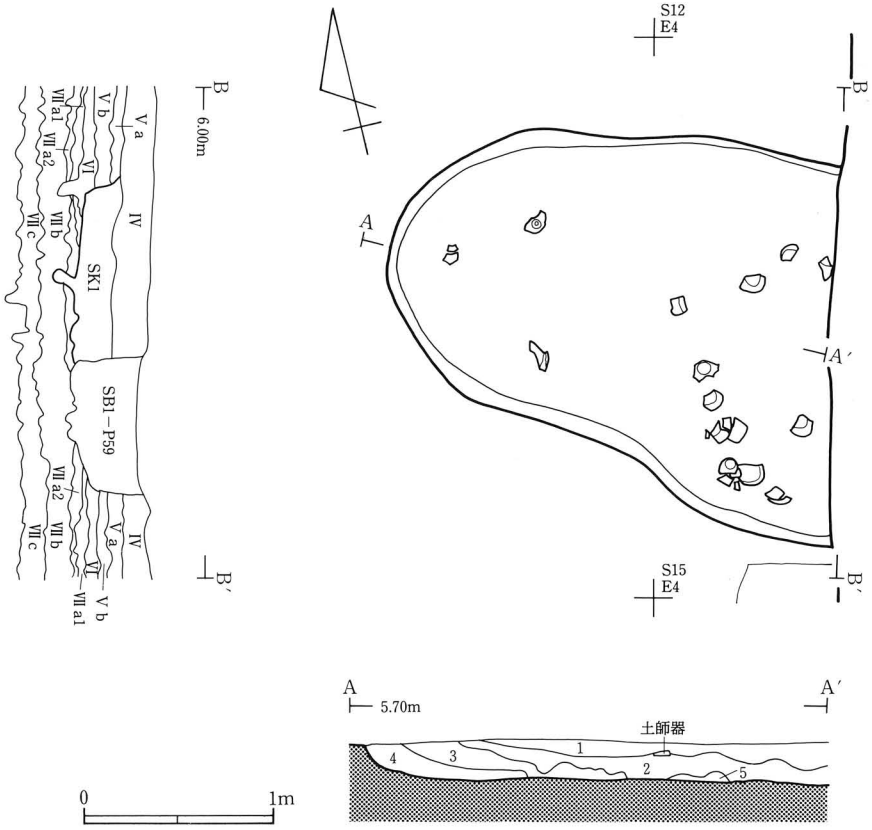
須恵器坏は、体部下半はわずかに丸みを持つが上部は比較的直線的に開き、口縁部はあまり外反しない器形である。調整技法は、切り離し方法が不明で底部あるいは底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるもの（第29図１・２）と、底部が回転糸切無調整のもの（第29図３～６）に分けられる。

土師器坏は２点が大型で、鉢に近いタイプのものである。調整技法は底部あるいは底部～体部下端に手持ヘラケズリ調整が施されるもの（第29図７・９）と底部が回転糸切無調整のもの（第29図８）に分けられる。

なお、土師器坏・須恵器坏共に底部に墨書が認められるものが１点ずつある（第29図６・９）。両者共に同じ文字で、「山阝」である可能性がある（註３）。

土師器甕はロクロ調整のもの（第30図１・４）とロクロ使用の有無が確認できないもの（第30図２・３）があるが、全体形が判るものはない。

（２）２号土坑－ＳＫ２－（第31図）



層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック少量
2	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	シルト	黒褐色粘土ブロック少量 炭化物粒多量、焼土粒少量
3	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック少量 炭化物粒微量
4	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトブロック・黒褐色粘土ブロック少量、炭化物粒微量
5	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック微量

第28図　SK1 平面・断面図

４区東部に位置する。盛土下の現代水田耕作土直下、Ⅵ層上面で確認した。平面形は楕円形で規模は65×40cm、深さ20cmである。堆積土上層には焼土ブロックを多量に含んでいる。遺物は土師器片26点、須恵器片２点が出土したが土師器の大部分はロクロ調整の甕の破片で、図化できたものはない。

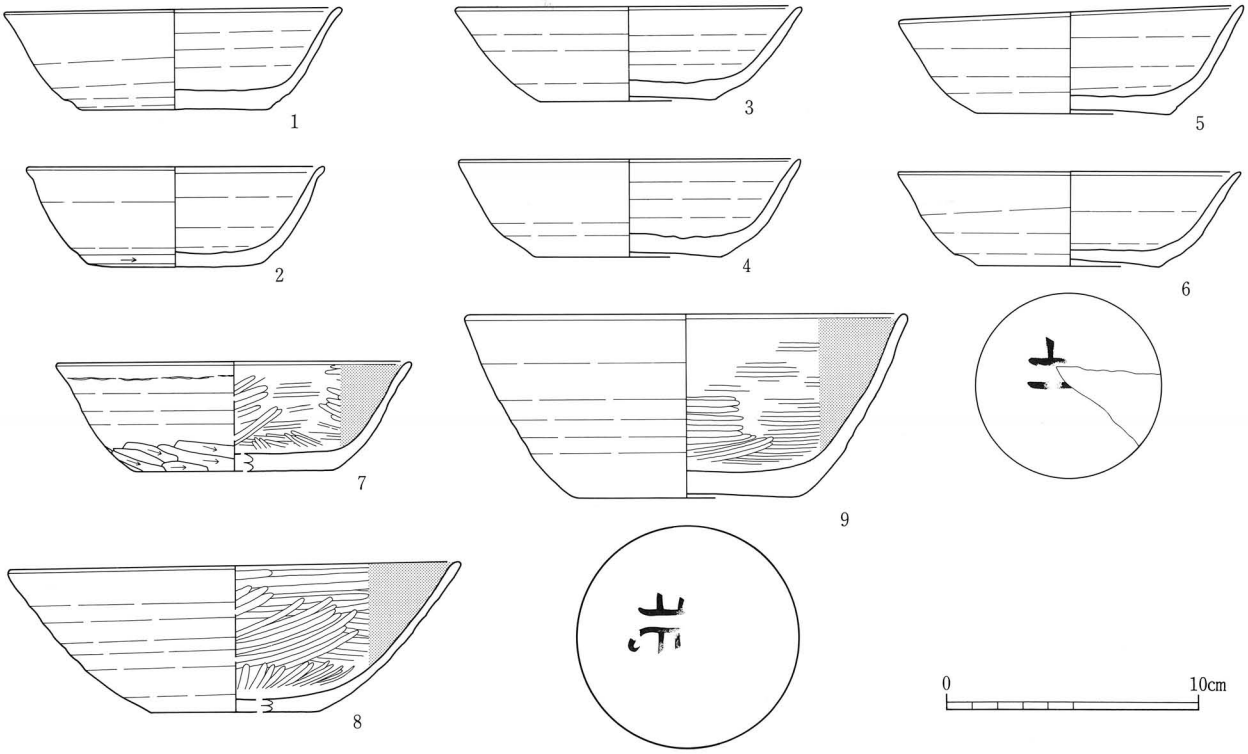
なお、このＳＫ２に近接してＳＫ３～８があるが、これらの土坑の確認状況はすべてＳＫ２と同じで堆積土も類似している。これらの土坑は「ＳＩ２」の項で述べたように、その位置関係からＳＩ２に伴うものである可能性が考えられる。

（３）３号土坑－ＳＫ３－（第31図）

平面形は楕円形で規模は80×70cm、深さ20cmである。堆積土は単層で焼土ブロックを多量に含んでいる。遺物は土師器片33点、須恵器片１点が出土したが土師器の大部分はロクロ調整の甕の破片で、図化できたものはない。

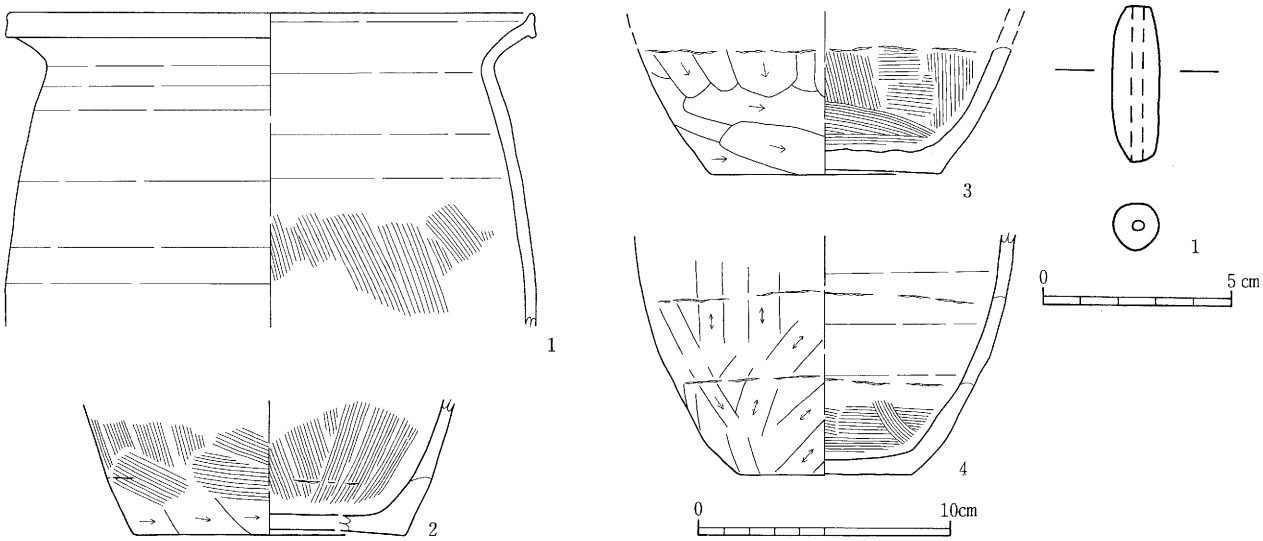
（４）４号土坑－ＳＫ４－（第31図）

平面形は長楕円形で規模は100×50cm、深さ30cmで、段を有する。堆積土は３層で一部に焼土を含んでいる。遺物



No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴 内面調整・特徴
1	160－1	堆積土	須恵器	坏	1/2	13.4	7.6	4.0	0.57	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ→ヘラナデ ロクロ調整
2	160－2	堆積土	須恵器	坏	1/2	(11.8)	6.9	4.0	0.58	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部～体部下端回転ヘラケズリ ロクロ調整
3	160－3	堆積土	須恵器	坏	ほぼ完形	13.8	7.0	3.8	0.51	灰白色 灰白色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 ロクロ調整
4	160－4	堆積土	須恵器	坏	1/2	13.6	7.3	3.9	0.54	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 ロクロ調整
5	160－5	堆積土	須恵器	坏	1/2	(13.7)	7.8	4.3	0.57	灰白色 灰白色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 ロクロ調整
6	160－6	堆積土	須恵器	坏	3/4	13.6	7.3	3.8	0.54	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切無調整、底部墨書 ロクロ調整
7	160－7	堆積土	土師器	坏	1/4	(14.0)	(6.8)	4.3	0.47	浅黄橙～褐灰 暗灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部～体部下端手持ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理
8	160－8	堆積土	土師器	坏	1/4	(18.0)	(6.6)	5.9	0.37	灰白～浅黄橙 暗灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 ヘラミガキ・黒色処理
9	160－9	堆積土	土師器	坏	1/3	(17.5)	(8.8)	7.3	0.50	浅黄橙色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部手持ヘラケズリ、底部墨書 ヘラミガキ・黒色処理

第29図　SK1出土遺物（１）



No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴 内面調整・特徴
1	161－1	堆積土	土師器	甕	上半部	(20.8)	?	?	—	にぶい橙色 にぶい橙色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整 ロクロ調整、体部下端ヘラナデ
2	161－2	堆積土	土師器	甕	底部	?	(10.6)	?	—	にぶい褐色 にぶい橙色	良好 白針微量	良好	ナデ、体部下端手持ヘラケズリ ナデ
3	161－3	堆積土	土師器	甕	底部	?	(9.0)	?	—	にぶい黄橙色 橙色	良好 白針微量	良好	体部手持ヘラケズリ、底部ナデ ナデ
4	161－4	堆積土	土師器	甕	底部	?	(6.7)	?	—	にぶい褐色 にぶい橙色	良好 白針微量	良好	手持ヘラケズリ ロクロ調整→体部下端～底部ナデ

No.	写真図版	出土層位	種別	遺存度	長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成
5	161－5	堆積土	土製品・土錘	完形	4.2	1.2	——		褐色	やや不良	やや軟質

第30図　SK1 出土遺物（２）

は土師器片19点の他、焼けた粘土塊が１点出土した。土師器の大部分はロクロ調整の甕の破片で、図化できたものはない。

（５）５号土坑－ＳＫ５－（第31図）

平面形は円形で規模は径55cm、深さ22cmである。堆積土は単層で焼土ブロックを含んでいる。遺物は土師器片23点、須恵器片２点が出土した。土師器の大部分はロクロ調整の甕の破片で、このうち１点が図化できた(第32図１)。

（６）６号土坑－ＳＫ６－（第31図）

平面形は不整な方形で規模は90×60cm、深さ50cmで、段を有する。堆積土は単層である。遺物は土師器片23点、瓦片１点、金属製品１点が出土した。土師器の大部分はロクロ調整の甕の破片で、瓦１点が図化できた(第32図２)。

（７）７号土坑－ＳＫ７－（第31図）

平面形は楕円形で規模は60×50cm、深さ37cmで、段を有する。堆積土はＳＫ6 と同じである。遺物は出土しなかった。

（８）８号土坑－ＳＫ８－（第31図）

調査区のコーナーに位置するため平面形や規模は不明である。深さは約10cmで、堆積土はＳＫ６と同じである。遺物は出土しなかった。

（９）９号土坑－ＳＫ９－（第34図）

５区南部に位置する。盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面で確認した。ＳＫ10を切り、ＳＤ22に切られている。平面形は不整な楕円形で規模は南北2.3m、東西1.7m 以上、深さ60cmである。堆積土は灰黄褐色粘土を主としており、ブロックを比較的多く含んでいることから人為的に埋め戻されている可能性がある。遺物は土師器の小片１点のみで図化はできなかった。

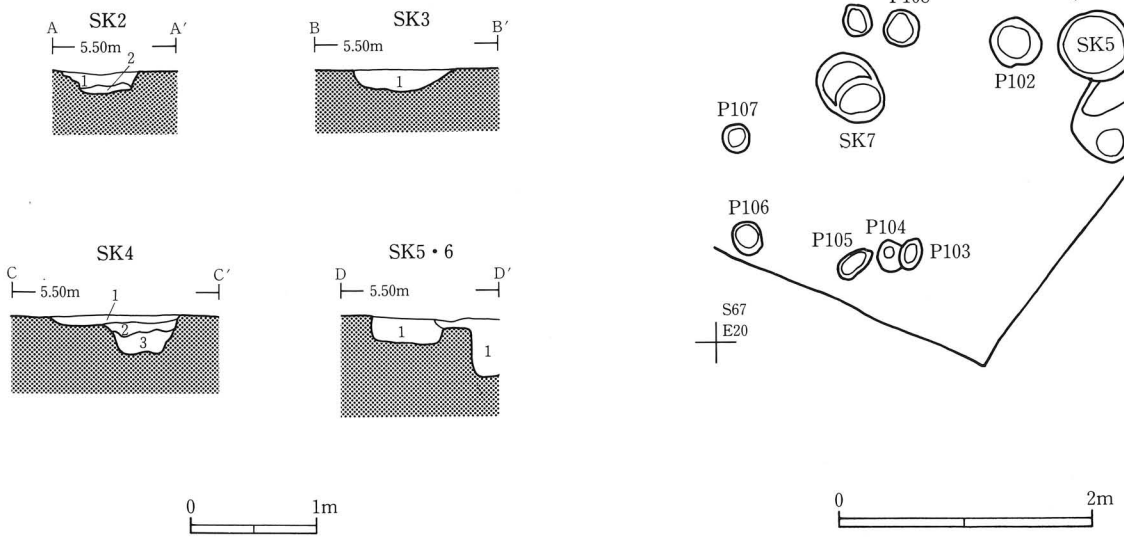
(10) 10号土坑－ＳＫ10－（第34図）

５区南部に位置する。盛土下の現代水田耕作土直下、VI層上面でＳＫ９の南側に並んで確認した。ＳＤ24を切り、ＳＤ23とＳＫ９に切られている。平面形は長方形で、規模は南北1.6m、東西2.2m 以上で主軸方向はＮ－81°－Ｅ、深さ80cmである。堆積土は上層が黒褐色粘土、下層が灰黄褐色粘土を主としており、層下部にはブロックを多量に含んでいることからある程度の深さまで埋め戻されていると考えられる。遺物は須恵器片１点のみである（第33図）。

５．ピット

掘立柱建物の柱穴として区別できるピット以外のものとしては、Ｖ区中央部、III層除去後のIV層上面で確認したＰ１～21、II区のＩ・II層除去後のVIIｂ層上面で確認したＰ33・35・36・38～48・60・61、４区の現代水田直下のVI層上面で確認したＰ99～126 がある（第８図）。

これらのうち２区のＰ33・36・60・61に関しては平面形が



SK 2

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R3/3 暗褐色	シルト	焼土ブロック多量
2	10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	

SK 3

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R3/3 暗褐色	シルト	焼土ブロック多量

SK 4

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック少量
2	10Ｙ R3/1 黒褐色 10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色	粘土 砂質シルト	} 混合、焼土ブロック少量
3	10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄褐色粘土ブロック微量・黒色粘土ブロック少量

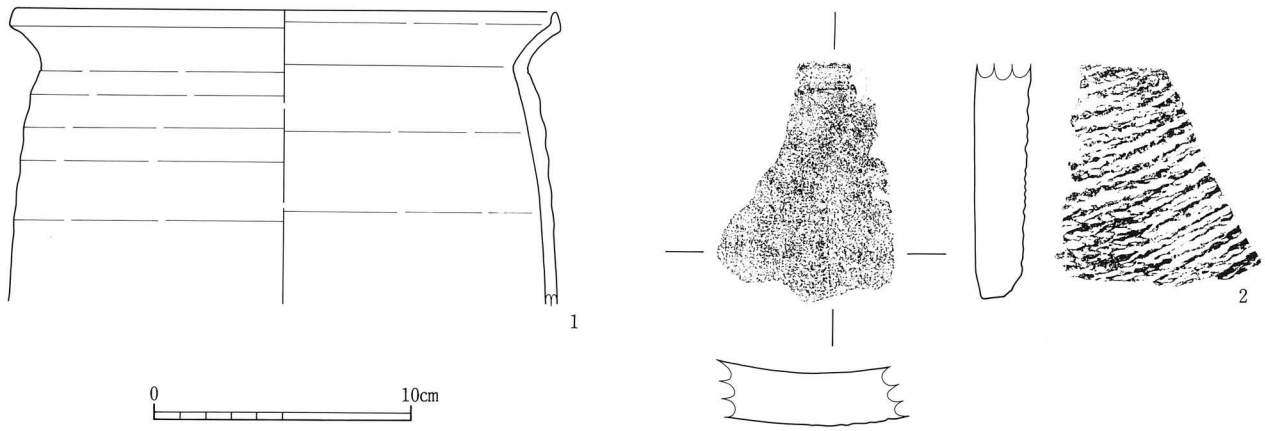
SK 5

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R3/3 暗褐色	シルト	黒色粘土ブロック多量、焼土ブロック少量

SK 6

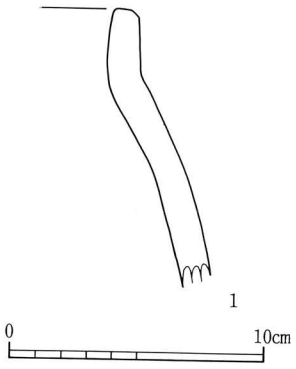
層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10Ｙ R3/3 暗褐色	砂質シルト	黒褐色粘土ブロック少量

第 31 図　SK2～8 平面・断面図



No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調/内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴/内面調整・特徴
1	162－1	ＳＫ５ 堆積土	土師器	甕	上半部 2/5	(21.2)	?	?	—	橙～褐灰色 橙～褐灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整 ロクロ調整
2	162－2	ＳＫ６ 堆積土	瓦・平瓦		部分	?				(凹面) 灰色 (凸面) 灰～暗灰色	やや不良	良好	(凹面) 布目、糸切り痕 (凸面) 横位縄叩き

第32図　SK5・6出土遺物

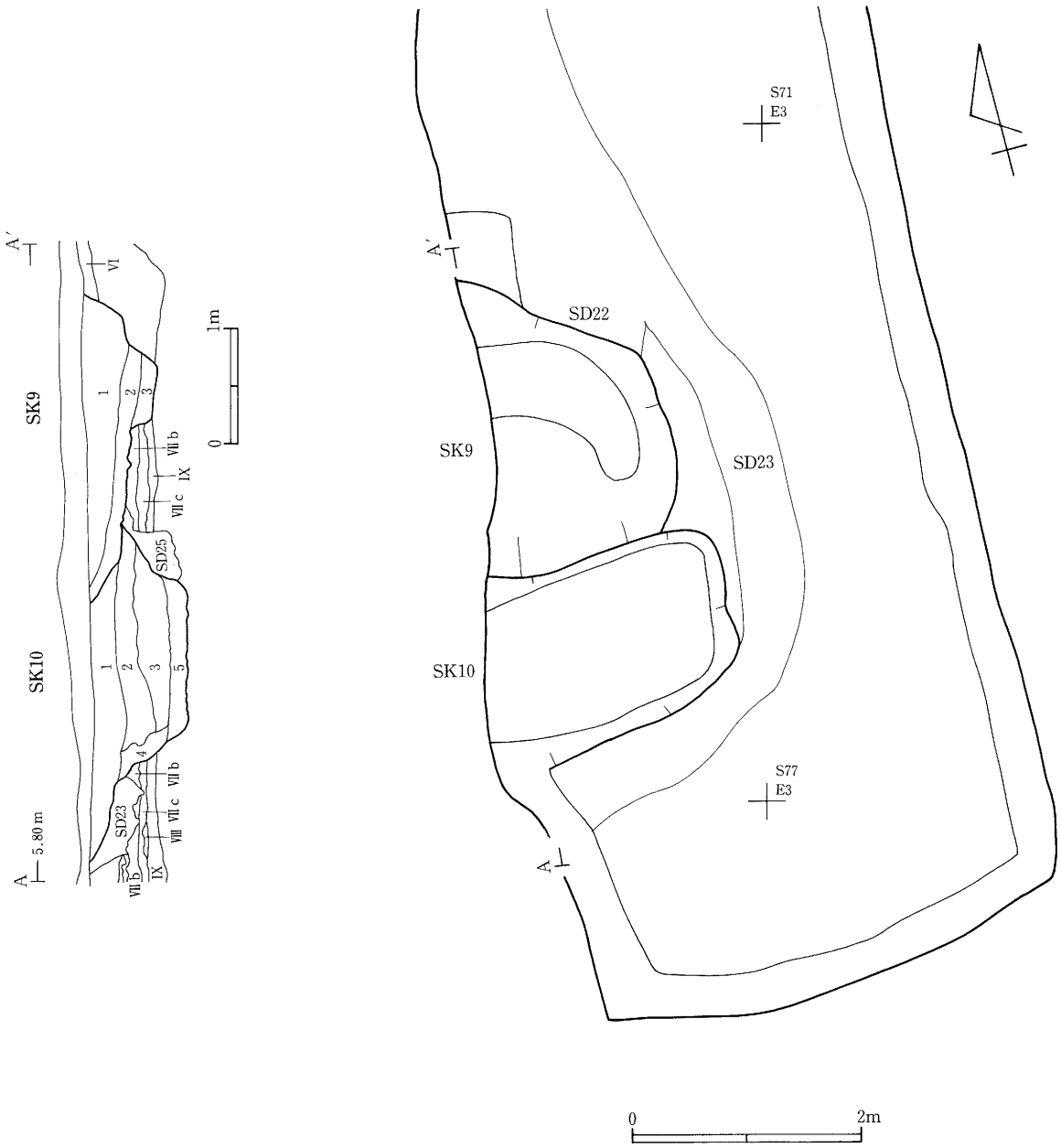


No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調/内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴/内面調整・特徴
1	163	堆積土	須恵器	短頸壺	口縁部 破片	?	?	?	—	灰色 灰色	やや不良 白針微量	良好	ロクロ調整 ロクロ調整

第33図　SK10出土遺物

方形で規模が大きく、ＳＢ１等掘立柱建物の柱穴に類似していることから、これらも建物の柱穴である可能性が高いが、どの建物に伴うものか明らかにすることはできなかった(第11図)。また、４区のＳＩ２のプランの内側に位置するＰ99～102・108・109・111については、ＳＫ２～８同様にＳＩ２に伴う可能性はあるが確定はできなかった。その他のピットの性格は不明である。

遺物は各ピットから土師器片70点、須恵器片23点が出土したが（表19)、このうち土師器坏・須恵器坏各１点が図化できた（第35図)。



ＳＫ９

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土 粘土	混合、にぶい黄褐色シルトブロック少量
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土	黒色粘土ブロック・にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量
3	10ＹＲ2/1 黒色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック多量

ＳＫ10

層位	色　　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック微量
2	2.5 Ｙ3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色砂質シルトブロック微量
3	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック多量、黒色粘土ブロック微量
4	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ5/2 灰黄褐色 10ＹＲ2/1 黒色	粘土 粘土 粘土	互層、層上部ににぶい黄褐色砂質シルトブロック少量
5	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ2/1 黒色	粘土 粘土	ブロックの混合、灰黄褐色粘土ブロック微量

第34図　SK9・10平面・断面図

６．小溝状遺構群（第36・37図）

３区西部において、Ⅲ層除去後のⅣ層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っているが、新旧関係は明らかにできなかった。

それぞれの小溝の幅は20～30cmで、長さは10m近く続くものもあるが１ｍ前後のものや３～４ｍで途切れるものもある。深さは５～10cm程度で壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は基本層Ⅲ層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のⅢ層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。

溝と溝との間隔は20～30cmと狭い箇所と、１ｍくらいある箇所とがある。

方向は、南北方向のものは北から東に約10°振れるものと20°前後振れるものとの２種類あり、東西方向のものはやや湾曲しているが北から75～85°西に振れているもののみである。

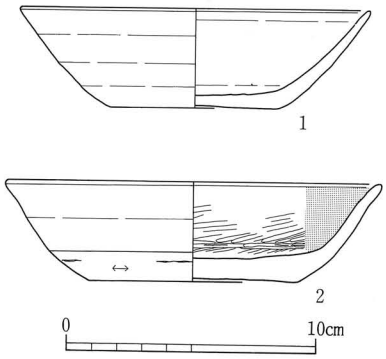
小溝状遺構群は、畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であり、畑の耕作土の下面で確認されている（註４）。３区の小溝状遺構群も同様のもので、Ⅲ層上面では畝は確認できなかったものの基本層Ⅲ層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがⅢ層直下のⅣ層にまで達したと考えられる。なお、小溝状遺構群が確認できなかった地点においてはその場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲については不明である。また、遺物は出土しなかった。

（註１）完掘したのはP49のみで、P58はプラン確認のみに留めた。

（註２）P57の位置がやや北に寄っているが、これはプランを確認したⅣ層上面がP57の付近ではⅠ・Ⅱ層の耕作によって乱されていた可能性もある。

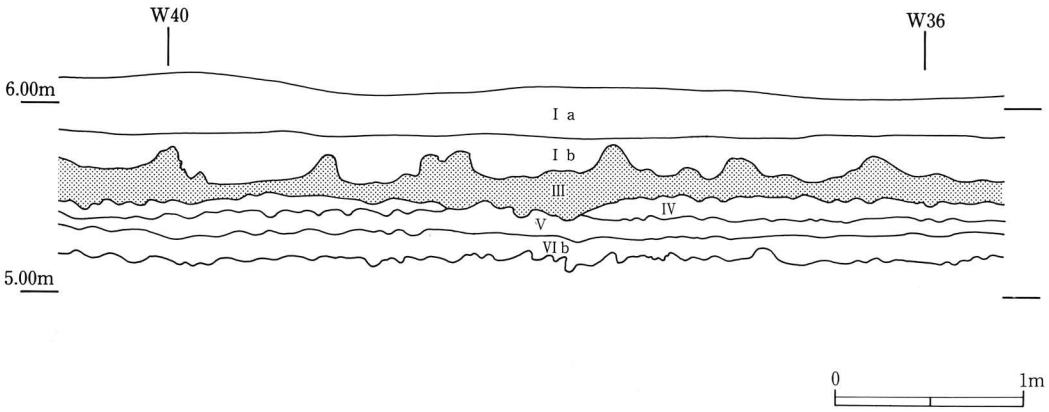
（註３）東北歴史資料館の赤外線テレビで他の墨痕の有無を確認させていただいたが、その際のご教示による。

（註４）下ノ内浦遺跡第４次調査（佐藤：1993）、同第５次調査（神成：1995）では畑の耕作土上面の畝と耕作土の直下層上面の小溝状遺構群の両者がセットとなって確認されている。なお、小溝状遺構群の成因である深い耕作痕については、通常の所謂「天地返し」の他に「根菜類用畝床」も含まれている可能性も指摘されている（佐藤：1998）。

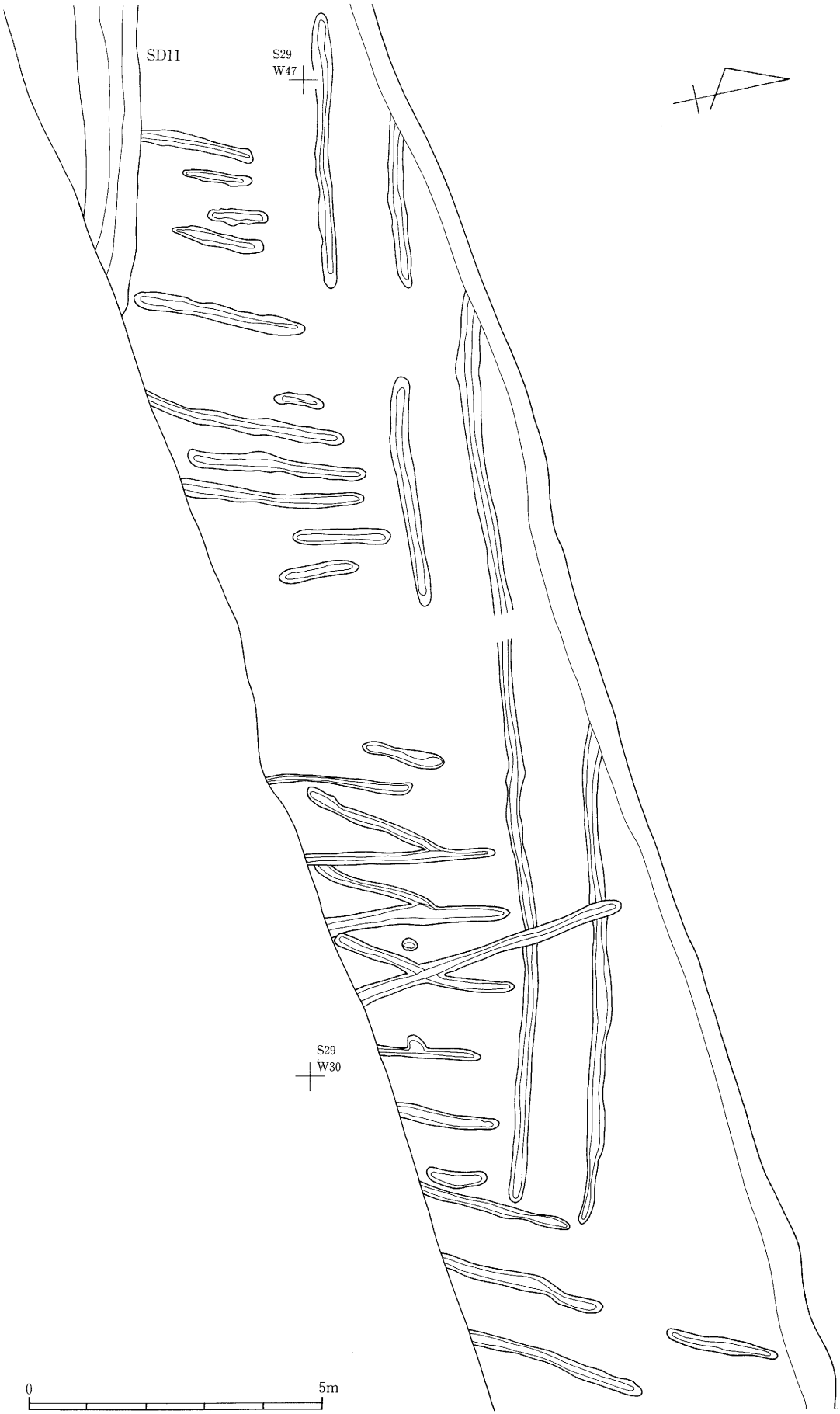


No.	写真図版	出土遺構出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調/内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴/内面調整・特徴
1	164－1	Ｐ５ 掘り方	須恵器	坏	2/5	(14.0)	(6.8)	4.0	0.49	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ→一部ナデ ロクロ調整
2	164－2	Ｐ６０ 掘り方	土師器	坏	1/2	(15.0)	8.4	4.0	0.56	にぶい黄橙色 暗灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部～体部下端回転ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理

第35図　P5・60出土遺物



第36図　Ⅳ層上面小溝状遺構群断面図

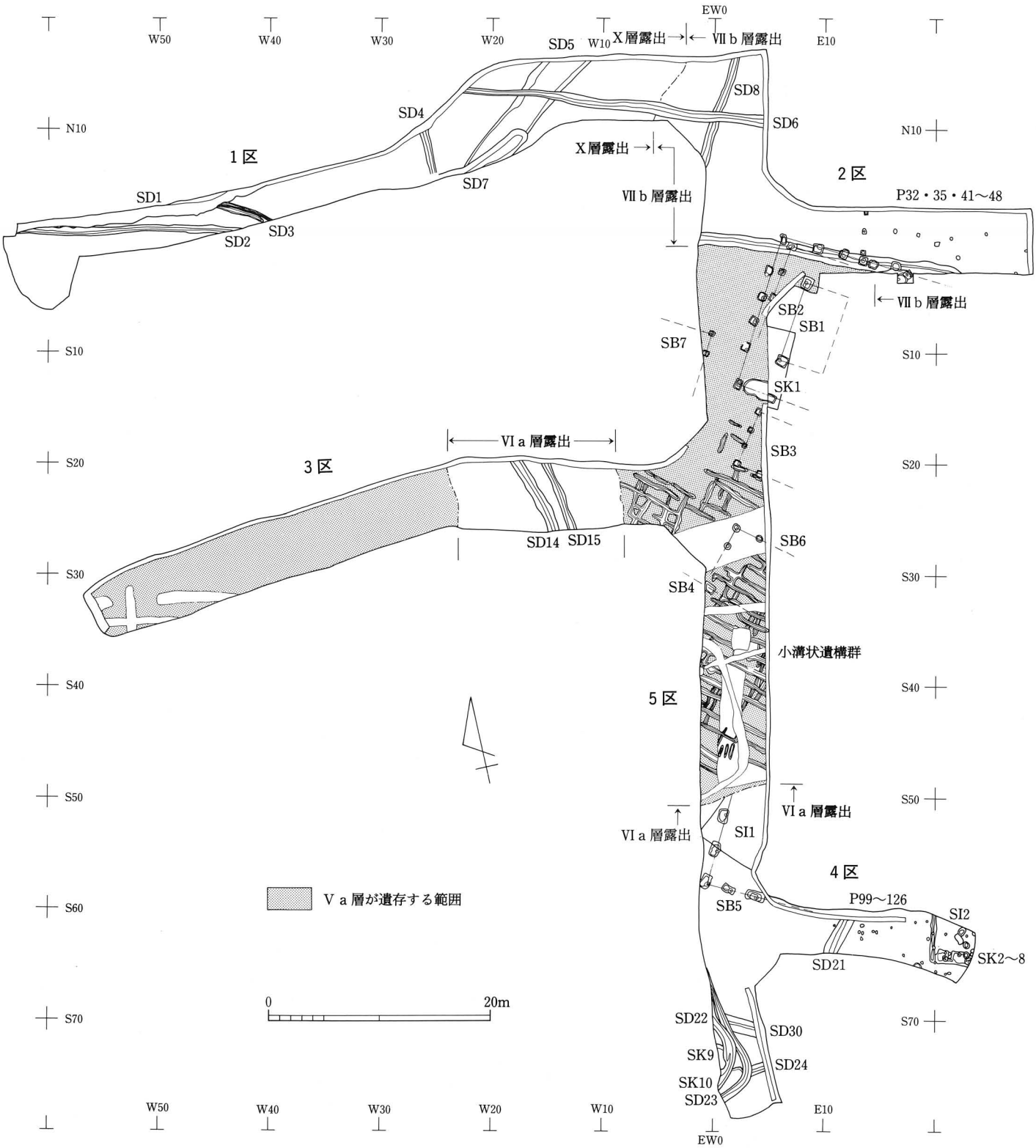


第 37 図　Ⅳ層上面小溝状遺構群平面図

第３節　Ｖａ～Ｘ層上面（Ｉ～Ⅳ層除去後）

Ｉ．Ｉ～Ⅳ層除去後の状況（第38図）

前節で述べたように調査区の大部分の箇所ではＩ～Ⅲ層を除去した段階ですでにⅣ層よりも下の層（Ｖａ・Ⅵａ・Ⅶｂ・Ｘ層など）が現れていたので、これらの箇所ではⅣ層の除去以前・以後でも状況は変わらない。



第38図　Ｖａ～Ｘ層上面（Ｉ～Ⅳ層除去後）平面図

Ⅳ層が遺存していたのは３区西半部（W24以西）と東端部（Ｗ８以東）、５区中央部（Ｓ20～50付近）のみであるが、ここではⅣ層上面の精査終了後にⅣ層を除去してＶａ層上面を検出した。３区西半部ではＶａ層上面で新しく確認した遺構はなかったが、５区中央部ではＳＢ３の南側の柱穴（Ｐ55・56）が確認できた他、この付近で一部が確認されていた小溝状遺構群がさらに南側のＳ50付近にある段差まで拡がっていることを確認した。

Ｓ30付近ではこの小溝状遺構群に混じってＳＢ４－Ｐ68が確認されたがＳＢ４の他の柱穴はまだ確認できない状況であった。さらにⅣ層上面で確認して精査したＳＤ16の底面からはＳＢ６－Ｐ94～96も確認したが、この建物が展開すると考えられたＳＤ16の南側では組み合う柱穴はまだ確認できなかった。

なお、Ｓ50付近の段差の南側で確認されていたＳＩ１とＳＢ５の北側部分のプランもこの段階ではまだ確認できない状況であった。

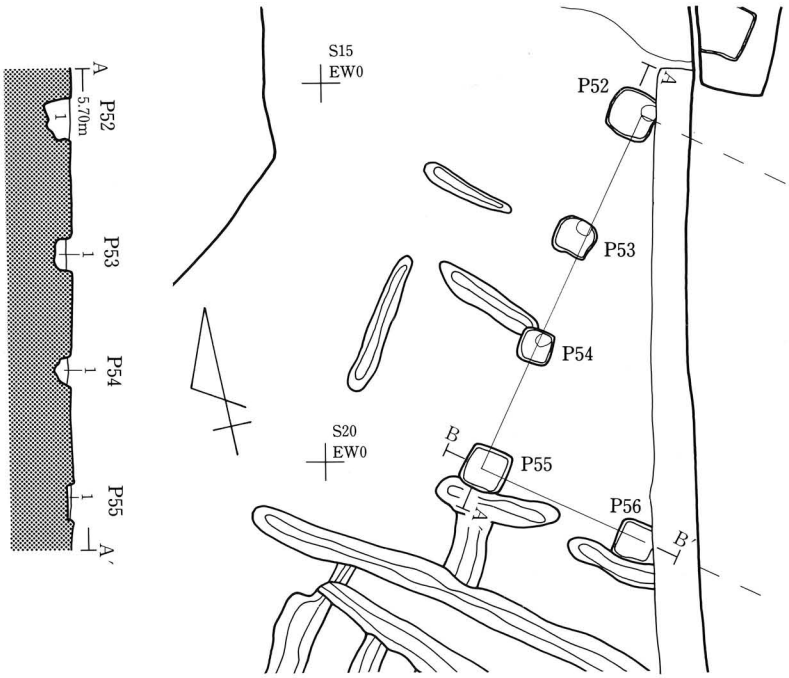
Ⅱ．遺構と遺物

１．掘立柱建物跡

３号掘立柱建物跡－ＳＢ３－（第39・40図）

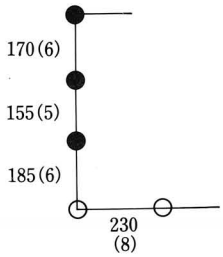
５区北部のＳＢ１の南側に位置している。Ｖａ層上面で南北方向の柱穴４基とそれに直交して東に延びる柱穴１基を確認した。同じくＶａ層上面で確認した小溝状遺構群に切られている。

南北３間で、東西は東側が調査区外のため不明であるが、規模は南北5.10m、東西2.30m以上、西側柱列の方向はＮ－37°－Ｅである。柱穴は表６の通りで上面や断面では柱痕跡は確認できなかったが、Ｐ52～54の底面には窪みが認められるのでこの部分が柱痕跡と推定される。南北の柱間は北から６尺・５尺・６尺でＳＢ１同様に中央が狭くなっている。東西は８尺である。遺物は土師器片18点、須恵器片 3点が出土したが図化できたものはない。



層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック微量

第39図　SB3 平面・断面図



第40図　SB3 模式図

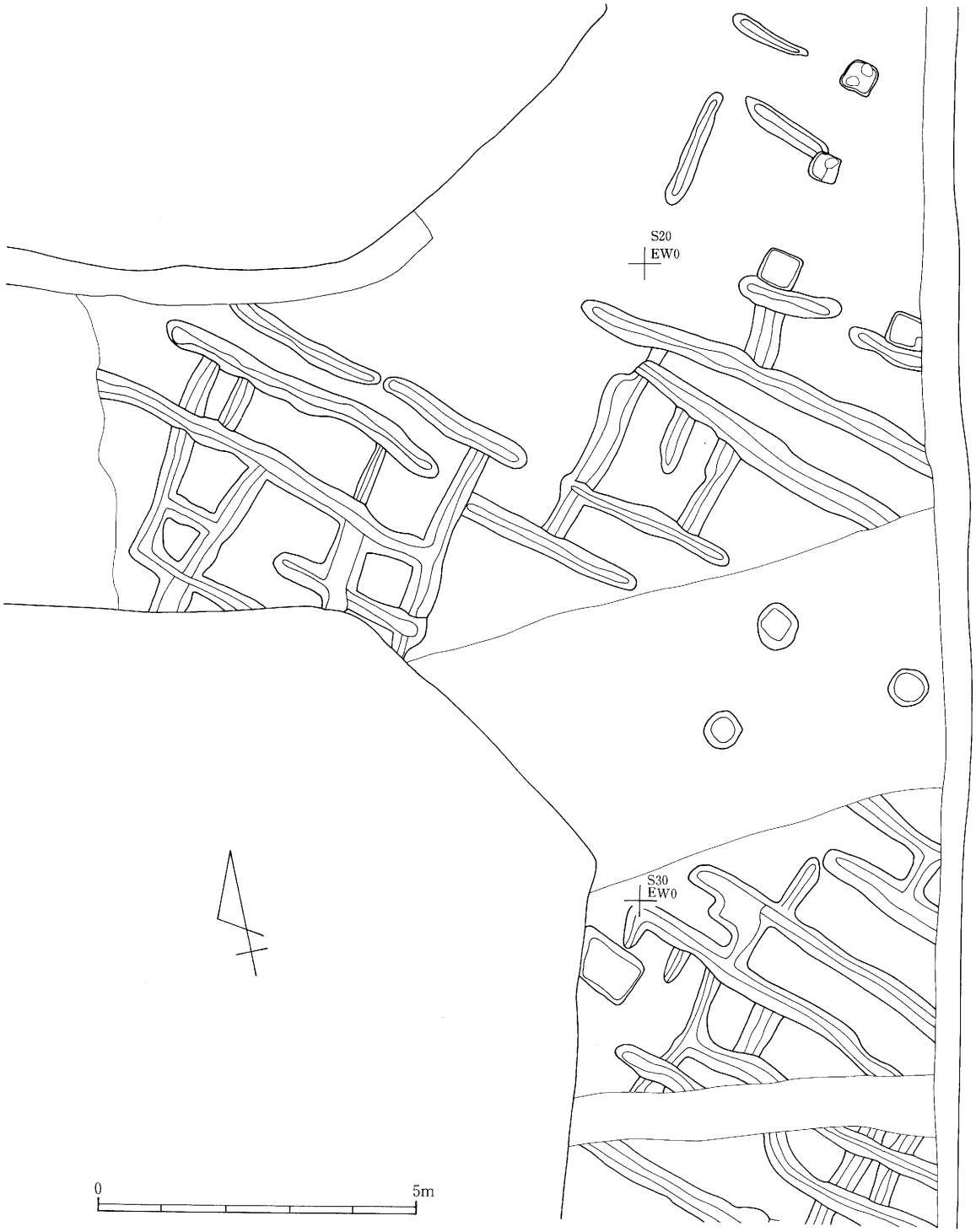
ピット No.	堀り方 大きさ	堀り方 深さ	柱痕跡 径	柱痕跡 深さ	備考
52	60 × 60	10	?	32	堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
53	50 × 50	12	?	26	堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定
54	45 × 45	13	?	24	堀り方底面の窪みが柱痕跡と推定、Ⅳ層畑の小溝に切られる
55	60 × 60	12	?	?	Ⅳ層畑の小溝に切られる
56	50 × 50	20	?	?	Ⅳ層畑の小溝に切られる

表６　SB３柱穴一覧表

２．小溝状遺構群（第41・42図）

３区東端部と５区中央部のⅣ層除去後のＶａ層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っている。全部の溝の新旧関係を明らかにすることはできなかったが、平面で切り合い関係が判明したものはすべて東西方向のものが新しい。

方向は、南北方向のものは北から東に30～35°くらい振れるものが大部分で、40～45°くらい振れるものがごくわずかにある。東西方向のものはこれにほぼ直交しており、北から48～55°くらい西に振れるものが大部分を占め、45°程



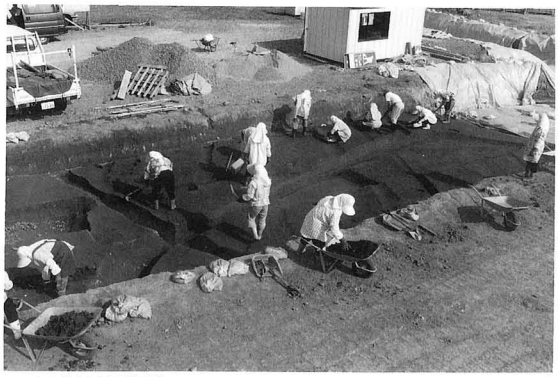
第41図　Ｖａ層上面小溝状遺構群平面図（S16～35）

度振れるものがわずかに認められる。

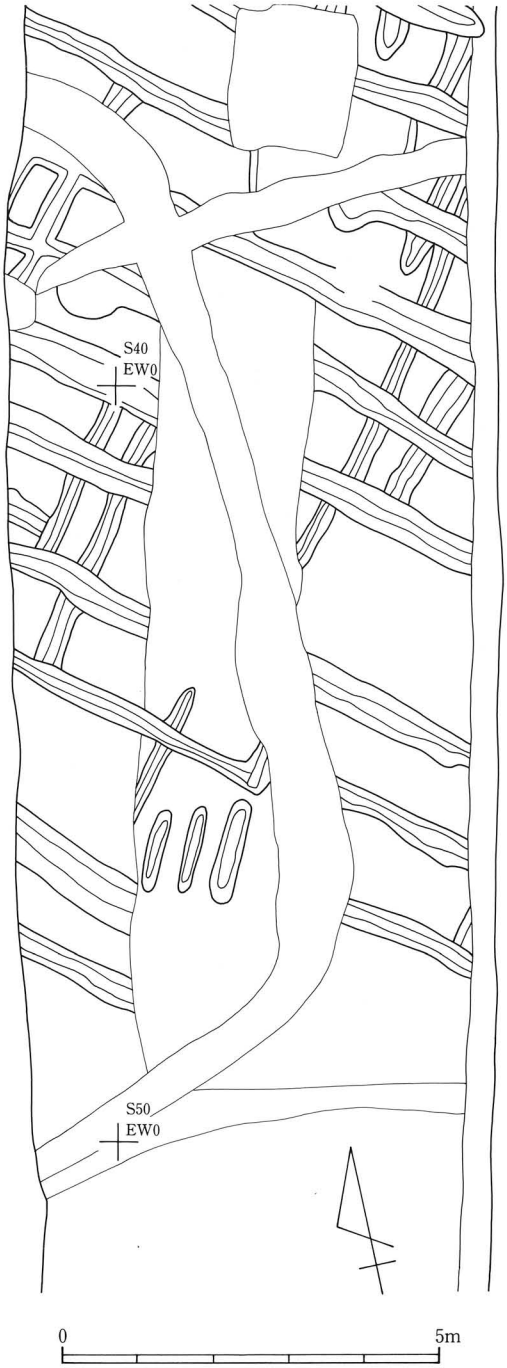
溝の幅は20～70cmで場所によって差があるが、概して東西方向のものが広くて60cm前後、南北方向のものが30cm前後である。調査区が限られているため長さは判らないが、途切れている部分もある。深さは２～10cm程度で平均５cm程度、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は基本層Ⅳ層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のⅣ層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。なお、これらの堆積土はⅤ層（黒褐色粘土）をわずかに巻き上げているが、東西方向の溝よりも南北方向の溝の堆積土のほうがⅤ層の巻き上げ方が多いためか、色調がやや暗い。

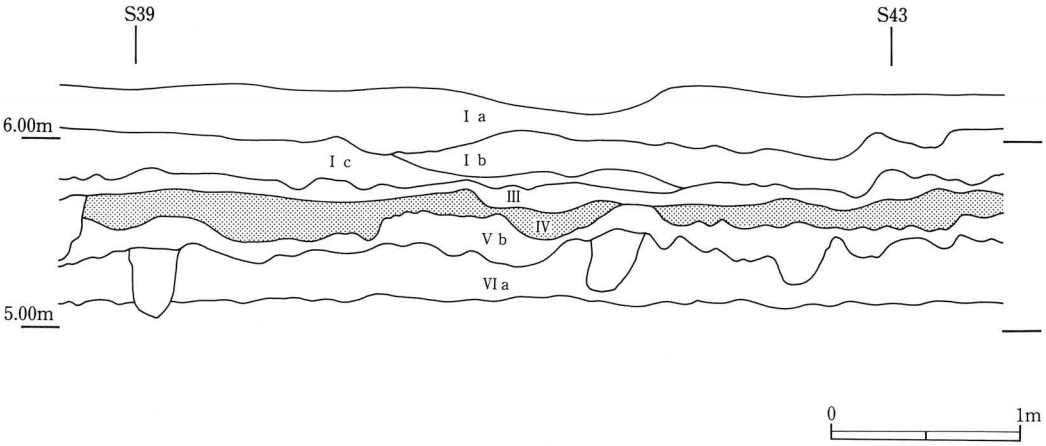
溝と溝との間隔は大体60cm前後であるが、狭い箇所では20～30cm程度の場合もあり、ばらつきがある。

これらの小溝状遺構群は、前節で述べた３区の小溝状遺構群と同様に畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であると考えられる。層上面では畝は確認できなかったものの基本層Ⅳ層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがⅣ層直下のⅤａ層にまで達したと考えられる。なお、小溝状遺構群が確認されなかった地点ではその場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲については不明である。遺物は出土しなかった。



小溝状遺構群
調査風景



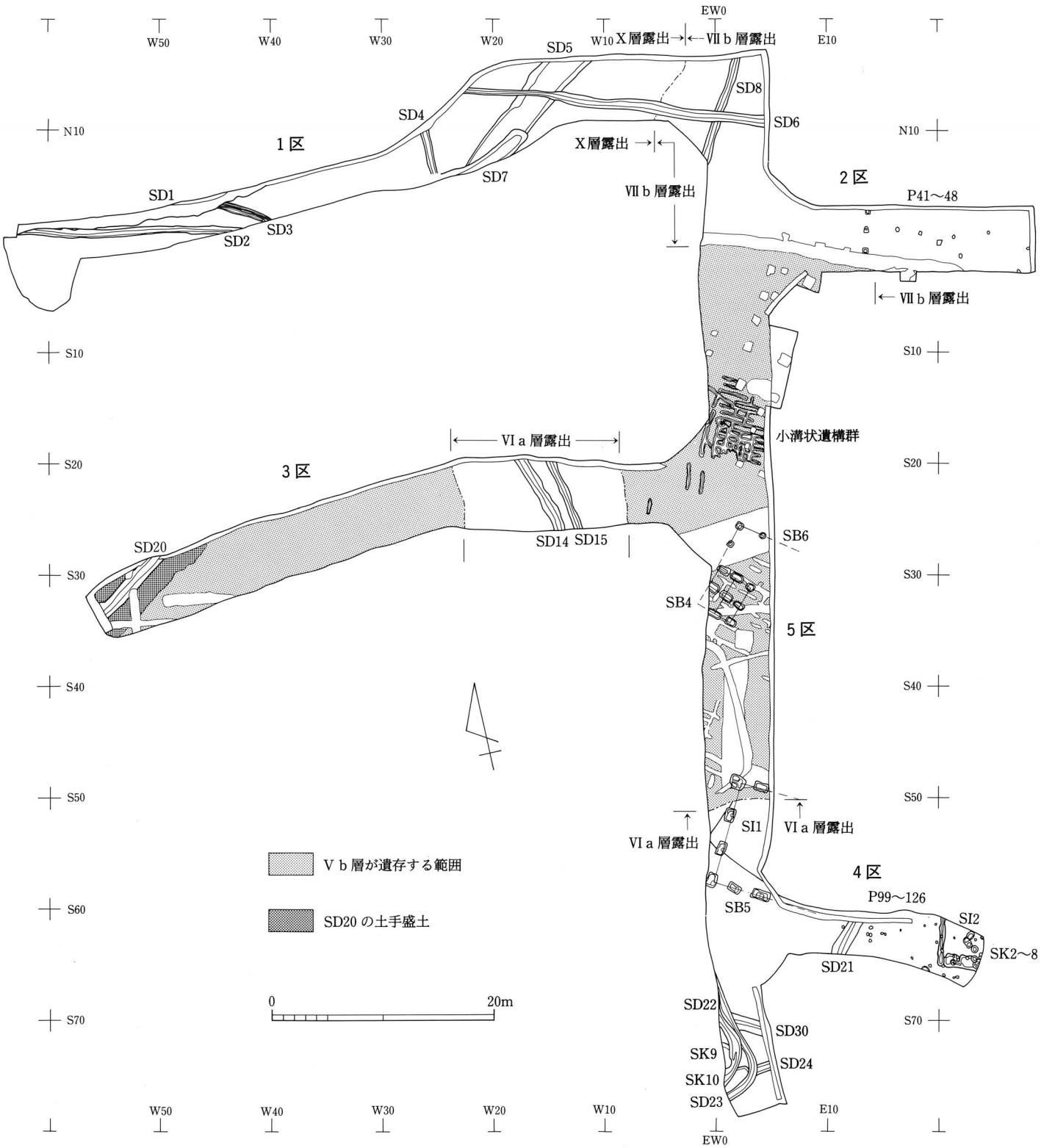


第42図　Ⅴａ層上面小溝状遺構群平面図（S35～50）・断面図

第４節　Ｖｂ～Ｘ層上面（Ｉ～Ｖａ層除去後）の遺構と遺物

Ｉ．Ｉ～Ｖａ層除去後の状況（第43図）

Ｉ～Ⅲ層を除去した段階ですでにＶａ層よりも下の層（Ｖｂ・Ⅵａ・Ⅶｂ・Ｘ層など）が露出していた箇所ではＶａ層の除去以前・以後でも状況は変わらない。



第43図　Ｖｂ～Ｘ層上面（Ｉ～Ｖａ層除去後）平面図

Ｖａ層が遺存していたのは３区西半部（W24以西）と東端部（Ｗ８以東）、５区北部から中央部（ＮＳ０～Ｓ50付近）で、ここではＶａ層上面の精査終了後にＶａ層を除去してＶｂ層上面を検出した。Ｖｂ層が遺存していて検出できた範囲はＶａ層とほぼ同じであった。

Ｖｂ層上面の遺構としては、３区西端部ではＳＤ20がある。ＳＤ20はすでにⅣ層上面の段階において溝に伴う南北両側の土手のプランを確認していたが、土手の盛土と溝の掘り込みはＶｂ層上面からのものと確認できた。

５区では、北部のＳ12～25付近で小溝状遺構群を確認した。中央部のＳ30付近では、Ｖａ層上面で柱穴が一基のみ（Ｐ68）確認されていたＳＢ４の残りの柱穴（Ｐ63～67・68・69）が確認できた。ただしＳＤ16底面で確認されていたＳＢ６の残りの柱穴はまだこの段階でも確認はできない状況であった。

なお、Ｓ50付近では、段差の下側でのみ確認されていたＳＢ５の残りの柱穴（Ｐ76・77）が段差上側のＶｂ層上面で確認できた。しかし、同様に段差の下側でのみ確認されていたＳＩ１の北側部分のプランについてはこの段階でもまだ確認できない状況であった。

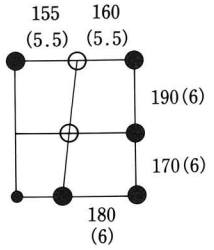
Ⅱ．遺構と遺物

１．掘立柱建物跡

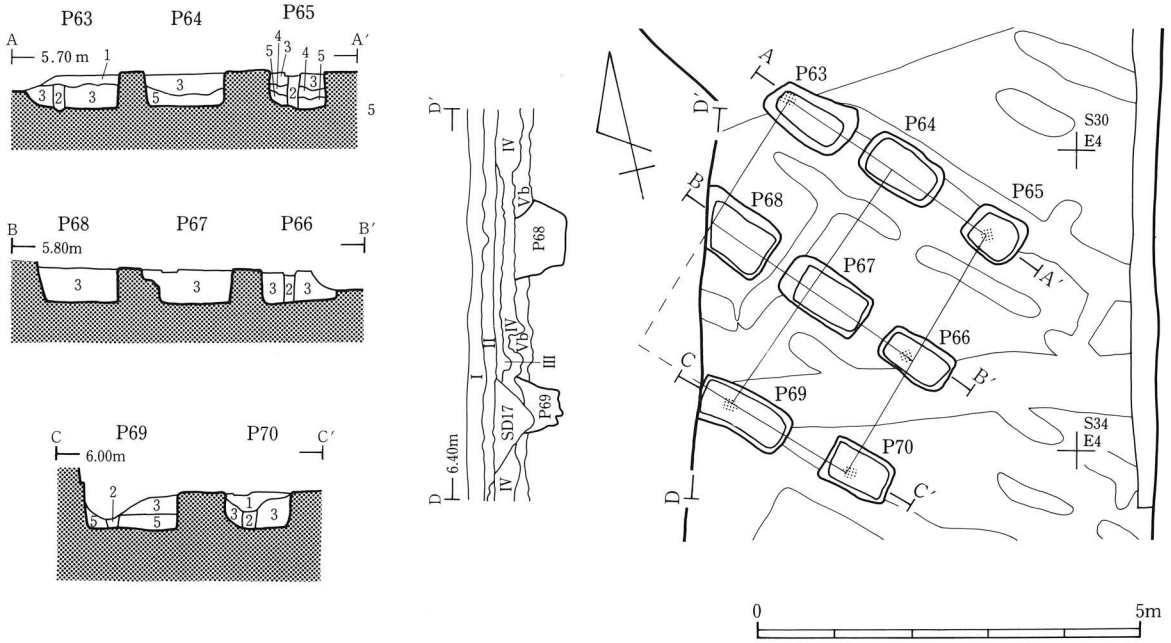
（１）４号掘立柱建物跡－ＳＢ４－（第44・45図）

５区中央部に位置している。前述したように直上のＶａ層上面でＰ68を確認し、Ｖｂ層上面で残りの柱穴を確認した。

南西コーナーの柱穴が調査区外のため未検出であるが、南北２間、東西２間の総柱の建物と考えられる。規模は南北3.60m（12尺）、東西3.15m（10～11尺）、東側柱列の方向はＮ－42°－Ｅであるが平面形はやや歪んでいる。柱穴は表７の通りで長方形の掘り方を持っており、確認できた柱痕跡はすべて径15cm程である。柱間は南北が６尺、東西



第44図　SB4模式図



層位	色　　調	土　　質	混入物・その他
1	10ＹＲ5/2 灰黄褐色	シルト	灰黄褐色粘土質シルトブロック少量、黒褐色粘土ブロック微量
2	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土	柱痕跡、にぶい黄褐色砂質シルトブロック・黒色粘土ブロック少量
3	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロック少量
4	10ＹＲ2/1 黒色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量
5	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロック少量

第45図　SB4平面・断面図

が５～5.5尺と推定される。

遺物は土師器片47点（大部分がロクロ使用のもの）、須恵器片12点が出土したがすべて細片で図化できたものはない。

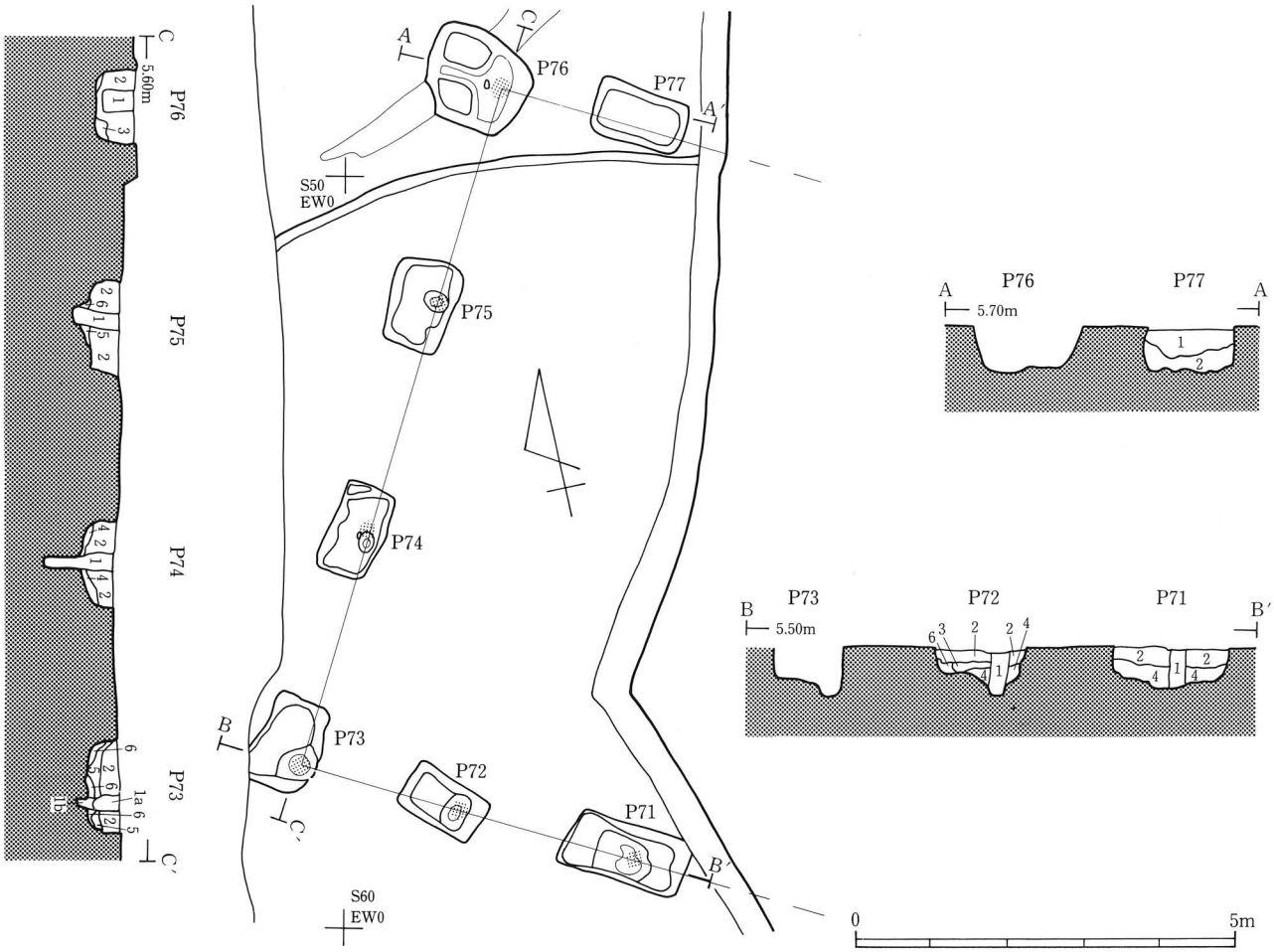
ピット No.	堀り方 大きさ	堀り方 深さ	柱痕跡 径	柱痕跡 深さ	備考
63	115 × 70	48	15	52	Ⅳ層畑の小溝に切られる
64	110 × 65	46	?	?	Ⅳ層畑の小溝に切られる
65	75 × 65	50	15	50	Ⅳ層畑の小溝に切られる
66	100 × 55	46	15	46	Ⅳ層畑の小溝に切られる、ＳＤ17に切られる
67	120 × 65	46	?	?	Ⅳ層畑の小溝に切られる
68	(120)× 75	47	?	?	一部調査区外
69	125 × 70	42	15	42	Ⅳ層畑の小溝に切られる、ＳＤ17に切られる
70	90 × 60	52	15	52	Ⅳ層畑の小溝に切られる

表７　SB ４柱穴一覧表

（２）５号掘立柱建物跡－ＳＢ５－（第46・47図）

５区南部に位置している。前述したように段差の下側ではＩ層を除去した直後のⅥａ層上面で大部分の柱穴（Ｐ71～75）を確認していたが、段差の上側ではＶａ層除去後のＶｂ層上面で残りの柱穴（Ｐ76・77）を確認した。

建物の東側が調査区外であるが、南北３間、東西２間以上の建物で、規模は南北9.35m（31尺）、東西4.5m以上、西側柱列の方向はＮ－38°－Ｅである。柱間は南北が10尺・11尺・10尺で中央が広くなっている。東西は、南側の柱列で見るとＰ73－Ｐ72が７尺、Ｐ72－Ｐ71が８尺となっていて、南北方向と同じく中央が広くなっていると仮定す



層位	色調	土質	混入物・その他
1a	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土	柱痕跡、にぶい黄褐色砂質シルト粒・黒褐色シルト質粘土粒微量、柔らかい
1b	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土	柱痕跡下部、黒色粘土ブロック少量、柔らかい
2	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄褐色粘土質シルトブロック多量・黒色粘土大ブロック少量
3	10ＹＲ3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量
4	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック・黒色粘土大ブロック多量
5	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黒色粘土ブロック少量
6	10ＹＲ2/1 黒色 10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土 砂質シルト	} 混合

第46図　SB5 平面・断面図

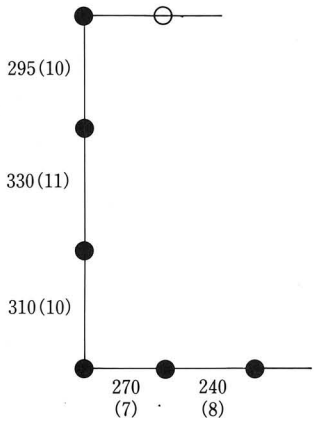
るとＰ72－Ｐ71が建物の中央となり、この場合の建物の東西は3 間となる。。

柱穴は表８の通りで、堀り方の平面形は北西コーナーのものを除いてすべて長方形であり、しかも堀り方の主軸方向は西側のものが南北方向、北側と南側のものが東西方向というように建物の壁面と一致する方向になっている。柱痕跡は径20～26cmで、北側のＰ77を除いたすべての柱穴で確認できた。このうちＰ72～75では柱痕跡の底面が堀り方よりも下がっていて、特にＰ74では堀り方底面から約50cmも低い。これは堀り方底面の基本層が水分を多く含む柔らかい粘土層（Ⅶｂ層）であったために、柱にあたる部分が建物の重みで不等沈下したためと考えられる。なお、Ｐ71・74・76からは柱痕跡のすぐ脇の堀り方底面に偏平な河原石（10×20cm、15×15cm程度）が１個ずつ認められた。これらは礎板として使用するために設置されたものの柱の真下の位置から外れたために、柱が沈下した際に一緒には沈まず、堀り方底面に取り残されたものである可能性がある。

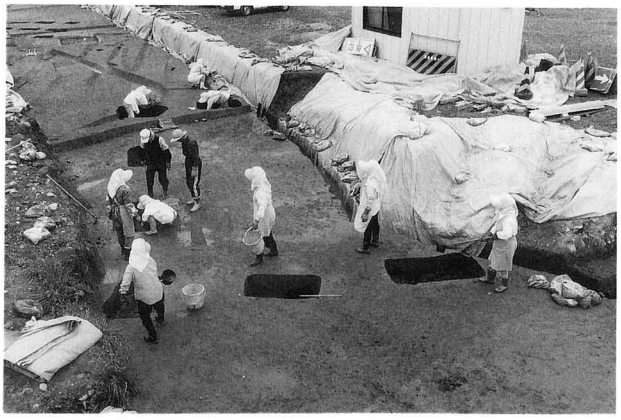
遺物は土師器片135点、須恵器片36点、土製品１点、金属製品１点と比較的多いが、柱穴のうちＰ74～77はＳＩ１堆積土を掘り込んでいるので遺物の中には本来ＳＩ１に伴うものも含まれている可能性はある。須恵器坏２点、土錘１点、鉄釘１点が図化できた。

ピット No.	堀り方 大きさ	堀り方 深さ	柱痕跡 径	柱痕跡 深さ	備考
71	160× 80	60	22	60	礎板石あり
72	110× 65	60	26	60	
73	125× 85	40	20	55	柱痕跡部分が15cm沈下
74	120× 75	46	24	95	柱痕跡部分が約50cm沈下、礎板石あり、ＳＩ１を切る
75	125× 85	66	21	66	ＳＩ１を切る
76	135×125	55	26	44	礎板石あり、ＳＩ１を切る
77	120× 70	66	?	?	ＳＩ１を切る

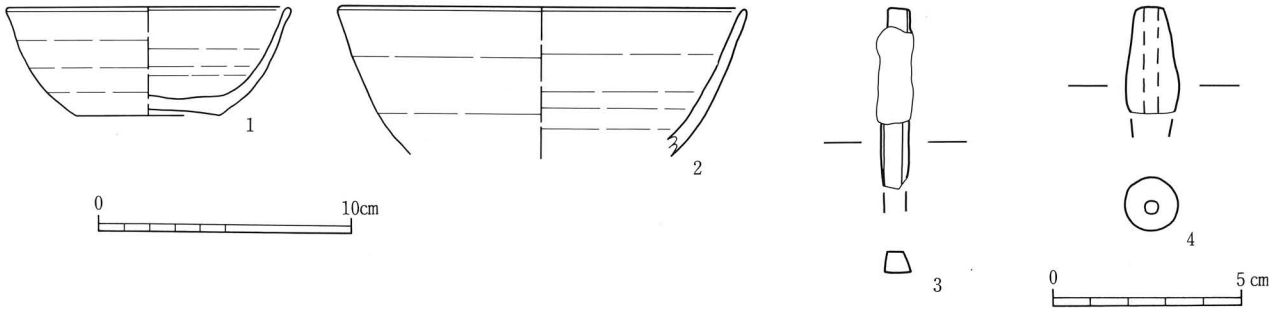
表８　SB ５柱穴一覧表



第 47 図
SB5 模式図



SB ５調査風景



No.	写真図版	出土遺構 出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	底径 口径	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴 内面調整・特徴
1	165－1	SB5-P74 掘り方	須恵器	坏	2/5	(11.3)	(5.6)	4.3	0.50	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転糸切り無調整 ロクロ調整
2	165－2	SB5-P71 掘り方	須恵器	坏	1/6	(16.0)	?	?	?	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整 ロクロ調整

No.	写真図版	出土層位	種別	遺存度	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成
3	165－3	SB5-P71 掘り方	鉄製品・釘	両端欠損	(4.7)	幅 0.7	0.6	——	——	—	—
4	165－4	SB5-P71 掘り方	土製品・土錘	端部欠損	(2.8)	径 1.4	——	——	にぶい黄橙色	良好	良好

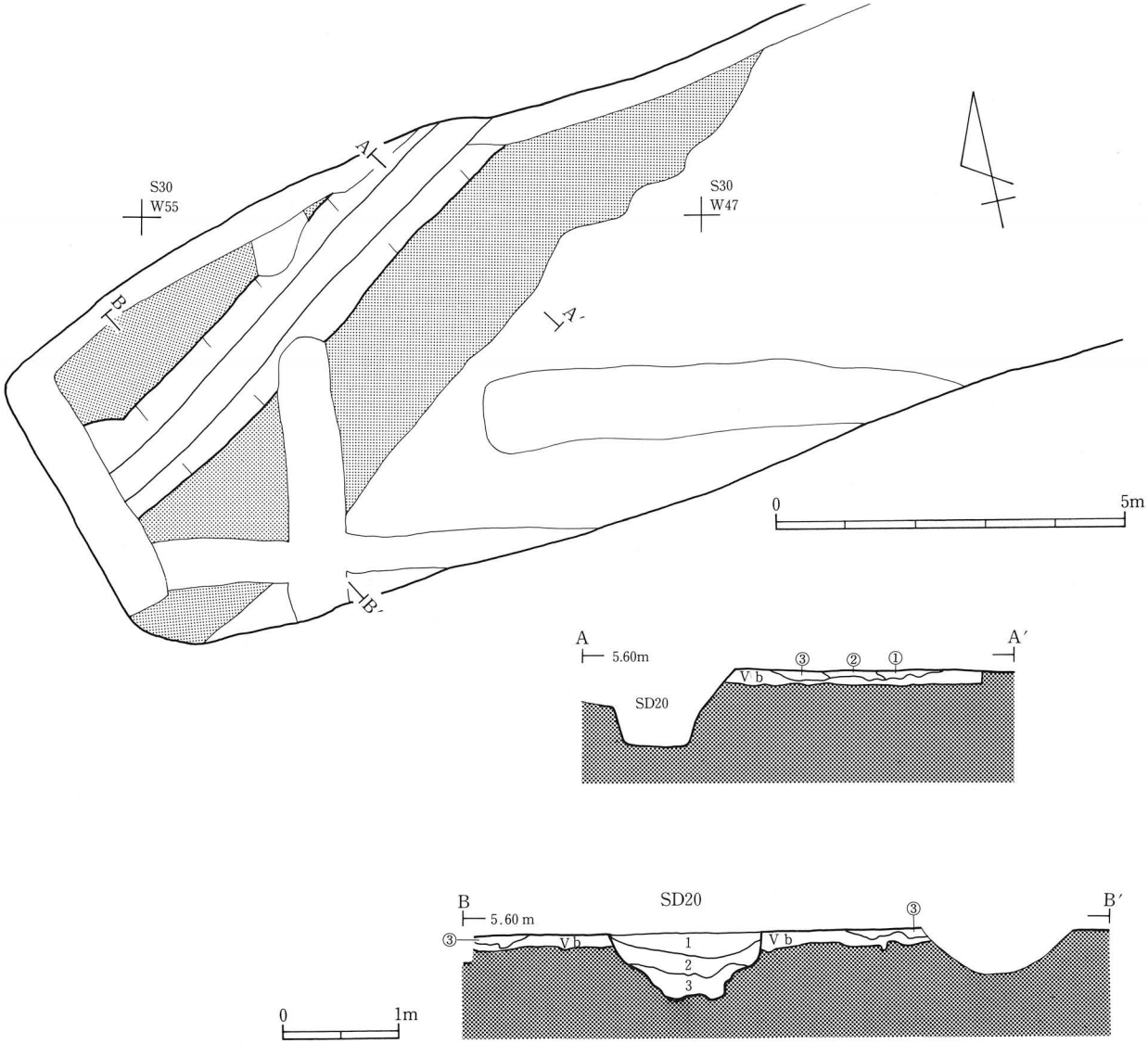
第 48 図　SB5 出土遺物

２．溝跡

20号溝跡－ＳＤ20－（第49図）

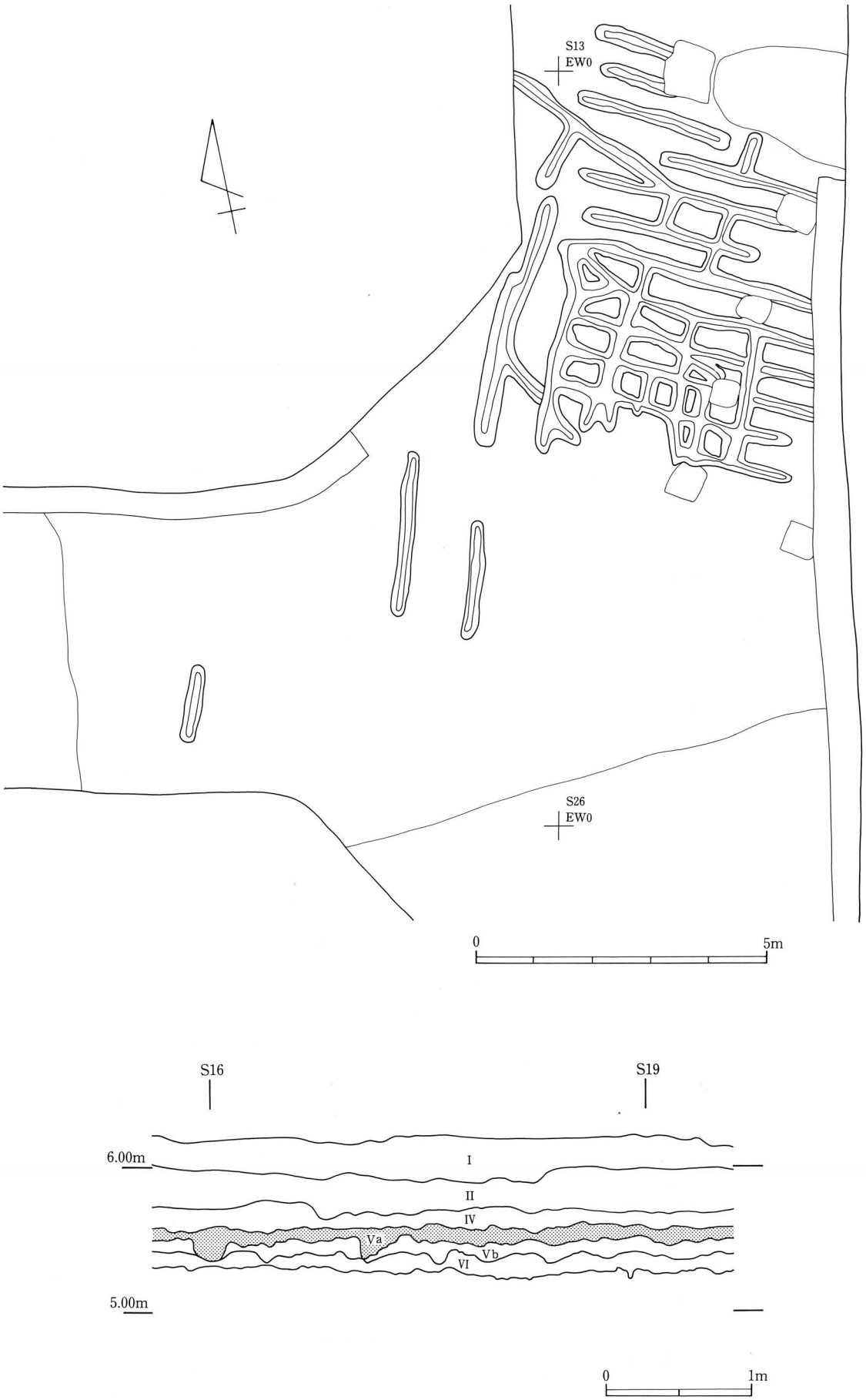
３区西端部に位置する。土手を伴っており、前述したように土手のプランはⅣ層上面で確認できたが、土手はＶｂ層上面に構築されたものであり、溝も同様にＶｂ層上面から掘り込まれたものである。

確認できた溝の長さは 8m、幅は約1.3m、方向はＮ－54°－Ｅである。断面形は逆台形であるが「Ｕ」字形を呈する部分もあり、深さは約60cm、底面はやや凹凸があるがレベル差は認められなかった。堆積土は３層に分層できたが、最下層は粘土や砂の互層であることから水成堆積と考えられ、第２層はブロック土であることからある程度埋没した後に人為的に埋め戻されている可能性がある。



層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	細砂 砂質シルト	混合
3	10ＹＲ4/2 灰黄褐色 10ＹＲ4/1 褐灰色 10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	細砂 粘土 砂質シルト	互層、部分的に乱れる
①	10ＹＲ3/2 黒褐色	砂質シルト	土手の盛土、黒褐色粘土ブロック少量
②	10ＹＲ2/1 黒色	シルト質粘土	土手の盛土、にぶい黄褐色粘土ブロック少量
③	10ＹＲ3/3 暗褐色	粘土質シルト	土手の盛土、黒褐色シルト質粘土ブロック少量、にぶい黄橙色粘土ブロック少量

第49図　SD20 平面・断面図



第50図　Ｖｂ層上面小溝状遺構群平面・断面図

土手は主として黒褐色シルトの盛土で構築されており、溝の南北両側に認められた。南側は幅が1.5～２ｍあるが、北側は大部分が調査区外のため幅は不明である。確認した際のＶｂ層上面からの高さは約10cmあったが、その後誤って削平してしまったため断面図に盛土の高まりを示すことができなかった。なお、平面図に盛土の上端を示していないのも同じ理由である。

溝の性格は堆積土の下層が水成堆積と推定されることと両岸に土手を伴うことから水路であると考えられる。このまま北東方向に延長すればＳＤ５に達するがＳＤ５とは幅が異なり、同一のものかどうかは断定はできない。なお、遺物は溝・土手ともに出土しなかった。

３．小溝状遺構群（第50図）

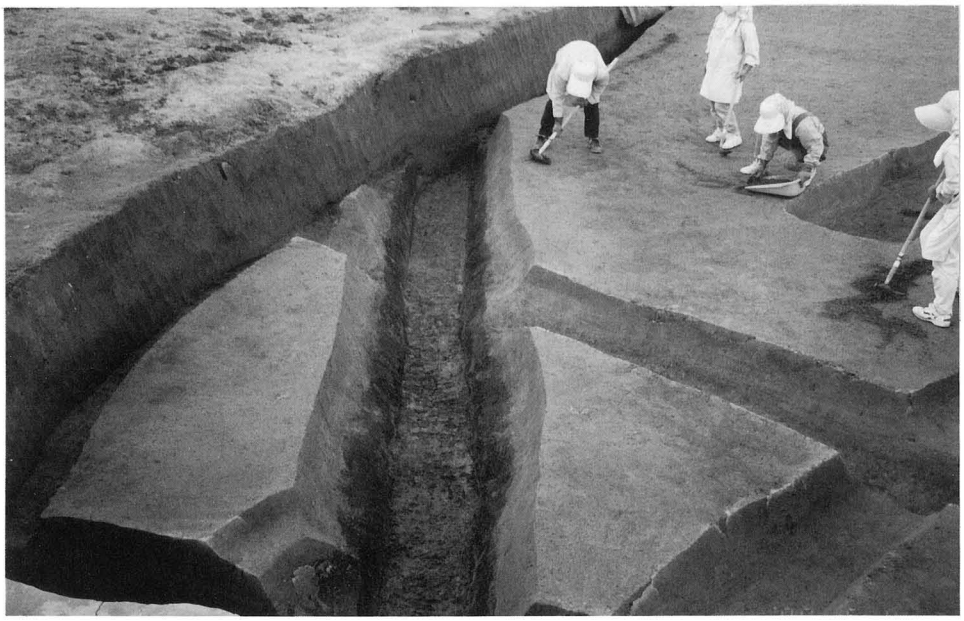
５区中央部のＳ12～25付近、Ｖａ層除去後のＶｂ層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っているが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。

方向は、南北方向のものがややばらつきがあって北から20～30°東に振れている。東西方向のものは１条のみが北から約40°西に振れているが、他の大部分は南北方向のものに直交して北から60°西に振れている。

溝の幅は20～40cmであるが大体は30cm前後、深さは１～５cmで平均は２cm程度とごく浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。長さについては、検出できた範囲が狭いことと、途切れている部分が本来の状況を示しているのかあるいは遺存状況が悪いためなのか判断できないため不明である。溝と溝との間隔は大体30cm前後である。

堆積土は基本層Ｖａ層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のＶａ層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。

これらの小溝状遺構群は、Ⅳ層やＶａ層上面で確認された小溝状遺構群（第２・３節参照）と同様に畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であると考えられる。層上面では畝は確認できなかったものの基本層Ｖａ層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがＶａ層直下のＶｂ層にまで達したと考えられる。なお小溝状遺構群が確認できなかった地点においては、その場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲については不明である。また、遺物は出土しなかった。

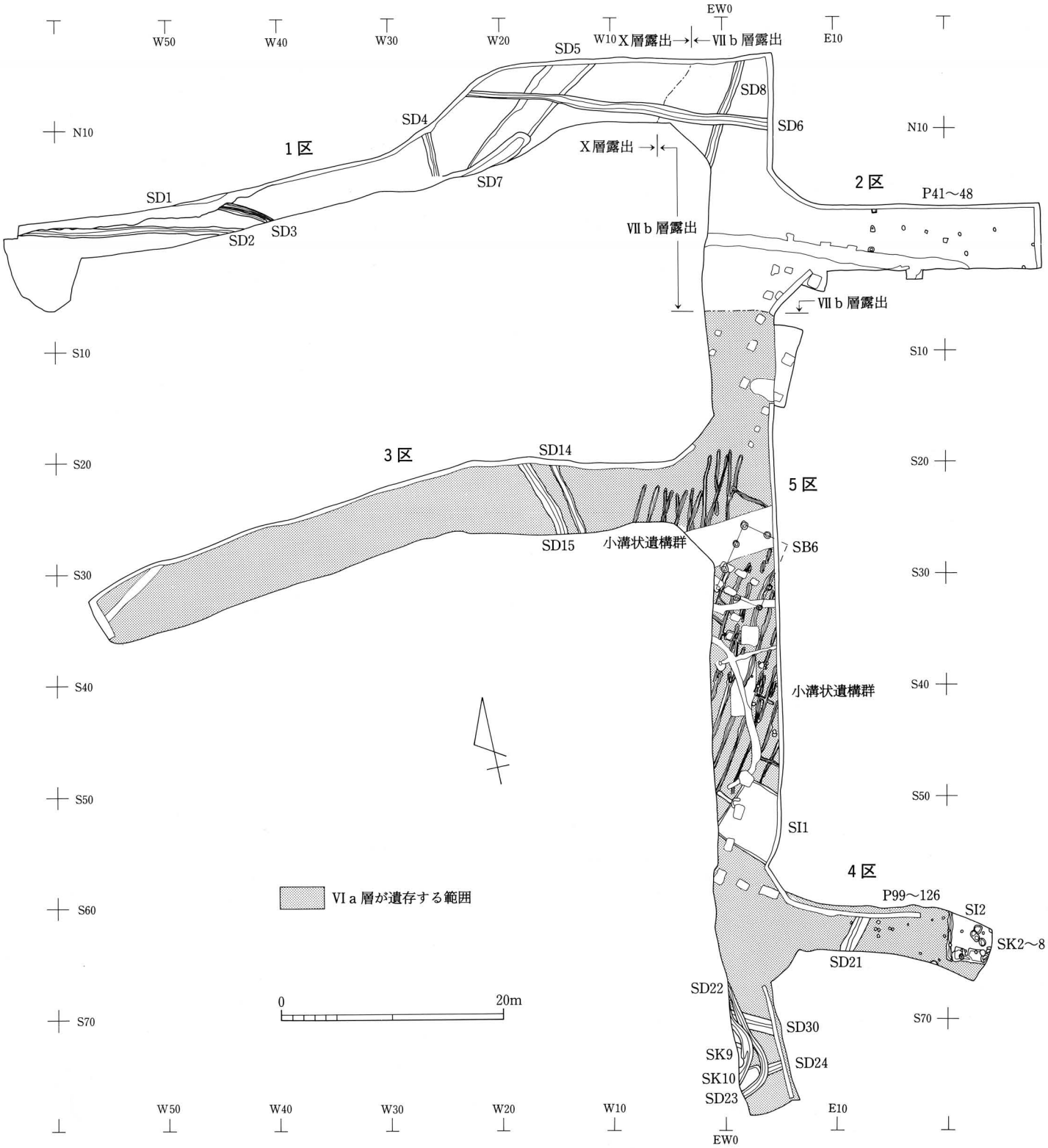


ＳＤ20調査風景

第５節　Ⅵａ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅴｂ層除去後）

Ⅰ．Ⅰ～Ⅴｂ層除去後の状況（第51図）

Ⅰ～Ⅲ層を除去した段階ですでにⅤｂ層よりも下の層（Ⅵａ・Ⅶｂ・Ⅹ層など）が露出していた箇所ではⅤｂ層の除去以前・以後でも状況は変わらない。



第51図　Ⅵａ～Ⅹ層上面（Ⅰ～Ⅴｂ層除去後）平面図

ＳＩ１床面の精査

Ｖｂ層が遺存していたのは３区西半部（W24以西）と東端部（Ｗ８以東）、５区北部から中央部（ＮＳ０～Ｓ50付近）であったが、ここではＶｂ層上面の精査終了後に同層を除去してVIａ層上面を検出した。VIａ層はＶｂ層下の全域に遺存しており、この段階においてやっと、Ｉ～III層を除去した段階ですでにVIａ層が露出していた地点と同一面となった。VIａ層上面の遺構としては、５区中央部においてＳＢ６の一部の柱穴がＳＤ16やＳＢ４－Ｐ68の底面で確認されていたが、この残りの柱穴（Ｐ87・88・93・101）がこの段階で確認できた。また、Ｓ20～50付近にかけて新たに小溝状遺構群を確認した他、Ｓ50付近の段差の下側でのみ確認されていたＳＩ１の北側部分のプランもこの段階で確認できた。

なお、５区Ｓ20付近では小溝状遺構群を確認した際にこれらに切られる形で黒褐色の並行する２条の帯状のプランを確認している（写真100・101と挿図参照）が、断面観察の結果これはVIａ層上面の遺構ではなく、VIIa1層水田跡に伴うＳＤ28の土手であることが判明した。

II．遺構と遺物

１．竪穴住居跡

１号住居跡－ＳＩ１－（第52図）

５区Ｓ50付近に位置し、小溝状遺構群を切っている。北西側にカマドが有り、主軸方向はＮ－22°－Ｗである。南東側が調査外となっているため規模は確定できないが、北東～南西が6.0m、北西～南東も5.6m 以上ある。

壁はやや傾きを持って立ち上がり、最も遺存状況がよい北東側で約35cmの高さがある。

堆積土は褐色の砂質シルトを主としており、自然堆積と考えられる。

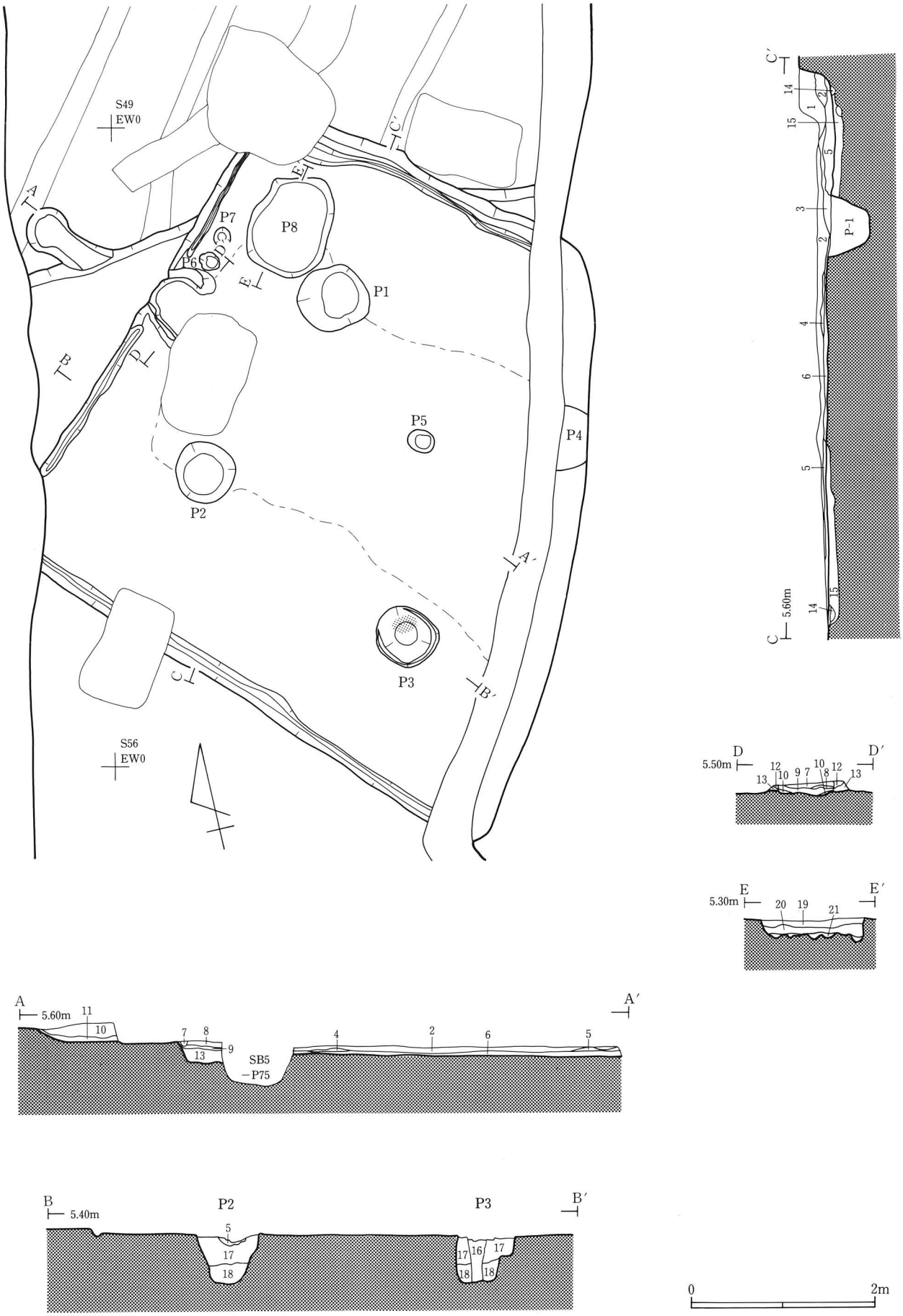
ピット No.	堀り方 大きさ	堀り方 深さ	柱痕跡 径	柱痕跡 深さ	備考
1	径70～75	43	?	?	主柱穴
2	径 65	46	?	?	主柱穴
3	径65～70	50	20	50	主柱穴
4	?	55	?	?	主柱穴、調査区東壁で確認
5	径25～30	6	—	—	
6	径20～25	8	—	—	カマド脇に位置する
7	径18～24	14	—	—	カマド脇に位置する
8	85 ×115	24	—	—	貯蔵穴

表９　SI １ピット一覧表

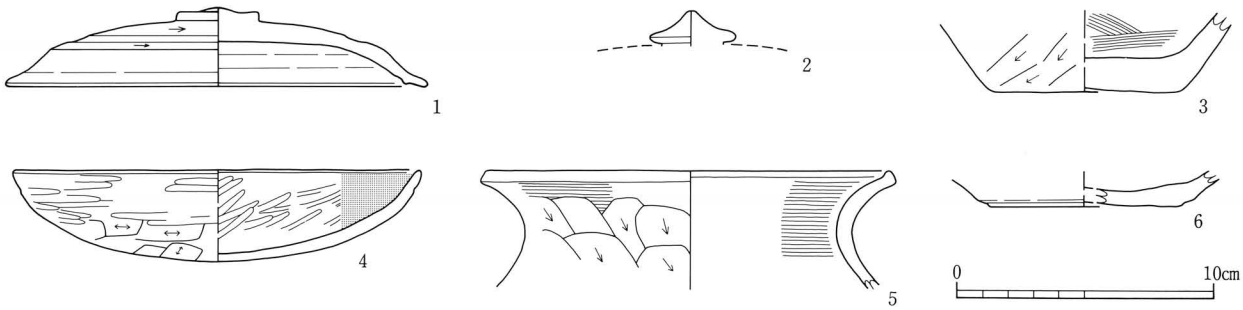
床面は堀り方を埋め戻して構築されているが堀り方の深さは一定ではなく、主柱穴（Ｐ１～４）を結んだラインの外側が約20cmと深くて、内側が５cm前後と浅い。この堀り方の浅い部分（第52図一点鎖線の内側）

ＳＩ　１

層位	色調	土質	混入物・その他
1	10ＹＲ4/4 褐色	砂質シルト	褐灰色粘土ブロック少量
2	10ＹＲ4/4 褐色	砂質シルト	褐灰色粘土ブロック多量
3	10ＹＲ3/1 黒褐色	砂質シルト	
4	10ＹＲ5/1 褐灰色	砂質シルト	炭化物粒・焼土粒少量
5	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土ブロック少量
6	10ＹＲ4/4 褐色	粘土質シルト	貼床、褐灰色粘土ブロック少量、硬く締まる
7	10ＹＲ5/1 褐灰色	シルト質粘土	カマド崩落土、焼土大ブロック少量
8	10ＹＲ5/1 褐灰色	シルト質粘土	カマド崩落土、灰黄褐色粘土ブロック少量
9	10ＹＲ4/1 褐灰色	粘土	カマド崩落土、焼土小ブロック少量
10	10ＹＲ5/1 褐灰色	シルト質粘土	煙道堆積土、焼土粒少量
11	2.5 Ｙ4/3 オリーブ褐色	細砂	煙道堆積土、褐色砂質シルトブロック・炭化物粒少量
12	5 ＹＲ4/3 にぶい赤褐色	シルト質粘土	カマド袖、焼土粒少量
13	2.5 Ｙ4/3 オリーブ褐色	シルト質粘土	カマド袖、褐灰色粘土多量
14	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	砂質シルト	周溝堆積土
15	10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	住居掘り方、黒褐色粘土小ブロック・灰黄褐色粗砂少量
16	10ＹＲ5/2 褐灰色	粘土質シルト	柱痕跡
17	10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	柱穴掘り方、黒色粘土ブロック多量
18	10ＹＲ6/1 褐灰色	粘土	柱穴掘り方、黒色粘土ブロック多量
19	10ＹＲ6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	貯蔵穴堆積土
20	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	貯蔵穴堆積土、黒色粘土ブロック少量
21	10ＹＲ5/6 黄褐色	砂	貯蔵穴堆積土



第52図　SI1 平面・断面図



No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴 内面調整・特徴
1	166－1	カマド・床面直上	須恵器	坏蓋	1/3	16.4	——	3.2	—	灰白色 灰白色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、天井部回転ヘラケズリ ロクロ調整
2	166－2	カマド	須恵器	坏蓋	つまみ部のみ	?	——	?	—	灰色 灰色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整 ロクロ調整
3	166－3	カマド	土師器	甕	底部1/3	?	(7.0)	?	—	橙～明赤褐色 橙～明赤褐色	やや不良 白針微量	良好	体部手持ヘラケズリ、底部木葉痕 ナデ
4	166－4	ＳＩ１－Ｐ４	土師器	坏	1/3	(16.0)	——（丸底	3.7	—	にぶい黄橙色 暗灰色	良好 白針多量	良好	口縁部ヨコナデ、体部～底部手持ヘラケズリ→体部粗いヘラミガキ ヘラミガキ・黒色処理
5	166－5	床面直上	土師器	甕	口縁部1/6	(15.8)	?	?	—	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	やや不良 白針微量	良好	口縁部ヨコナデ、頸部～体部手持ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、体部磨滅（ナデ？）
6	166－6	掘り方	須恵器	坏	底部1/3	?	(7.4)	?	?	灰色 灰白色	良好 白針微量	良好	ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ ロクロ調整

第53図　SI1 出土遺物

は褐色の粘土質シルトで貼床されていて硬く締まっている。床面はわずかに凹凸があり、レベルは北東側がやや低くなっている。壁際には幅10～20cm、深さ約５cmの周溝が巡っていた。なお、堀り方底面には幅約15cm、奥行約10cmの半月形の工具痕が多数確認された（写真91～93）。

ピットは 8基検出した。詳細は表９の通りであるが、このうち主柱穴と考えられるのがＰ１～４で住居プランの対角線上の位置にある。柱間隔については、柱痕跡が確認されたのがＰ3(径約10cm）のみであるので詳細はよく判らないが、柱穴の心々でみるとＰ１～４、Ｐ２～３、Ｐ３～４が2.8m と同じで、カマド側のＰ１～Ｐ２が2.5m でやや狭い。なお他のピットのうちＰ８はカマド脇の貯蔵穴と考えられる。

カマドは大部分が崩落していて、両袖の下部と煙道先端部が遺存するのみであった。袖は粘土のみで構築されており、特に芯材等は認められなかった。なお、カマド奥壁から煙道先端部までの距離は1.5m である。

遺物は堆積土や堀り方から土師器片38点、須恵器片16点などが出土したが、このうち須恵器は坏蓋２点と坏１点、土師器は非ロクロ調整の丸底坏１点と甕２点が図化できた（第53図）。

２．掘立柱建物跡

６号掘立柱建物跡－ＳＢ６－（第54・55図）

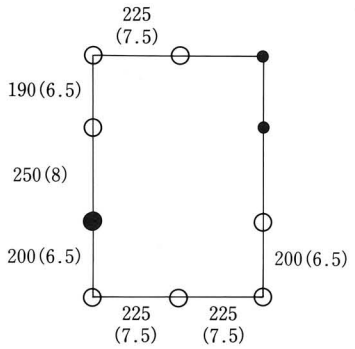
５区中央部に位置している。柱穴は前述したようにＳＤ16底面で 3基(Ｐ94～96)、ＳＢ４－Ｐ68底面で１基（Ｐ92）、VIａ層上面で残りの４基（Ｐ87・88・93・101）を確認した。ただし、VIａ層上面で確認した柱穴については他の遺構との切り合い等のためプランの確定が困難であり、このため写真撮影や図面作成はプランを確定しやすいVIIａ2 層水田面にて実施している。

建物は北東側の柱穴２基が調査区外のため未検出であるが、南北３間、東西２間の南北棟と考えられる。規模は南北6.40m（21 尺)、東西4.50m(15 尺)で、方向は西側柱列で見るとＮ－37°－Ｅである。

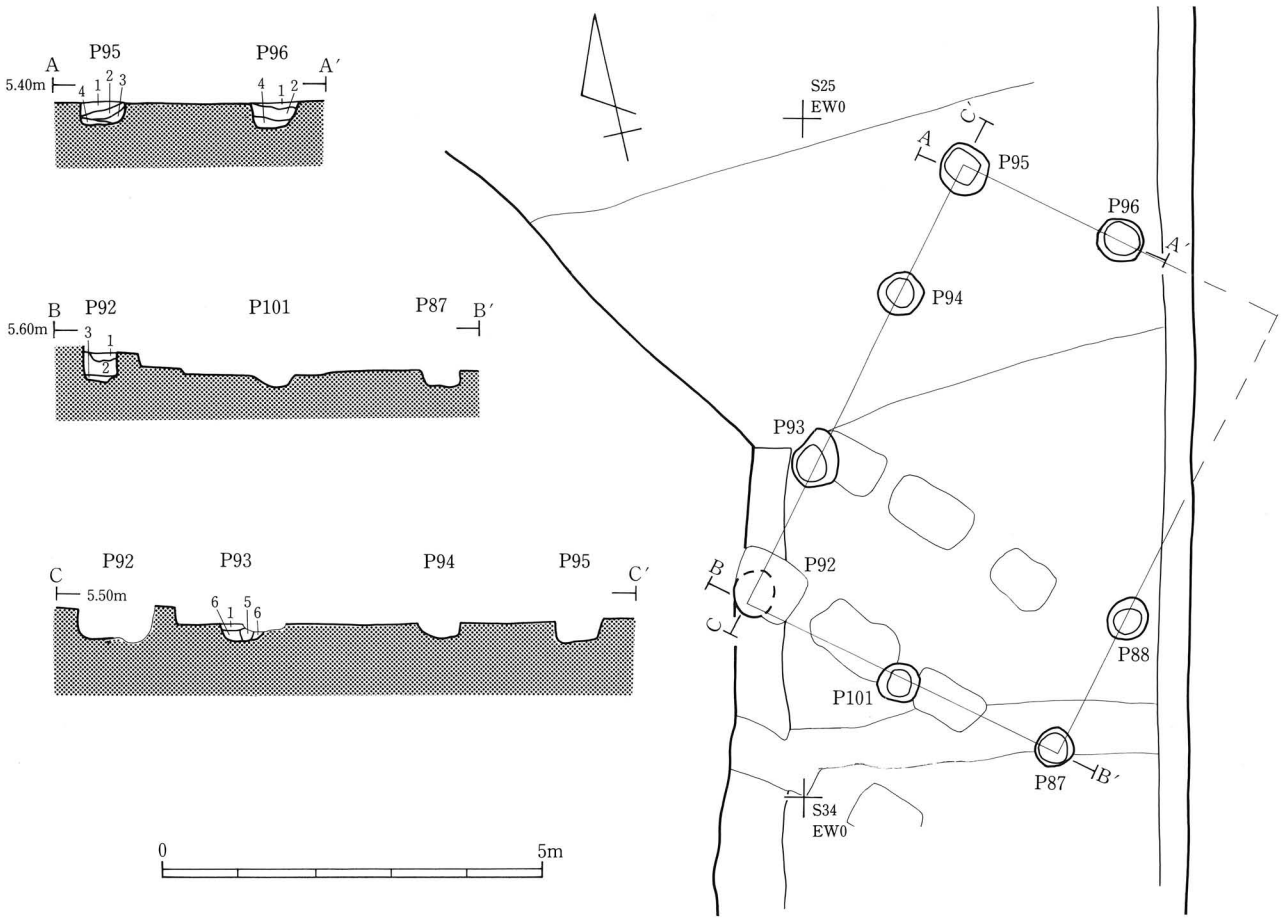
柱穴は表10の通りで円形の堀り方を持っている。柱痕跡はＰ93で確認できたが、径15cm程である。柱間は南北方向のＰ95－Ｐ94－Ｐ93－Ｐ92が 6.5尺・８尺・6.5尺で、中央部がやや広くなっている。東西は7.5尺である。なお遺物は出土しなかった。

ピット No.	堀り方 大きさ	堀り方 深さ	柱痕跡 径	柱痕跡 深さ	備考
８８	径 55	24	?	?	
８７	径 50	17	?	?	ＳＤ17に切られる
１０１	径 50	15	?	?	Ｐ66・67に切られる
９２	?	38	?	?	Ｐ68に切られる
９３	径 60	21	15	21	Ｐ63に切られる
９４	径 55	35	?	?	ＳＤ16に切られる
９５	径 65	25	?	?	ＳＤ16に切られる
９６	径 60	40	?	?	ＳＤ16に切られる

表10　SB ６柱穴一覧表

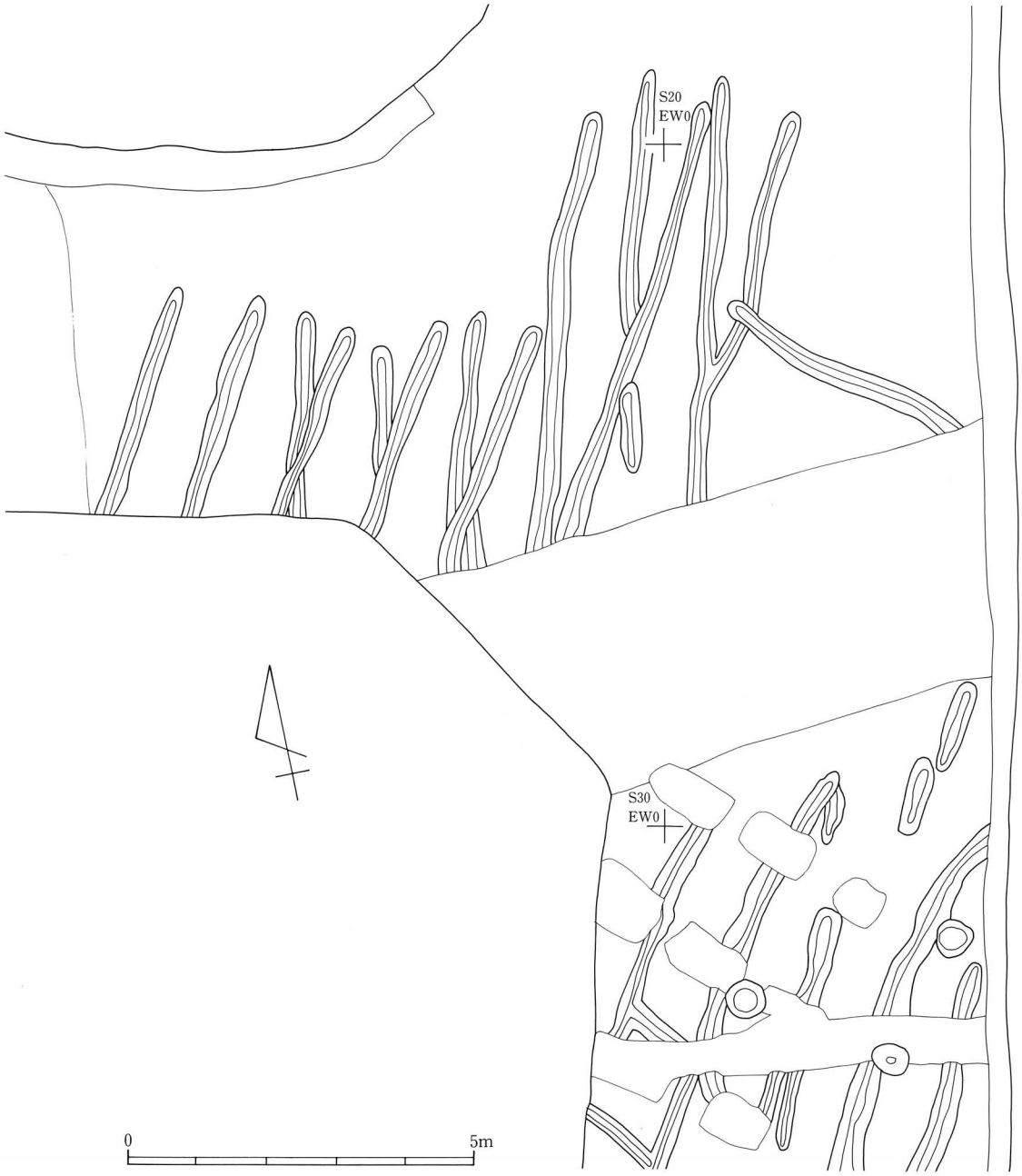


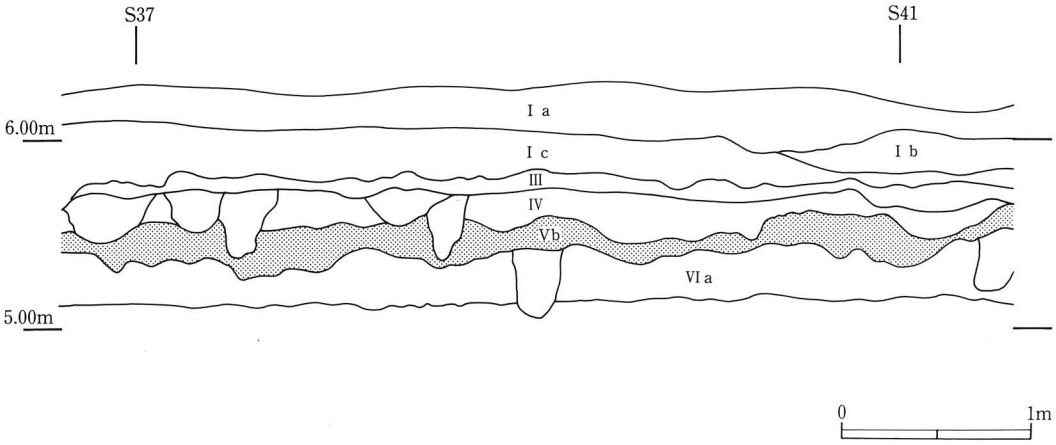
第 54 図　SB6 模式図



層位	色調	土質	混入物・その他
1	10ＹＲ5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロック少量
2	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック・黒色粘土ブロック多量
3	10ＹＲ2/1 黒色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック少量
4	10ＹＲ4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック多量
5	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	柱痕跡、黒色粘土ブロック多量
6	10ＹＲ5/4 にぶい黄褐色	細砂	黒色粘土ブロック少量

第 55 図　SB6 平面・断面図





第56図　VIa層上面小溝状遺構群平面（S19～35）・断面図

３．小溝状遺構群（第56・57図）

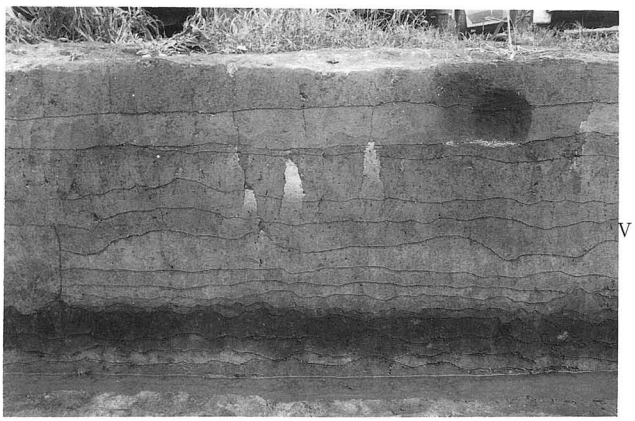
５区中央部のＳ20～50付近、Ｖｂ層除去後のⅥａ層上面で確認した。東西・南北方向の小溝群が切り合っているが、南北方向のものが多く東西方向のものは少ない。なお、すべての新旧関係を明らかにすることはできなかった。

南北方向の小溝の方向は、N25付近では北から約15°東に振れるものと、約30°東に振れるものの２種類あり、後者が前者を切っている。これより南部では大部分が30～35°東に振れるものである。なお、東西方向のものは確認した数が少ないため明確ではないが、大体北から55～60°西に振れている。

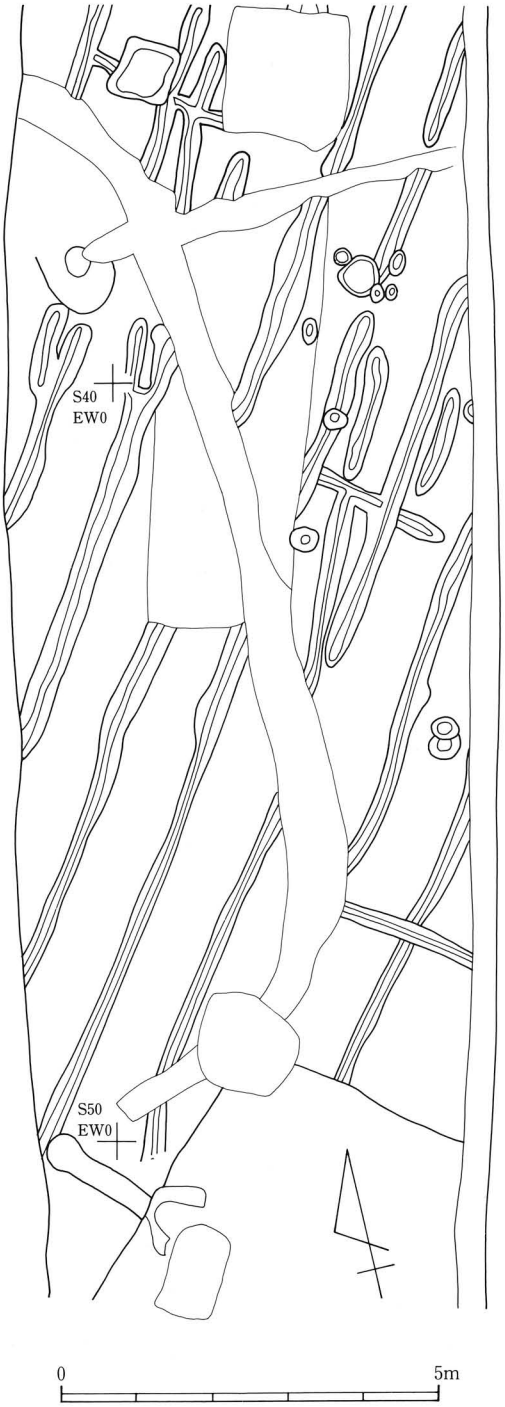
溝の幅は20～40cmであるが大体は30cm前後、深さは５～10cm程度で浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。長さは検出できた範囲が狭いため不明である。溝と溝との間隔は同じ方向のもの同士でみると70～120cmで、90cm前後のものが最も多い。

堆積土は基本層Ｖｂ層が入り込んだもので、調査区の壁面観察でも溝直上のＶｂ層と溝の堆積土とに違いは認められなかった。

これらの小溝状遺構群は、Ⅳ～Ｖｂ層上面で確認された小溝状遺構群と同様に、畑に関わる耕作痕の中でも天地返しなどのように比較的深いものの痕跡であると考えられる。層上面では畝は確認できなかったものの基本層Ｖｂ層は畑の耕作土であり、耕作痕の中でも深いものがＶｂ層直下のⅥａ層にまで達したと考えられる。なお小溝状遺構群が確認できなかった地点においては、その場所が耕作域であったかどうか判断できないため、畑の範囲については不明である。また、遺物は出土しなかった。



５区東壁断面

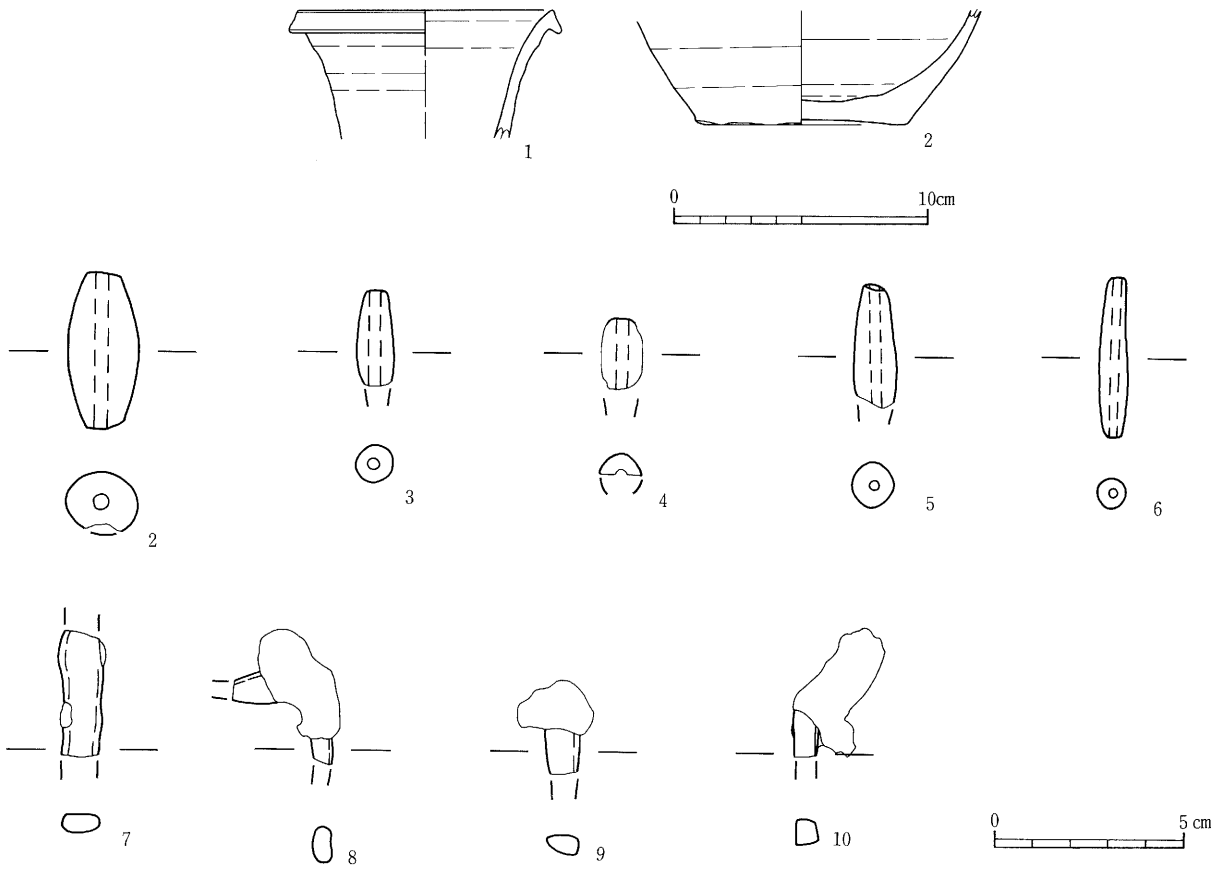


第57図　Ⅵａ層上面小溝状遺構群平面図

(S35～50)

第６節　Ⅰ～Ⅵ層・その他の出土遺物

前節まで記載した遺物の他に、基本層Ⅰ～Ⅵ層中から出土した遺物や、壁面清掃中などに出土したため出土層位が不明な遺物がある。これらの遺物のなかではⅠ・Ⅱ層からの出土破片数が2000点を越えていて圧倒的に多いが(表19)、これらのうちの大部分の遺物は耕作によって下層から巻き上げられ、細かく砕かれてしまったものである。このため図化できたものは少なく、須恵器１点、土師器１点、土製品（土錘）５点、金属製品（鉄釘）４点のみである(第58図)。



No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴 内面調整・特徴
1	167－1	２区Ⅰ層	須恵器	長頸壺	口縁部 1/8	(5.0)	?	?	—	灰オリーブ 灰	良好 白針微量	良	ロクロ調整 ロクロ調整
2	167－2	２区Ⅰ層	土師器	甕	体部～底部	?	8.4	?	—	にぶい褐色 にぶい橙色	良好	良	体部ロクロ調整、底部回転糸切り ロクロ調整

No.	写真図版	出土層位	種別	遺存度	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成
3	167－3	２区　Ⅱ層	土製品・土錘	ほぼ完形	4.2	径 1.9	——		褐色	良	良好
4	167－4	２区　Ⅱ層	土製品・土錘	端部欠損	(2.6)	径 1.0	——		にぶい褐色	良	良好
5	167－5	５区　層不明	土製品・土錘	端部欠損	(1.9)	径 1.1	——		灰黄褐色	良	良好
6	167－6	５区　層不明	土製品・土錘	ほぼ完形	(3.3)	径 1.1	——		にぶい黄橙色	良	良好
7	167－7	５区　層不明	土製品・土錘	ほぼ完形	4.2	径 0.8	——		にぶい褐色	良	良好
8	167－8	５区　Ⅳ層	鉄製品・釘	両端欠損	(3.4)	幅 1.3	0.5		——	—	—
9	167－9	５区　Ⅳ層	鉄製品・釘	両端欠損	(3.4)	幅 0.9	0.5		——	—	—
10	167－10	５区　Ⅳ層	鉄製品・釘	両端欠損	(2.5)	幅 0.9	0.5		——	—	—
11	167－11	５区　Ⅳ層	鉄製品・釘	両端欠損	(3.8)	幅 0.7	0.7		——	—	—

第58図　Ⅰ～Ⅳ層・その他の出土遺物

第７節　Ⅶa1 層水田跡

Ⅶa1 層上面ではⅦa1 層水田跡を検出した。

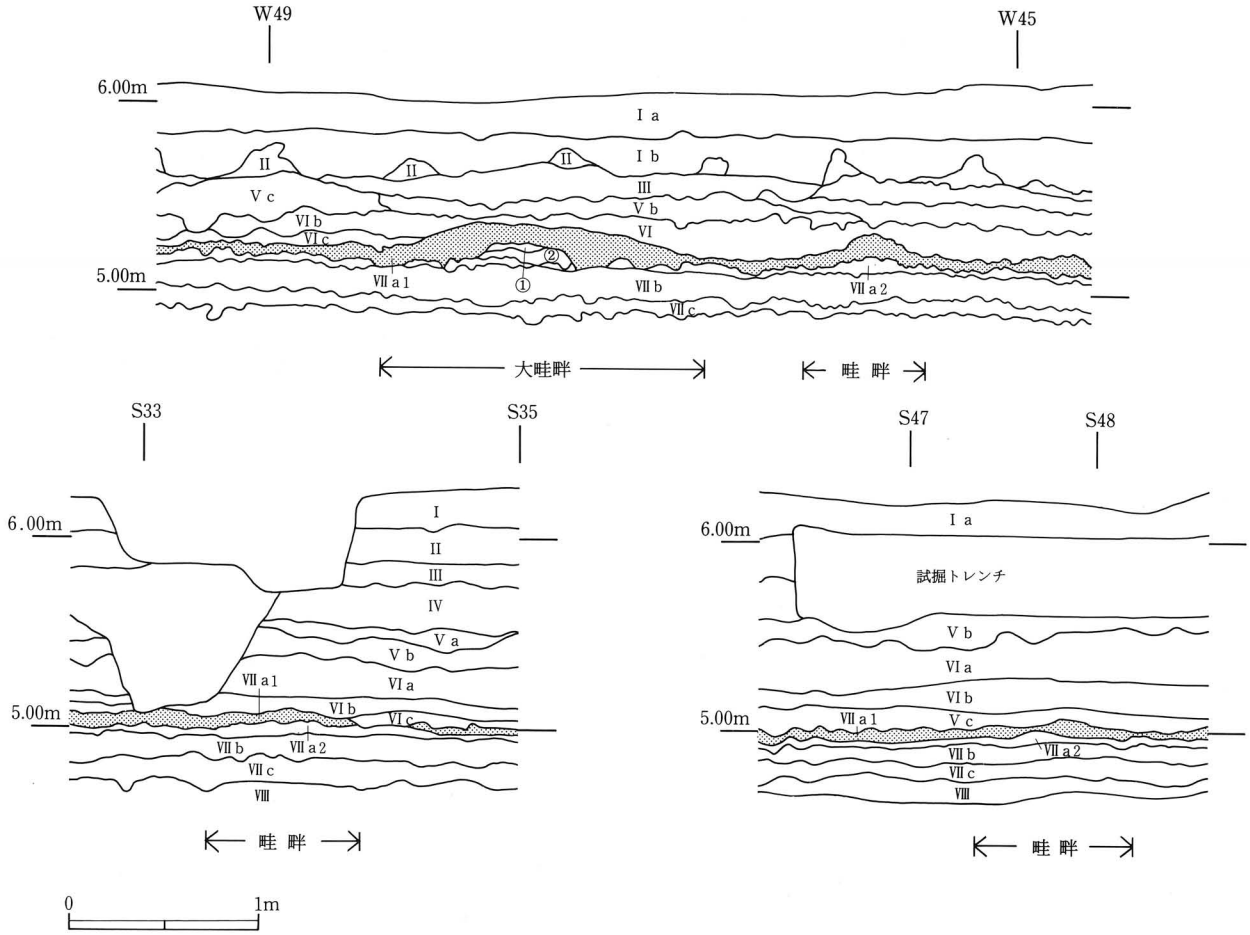
Ⅰ．水田の構成と概要

１．水田の構成

大畦畔１条と多数の小畦畔、土手を伴う水路２条によって小区画の水田が構成される。水路２条は東西方向にほぼ平行して走り、それと直交する南北方向の大畦畔とによって大区画が造られ、大区画を分割して中区画→小区画と細分していったことが想定できる。なお、水路はその他にも２条あるが他の遺構よりもやや新しいと考えられる。

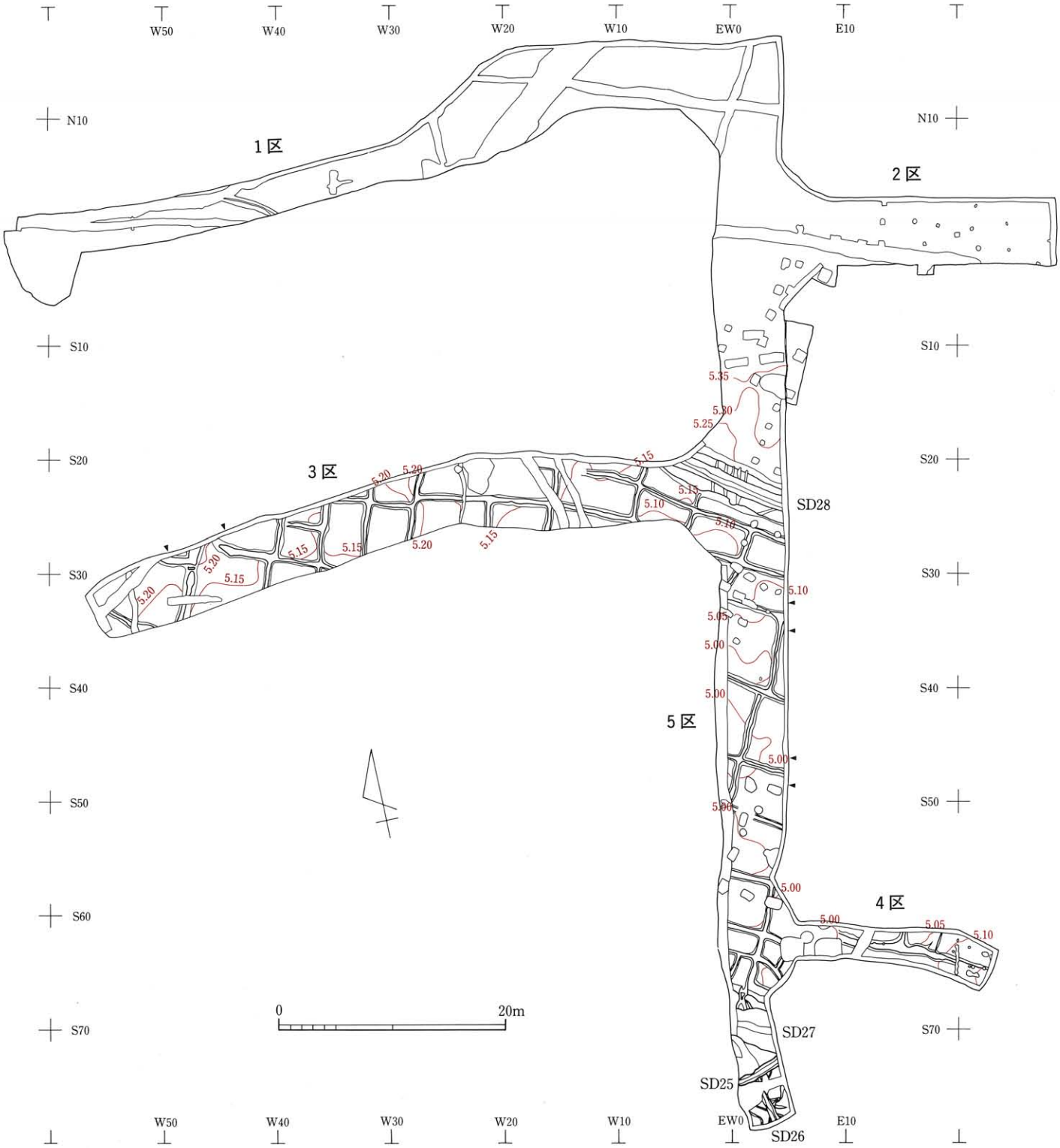
２．検出・遺存状況

調査開始直後から下層の状況を探るために調査区の周囲に設けた側溝の壁面観察を行っていたが、５区南部において厚い砂層（Ⅵ層）の下に暗褐色や黒褐色の粘土層が存在し、この粘土層が耕作土らしいこと、そして畦畔状に盛り上がる部分があることを確認した。このため各区においてこの粘土層の分布を確定するとともに断面観察を行った結果、５区中央部から南と３区・４区において水田跡が遺存している可能性が高いと考えられた。念のため数地点においてプラント・オパール分析を行った結果イネのプラント・オパールが検出され、水田跡の存在がほぼ確実となった。このためⅥ層上面の調査終了後は一度にⅦ層上面を検出せずに、畦畔の確認作業を行いながら徐々にⅥ層を除去していった。



第 59 図　Ⅶa1 層水田跡断面図（位置は平面図１に表示）

畦畔はVI層を削り込んでいく途中で確認したが、小畦畔はほとんどがVIｃ層中、大畦畔はさらに上部のVIｂ層中で確認できた。なお前節で述べたように、ＳＤ28の土手はVIａ層上面の段階ですでに確認している。畦畔の遺存状況は直上のVI層が自然堆積層であるために良好であったが、１区と２区および５区のＮＳ０以北ではすでに層上面が攪拌・削平されていたため畦畔は確認できず、ＮＳ０とＳＤ28の間でも確認できなかった。



第60図　VII a1 層水田跡平面図（１）

３．耕作土

耕作土は基本層Ⅶa1層で、暗褐色の粘土である。厚さは２～10cmで一定せず、平均６cm前後である。下面は凹凸が激しいが下層への食い込みはそれほど深くはなく、大体直下のⅦa2層中で留まっている。

４．水田域

畦畔が検出できた５区中央部から南の部分については、調査区の東側・南側・西側にまで水田域が拡がっていることは確実であるが、畦畔が検出できなかった５区中央部から北の区域については耕作域・非耕作域の区別はできない。

Ⅱ．遺構の状況

１．畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、No.１～41まで検出した。

規模が大きいのはNo.１・19・20・37・38であるが、この他にもNo.27・34・39・40などやや大きいものがある。これらのうち、大畦畔と考えられるものは３区の西端で検出し南北方向にのびるNo.１で、上端幅・下端幅・高さ共に他の畦畔と比べて明らかに大きく約２倍ある。なお、No.19・20はＳＤ28の土手、No.37・38はＳＤ27の土手であり、通常の大畦畔とは性格が異なる。また、No.27については検出した長さが短いので大畦畔であるのかどうか断定できず、No.34・39・40については遺存状況が悪く、畦畔が崩れているために幅が広がって見えるのではないかと考えられる。

No.	方　向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備　考
1	N－23°－E	(6.5)	30 ～ 90	95 ～ 135	3 ～ 14	大畦畔。Ⅶb層水田の大畦畔No.１・Ⅶa２ 層水田の段差No.１を踏襲
2	N－19°－E	(2.3)	23 ～ 30	54 ～ 62	5 ～ 10	
3	N－21°－E	(3.1)	21 ～ 35	58 ～ 75	3 ～ 8	
4	N－17°－E	(6.1)	20 ～ 50	52 ～ 85	1 ～ 4	
5	N－17°－E	(6.0)	19 ～ 40	44 ～ 72	2 ～ 7	
6	N－22°－E	(6.0)	30 ～ 45	55 ～ 67	2 ～ 5	Ⅶa２ 層水田の段差No.７を踏襲
7	N－15°－E	(2.1)	38 ～ 45	63 ～ 72	1 ～ 4	
8	N－18°－E	(5.5)	27 ～ 40	60 ～ 71	1 ～ 7	
9	N－23～34°－E	(5.0)	24 ～ 37	50 ～ 60	1 ～ 6	やや屈曲する
10	N－32°－E	(3.2)	21 ～ 34	40 ～ 62	3 ～ 8	
11	N－34～47°－E	(5.0)	23 ～ 38	50 ～ 81	1 ～ 5	やや屈曲する。Ⅶa２ 層水田の畦畔No.８を一部踏襲
12	N－21°－E	6.1	20 ～ 48	56 ～ 70	1 ～ 5	
13	N－27°－E	(9.8)	16 ～ 42	52 ～ 78	1 ～ 7	Ⅶa２ 層水田の畦畔No.10を一部踏襲
14	N－33°－E	(1.7)	23 ～ 33	43 ～ 58	1 ～ 3	
15	N－20～28°－E	8.8	22 ～ 67	54 ～ 85	2 ～ 7	やや屈曲する
16	N－47°－E	(0.9)	23 ～ 31	47 ～ 51	1 ～ 4	
17	N－26°－E	(0.9)	18 ～ 52	59 ～ 100	5 ～ 6	
18	N－33°－E	(1.5)	48	68	1	
19	N－55°－W	(8.8)	57 ～ 76	150 ～ 186	10 ～ 15	ＳＤ28北側の土手。Ⅶb層水田の土手No.21・Ⅶa2 層水田の土手No.12を踏襲
20	N－57°－W	(11.1)	51 ～ 110	146 ～ 180	5 ～ 23	ＳＤ28南側の土手。Ⅶb層水田の土手No.22・Ⅶa2 層水田の土手No.13を踏襲
21	N－54～67°－W	(18.3)	14 ～ 47	43 ～ 84	1 ～ 10	やや屈曲する。Ⅶa2 層水田の畦畔No.15を一部踏襲
22	N－62°－W	(7.1)	11 ～ 40	55 ～ 71	1 ～ 3	
23	N－67～77°－W	19.2	28 ～ 45	60 ～ 90	1 ～ 4	やや屈曲する。Ⅶa2 層水田の畦畔No.14を一部踏襲
24	N－72°－W	(5.8)	25 ～ 42	46 ～ 70	3 ～ 5	
25	N－75°－W	3.1	20 ～ 50	42 ～ 73	1 ～ 4	
26	N－65°－W	(10.6)	16 ～ 70	48 ～ 117	3 ～ 10	
27	N－69°－W	(2.5)	48 ～ 65	89 ～ 100	5 ～ 9	
28	N－51°－W	(3.4)	25 ～ 37	53 ～ 70	2 ～ 7	
29	N－58°－W	(4.7)	15 ～ 54	54 ～ 99	1 ～ 4	Ⅶb層水田の畦畔No.30を踏襲
30	N－57°－W	(5.3)	16 ～ 48	62 ～ 76	2 ～ 7	Ⅶb層水田の畦畔No.32を踏襲
31	N－62°－W	(5.2)	14 ～ 38	50 ～ 71	4 ～ 7	Ⅶa2 層水田の畦畔No.22を一部踏襲
32	N－58°－W	(4.8)	36 ～ 38	47 ～ 52	1 ～ 6	
33	N－63°－W	(3.5)	33 ～ 57	67 ～ 88	6 ～ 9	
34	N－63～70°－W	(13.3)	33 ～ 71	85 ～ 109	1 ～ 7	やや屈曲する。Ⅶb層水田の畦畔No.37を踏襲
35	N－55～63°－W	(5.0)	32 ～ 47	57 ～ 76	1 ～ 6	やや屈曲する。Ⅶb層水田の畦畔No.38を踏襲
36	N－15～66°－W	(5.2)	21 ～ 40	36 ～ 64	1 ～ 6	屈曲する
37	N－58°－W	(3.2)	56 ～ 92	118 ～ 146	11 ～ 14	ＳＤ27の北側土手。Ⅶb層水田の土手No.39を踏襲
38	N－57°－W	(4.3)	140	160	2	ＳＤ27の南側土手。部分的に遺存、Ⅶb層水田の土手No.40を踏襲
39	N－27°－E	(4.4)	57 ～ 100	80 ～ 165	1 ～ 4	部分的に遺存
40	N－51°－W	(1.7)	70	96	1 ～ 2	
41	N－72°－W	(1.2)	50	85	4	

表11　Ⅶａ１層水田跡畦畔計測表

水路や大畦畔は検出できた距離が短いために正確な方向や位置関係が不明であるが、ＳＤ27とＳＤ28はほぼ平行しており、大畦畔№１はこれに大体直交（約80°振れる）した関係にあるので、これらは他の小畦畔の基軸となっていると考えられる。

小畦畔は上記のものを除くと東西・南北方向ともに規模はほぼ同じで、平均すると上端幅34cm、下端幅64cm、高さ４cm程度である。方向は№21・22～24、また離れてはいるが№26と30の畦畔の配置をみると直線ではなく南側が開いた緩やかな弧状をしている。これは、５区の西側に南方から浅い谷が入り込んでいるためにその影響を受けているためと考えられる（微地形については後述する）。

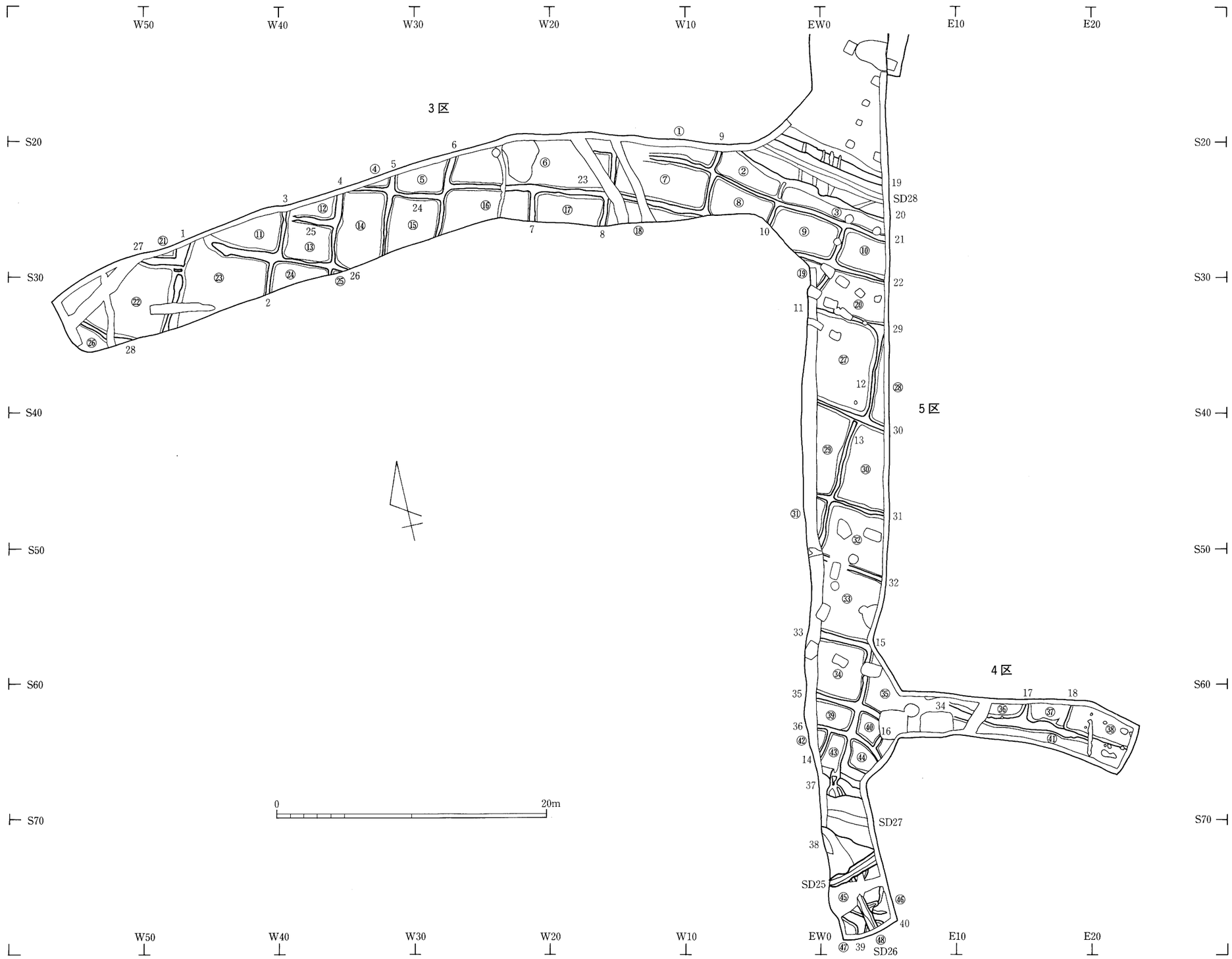
２．水田区画

水田区画は大畦畔と水路によって区画された大区画と小畦畔によって区画された小区画とがある。大区画は全体が明らかになったものはないが、南北約40m、東西75m以上の長方形の部分が確認されている。なお、ＳＤ28の北側も耕作域であった可能性が高いが、この部分には区画№は付けなかった。

小区画は方形を基調としており、№⑦～⑨や⑭のように短辺2.5～３ m×長辺4.5～ 6.5m程で面積が11～17m²前後の区画と、全体の規模は不明ながらも㉒・㉓・㉗～㉚のように短辺が5.5m前後あって面積が30m²程度と推定されるやや大きめの区画が多い。ただしＳＤ28の南側には②のように1.5×4.7mの細長い区画、あるいは③のように短

№	標高(m)	比高差(m)	傾斜方向	東辺(m)	西辺(m)	南辺(m)	北辺(m)	面積(m²)	推定規模	備　考
1	5.14～5.20	(6)	西 → 東	(1.2)	?	(6.5)	?	(5.1)	?	
2	5.15～5.19	(4)	ほぼ水平	1.1	(1.4)	4.3	(4.1)	(7.3)	1.5 × 4.7	台形
3	5.16～5.18	(2)	ほぼ水平	?	1.0	(8.0)	(7.5)	(7.1)	0.8 × ?	
4	5.15～5.20	(5)	?	(0.5)	?	(1.7)	?	(0.5)	?	部分的に検出
5	5.16～5.22	(6)	北 → 南	(2.4)	(1.1)	3.1	?	(6.2)	3.1 × ?	
6	5.16～5.20	(4)	ほぼ水平	2.5	(2.0)	11.3	?	(27.9)	2.5 ×11.3	
7	5.11～5.17	6	北西→南東	2.6	2.6	6.6	6.6	17.2	2.6 × 6.6	
8	5.09～5.14	(5)	北 → 南	(1.5)	2.5	?	4.5	(8.1)	2.5 × 4.5	
9	5.09～5.14	(5)	北 → 南	2.2	(1.5)	(2.7)	4.5	(9.9)	2.4 × 4.5	
10	5.11～5.14	(3)	ほぼ水平	?	2.2	(3.5)	(2.8)	(7.5)	2.2 × ?	
11	5.16～5.19	(3)	ほぼ水平	(2.8)	?	(5.0)	?	(8.6)	?	
12	5.14～5.19	(5)	西 → 東	(1.4)	(0.4)	3.1	?	(2.9)	3.1 × ?	
13	5.14～5.18	4	西 → 東	2.3	2.5	3.4	3.1	8.2	2.4 × 3.4	
14	5.12～5.18	(6)	北 → 南	(4.7)	5.3	(0.9)	2.9	(16.1)	3.0 × 5.5	
15	5.15～5.20	(5)	ほぼ水平	(2.7)	(4.4)	?	3.0	(10.9)	3.0 × ?	
16	5.15～5.23	(8)	北 → 南	(2.2)	(3.4)	?	5.9	(14.5)	6.0 × ?	
17	5.13～5.18	(5)	北西→南東	(2.1)	(2.0)	?	4.6	(9.0)	4.5 × ?	
18	5.12～5.15	(3)	ほぼ水平	?	(2.0)	?	(6.5)	(6.5)	?	
19	5.12	――	?	(1.1)	?	?	(1.4)	(1.7)	?	部分的に検出
20	5.06～5.12	(6)	北西→南東	?	(2.6)	(5.2)	(3.8)	(12.2)	2.6 × ?	
21	5.25～5.27	(2)	?	(0.3)	?	(1.0)	?	(0.2)	?	部分的に検出
22	5.17～5.24	(7)	北西→南東	(4.8)	?	(4.0)	(2.5)	(30.3)	5.3 × ?	
23	5.13～5.20	(7)	北西→南東	(2.4)	(6.6)	?	(5.2)	(25.2)	5.7 × ?	
24	5.10～5.15	(5)	北 → 南	(0.3)	(2.2)	?	3.7	(4.8)	3.7 × ?	
25	5.14～5.16	(2)	?	?	(0.2)	?	(0.5)	(0.1)	?	部分的に検出
26	5.15～5.21	(6)	ほぼ水平	?	?	?	(2.5)	(2.8)	?	部分的に検出
27	4.99～5.06	(7)	北 → 南	5.9	?	(3.7)	(4.3)	(24.3)	5.9 × ?	台形？
28	5.01～5.05	(4)	北 → 南	?	(5.3)	(1.1)	?	(2.7)	5.9 × ?	部分的に検出
29	4.97～5.02	(5)	北東→南西	5.7	?	(0.9)	(2.7)	(10.6)	5.7 × ?	
30	4.98～5.03	(5)	北東→南西	?	5.6	(3.6)	(1.9)	(15.4)	5.6 × ?	
31	4.99～5.03	(4)	?	(2.5)	?	?	(0.6)	(1.1)	?	部分的に検出
32	4.99～5.02	(3)	ほぼ水平	?	3.5	(4.8)	(3.8)	(15.7)	3.5 × ?	
33	4.96～5.02	(6)	北東→南西	?	?	(3.4)	(4.6)	(18.8)	4.5 × ?	
34	5.00～5.03	(3)	ほぼ水平	3.6	?	(3.1)	(3.4)	(12.5)	3.8 × ?	
35	4.97～5.02	(5)	北 → 南	?	(3.8)	(1.4)	?	(4.8)	?	攪乱が多い
36	5.02～5.08	(6)	?	(0.7)	?	(5.2)	?	(3.5)	?	部分的に検出
37	5.04～5.06	(2)	?	(0.5)	(1.1)	1.6	?	(2.4)	?	部分的に検出
38	5.06～5.14	(8)	東 → 西	?	(1.6)	(4.8)	?	(8.4)	?	
39	4.98～5.01	(3)	ほぼ水平	1.6	?	(2.1)	(2.8)	(4.2)	1.6 × ?	
40	4.95～4.98	(3)	ほぼ水平	1.0 以上	1.4	1.4	(1.3)	(2.6)	1.4 × 1.4	歪んだ台形
41	5.06～5.17	(11)	東 → 西	?	?	?	(10.1)	(9.0)	?	分割される可能性あり
42	4.98～4.99	(1)	?	(1.4)	?	?	(0.6)	(0.6)	?	部分的に検出
43	4.95～4.98	(3)	ほぼ水平	2.5	(2.3)	(1.3)	(1.0)	(2.6)	1.2 × 2.4	
44	4.94～4.97	(3)	ほぼ水平	?	1.5	(1.5)	(2.4)	(2.5)	1.6 × ?	歪んだ台形？
45	5.02～5.03	(1)	?	(0.6)	?	(1.2)	(2.1)	(8.6)	?	部分的に検出
46	4.99～5.01	(2)	?	?	(1.7)	(1.3)	?	(0.9)	?	部分的に検出
47	5.03～5.04	(1)	?	(0.5)	?	?	(1.1)	(0.7)	?	部分的に検出
48	5.00～5.02	(2)	?	?	(0.7)	?	(0.9)	(0.4)	?	部分的に検出

表12　Ⅶａ１層水田跡水田区画計測表　　（　　）は現存値



第61図　Ⅶa1層水田跡平面図（２）

辺0.8mで長辺が８ｍ以上ある極端に細長い区画が認められ、またＳＤ27の北側には㊵・㊸・㊹のように1.4×1.4ｍあるいは1.2×2.4mで面積が２～３㎡と矮小な区画が集中して認められるなど、水路に近接して極端に変形したり小さな区画が集中する傾向がある。

また、畦畔のなかには№６・９・26・30・34のように他の畦畔を分断するものがある。調査区が限定されるために断定はできないが、これらが大畦畔以外の基軸の畦畔であると想定すれば、大区画の中で中区画を形成していると考えられる。さらに大畦畔１～畦畔６～畦畔９の間隔はそれぞれ18mと19mでほぼ同じであることから中区画は一定の規格に沿って造られている可能性がある。なお、畦畔23のように他の畦畔を分断はするものの、逆に他の畦畔によって分断される畦畔については基軸の畦畔であるかどうか判断できない。

３．水田面の標高と傾斜

調査区の全体的な地形は北から南へ傾斜しているが、細かく見ると３区が北西から南東方向、５区が北東から南西方向へ傾斜しており、５区南部の西壁寄りとＳＤ27の北側には最も標高の低い（5.0m以下）部分が数カ所で認められる。これらのことから、５区の西側から調査区外にかけて南方から浅い谷が入り込んでいることが予想され、調査区はちょうどこの谷の北側から東側を巡るように位置していると考えられる。

水田面の標高はＳＤ28から北の部分を除くと4.94～5.27mである。勾配は前述したように南から入り込む谷があるために調査区全体を通しては測定できないが、部分的に見ると３区西部の水田区画⑪－㉔の北西～南東方向が18cm／10m、ＳＤ28の南側の②－⑧の南北方向が25cm／10m、５区の㉙－㉚の北東～南西方向が12cm／10mである。調査区が谷の周囲に位置するためか傾斜が比較的きつい部分が多く、特にＳＤ28の近くが顕著である。なお、勾配や傾斜の方向は想定した中区画を越えて連続していると考えられることから、中区画は微地形とは特に関係なく設置されていると考えられる。

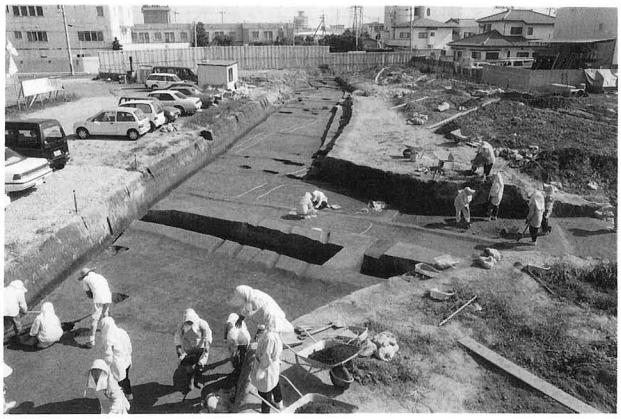
小区画内の傾斜も全体的な傾斜とほぼ一致するが、ＳＤ27の周辺は比較的平坦である。区画内の比高差は、全体を検出できた区画が⑦と⑬のみで少ないがそれぞれ６cmと４cmで、その他は不明であるが８cm以上の区画もある。

４．水口

畦畔を切って隣接する水田区画を結ぶ溝状の窪みを水口とした。明らかに水口と考えられるのは２ヵ所で、大畦畔１、畦畔37（ＳＤ27の北側土手）に設けられている。

大畦畔１に付けられた水口は大畦畔の東西にある区画㉒と㉓をつないでいる。上端幅約60cm、下端幅５～10cmの溝状で、底面は田面から４～５cm高くなっている。なお、畦畔上面からの深さは西端で約５cm、東端で約９cmで、用水が東に向かって流れるようになっている。

畦畔37に付けられた水口は区画㊸からＳＤ27への排水用と考えられる。北半部は上端幅が45～75cm、下端幅10～35cmの細い溝状を呈しているが南側は幅150cm程に大きく開いている。北端部の底面は43の田面から約６cm高くなっていてそこから南側に向かって徐々に低くなっているが、中央部では段差がついていて南端部では北端部に比べて約20cm低くなっている。


Ⅶａ１層水田跡検出作業

この他に畦畔25と26の西端部も畦畔が途切れている。畦畔26の場合は一部が側溝のために不明となっているが、両者ともに畦畔端部が徐々に低くなって田面と同じ高さとなっている。水口の可能性はあるが、他にこのような形態のものは認められないので断定はできない。なお、この畦畔25と26のものが水口ではないとすると確認できた水口は大畦畔と水路の土手に設けられたものだけ

となる。

5．溝跡

VII a1 層上面では溝跡を4条検出した。

（1）25号溝跡－ＳＤ25－（第62図）

5区南部に位置し、畦畔38（ＳＤ27南側の土手）や39を切っている。ＳＤ27とは調査区の東壁でごくわずかに重複するだけであるので明確ではないが、断面観察ではＳＤ27よりも新しいと推定している。なお、ＳＤ26とも接続あるいは切り合い関係にあるが新旧は不明である。

確認できた溝の長さは4 m、幅は約90cm、方向はＮ－73°－Ｅである。断面形は逆台形で深さは約45cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は4層に分層できたが、ほとんどが細砂や粘土の互層であることから大部分が水成堆積層と考えられる。溝の性格は堆積土の状況から水路であると考えられるが、流れの方向は不明である。時期については①VII a1 層水田跡の畦畔・土手・水路を切っており方向も異なること、②VII a1 層水田跡同様にVI c 層によって覆われていること、などから同水田跡の経営期間の中の最終段階か、あるいは廃絶直後に掘られた可能性が高い。

（2）26号溝跡－ＳＤ26－（第62図）

5区南部に位置し、畦畔39・41を切っている。なお、ＳＤ25とも接続あるいは切り合い関係にあるが新旧は不明である。

確認できた溝の長さは4 m、幅は60～80cm、方向はＮ－15°－ＷでＳＤ25とほぼ直交する。断面形はやや開いた「Ｕ」字形で深さは約40cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は5層で自然堆積層と推定される。

溝の性格については不明であるが、確認した状況がＳＤ25と同じで方向もほぼ直交するなどＳＤ25との関連性が高いと考えられる。時期についてもＳＤ25同様にVII a1 層水田跡の経営期間の中の最終段階か、あるいは廃絶直後のものである可能性が高い。

（3）27号溝跡－ＳＤ27－（第62図）

5区南部に位置する。土手を伴っており、土手のプランは盛土下の現代水田耕作土を除去した直下のVI層上面で確認できた。土手はVII a1 層上面に構築されたもので、溝も同様にVII a1 層上面から掘り込まれたものである。

確認できた溝の長さは4 m、幅は約3 m、方向はＮ－63°－Ｗである。断面形は大きく開く「Ｕ」字形で、北側の土手の上面からの深さは約90cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は砂や粘土からなる自然堆積層で、水成堆積と考えられる。

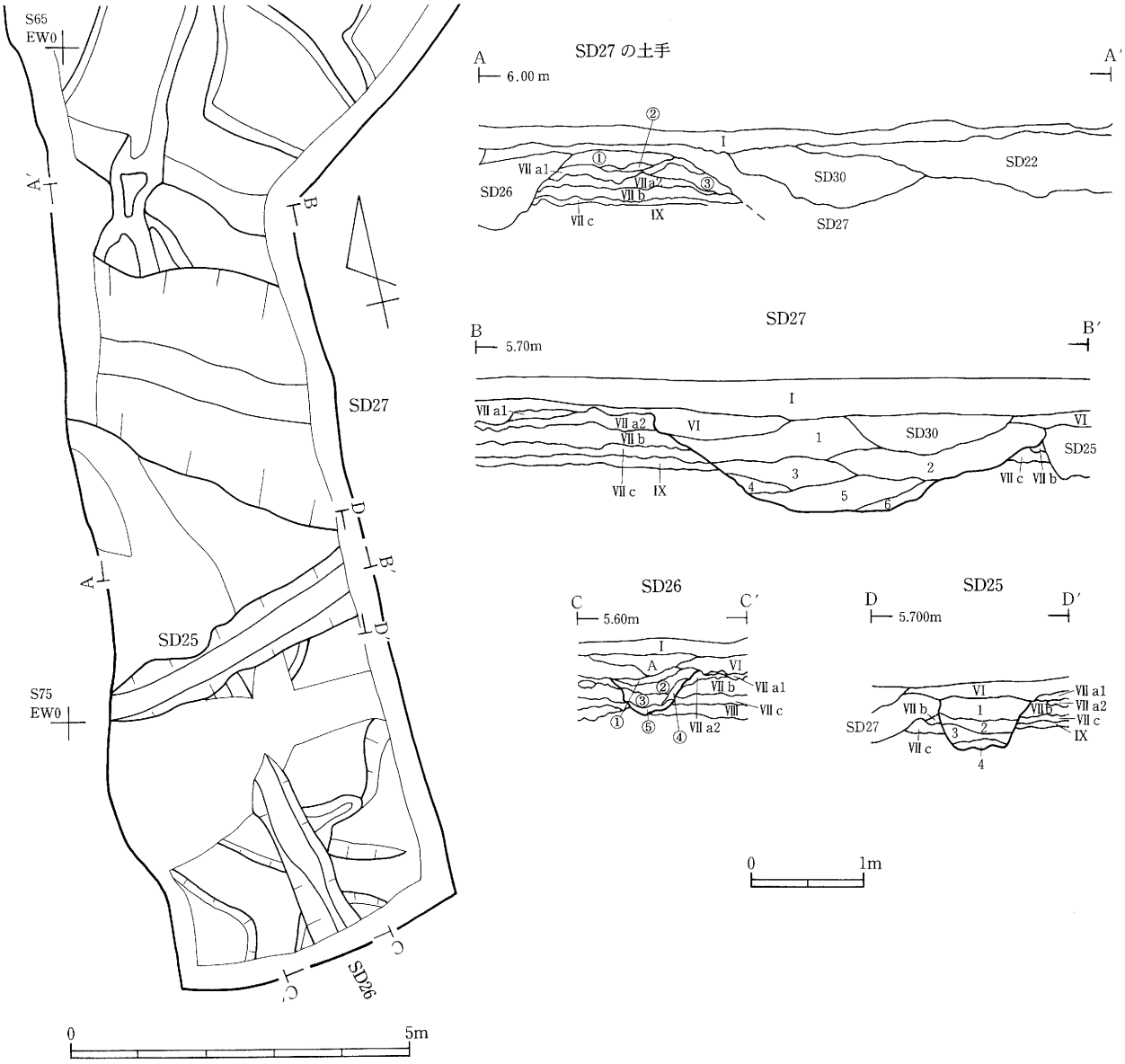
土手は溝の南北両側に認められ（畦畔37・38とした）、遺存状況の比較的良い箇所ではVII a1 層の上に褐灰色粘土やにぶい黄褐色細砂の盛土が認められたが、VII a1 層耕作土の高まりだけ確認できた部分もある。規模は表11の通りで、北側の土手には前述したように水口が設けられている。

溝の性格は堆積土が水成堆積と推定されることと両岸に土手を伴うことから水路であり、地形の状況からすると東へ流れていたと考えられる。北側に広がる水田の排水路としての役割を持っているが、南側にも一段低い水田が広がっているとするとこの南側の水田に対する給水路としての役割も有することとなる。なおVII a1 層水田段階だけでなく、下層のVII b 層水田段階にも土手が認められるので、この溝の上限はVII b 層水田段階にまで上ると推定され、掘削されて以来VII a1 層水田段階まで踏襲された基幹水路であると考えられる。

（4）28号溝跡－ＳＤ28

5区中央部に位置する。土手を伴っており、土手のプランは第5節で述べたようにVI a 層上面で確認できた。土手はVII a1 層上面に構築されたもので、溝も同様にVII a1 層上面から掘り込まれたものである。

確認できた溝の長さは10m、幅は1～1.3m である。方向はＮ－55°－Ｗを示しているが北西方向の延長線上にある



SD25

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	2.5 Y3/2 黒褐色	粘土	部分的に暗灰黄色シルト質粘土・黒褐色粘土と互層
2	2.5 Y5/2 暗灰黄色 2.5 Y4/1 黄灰色	細砂 シルト質粘土	} 互層
3	2.5 Y4/2 暗灰黄色	細砂	
4	10Y　5/2 オリーブ灰色 10Y　3/1 オリーブ黒色	粘土 粘土	} ブロックの混合

SD26

層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10Y R4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック多量
2	10Y R3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量
3	10Y R3/2 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック・灰黄褐色粘土ブロック多量
4	10Y R3/1 黒褐色	粘土	褐灰色粘土ブロック少量
5	10Y R2/1 黒色	粘土	褐灰色粘土ブロック少量

SD27

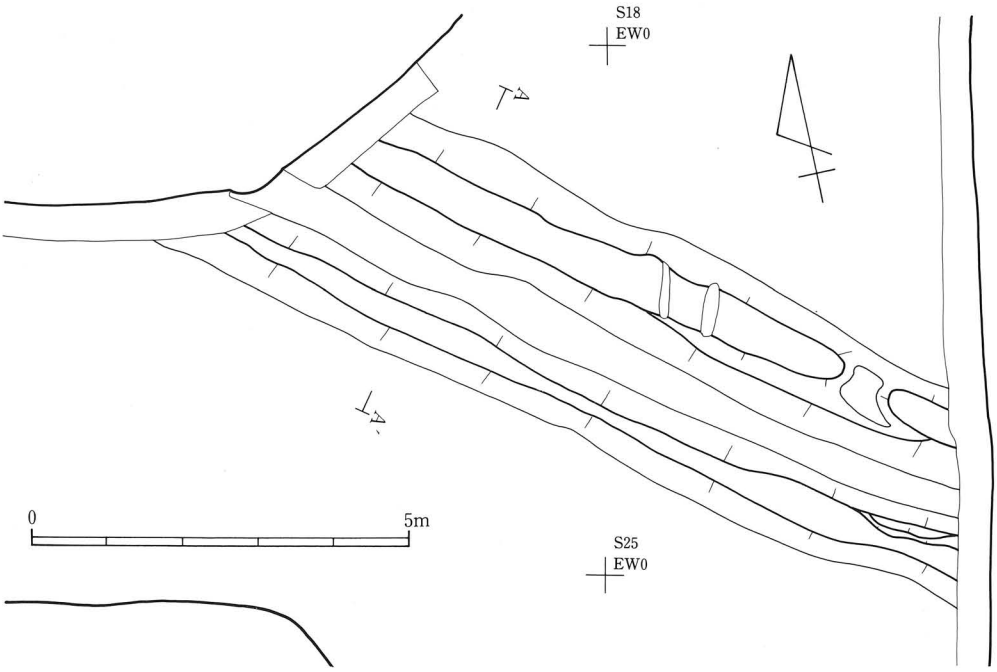
層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	10Y R5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10Y R4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土質シルトブロック・黒褐色粘土ブロック多量
3	10Y R4/3 にぶい黄褐色 10Y R5/3 にぶい黄褐色	粗砂 粘土	} 互層
4	10Y R3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトブロック多量
5	10Y R4/3 にぶい黄褐色	粗砂	
6	10Y R5/1 褐灰色 10Y R4/1 褐灰色	粘土 粗砂	} ブロックの混合
①	10Y R4/1 褐灰色	粘土	黒褐色粘土ブロック・灰黄褐色シルトブロック少量
②	10Y R4/3 にぶい黄褐色	細砂	灰黄褐色粘土ブロック微量
③	10Y R4/1 褐灰色	粘土	黒褐色粘土ブロック微量、暗褐色細砂多量

第62図　SD25～27 平面・断面図

１区西部で確認されていないので、西方にまっすぐは延びずに１区と３区の間を通るように南側に湾曲していると推定される。断面形は上部は大きく開く「U」字形であるが下部は逆台形をしていて、堆積土もこの部分を境にして分層できることから一度埋没した後に再掘削されていると推定される。土手の上面からの深さは70～75cm、底面はほぼ平坦でレベル差は認められなかった。堆積土は上層がシルトを主とし、下層が砂を主とする自然堆積層で、水成堆積と考えられる。

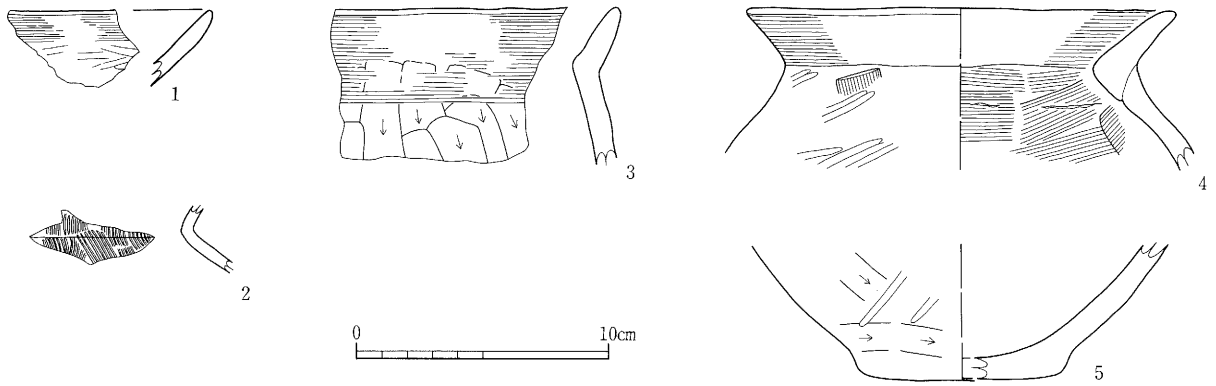
土手は溝の南北両側に認められ（畦畔19･20とした）、規模は表11の通りである。上部にはVII a1 層が積まれて造られているが、土手の下部にはVII a2 層やVII b 層の水田耕作土、褐色･にぶい黄褐色の粘土質シルトや粘土の盛土が認められる。

溝の性格は堆積土が水成堆積と推定されることと両岸に土手を伴うことから水路であり、東へ流れていたと推定される。調査区内で水口は認められなかったが南側に広がる水田の給水路としての役割を持っていると推定され、また北側にも耕作域が広がっていたとすると北側の水田の排水路としての性格も有することとなる。なお、溝が掘りなおされていることや土手がVII b 層水田の段階から継続して使用されている状況などからするとこの溝はVII b 層段階から踏襲されてきた基幹の水路であると考えられる。



層位	色　　調	土　　質	混入物・その他
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトブロック少量
3	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色細砂ブロック少量
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粗砂	
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロック多量
①	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	VII a 2 層水田段階の土手の盛土、黒褐色粘土ブロック微量
②	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	VII b 層水田段階の土手の盛土、黒褐色粘土ブロック少量

第63図　SD28 平面・断面図



No.	写真図版	出土層位	種別	器種	遺存度	法量(cm) 口径	底径	器高	外面色調 内面色調	胎土	焼成	外面調整・特徴 内面調整・特徴
1	168－4	堆積土下層	土師器	甕	口縁部小片	?	?	?	にぶい橙色 にぶい橙色	良好 白針少量	良好	口縁部端部ヨコナデ、ナデ→粗いヘラミガキ ナデ→粗いヘラミガキ
2	168－1	堆積土下層	土師器	甕	頸部小片	?	?	?	にぶい黄橙色 褐灰色	良好 白針微量	良好	ハケメ 口縁部ハケメ、体部ナデ
3	168－2	堆積土下層	土師器	甕	口縁部小片	?	?	?	にぶい橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	良好	口縁～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ、体部ナデ→粗いヘラミガキ
4	168－3	堆積土下層	土師器	甕	上部1/4	(17.0)	?	?	暗灰色 にぶい黄橙色	やや不良 白針微量	良好	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ→粗いヘラミガキ 口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ
5	168－5	堆積土下層	土師器	甕	下部1/2	?	(7.8)	?	黄灰色 にぶい黄橙色	良好 白針少量	良好	体部ヘラケズリ→粗いヘラミガキ、底部ヘラケズリ ナデ？（磨滅）

第64図　SD27出土遺物

Ⅲ．出土遺物

耕作土中からは土師器片が２点出土したのみである。非ロクロ調整の甕と考えられるが細片のため図化はできなかった。

ＳＤ27からは堆積土の下層（第62図の５・６層）を中心に土師器片が44点出土した。全て非ロクロ調整で、甕と考えられる５点が図化できた(第64図)。このうち２は器壁が薄くハケメが細かいのが特徴的で、所謂Ｓ字状口縁甕である可能性が考えられる。なお、ＳＤ27はⅦa1層水田跡だけに伴う溝ではなく、Ⅶb層水田の段階から継続して使用された基幹水路と推定されるため、遺物もⅦb層～Ⅶa1層水田までのものが混在している可能性があるが、出土層位等によって区別することはできなかった。

第８節　Ⅶa2層水田跡

Ⅶa2層上面ではⅦa2層水田跡を検出した。

Ⅰ．水田の構成と概要

１．水田の構成

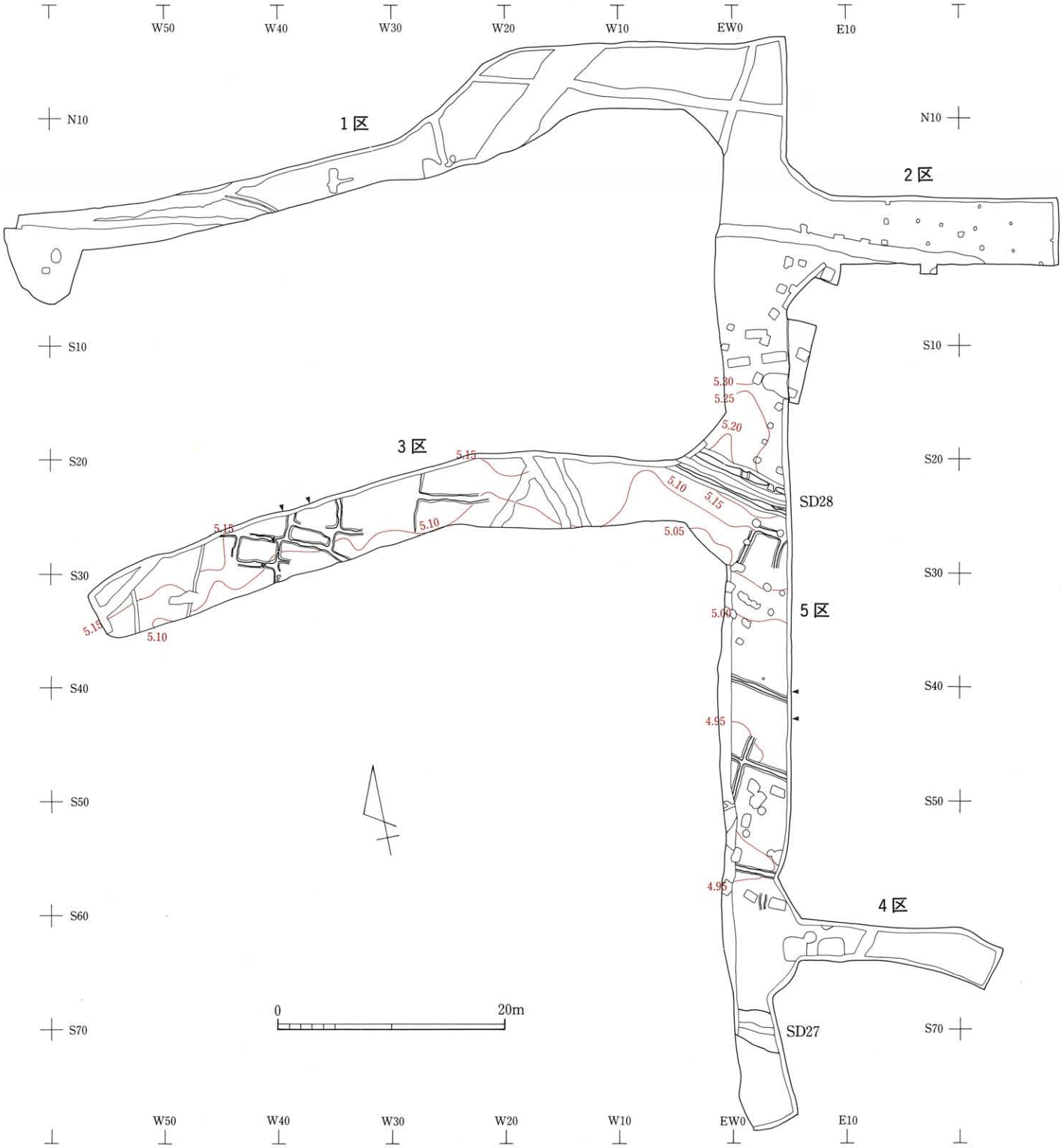
東西方向にほぼ平行して走る水路２条と小畦畔によって構成される。検出した畦畔のうち12条の畦畔が直下のⅦb層水田跡の畦畔をほぼ踏襲しており（表13の備考欄参照）、特に３区西部では部分的ではあるがⅦb層水田跡と類似する小区画が検出されている。５区では畦畔の間隔が広いが、上下層で小区画の水田が検出されていることからすると検出できなかった箇所にも畦畔が存在した可能性が高く、このことから当水田跡もⅦa1層水田跡と同じような小区画の水田構造であると推定される。

２．検出・遺存状況

当初の壁面観察において、Ⅶa層は層上部と下部の層相がやや異ることを把握はしていたがそれは同じ耕作土中の耕作頻度の違いに起因するものと考えていた。ところがⅦa層(後でⅦa1層に変更）の精査終了後、３区においてⅦa層を削り込んでⅦb層水田跡の畦畔確認作業を開始したところ、Ⅶa層ともⅦb層とも異なる畦畔を確認し

た。そこで調査区全面の断面を再検討したところⅦａ層は２層に細分できることが判明し、それぞれⅦa1 層とⅦa2 層とした。

なお、畦畔はⅦa1 層を削り込んでいく途中で確認したが遺存状況はあまり良くなく、断片的に確認できたのみであった。



第 65 図　Ⅶa2 層水田跡平面図（１）

３．耕作土

耕作土は基本層Ⅶa2層で、黒褐色の粘土である。厚さは２～８cmで一定せず、平均４cm前後である。下面は凹凸が激しいが下層への食い込みはそれほど深くはなく、直下のⅦb層中で留まっている。

４．水田域

畦畔が検出できた５区中央部から南の部分については、調査区の東側・南側・西側にまで水田域が拡がっていることは確実であるが、畦畔が検出できなかった５区中央部から北の区域については耕作域・非耕作域の区別はできない。この点はⅦa1層水田跡と同じである。

Ⅱ．遺構の状況

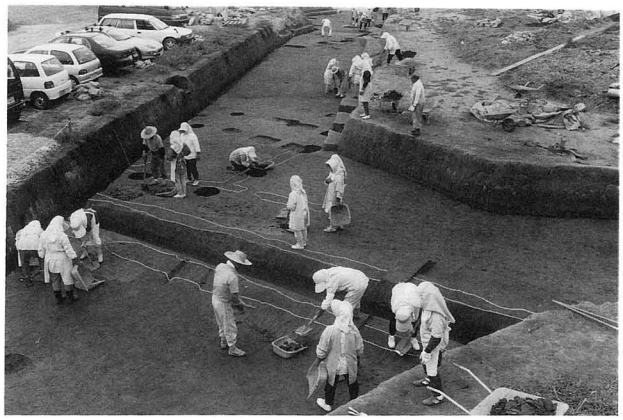
１．畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、№１～23まで検出した。詳細は表13の通りである。規模が大きいのはＳＤ28の北側の土手である№12で、その他№16もやや幅広であるが、これは遺存状況が悪く崩れているためひろがって見えるのではないかと考えられる。なお３区西部にある段差の位置では直下のⅦb層水田跡と直上のⅦa1層水田跡で大畦畔が検出されているので、検出はできなかったが大畦畔が存在した可能性が高い。

他の小畦畔は東西・南北方向ともに規模はほぼ同じで、平均すると上端幅31cm、下端幅55cm、高さ２cm程度である。方向は断片的なものが多いために不明な点が多いが、Ⅶa1層水田跡と同様と推定される。

２．水田区画

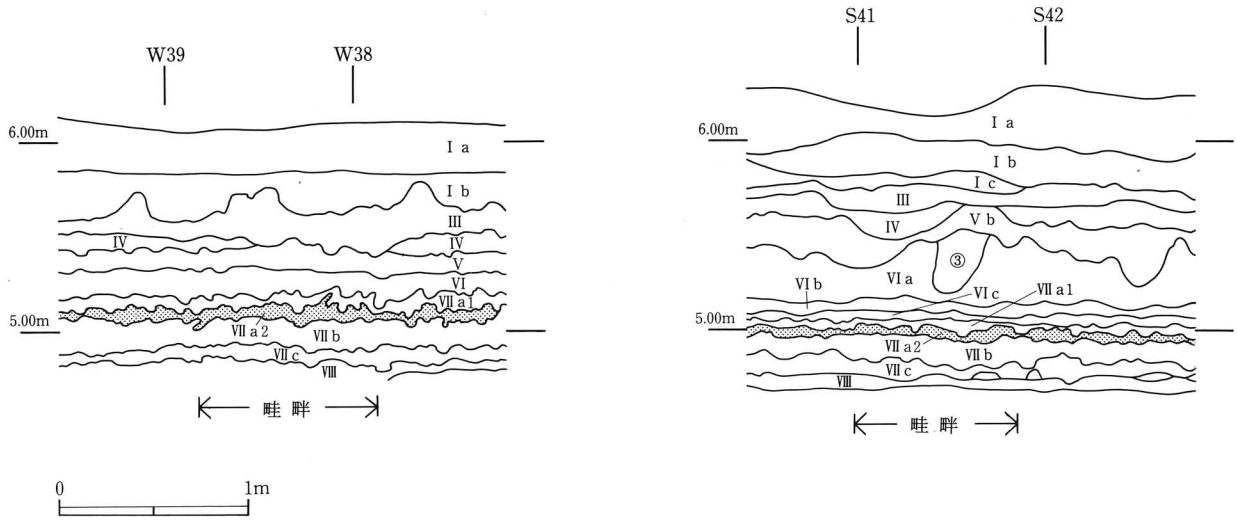
区画がある程度明確にできたのは３区西部のみで、他は部分的な検出に留まっているため大部分の詳細は不明である。ただし「水田の構成」の項で述べたように、直上のⅦa1層水田跡と直下のⅦb層水田跡の構造が類似していることからⅦa2層水田跡も同じような小区画であったと考えられ、実際はさらに細分される区画が多いと考えられる。



Ⅶａ２層水田跡作業風景（ＳＤ28付近）

３．水田面の標高と傾斜

地形の特徴はⅦa1層水田跡と同じで、大まかには北から南へ傾斜するなかで、５区の西側から調査区外にか



第66図　Ⅶa2層水田跡断面図（位置は平面図１に表示）

けて南方から浅い谷が入り込んでいる。

水田面の標高はＳＤ28から北の部分を除くと4.92～5.19mである。部分的な勾配はⅦa1層水田跡と同じで、３区西部の水田区画④の北西～南東方向が15cm／10m、ＳＤ28の南側の南北方向が25cm／10m、５区の⑳の東西方向が12cm／10mである。

なお、小区画内の傾斜・比高差については区画自体が不明確なため詳細は不明である。

４．水口

明確に水口と考えられる箇所は検出できなかった。

５．溝跡

Ⅶa1層水田跡上面で確認したＳＤ27・28は前述したようにⅦa2層水田跡にも伴う基幹水路で、規模や形態はⅦa1層水田段階とほぼ同じである。

Ⅲ．出土遺物

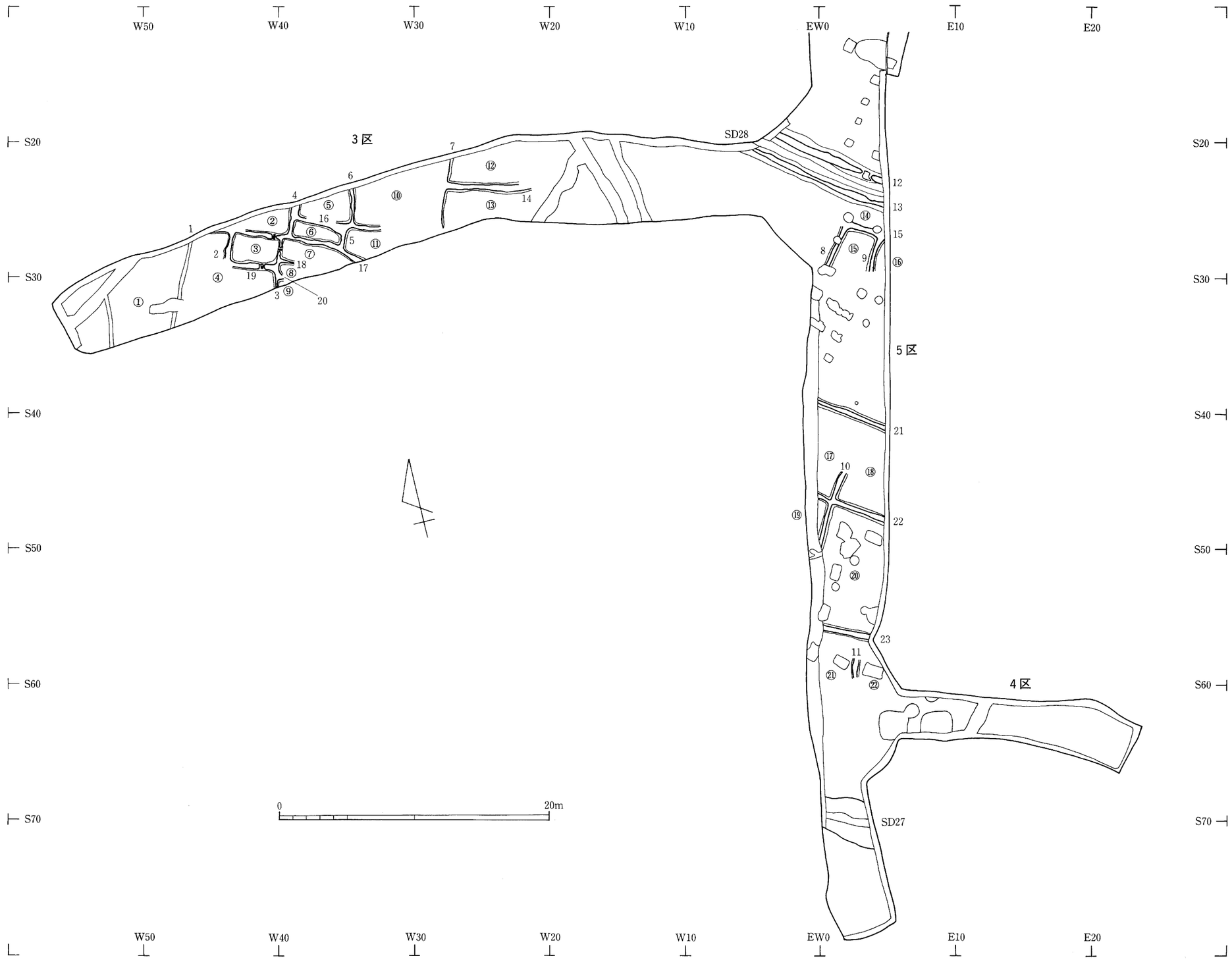
遺物は耕作土中から非ロクロ調整の土師器片が15点出土したが、細片で磨滅が著しいために図化できたものはない。なお、ＳＤ27の遺物については前述したようにⅦa1層～Ⅶb層の各水田跡の遺物が混在している可能性はあるが、区別することはできない。

No.	方　向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備　考
1	N－25°－E	(6.6)	――	――	1 ～ 5	段差のみ検出。Ⅶb層水田の大畦畔No.1を踏襲
2	N－25°－E	1.9	29 ～ 43	46 ～ 66	2 ～ 4	Ⅶb層水田の畦畔No.3を踏襲
3	N－17°－E	(3.6)	15 ～ 33	45 ～ 58	1 ～ 4	
4	N－21°－E	(2.1)	33 ～ 53	56 ～ 79	2 ～ 3	Ⅶb層水田の畦畔No.7を踏襲
5	N－22°－E	1.0	25 ～ 33	61 ～ 70	2 ～ 4	Ⅶb層水田の畦畔No.8の一部を踏襲
6	N－11°－E	(2.5)	17 ～ 31	45 ～ 54	1 ～ 3	Ⅶb層水田の畦畔No.8の一部をほぼ踏襲
7	N－19°－E	(5.3)	――	――	1 ～ 2	段差のみ検出
8	N－37°－E	(3.1)	26 ～ 33	54 ～ 60	1 ～ 4	
9	N－28°－E	(2.3)	29 ～ 31	56 ～ 65	1 ～ 3	やや屈曲
10	N－27～34°－E	(5.5)	21 ～ 37	56 ～ 65	1 ～ 3	やや屈曲
11	N－16°－E	(1.4)	29 ～ 45	43 ～ 61	1 ～ 2	
12	N－52°－W	(8.6)	50 ～ 69	70 ～ 120	6 ～ 16	ＳＤ28の北側土手。Ⅶb層水田の土手No.21を踏襲
13	N－53°－W	(10.7)	15 ～ 50	46 ～ 80	7 ～ 16	ＳＤ28の南側土手。Ⅶb層水田の土手No.22を踏襲
14	N－77°－W	(5.7)	30 ～ 58	58 ～ 81	1 ～ 3	
15	N－61°－W	(1.8)	35 ～ 42	66 ～ 72	1 ～ 3	
16	N－64°－W	(3.6)	25 ～ 71	50 ～ 105	1 ～ 3	Ⅶb層水田の畦畔No.25の一部を踏襲
17	N－48～69°－W	(3.1)	23 ～ 38	42 ～ 51	1 ～ 4	やや屈曲する。Ⅶb層水田の畦畔No.27を踏襲
18	N－68°－W	(1.0)	13 ～ 18	33 ～ 40	1 ～ 2	
19	N－73°－W	(3.0)	26 ～ 45	58 ～ 78	2 ～ 3	Ⅶb層水田の畦畔No.28の一部をほぼ踏襲
20	N－74°－W	(0.6)	34	66	1	
21	N－57°－W	(5.3)	21 ～ 37	53 ～ 66	2 ～ 4	Ⅶb層水田の畦畔No.32を踏襲
22	N－52～58°－W	(5.2)	21 ～ 38	45 ～ 73	2 ～ 4	
23	N－66°－W	(3.6)	36 ～ 46	52 ～ 64	1 ～ 2	Ⅶb層水田の畦畔No.36を踏襲

表13　Ⅶａ２層水田跡畦畔計測表

No.	標高(m)	比高差(m)	傾斜方向	東辺(m)	西辺(m)	南辺(m)	北辺(m)	面積(m²)	推定規模	備　考
1	5.10～5.19	(9)	北 → 南	(6.6)	?	?	?	(42.9)	?	分割される可能性あり
2	5.12～5.14	(2)	ほぼ水平	(1.9)	?	(4.4)	?	(5.2)	?	
3	5.10～5.13	3	北西→南東	1.6	1.9	3.0	3.2	5.9	1.7 × 3.1	
4	5.08～5.17	(9)	北西→南東	(1.3)	(6.6)	?	?	(25.4)	?	分割される可能性あり
5	5.10～5.12	(2)	ほぼ水平	(2.3)	(0.7)	3.6	?	(5.9)	3.5 × ?	
6	5.10～5.12	2	ほぼ水平	0.6	1.0	3.1	3.2	2.8	0.8 × 3.2	
7	5.08～5.11	(3)	北西→南東	?	1.4	(1.0)	(5.4)	(6.4)	1.4 × ?	歪んだ方形？
8	5.06～5.09	(3)	ほぼ水平	?	0.6	?	(1.0)	(1.7)	0.6 × ?	
9	5.06～5.08	(2)	?	?	(0.4)	?	(0.6)	(0.3)	?	部分的に検出
10	5.09～5.12	(3)	ほぼ水平	?	(2.6)	(1.8)	?	(21.0)	6.0 × ?	
11	5.08～5.10	(2)	ほぼ水平	?	1.4	(1.7)	(2.3)	(7.7)	?	台形？
12	5.10～5.17	(7)	北東→南西	?	(1.2)	(5.2)	?	?	?	
13	5.05～5.12	(7)	北西→南東	?	(2.8)	?	(6.1)	?	?	
14	5.11～5.16	(5)	北 → 南	?	?	(1.6)	?	?	?	
15	4.95～5.10	(15)	北 → 南	(2.1)	(3.0)	?	2.0	?	2.0 × ?	
16	4.95～5.11	(16)	北 → 南	?	(2.4)	?	?	?	?	
17	4.93～4.97	(4)	北東→南西	(2.1)	?	(0.9)	?	(13.1)	5.8 × ?	
18	4.94～5.00	(6)	北東→南西	?	(1.9)	(3.6)	?	(13.9)	5.7 × ?	
19	4.96～4.97	(1)	?	(2.4)	?	?	(0.7)	(1.0)	?	部分的に検出
20	4.92～4.98	(6)	北東→南西	?	(3.3)	(3.6)	(3.9)	(35.8)	8.2 × ?	
21	4.92～4.98	(6)	?	(1.5)	?	?	(2.4)	?	?	
22	4.95～4.98	(3)	?	?	(1.3)	?	(0.5)	?	?	

表14　Ⅶａ２層水田跡水田区画計測表　　(　　)は現存値



第 67 図　Ⅶa2 層水田跡平面図（２）

第９節　Ⅶｂ層水田跡

Ⅶｂ層上面ではⅦｂ層水田跡を検出した。

Ⅰ．水田の構成と概要

１．水田の構成

水田の構成はⅦａ1層水田跡とほぼ同じで、南北方向の大畦畔１条と土手を伴なう東西方向の水路２条によって大区画が造られ、その内部を小畦畔によって分割して小区画が造られている。ただしⅦａ1層水田跡の場合は小畦畔のなかにも基軸となる畦畔があって、大区画を区切る「中区画」の存在が想定できたが、Ⅶｂ層水田跡の場合は中区画の存在はそれほど明瞭ではない。

水田面の検出作業

２．検出・遺存状況

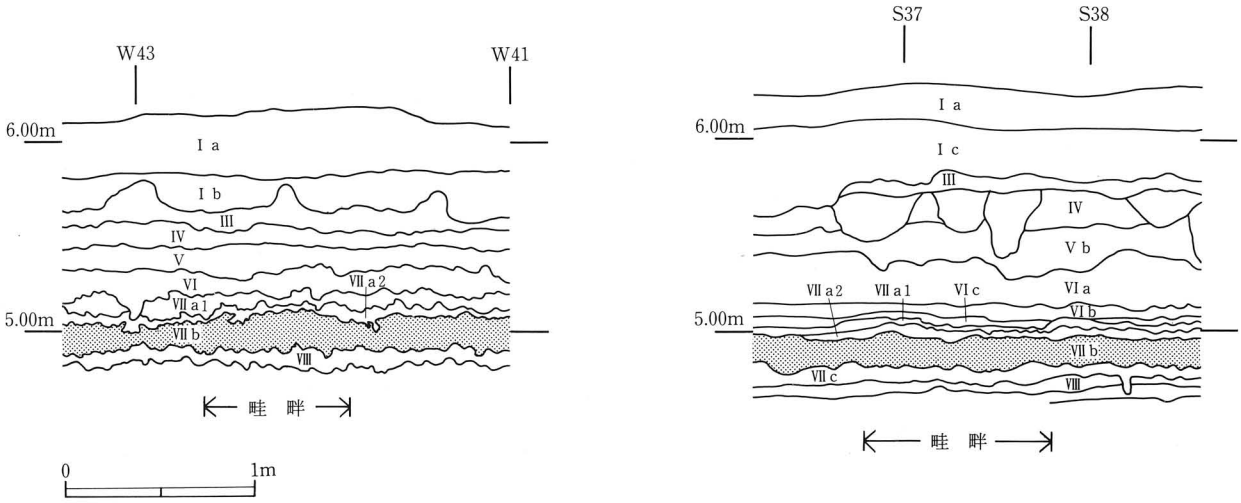
畦畔はⅦａ2層水田の耕作土を削り込んでいく途中で確認した。畦畔の遺存状況は比較的良好であったが、ＳＤ27の南側やＳＤ28の南側では畦畔を確認できなかった。このうちＳＤ27の南側はこの付近に上層の遺構が集中していたためⅦｂ層自体が遺存する箇所が少なく、このために畦畔が確認できなかったと考えられる。一方ＳＤ28の南側で畦畔が確認できなかった理由は明らかではなく、本来畦畔が存在しなかったのかどうか不明である。なお、Ⅶａ1層水田跡やⅦａ2層水田跡ではＳＤ28の北側で畦畔は確認できなかったが、本層ではわずかながら北にのびる畦畔（№17）を確認できた。

３．耕作土

耕作土は基本層Ⅶｂ層で黒色の粘土であるが、５区中央部のＳＤ28以北では北に向かうにつれて徐々に泥炭質粘土となる。厚さは12～20cmで比較的厚く安定した分布を示し、平均15cm前後ある。下面は凹凸が激しいが下層への食い込みはそれほど深くはなく、直下にⅦｃ層が遺存する箇所では大体Ⅶｃ層中で留まっている。

４．水田域

畦畔が検出できた５区中央部から南の部分については、調査区の周囲にまで水田域が拡がっていることは確実である。一方、畦畔が検出できなかった５区中央部から北の区域については、２区東端部におけるプラント・オパール分析の結果、Ⅶｂ層中からイネが2900個／ｇという数値を得ているので（第３章参照）、少なくとも２区東端部付近までは耕作域であった可能性はある。



第68図　Ⅶｂ層水田跡断面図（位置は平面図１に表示）

II．遺構の状況

１．畦畔

畦畔は耕作土を盛り上げて作られており、№１～40まで検出した。

規模が大きいのは№１・39・40である。このうち大畦畔は３区西端部の№１で、高さは他の畦畔とあまり変わらないが、上端幅・下端幅は他の２～３倍ある。なお、№39・40はＳＤ27の土手である。

畦畔の確認状況（３区西部）

水路ＳＤ27・ＳＤ28と大畦畔№１はこのVIIｂ層水田跡で造られたものが上層のVII a2 層水田跡やVII a1 層水田跡まで踏襲されたと考えられる。従って当然基本となる構造は前述した上層の水田跡と同じで、水路がほぼ平行し、大畦畔№１はこれに大体直交して他の小畦畔の基軸となっている。

小畦畔は東西・南北方向ともに規模はほぼ同じで、平均すると上端幅26cm、下端幅51cm、高さ６cm程度である。方向は№24のように比較的直線的なものもあるが、№23・27・28のように南側が開いた緩やかな弧状をしているものもある。３区と５区の畦畔のつながりが確定できないため判然としないが、VII a1 層水田跡と同じように５区の西側に南方から浅い谷が入り込んでいて、その影響を受けているために畦畔が湾曲しているのではないかとと考えられる。

２．水田区画

水田区画は大畦畔と水路によって区画された大区画と小畦畔によって区画された小区画とがある。大区画は全体が明らかになったものはないが、VII a1 層水田跡と同じく南北約40m、東西75m以上の長方形の部分が確認されている。

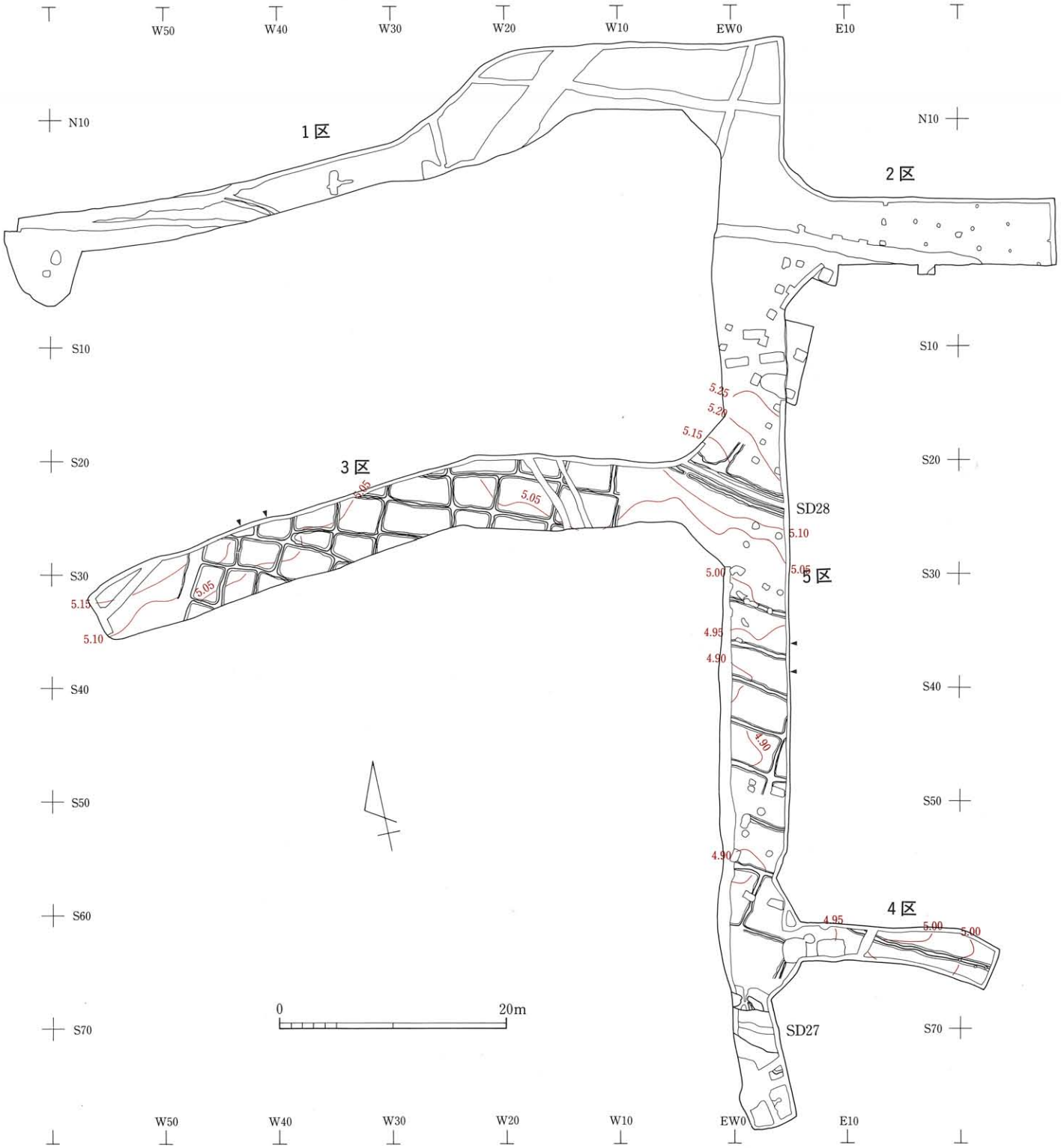
小区画は№㉑のような例外はあるが方形を基調としている。規模は様々で、№㉑・㉒・㉙のように短辺１～２ｍ×長辺３ｍ程で面積が３～６㎡前後の極小の区画、⑩・⑯・㉗のように短辺２～３ｍ×長辺３～４ｍ程で面積が７～10㎡前後の区画、⑨・⑪・⑫・⑰のようにそれよりやや大きく短辺2.5～３ｍ×長辺５ｍ程で面積が10～15㎡前後の区画、さらに33～36のように短辺約３ｍ×長

№.	方　向	長さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm)	備　考
1	N－28°－E	(6.5)	88 ～ 128	128 ～ 150	1 ～ 7	大畦畔
2	N－24°－E	3.1	20 ～ 32	53 ～ 62	3 ～ 5	
3	N－17°－E	2.1	23 ～ 30	46 ～ 56	1 ～ 3	
4	N－17°－E	(0.7)	25 ～ 38	48 ～ 62	1 ～ 2	
5	N－22°－E	(2.0)	8 ～ 24	38 ～ 48	2 ～ 5	
6	N－30°－E	2.3	22 ～ 30	47 ～ 60	1 ～ 3	
7	N－13～37°－E	(1.9)	15 ～ 18	46 ～ 53	2 ～ 5	やや屈曲する
8	N－16～28°－E	(4.2)	12 ～ 22	41 ～ 51	3 ～ 5	やや屈曲する
9	N－32°－E	(0.8)	15 ～ 18	44 ～ 47	3 ～ 5	
10	N－24°－E	(6.2)	7 ～ 24	37 ～ 48	3 ～ 6	
11	N－12°－E	(5.3)	16 ～ 32	46 ～ 60	2 ～ 5	
12	N－21°－E	(4.7)	12 ～ 30	38 ～ 60	1 ～ 4	
13	N－14°－E	(1.0)	17 ～ 24	47 ～ 56	2 ～ 3	
14	N－28°－E	(6.4)	15 ～ 36	45 ～ 71	4	
15	N－19°－E	(2.3)	25 ～ 37	52 ～ 63	1 ～ 4	
16	N－24°－E	(2.6)	20 ～ 26	43 ～ 57	1 ～ 4	
17	N－49°－E	(2.8)	38 ～ 42	50 ～ 62	1 ～ 3	
18	N－30°－E	(5.8)	13 ～ 65	34 ～ 75	2 ～ 5	
19	N－34°－E	(4.5)	20 ～ 36	41 ～ 61	1 ～ 3	
20	N－36°－E	(1.9)	19 ～ 43	45 ～ 66	1 ～ 3	
21	N－55°－W	(8.6)	10 ～ 80	25 ～ 85	1 ～ 3	ＳＤ28北側の土手
22	N－54°－W	(10.5)	18 ～ 32	30 ～ 52	2 ～ 6	ＳＤ28南側の土手
23	N－72°－W	(17.5)	9 ～ 25	33 ～ 58	1 ～ 7	屈曲する
24	N－70°－W	(18.2)	11 ～ 33	34 ～ 58	1 ～ 5	
25	N－70～79°－W	6.8	7 ～ 24	37 ～ 50	3 ～ 6	屈曲する
26	N－70°－W	(3.7)	10 ～ 18	43 ～ 48	1 ～ 5	
27	N－59～70°－W	(11.5)	12 ～ 31	44 ～ 70	1 ～ 7	やや屈曲する
28	N－56～67°－W	(7.8)	13 ～ 30	38 ～ 58	2 ～ 4	やや屈曲する
29	N－64°－W	(2.4)	11 ～ 30	46 ～ 60	2 ～ 5	
30	N－61°－W	(5.1)	22 ～ 40	34 ～ 62	1 ～ 5	
31	N－63°－W	(5.1)	23 ～ 38	52 ～ 60	1 ～ 4	やや屈曲する
32	N－57°－W	(5.1)	28 ～ 31	48 ～ 56	3 ～ 6	
33	N－59°－W	(5.1)	23 ～ 42	39 ～ 60	2 ～ 4	
34	N－58°－W	(5.0)	28 ～ 43	51 ～ 65	2 ～ 5	
35	N－59°－W	(3.3)	17 ～ 26	37 ～ 50	3 ～ 6	やや屈曲する
36	N－62°－W	(3.5)	28 ～ 57	58 ～ 73	2 ～ 5	やや屈曲する
37	N－62°－W	(11.8)	16 ～ 36	41 ～ 66	1 ～ 5	やや屈曲する
38	N－60°－W	(5.0)	14 ～ 26	35 ～ 48	2 ～ 4	
39	N－58°－W	(3.2)	56 ～ 92	118 ～ 146	11 ～ 14	ＳＤ27の北側土手
40	N－57°－W	(4.3)	140	160	2	ＳＤ27の南側土手、部分的に遺存

表15　VII ｂ層水田跡畦畔計測表

辺５ｍ以上で面積が15㎡以上と推定されるやや大きなめの区画などがある。概して言えば３区西部（大畦畔№１と畦畔№10の間）に小さな区画が多く、３区東部（畦畔№10の東側）には中ぐらいの規模の区画があり、５区ではやや大きめの区画が多い。

なお中区画については、Ⅶa1層水田跡ほど明瞭に基軸の畦畔と推定できるものはないが、№10・23・27・28のよ



第69図　Ⅶb層水田跡平面図（１）

うに他を分断する畦畔がⅦa1 層水田跡と似た配置で認められるので、同様な中区画が造られている可能性がある。

３．水田面の標高と傾斜

調査区の全体的な地形はⅦa1 層・Ⅶa2 層水田跡と同様で、北から南へ傾斜している中に５区の西側から調査区外にかけて南方から浅い谷が入り込んでおり、調査区はちょうどこの谷の北側から東側を巡るように位置していると考えられる。

水田面の標高は５区の西壁側が低く、最も低い箇所は区画㊵で4.86m、標高が高いのは３区西端部の区画㉔やＳＤ28の北側で、最も高い箇所は区画②で5.21m である。

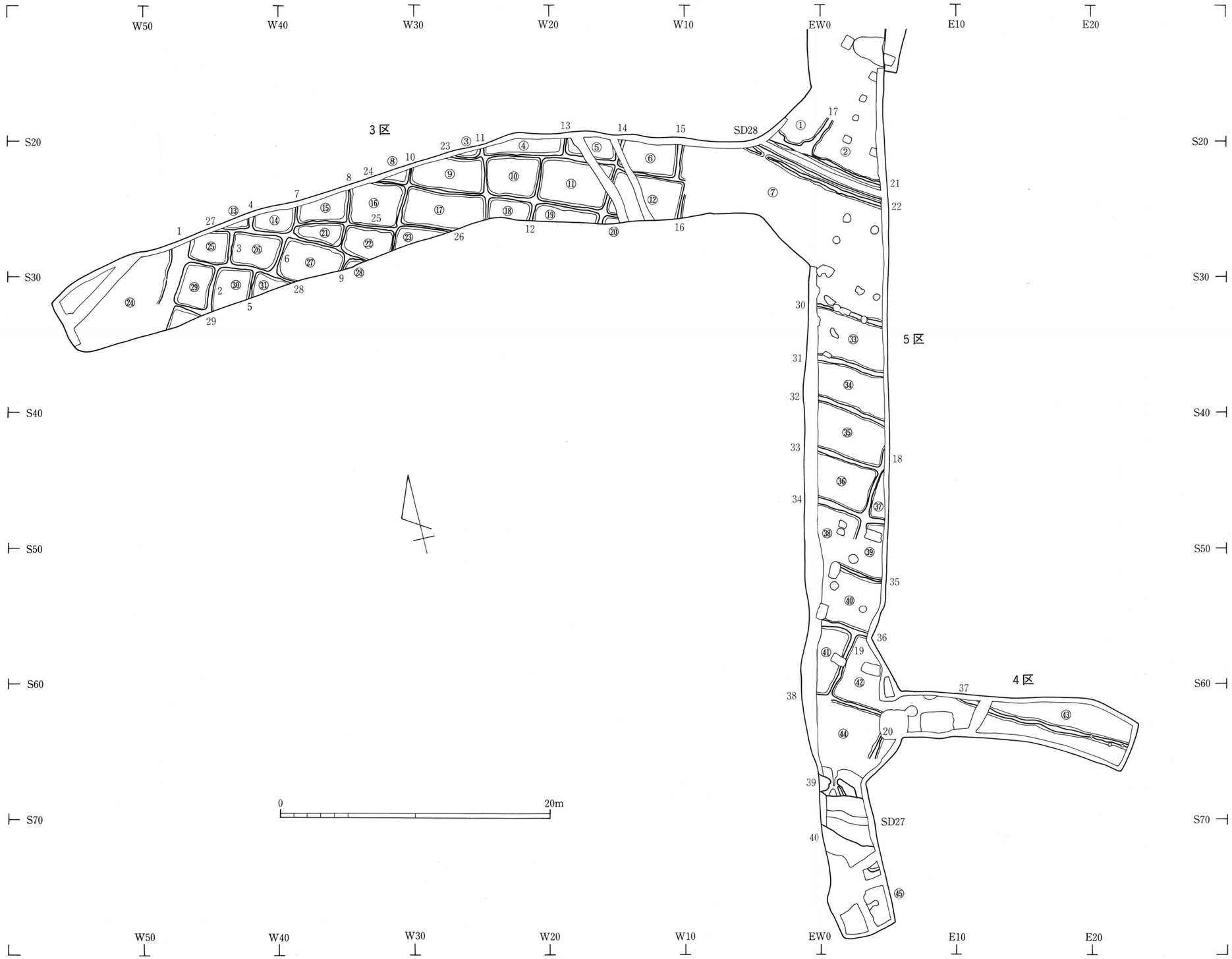
勾配は調査区全体を通しては測定できないが、部分的に見ると３区西部の水田区画㉕－㉚の北西～南東方向が20cm／10m、３区東部の⑥－⑫の南北方向が10cm／10m、ＳＤ28の南側で25cm／10m、５区の㊳－㊴の東西方向が12cm／10m である。３区西端部とＳＤ28の近くの傾斜が比較的きつく他の箇所はやや緩やかで、ほぼ上層の水田跡と同じ状況となっている。なお、小区画内の傾斜も全体的な傾斜とほぼ一致している。区画内の比高差は全体を検出できた区画では６cm以下で、その他の区画でも⑦・㉔・㊷・㊸が10cm以上あるがそれ以外はすべて７cm以下である。10cm以上ある４区画については他と比べて面積が広いので実際はさらに細分される可能性があることから、本来はすべて６～７cm以下である可能性が高い。

４．水口

明らかに畦畔を切る形態のものを水口とした。確認できたのは畦畔22（ＳＤ28の南側土手）に設けられた１ヵ所の

No.	標高(m)	比高差(m)	傾斜方向	東辺(m)	西辺(m)	南辺(m)	北辺(m)	面積(m²)	推定規模	備　考
1	5.13～5.19	(6)	北東→南西	(2.7)	?	(0.8)	?	?	?	
2	5.16～5.21	(5)	ほぼ水平	?	(2.8)	(5.2)	?	?	?	
3	5.03～5.05	(2)	?	(0.4)	?	(1.2)	?	(0.3)	?	部分的に検出
4	5.06～5.07	(1)	ほぼ水平	(1.0)	(0.4)	5.4	?	(4.8)	5.4 × ?	
5	5.07～5.10	(3)	ほぼ水平	(1.3)	(1.0)	3.3	?	(4.4)	3.3 × ?	
6	5.05～5.09	(4)	ほぼ水平	(2.2)	(1.8)	3.8	?	(8.2)	3.8 × ?	
7	5.00～5.14	(14)	北東→南西	?	(5.5)	(5.0)	(11.1)	(91.1)	?	分割される可能性あり
8	5.03～5.05	(2)	?	(0.9)	?	(1.6)	?	(0.8)	?	部分的に検出
9	5.02～5.05	(3)	ほぼ水平	2.3	(1.0)	5.3	(2.5)	(10.1)	2.3 × 5.1	
10	5.03～5.06	3	北東→南西	2.6	2.3	3.0	3.6	9.0	2.4 × 3.4	
11	5.02～5.08	6	北東→南西	3.0	2.7	4.5	4.9	14.3	3.0 × 4.7	
12	5.04～5.08	(4)	北 → 南	(2.7)	3.0	(0.7)	4.7	(14.4)	3.0 × 4.7	
13	5.08～5.10	(2)	?	(0.5)	?	(1.7)	?	(0.5)	?	部分的に検出
14	5.07～5.10	(3)	西 → 東	(1.6)	(0.9)	2.6	?	(3.8)	2.6 × ?	
15	5.03～5.09	(6)	北 → 南	(2.1)	(1.2)	3.2	?	(5.3)	3.2 × ?	
16	5.03～5.07	(4)	北西→南東	3.0	(2.3)	3.2	(2.4)	(10.1)	3.0 × 3.4	
17	5.01～5.04	(3)	ほぼ水平	(1.7)	2.5	(4.2)	5.4	(13.2)	2.4 × 5.7	
18	5.02～5.05	(3)	ほぼ水平	(1.1)	(1.3)	?	2.9	(3.6)	2.8 × ?	
19	5.01～5.03	(2)	ほぼ水平	(0.6)	(1.1)	?	4.3	(3.9)	4.3 × ?	
20	5.01～5.03	(2)	?	?	(0.4)	?	(0.9)	(0.4)	?	部分的に検出
21	5.03～5.05	2	西 → 東	1.4	0.5	2.8	3.1	3.1	1.0 × 3.1	三角形に近い
22	5.01～5.04	(3)	ほぼ水平	(1.4)	1.5	(2.1)	3.2	(6.0)	1.9 × 3.2	台形
23	5.02～5.04	(2)	?	?	(1.6)	?	(3.2)	(2.7)	?	
24	5.07～5.18	(11)	北西→南東	(4.2)	?	?	?	(26.8)	?	分割される可能性あり
25	5.08～5.13	(5)	北西→南東	2.1	(1.3)	2.5	(1.4)	(5.0)	2.1 × 2.5	
26	5.04～5.08	4	北西→南東	2.2	2.1	2.8	3.2	6.8	2.1 × 3.1	
27	5.02～5.06	(4)	北西→南東	(1.2)	2.4	(1.4)	4.0	(9.7)	2.6 × 4.1	
28	5.03	?	?	?	(0.5)	?	(0.9)	(0.3)	?	部分的に検出
29	5.03～5.09	6	北西→南東	3.0	2.8	2.0	1.8	5.7	1.9 × 2.9	
30	5.02～5.06	(4)	北西→南東	(2.1)	(3.1)	?	2.1	(6.3)	2.3 × ?	
31	5.01～5.03	(2)	?	?	(1.9)	?	(1.9)	(2.3)	?	
32	5.03～5.05	(2)	?	?	(1.5)	?	(2.0)	(1.7)	?	
33	4.91～4.98	(7)	北 → 南	?	?	(5.1)	(5.1)	(15.7)	3.0 × ?	
34	4.89～4.93	(4)	北東→南西	?	?	(5.1)	(5.0)	(13.0)	2.5 × ?	
35	4.90～4.93	(3)	東 → 西	(2.7)	?	(4.8)	(5.1)	(15.1)	2.9 × ?	
36	4.88～4.93	(5)	東 → 西	3.0	?	(3.4)	(4.6)	(12.2)	2.9 × ?	
37	4.92～4.95	(3)	?	?	(3.2)	(1.0)	?	(2.1)	3.2 × ?	部分的に検出
38	4.90～4.94	(4)	ほぼ水平	(1.4)	?	(0.5)	(3.3)	(9.2)	3.4 × ?	
39	4.94～4.95	(1)	ほぼ水平	?	(0.3)	(2.3)	(1.1)	(6.0)	3.6 × ?	
40	4.86～4.93	(7)	北東→南西	?	?	(3.4)	(3.2)	(15.3)	3.4 × ?	
41	4.89～4.93	(4)	ほぼ水平	4.4	?	(0.8)	(2.2)	(7.6)	4.6 × ?	
42	4.91～5.03	(12)	東 → 西	?	(6.1)	(3.9)	(13.8)	(41.0)	?	分割される可能性あり
43	4.97～5.07	(10)	中央が高い	?	?	(10.5)	?	(15.1)	?	分割される可能性あり
44	4.91～4.95	(4)	北 → 南	(2.2)	?	?	(3.7)	(20.0)	4.5 × ?	
45	4.99～5.03	(4)	?	?	?	?	(4.2)	(11.0)	?	部分的に検出

表16　Ⅶｂ層水田跡水田区画計測表　　（　　）は現存値



第70図　Ⅶb層水田跡平面図（２）

みで、畦畔が約35cmにわたって途切れていた。ＳＤ28から南側の水田面への給水用と考えられる。

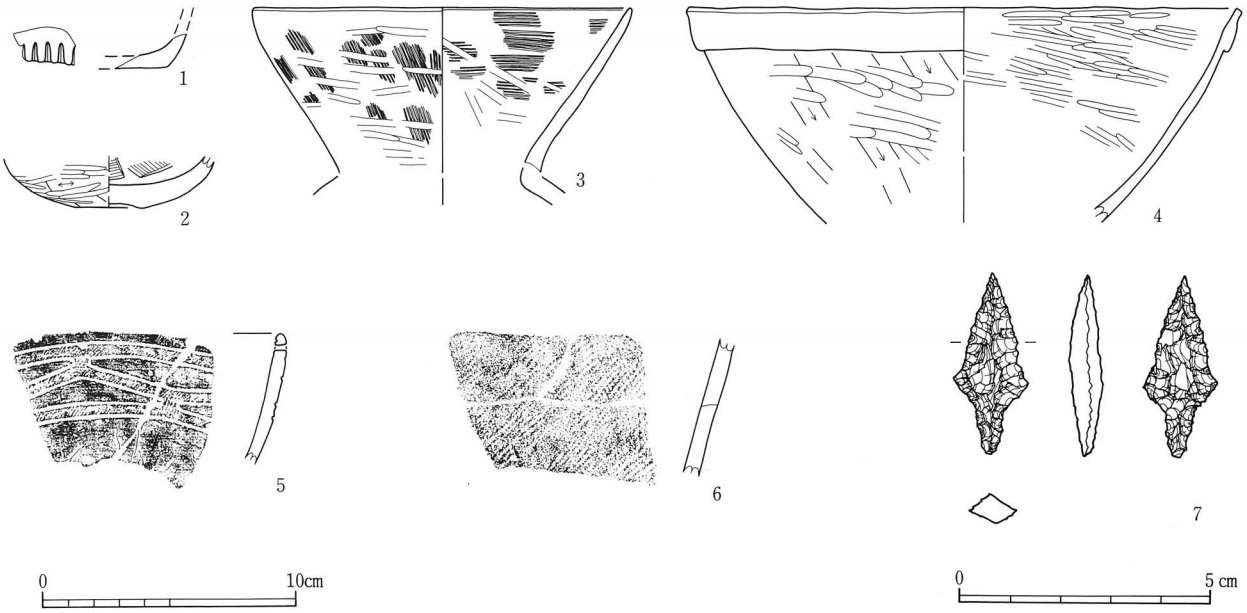
５．溝跡

当水田跡に伴う溝跡はＳＤ27･28の２条で、Ⅶa1 層水田跡まで踏襲される基幹水路である。形態や規模はほぼⅦa1 層水田跡の項で述べた通りであるが、溝の土手は各水田段階ごとに積み上げられているので土手上面から溝底面までの深さはⅦa1 層水田跡段階よりもやや浅く、ＳＤ27が約80cm、ＳＤ28が約60cmである。

Ⅲ．出土遺物

耕作土中からは弥生土器片２点、土師器片49点が出土した。遺物の大部分はⅠ層直下にすぐⅦｂ層が露出する５区北部から２区にかけて、Ⅰ層の攪拌を受けたⅦｂ層上面から出土したもので、確実にⅦｂ層中から出土した遺物はごくわずかである。なお、Ⅶｂ層中から出土した数少ない遺物の中でも時期差があり、水田跡に伴う遺物を確定することはできなかった。

図化できたのは土師器４点、弥生土器２点、石鏃１点（第71図）である。１は複合口縁壺の口縁部下部と推定されるもので、縦位の刻みがあり、赤彩が施されている。２は小型の壺、３は直口縁の壺、４は甑と推定される。１は磨滅していて調整技法はよく判らないが、２～４はハケメあるいはヘラケズリの後粗いヘラミガキが施されている。５・６は弥生土器で、６は縄文のみであるが５の鉢は沈線で文様帯が区画され、連弧文が施されている。器形・調整技法の特徴から見て１～４は塩釜式、５は枡形囲式と考えられる。



No.	写真図版	出土層位	種　別	器種	遺存度	法　量(cm) 口　径	底　径	器　高	外面色調 内面色調	胎　土	焼成	外　面　調　整　・　特　徴 内　面　調　整　・　特　徴
1	169－1	２区 Ⅶｂ層上	土師器	壺	口縁部 小片	?	?	?	にぶい褐色 黄灰色	やや不良 白針少量	良好	磨滅、一部ヘラナデ、（赤彩） 磨滅、（赤彩）　複合口縁壺と推定
2	169－2	３区 Ⅶｂ層	土師器	小形 壺	体部～ 底部	?	2.8	?	赤褐色 明赤褐色	良好 白針少量	良好	ヘラケズリ→ヘラミガキ ヘラナデ
3	169－4	２区 Ⅶｂ層上	土師器	壺	口縁部 3/5	(15.0)	?	?	赤褐色 赤褐色	良好 白針少量	やや 軟質	ハケメ→粗いヘラミガキ、（赤彩） ハケメ→粗いヘラミガキ、（赤彩）
4	169－3	２区 Ⅶｂ層上	土師器	甑	1/4	(22.0)	?	?	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	良好 白針少量	良好	口縁ヨコナデ、体部ヘラケズリ→粗いヘラミガキ ヘラミガキ
5	169－5	５区 Ⅶｂ層	弥生 土器	鉢	1/6	?	?	?	灰黄褐色 灰黄褐色	良好 白針少量	良好	(外) 連弧文（１列構成のＵ字波形文)、文様帯内部に縄文ＬＲ、外部ヘラミガキ、穿孔１ヵ所 (内) 口唇部に沈線１条、ヘラミガキ
6	169－6	３区 Ⅶｂ層	弥生 土器	甕	体部 小片	?	?	?	灰黄褐色 にぶい橙色	良好 白針少量	良好	(外) 縄文ＬＲ (内) ナデ

No.	写真図版	出土層位	種　別	遺存度	長　さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
7	169－７	Ⅶｂ層	石器・石鏃	完形	3.5	幅 1.4	0.6		

第71図　Ⅶｂ層水田跡出土遺物

なお、ＳＤ27からの出土遺物について、VIIｂ層水田跡に伴う遺物が混在している可能性があることは前述した通りである。

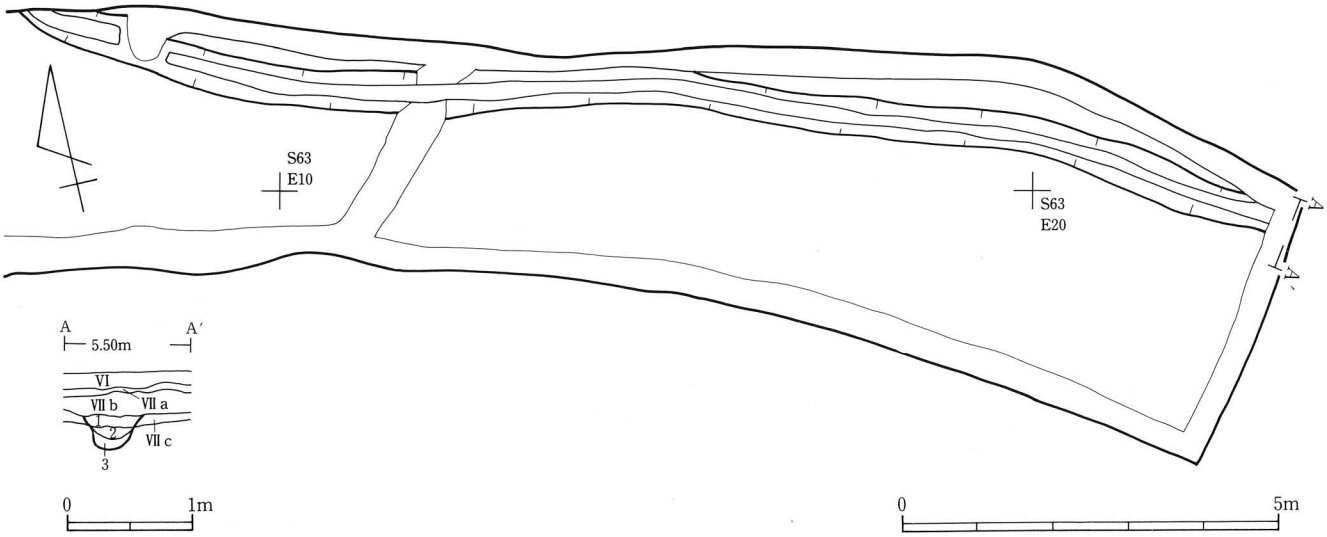
Ⅳ．耕作土下面の状況

VIIｂ層水田跡の調査終了後、耕作土VIIｂ層を除去してその下面（VIIｃ層上面）を精査した。ほとんど人為的な掘り込みは確認できなかったが、４区から５区南部にかけて東西にのびる溝跡を１条確認した。遺構のプランはVIIｃ層上面では不明瞭であったため実際にはVIII層上面で確認している。調査区の断面観察ではVIIｃ層上面から落ち込んでいることを確認したが、VIIｂ層上面から掘り込まれた後に耕作されている可能性も考えられる。

幅は約50cm、深さ約25cmで、途中で一部が調査区外となるが４区東端から５区西壁まで約25mの長さを確認している（第72図は４区のみ示した）。堆積土はVIIｂ層に似た黒褐色粘土で自然堆積層と推定される。

性格は明確ではないが、位置はVIIｂ層水田跡の畦畔37の北側で畦畔とほぼ平行していることと、堆積土が水田耕作土と類似していることからVIIｂ層水田の開田直前の時期か、あるいは同水田の経営期間中に掘られたものと推定される。

耕作土除去作業



層位	色　調	土　質	混入物・その他
1	2．5Y3/1 黒褐色	粘土	
2	10YR2/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土粒少量
3	10YR2/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック少量

第72図　SD29 平面・断面図

第３章　プラント・オパール分析

仙台市、後河原遺跡のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO ２）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

後河原遺跡の発掘調査では、３層準において水田跡が検出された。そこで、これらの遺構における稲作の検証およびその他の層における稲作の可能性について検討する目的でプラント・オパール分析を行うことになった。

２．試料

調査の対象となった層準は、上位よりⅥａ層（黄褐色砂質シルト）、Ⅵｂ層（灰黄褐色シルト質粘土）、Ⅵｃ層（暗褐色細砂）、Ⅶa1 層（暗褐色粘土、水田跡検出）、Ⅶa2 層（黒褐色粘土、水田跡検出）、Ⅶｂ層（黒色粘土、水田跡検出）、Ⅶｃ層（黒褐色粘土）、Ⅷ層（黄褐色粘土）、Ⅸ層（黒褐色粘土）である。試料採取地点は、Ａ地点（Ⅱ区東壁）、Ｂ地点（Ⅴ区東壁）、Ｃ地点（Ⅲ区西壁）、Ｄ地点（Ⅳ区北壁）、Ｅ地点（Ⅴ区東壁南端）およびＦ地点（Ⅴ区東壁）の６地点である。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

１）試料土の絶乾（105℃・24時間）

２）試料土約1g を秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02g）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

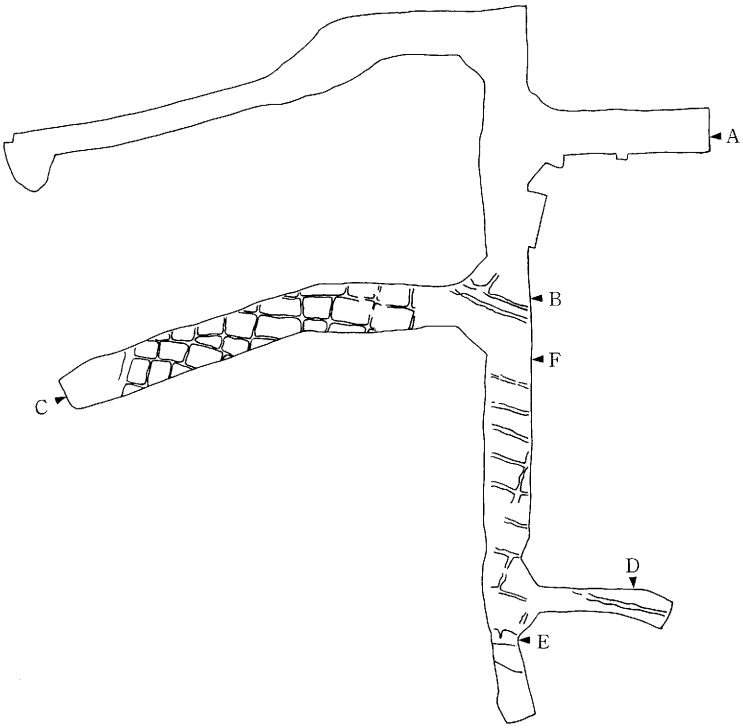
４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μm 以下）除去、乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。



第73図　プラント・オパール試料採取地点
本図は編集者が追加した
（S＝1/1000、図面はⅦｂ層水田跡）

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g) を乗じて、単位面積で層厚１ cm あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である（杉山・藤原，1987)。

４．分析結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族（ヒエ属型)、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型)、シバ属、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および不明（未分類）である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表17、表18、第74～79図に示した。なお、おもな分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

５．考察

（１）稲作の可能性について

水田跡の調査（探査あるいは検証）を行う場合、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合、稲作跡である可能性が高いと判断される。ただし、仙台平野ではこれまでの調査事例から判断基準値を3,000個/g としている。また、該当層においてプラント・オパール密度にピークが認められれば、上層からの混入の危険性は考えにくいことから、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことを基準として稲作の可能性について検討を行う。

１）Ⅶa1 層

Ⅶa1 層はＦ地点において分析を行った。ここではイネのプラント・オパールが3,200個/g の高い密度で検出された。したがって、当該層において稲作が行われていた可能性が考えられる。

２）Ⅶa2 層

表17　仙台市、後河原遺跡のプラント・オパール分析結果（１）

検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試　料	A地点		B地点			C地点					D地点			
	Ⅶb	Ⅶc	Ⅶa2	Ⅶb	Ⅶc	Ⅶa2	Ⅶb	Ⅶc	Ⅷ	Ⅸ	Ⅶa2	Ⅶb	Ⅷ	Ⅸ
イネ科														
イ　ネ	29		50	52		35	35				65	7		
キビ族（ヒエ属型）	15			6		14	7					20		
ヨシ属	44	20	29	13	14	42	43	44	7	7	58	27	34	6
ウシクサ属（ススキ属型）	15	7	29	13	7	21	35				7	20	7	
シバ属	7													
タケ亜科														
ネザサ節型	22	20	14	32	14	28	7	7		28	15	20	7	6
クマザサ属型	15				7		7	15	7	14	7	13	34	13
その他	22	20	57	19	14	7	7	15	29	7	44	7	7	25
未分類等	334	128	157	123	142	111	234	183	117	69	269	106	115	101
プラント・オパール総数	501	196	336	258	199	256	376	264	161	125	465	219	203	152

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²･cm）

イ　ネ	0.85		1.47	1.52		1.02	1.04				1.92	0.19		
キビ族（ヒエ属型）	1.22			0.54		1.16	0.60					1.67		
ヨシ属	2.75	1.28	1.80	0.82	0.89	2.62	2.68	2.77	0.46	0.44	3.67	1.67	2.13	0.40
ウシクサ族（ススキ属型）	0.18	0.08	0.35	0.16	0.09	0.26	0.44				0.09	0.25	0.08	
ネザサ節型	0.10	0.10	0.07	0.16	0.07	0.13	0.03	0.04		0.13	0.07	0.10	0.03	0.03
クマザサ属型	0.11				0.05		0.05	0.11	0.05	0.10	0.05	0.10	0.25	0.09

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

Ⅶa2 層はＢ地点、Ｃ地点、Ｄ地点、Ｅ地点およびＦ地点において分析を行った。イネのプラント・オパールはこれらすべての地点において検出された。プラント・オパール密度はＥ地点以外はいずれも3,000個/g 以上の高い値である。また、Ｅ地点でも1,900個/g と比較的高い値である。したがって、Ⅶa2 層は調査区の全域が水田であったと考えられる。

３）Ⅶｂ層

Ⅶｂ層はＡ～Ｆの全地点について分析を行った。イネのプラント・オパールはすべての地点で検出された。プラント・オパール密度はＤ地点で700個/g である他はおよそ3,000個/g 以上と高い値である。このことから、Ⅶｂ層についても調査区のほぼ全域が水田であったと考えられる。ただし、Ｄ地点については耕作域ではなかった可能性も考えられる。

４）その他の層（Ⅵａ，Ⅵｂ，Ⅵｃ，Ⅶｃ層，Ⅷ層，Ⅸ層）

その他の層でイネのプラント・オパールが検出されたのは、Ｆ地点のⅦｃ層のみである。ただし、プラント・オパール密度は600個/g と低い値である。直上のⅦｂ層が10,000個/g 以上の高密度であることから、ここで検出されたプラント・オパールは上層からの混入である可能性が高い。したがって、上記以外の層については稲作が行われた痕跡は認められない。

（２）稲作以外の農耕について

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型（モロコシが含まれる）などがある。本遺跡では、ヒエ属型がＣ地点とＥ地点のⅦa2 層、Ａ～Ｅ地点のⅦｂ層よりそれぞれ検出されている。ヒエ属には栽培種のヒエと野生種のイヌビエがあるが、現時点では両者のプラント・オパールを識別するには至っていない（杉山ほか，1988）。したがって、両層においてヒエが栽培されていた可能性が考えられるが、あるいは雑草のイヌビエ（タイヌ

表18　仙台市、後河原遺跡のプラント・オパール分析結果（２）

検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試　料	Ｅ地点				Ｆ地点							
	Ⅶa2	Ⅶｂ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅵａ	Ⅵｂ	Ⅵｃ	Ⅶa1	Ⅶa2	Ⅶｂ	Ⅶｃ	Ⅷ
イネ科												
イ　ネ	19	34						32	76	118	6	
キビ族（ヒエ属型）	6	6										
ヨシ属	13	17	13	6		22	6	6	58	94	73	12
ウシクサ属（ススキ属型）	6	11			6	6	13	26	18	18	12	12
シバ属												
タケ亜科												
ネザサ節型	25	6	6	6	70	123	32	52	82	41	61	70
クマザサ属型	6	11	6	6	29	34	6	19	47	47	6	12
その他	6	11	6	26	23	28	6	19	18	12	12	6
未分類等	95	201	84	97	105	190	149	155	210	335	519	205
プラント・オパール総数	177	296	116	142	233	403	213	310	508	664	689	316

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イ　ネ	0.56	0.99						0.95	2.23	3.46	0.18	
キビ族（ヒエ属型）	0.53	0.47										
ヨシ属	0.80	1.06	0.82	0.41		1.41	0.41	0.41	3.68	5.93	4.62	0.74
ウシクサ族（ススキ属型）	0.08	0.14			0.07	0.07	0.16	0.32	0.22	0.22	0.15	0.15
ネザサ節型	0.12	0.03	0.03	0.03	0.34	0.59	0.16	0.25	0.39	0.20	0.29	0.34
クマザサ属型	0.05	0.08	0.05	0.05	0.22	0.25	0.05	0.15	0.35	0.35	0.05	0.09

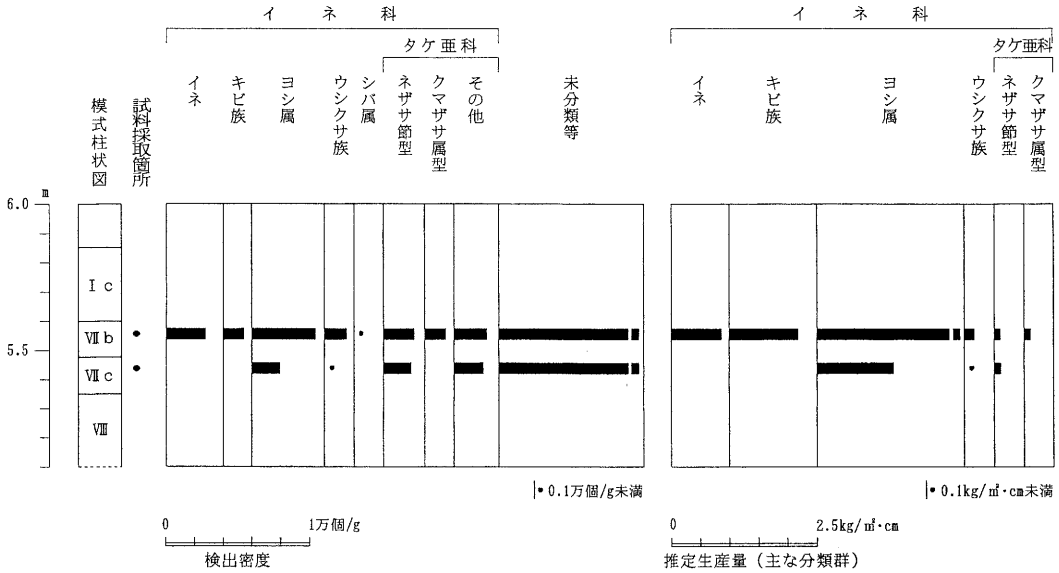
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

ビエ）である可能性も否定できない。

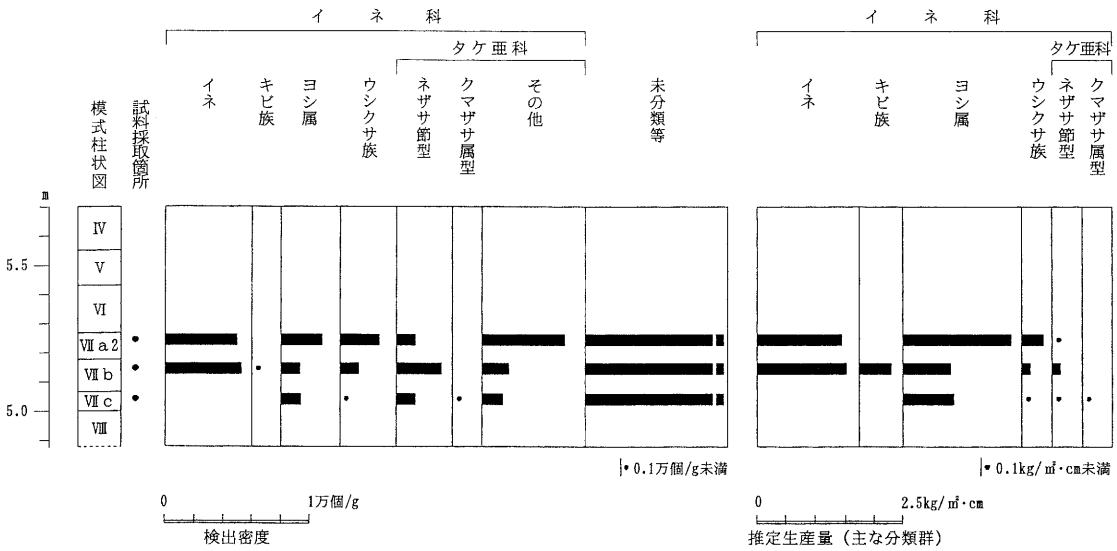
イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。また、プラント・オパール分析で同定が可能なものは、イネ科の草本植物が主であることから、マメ類，イモ類，野菜類などは分析の対象から除かれている。

6．まとめ

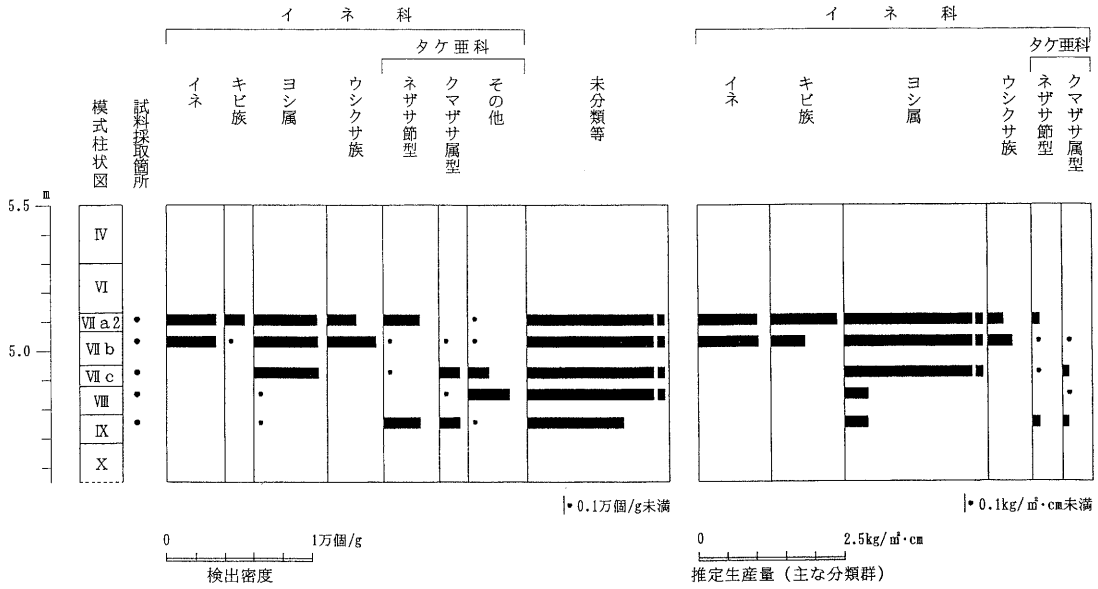
後河原遺跡においてプラント・オパール分析を行い、検出された水田層における稲作の確認およびその他の層における稲作跡の探査を試みた。その結果、耕作層であるⅦa1層、Ⅶa2層およびⅦb層においてイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらの層において稲作が行われていたことが分析的に確認された。これら以外の層では稲作が行われた可能性は認められなかった。



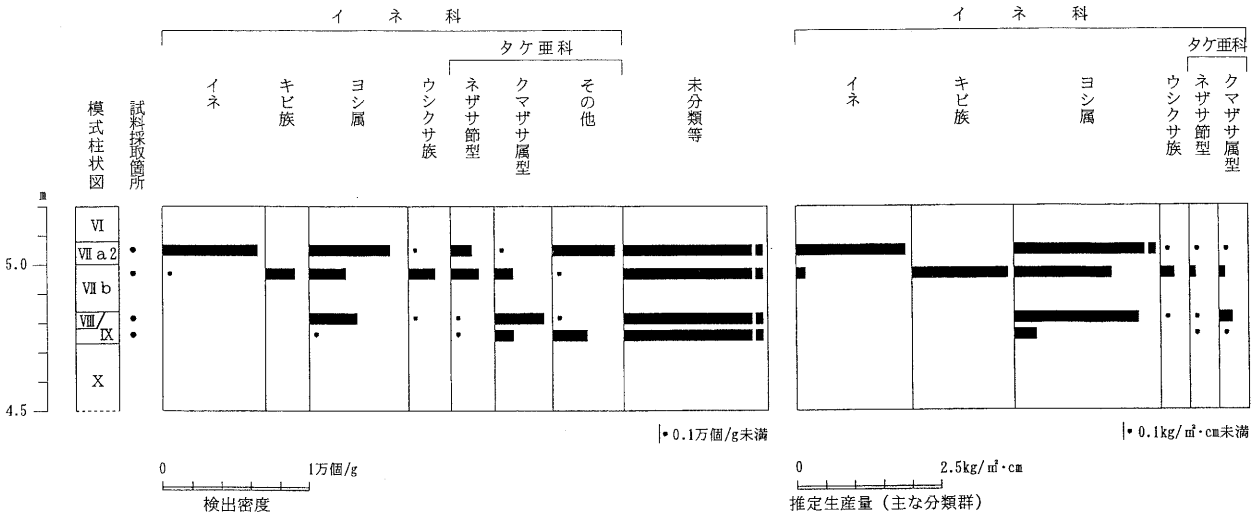
第74図　A地点のプラント・オパール分析結果　※主な分類群について表示。



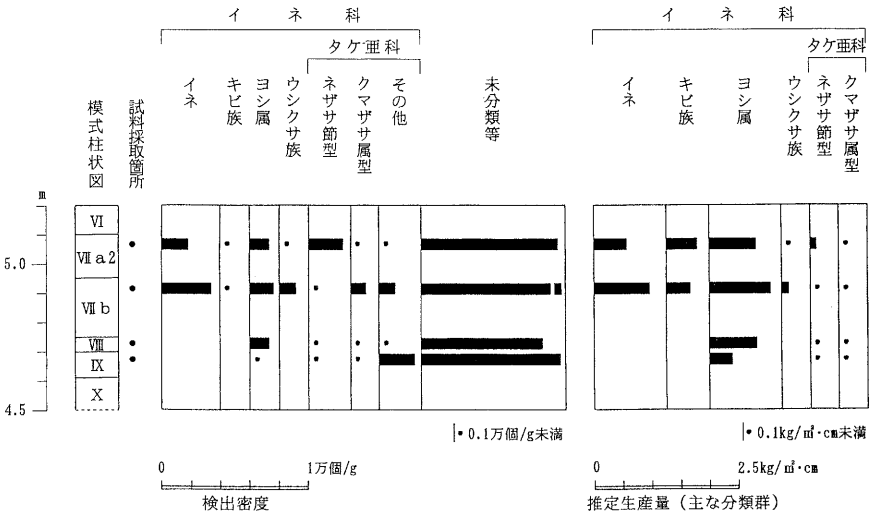
第75図　B地点のプラント・オパール分析結果　※主な分類群について表示。



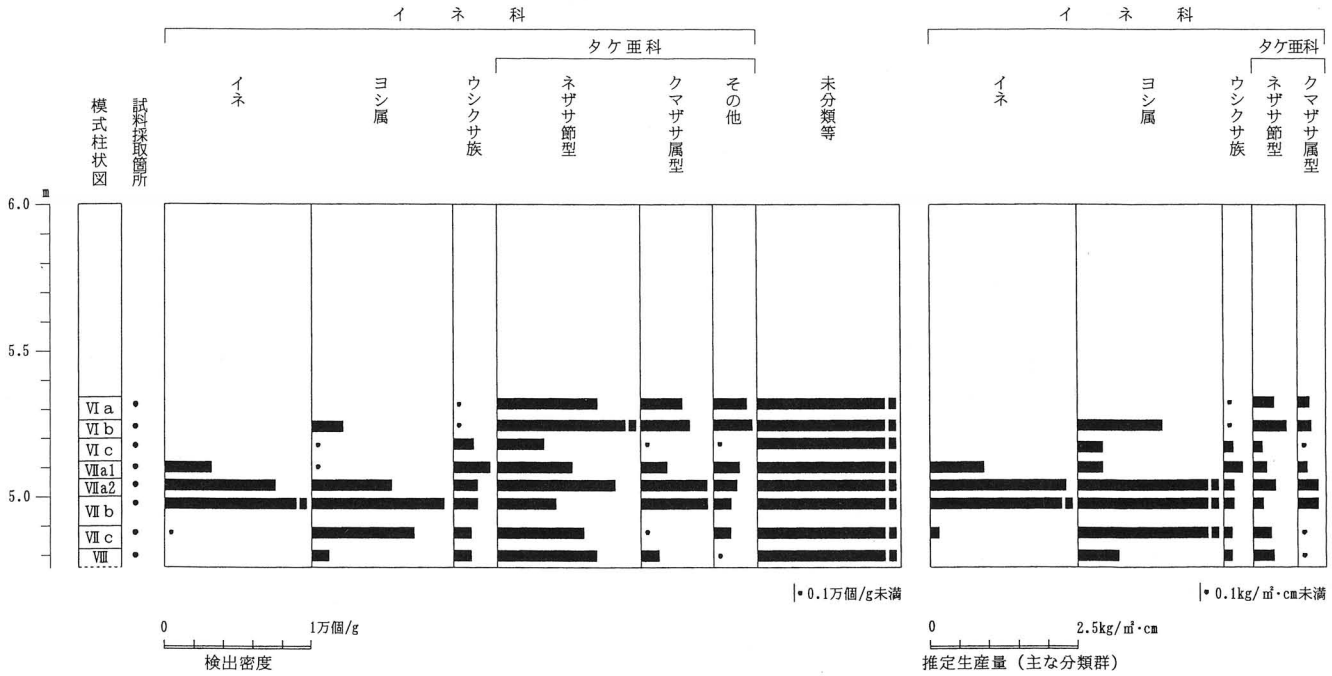
第76図　Ｃ地点のプラント・オパール分析結果　※主な分類群について表示。



第77図　Ｄ地点のプラント・オパール分析結果　※主な分類群について表示。



第78図　Ｅ地点のプラント・オパール分析結果　※主な分類群について表示。



第79図　F地点のプラント・オパール分析結果　※主な分類群について表示。

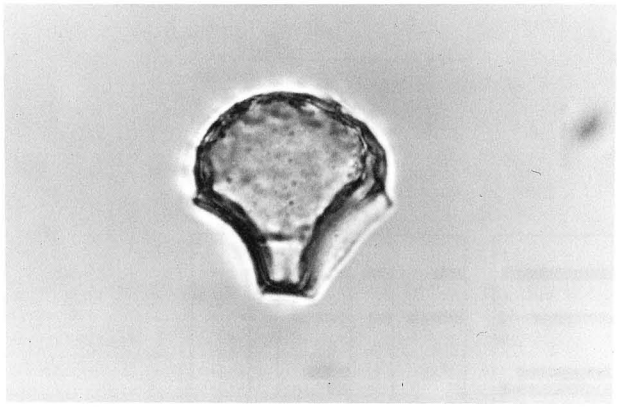
参考文献

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追求のための基礎資料として－，考古学と自然科学，20：81-92.

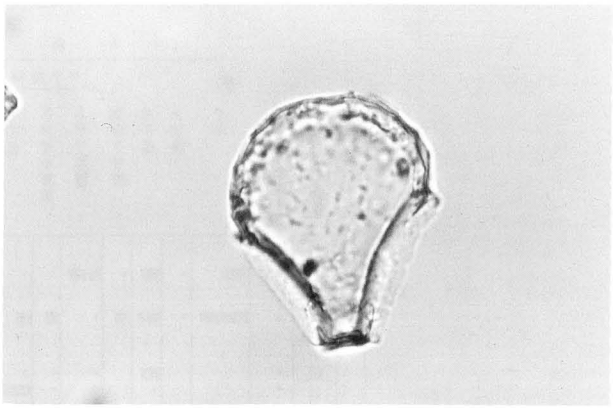
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－，考古学と自然科学，9：15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－，考古学と自然科学，12：29-41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－，考古学と自然科学，17：73-85.

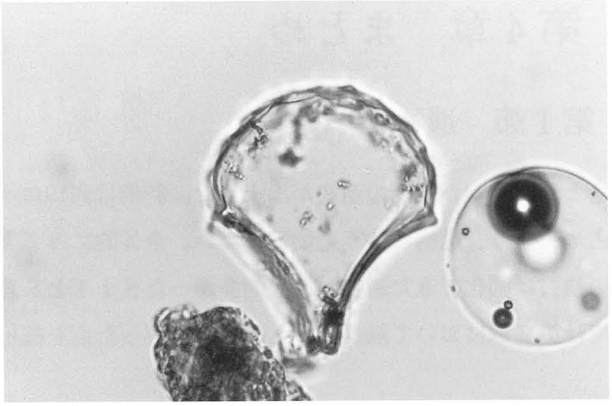


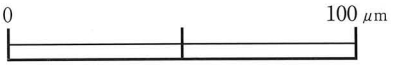
イネ（B地点Ⅶa2層）



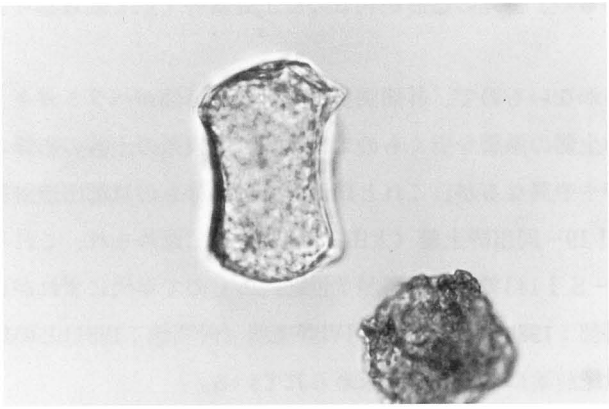
イネ（F地点Ⅶa1層）

0　100 μm

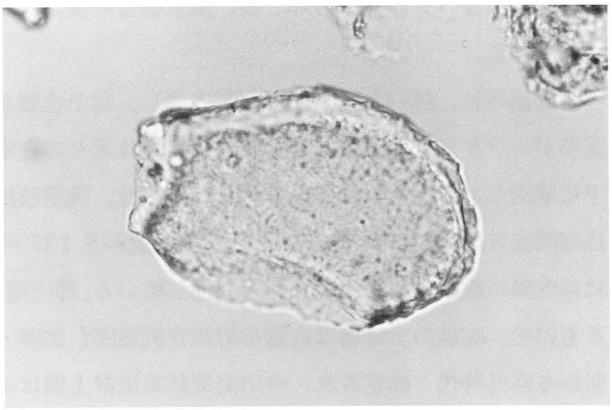




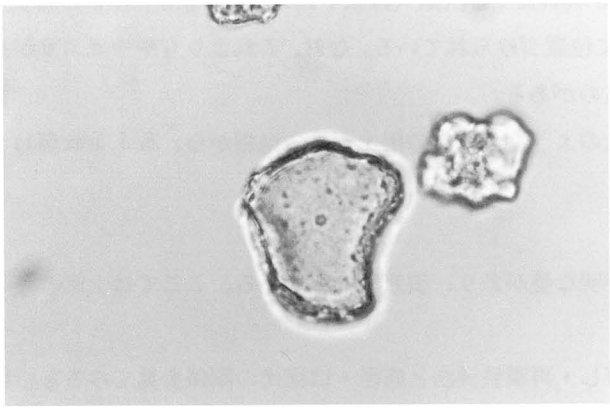
イネ（F地点　Ⅶb層）



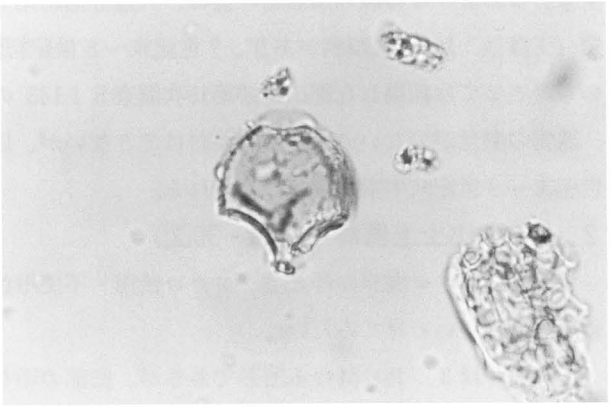
キビ族（ヒエ属型、A地点　Ⅶb層）



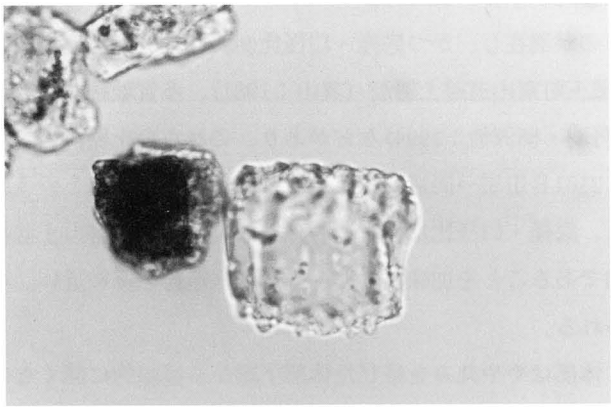
ヨシ属（F地点　Ⅶb層）



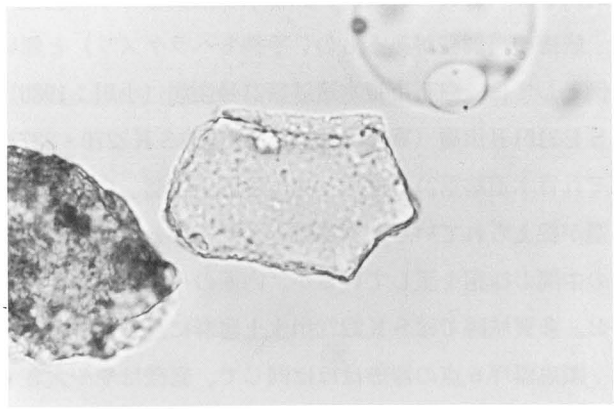
ウシクサ族（ススキ属、C地点　Ⅶb層）



シバ属（A地点　Ⅶb層）



タケ亜科（ネザサ節型、F地点　Ⅶc層）



タケ亜科（クマザサ属型、F地点　Ⅶb層）

第４章　まとめ

第１節　遺物について

今回の調査では、土師器・須恵器を中心として約 4,800点の遺物が出土した。詳細は表19に示したが、基本層・その他から出土した遺物が全体の73％を占めており、遺構に伴う遺物は少ない。全体的にみて復元・図示できた遺物の数量も限られるため、遺物についての検討は図化できた遺物が比較的多かったＳＩ１とＳＫ１についてのみ行うこととし、他の遺構の出土遺物については第２章において触れることのできなかった点を補足する程度に留めておきたい。

１．SI １出土土器群（第53図）

土師器は非ロクロ調整の坏と甕、須恵器は坏蓋と坏があるが、全体の器形が判るのは土師器坏１点と須恵器坏蓋１点である。

土師器坏は、浅い丸底で口縁部が内湾し、段や沈線がつかないもので、外面調整は口縁部～体部がヘラミガキ、底部がヘラケズリである。このタイプの坏は元々の在地の土器の系譜を引くものではなく、関東系の土器の影響の下に成立したと考えられている(太田：1994)。調整技法がやや異なるが、これと類似した器形のものは郡山遺跡第15次調査ＳＩ143(木村他：1982)や中田南遺跡ＳＩ17・ＳＩ19－同Ⅲ群土器（太田：1994)などで認められ、これらには内外に段の付く在地の土器が共伴している。郡山遺跡－ＳＩ143では須恵器が７世紀代のもので年代にずれがあるものの、在地の土師器は高清水町観音沢遺跡(加藤・阿部：1980)や清水遺跡第Ⅵ群土器（丹羽他：1981)との類似から奈良時代と推定され、中田南遺跡第Ⅲ群土器は８世紀前葉にその中心が求められている。

須恵器坏蓋は偏平な宝珠様のツマミと極めて低いカエリが特徴で、これは陶邑編年では第Ⅲ形式第３段階に相当する。このような特徴の須恵器坏蓋は、大蓮寺窯跡第２・３次調査１号灰原（篠原：1993)や福島市小倉寺高畑２号窯（工藤他：1969)に類例があり、７世紀末～８世紀初頭に位置づけられている。なお、これよりもややカエリが高いものとしては前掲した郡山遺跡第15次調査ＳＩ143 のものがある。

遺物の数量が少ないので細かな検討はできないが、以上のような点と他の出土遺物の様相から、ＳＩ１は概ね７世紀末～８世紀前半頃に位置づけられる。

２．SK １出土土器群（第29・30図）

土師器はロクロ調整の坏と甕、ロクロ使用・不使用が不明な甕があり、須恵器は坏がある。ここでは土師器坏と須恵器坏について見てみたい。

土師器坏は３点共に異なる器形であるが、底部の切り離し・再調整技法と底径・口径比の関係を見てみると、切り離し法は不明で底部あるいは底部～体部下端に手持ちヘラケズリ調整される第29図７と 9が底径・口径比が比較的大きく（0.47と0.50）、回転糸切無調整の８は底径・口径比が小さい(0.37)。

底部の再調整があるもの(手持ちヘラケズリ）と無いものが混在し、かつ底径・口径比が0.37～0.50程度である例としては、白石市青木遺跡第21号住居（小川：1980)、蔵王町東山遺跡土器溜（真山：1981)、多賀城跡60次調査ＳＥ2101ＢⅢ層（真山：1991)、同遺跡ＳＫ2270・2272（丹羽・柳沢他：1994)などがあり、これらの土器群はそれぞれ青木遺跡第21号住居→東山遺跡土器溜、多賀城跡ＳＥ2101ＢⅢ層→同遺跡ＳＫ2272→同遺跡ＳＫ2270という変遷が捉えられている。本遺跡の土師器坏と比較してみると、底径・口径比は青木遺跡の土器群と東山遺跡の土器群の中間の様相を呈しているが、内面のヘラミガキが横方向であることを加味すると、やや青木遺跡の例に近い。なお、多賀城跡ではＳＫ2272出土土器群に最も近いと考えられる。

須恵器坏６点の器形はほぼ同じで、底径はやや大きく、体部はやや丸みを帯びた体部下端から直線的に開くもの

である。底部の切り離し・再調整技法と底径・口径比の関係をみると、切り離し後（切り離し法は不明）底部全面あるいは底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施される１・２が底径・口径比0.57と0.58で、回転糸切り無調整の３～６は0.51～0.57で平均値は0.54とやや小さい。

同様の特徴を持つものは、前掲した多賀城跡ＳＫ2272に類例がある。多賀城跡ＳＫ2272の須恵器坏は底径が比較的大きく（底径・口径比0.48～0.68）体部が直線的な器形が多い点は当遺跡のものと類似している。ただし底部の切り離しと再調整技法の比率がやや異なっており、当遺跡では回転糸切り無調整のものが主体となっているのに対

遺構 層位	弥生土器	土師器	須恵器	陶器	磁器	瓦	土製品	石製品	石器	金属製品	その他
ＳＩ　１		３８	１６								焼けた粘土塊１
ＳＩ　２		３８	１２				土錘　１				
ＳＢ　１		１０５	４０				土錘　１				焼けた粘土塊２
ＳＢ　２		２	２								
ＳＢ　３		１８	３								
ＳＢ　４		４７	１２								
ＳＢ　５		１３５	３６				土錘　１			鉄釘　１	
ＳＤ　１		４	３								現代の磁器製品３
ＳＤ　５		４	２								
ＳＤ　７		２									
ＳＤ　８		１									
ＳＤ　９		７						砥石　１			
ＳＤ１０		４									
ＳＤ１１		７	８								
ＳＤ１２		１									
ＳＤ１３		１２	３								
ＳＤ１４				常滑　１							
ＳＤ１６		７７	３５								焼けた粘土塊２
ＳＤ１７		３７	１８								
ＳＤ１８		１３	６								
ＳＤ１９		６３	１７							鉄釘　１	
ＳＤ２１		６	５								
ＳＤ２３		１０	２								
ＳＤ２４		１０	５								
ＳＤ２７		４４									
ＳＫ　１		１０２	５１				土錘　１			刀子　１	
ＳＫ　２		２６	２								
ＳＫ　３		３３	１								
ＳＫ　４		１９									焼けた粘土塊１
ＳＫ　５		２３	２								
ＳＫ　６		２３				１				鉄釘　１	
ＳＫ　９		１									
ＳＫ１０			１								
Ｐ　１		３	１								
Ｐ　５		１	１								焼けた粘土塊１
Ｐ　６		１									
Ｐ　７			１								
Ｐ　８			１								
Ｐ３３		３									
Ｐ３５		７	１								
Ｐ４３		１									
Ｐ４６		１									
Ｐ６０		１７	１３								
Ｐ６１		８	２								
Ｐ８３		１									
Ｐ８６		１									
Ｐ９９		１									
Ｐ１００		８									
Ｐ１０１		２									
Ｐ１０２		８	１								
Ｐ１０８		２									
Ｐ１１１		６									
Ｐ１１３			１								
Ｐ１２２		１									
Ｐ１２４			１								
Ⅰ　層	３	１０５１	２０８	４	６	１	土錘　１			１	
Ⅱ　層	１	６８９	２１８	１０	３		土錘　２				
Ⅲ　層		１９５	７２								
Ⅳ　層		２７９	８１							鉄釘　４	
Ⅴ　層		５６	２１								
Ⅵ　層		２２	１１								
Ⅶａ１層		２									
Ⅶａ２層		１５									
Ⅶｂ　層	２	４９							石鏃　１		
層不明		３７３	９４	２			土錘　４				鉄滓２
計	６	３７１４	１０１０	１７	９	２	１１	１	１	９	現代磁器３、焼けた粘土塊７、鉄滓２

表19　遺物集計表

して、ＳＫ2272の場合はヘラ切り無調整のものが多い（註１）。

以上のようなことからＳＫ１出土の土器群の編年的位置を考えてみる。全体的な様相は多賀城跡ＳＫ2272出土土器に類似していることから、ＳＫ１は多賀城跡ＳＫ2272とほぼ同時期であると推定されるが、ＳＫ１の須恵器坏には回転糸切り無調整のものが多いことからＳＫ2272よりも新しい要素も持っているとも言え、このことからすると、ＳＫ１出土の土器群の方がやや新しい時期の所産である可能性もある。ただし、多賀城跡でＳＫ2272に後続する時期とされるＳＫ2270出土土器群と比べると、ＳＫ2270の方が若干新しい様相を示す（註２）ことから、ＳＫ１の土器群は多賀城跡ＳＫ2270の時期までは下らないと考えられる。したがって、ＳＫ１の年代は多賀城跡ＳＫ2272と同じく９世紀第３四半期を中心とする頃と推定される（註３）。

３．その他の出土土器

他の遺構は出土遺物が少なく、図化できた土器があるのはＳＩ２、ＳＢ５、ＳＤ11・13・19・27、Ｐ５・60、ＳＫ５・10、基本層Ｉ・VIIｂ層のみである。

（１）ＳＩ２出土土器（第10図）

土師器坏は椀状のもので、このような器形の坏はＳＫ１出土の体部が逆台形をした坏（第29図７）よりも後出のタイプであることが明らかにされている（註4）。他に図化できた遺物が回転糸切り無調整の須恵器坏１点のみであるので断定はできないが、これらは大体９世紀後半～10世紀前半頃を中心とする時期の所産と考えられよう。

（２）ＳＢ５、ＳＤ11・13・19、Ｐ５・60、ＳＫ５・10、基本層Ｉ層出土土器

これらの遺物についてはすべて平安時代の所産で、その中でも坏類に関しては平安時代前半を中心とする時期のものと考えられる。

（３）ＳＤ27出土土器（第64図）

ＳＤ27出土遺物はすべてが非ロクロ調整の甕のみである。器面の調整技法を見ると、ハケメ、ハケメ後ヘラミガキ、ヘラケズリ後ヘラミガキなどのものがあり、塩釜式～南小泉式期の所産であると考えられるが、全体形が判るものがないのでこれ以上の時期の限定はできない。

（４）基本層VIIｂ層出土土器（第71図）

VIIｂ層上面からは土師器（１～４）、層中からは弥生土器（５・６）と石鏃（７）が出土している。土師器は古墳時代前期の塩釜式に比定されるものである。器種が少なく全体形が判るものがないため詳細な時期区分はできないが、口縁部下端に刻みがほどこされる２段口縁の壺（註5）があることから塩釜式の中でも古い段階のものも含まれている可能性がある。弥生土器のうち時期が限定できるのは（５）のみで、文様構成の特徴から中期の桝形囲式に比定される。

VIIｂ層中から出土した弥生土器や石器については、VIIｂ層水田跡に伴う可能性はあるが、周辺からの混入やVIIｂ層水田によって破壊された古い遺構（水田も含む）に伴う遺物である可能性もあり、断定はできない。

第２節　遺構について

１．本来の遺構掘り込み面の推定

第２章第１節で述べたように、調査時の確認面と本来の遺構掘り込み面とが一致しない場合がある。そこで遺構の切り合い関係と出土遺物を検討することによって、①遺構プランの確認面、②本来の遺構掘り込み面とその推定根拠、③調査時の確認面と本来の遺構掘り込み面との一致・不一致についてまとめたのが表20である。すべての遺構について確定することはできなかったが、III層～VIIｃ層まで推定される遺構面ごとに記載した。

２．遺構の変遷

遺構の掘り込み面については以上のように推定できた。実際に掘り込み面が確定できた遺構は少なく、また同一

面の遺構であっても必ずしも同時期のものとは限らないため、詳細な遺構の変遷を明らかにすることはできなかったが、これらの遺構の変遷に各層の形成過程を加えてまとめたのがP92である。時期を確定できた遺構については中に示したが、時期を限定できない遺構もあるため、各層段階における上限・下限を明らかにすることはできなかった。

これによって当遺跡における遺構の変遷を概観してみる。なお、各層上面の遺構は直上層によって覆われているわけであるが、各遺構は必ずしも直上層の堆積によって廃絶したわけではなく、廃絶後に埋没する場合もあり得る。今回は両者を区別することはできなかった。

古墳時代前～中期、集落については明らかではないが、自然堤防上から南側の低地にかけてⅦb～Ⅶa1層水田が

遺　構　名	プラン確認面	本来の遺構面とその推定根拠		プラン確認面と本来の遺構面との一致・不一致 不一致の場合、本来の遺構面で確認できなかった理由
ＳＤ17	Ⅳ層上面	Ⅲ層上面	調査区東壁・西壁で確認	×　堆積土とⅢ層が類似するので見分けにくい
ＳＢ１－Ｐ57～59	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面で確認、P59は調査区東壁でも確認	○
－Ｐ22～26,49	Ｖａ層上面	〃	Ｐ57～59と同一の建物	×　Ⅰ層畑の耕作が確認面まで及ぶ
－Ｐ27,31,32	ＳＤ９～Ⅶｂ層上面	〃	〃	×　〃
－Ｐ34,62	ＳＤ９上面	〃	〃	×　〃
ＳＢ２－Ｐ28	ＳＤ９上面	Ⅳ層上面	ＳＢ１と形態・方向が類似	×　Ⅰ層畑の耕作が確認面まで及ぶ
－Ｐ29,30	Ｖａ層上面	〃	〃	×　〃
ＳＢ３－Ｐ52～54	Ｖａ層上面	Ⅳ層上面	ＳＢ１と形態・方向が類似	×　Ⅰ層畑の耕作が確認面まで及ぶ
－Ｐ55,56	Ｖａ層上面	〃	〃	×　Ⅳ層畑の耕作によりⅣ層上面が乱された
ＳＢ７	Ｖａ層上面	Ⅳ層上面	ＳＢ１と形態・方向が類似	×　Ⅰ層畑の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＤ10	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面・調査区西壁で確認	○
ＳＤ11	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面で確認	○
ＳＤ12	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面・調査区北壁で確認	○
ＳＤ13	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面・調査区西壁で確認	○
ＳＤ16	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面・調査区東壁で確認	○
ＳＤ18	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面・調査区東壁・西壁で確認	○
ＳＤ19	Ⅳ層上面	Ⅳ層上面	平面・調査区西壁で確認	○
ＳＩ２	Ⅵ層上面	Ｖａ層上面	遺物の様相がＳＫ１とほぼ同じ	×　Ⅰ層水田の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＢ４－Ｐ68	Ｖａ層上面	Ｖａ層上面	平面で確認	○
－Ｐ63～67	Ｖｂ層上面	〃	Ｐ68と同じ建物	×　Ⅳ層畑の耕作によりＶａ層上面が攪拌された
－Ｐ69,70	Ｖｂ層上面	〃	〃	×　Ⅳ層畑の耕作によりＶａ層上面が攪拌された
ＳＢ５－Ｐ71～73	Ⅵａ層上面	Ｖａ層上面	ＳＢ４と形態・方向が類似	×　Ⅰ層水田の耕作が確認面まで及ぶ
－Ｐ74	ＳＩ１～Ⅵ層上面	〃	ＳＢ４と形態・方向が類似・ＳＩ１を切る	×　〃
－Ｐ75	ＳＩ１上面	〃	〃	×　〃
－Ｐ76,77	Ｖｂ層上面	〃	ＳＢ４と形態・方向が類似	×　Ⅳ層畑の耕作によりＶａ層は攪拌されて遺存しない
ＳＫ１	Ｖａ層上面	Ｖａ層上面	平面・調査区東壁で確認	○
ＳＩ１	Ⅵａ層上面	Ｖｂ層上面	Ｖｂ層畑の小溝状遺構群（Ⅵ層上面確認）を切る。遺物の様相がＳＫ１よりも古い	×　Ⅳ層畑の耕作（小溝状遺構群など）によってＶｂ層上面が攪拌された
ＳＢ６－Ｐ87,88,93 101	Ⅵａ層上面	Ｖｂ層上面	Ｖｂ層畑の小溝状遺構群（Ⅵ層上面確認）を切る	×　Ⅳ層やＶａ層畑の耕作によりＶａ～Ｖｂ層上面が攪拌された
－Ｐ92	ＳＢ４－Ｐ68底面	〃	Ｐ87,88,93,101と同じ建物	×　Ｐ68に大部分が切られた
－Ｐ94～96	ＳＤ16底面	〃	〃	×　ＳＤ16に切られた
ＳＤ20	Ｖｂ層上面	Ｖｂ層上面	平面・調査区北壁で確認	○
ＳＤ25	Ⅶａ１層上面	Ⅶａ1層上面	平面・調査区東壁で確認	○
ＳＤ26	Ⅶａ１層上面	Ⅶａ1層上面	平面・調査区南壁で確認	○
ＳＤ27	Ⅶａ１層上面	Ⅶａ1層上面	平面・調査区東壁・西壁で確認	○
ＳＤ28	Ⅶａ１層上面	Ⅶａ1層上面	平面・調査区東壁・西壁で確認	○
ＳＤ29	Ⅶｃ～Ⅷ層上面	Ⅶｃ層上面	調査区東壁で確認	×　堆積土とⅦｃ層が類似するので見分けにくい
ＳＤ１～５	Ｘ層上面	？		？　Ⅰ層水田の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＤ６	Ⅶｂ・Ｘ層上面	？		？　Ⅰ層水田・畑の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＤ７	Ｘ層上面	？		？　Ⅰ層水田の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＤ８	Ⅶｂ層上面	？		？　Ⅰ層畑の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＤ９	Ｖａ・Ⅶｂ層上面	？		？　〃
ＳＤ14・15、21～24	Ⅵａ層上面	？		？　Ⅰ層水田の耕作が確認面まで及ぶ
ＳＤ30	Ⅵａ層上面	？		？　〃
ＳＫ２～10	Ⅵａ層上面	？		？　〃
Ｐ１～21	Ⅳ層上面	？		？
Ｐ33,35,36,60	SD9～Ⅶｂ層上面	？		？　Ⅰ層畑の耕作が確認面まで及ぶ
Ｐ41～48,61	Ⅶｂ層上面	？		？　〃
Ｐ99～126	Ⅵａ層上面	？		？　〃
３区の小溝状遺構群	Ⅳ層上面	Ⅲ層上面	堆積土がⅢ層、調査区壁で確認	×　Ⅲ層畑の耕作によってⅢ層上面が攪拌された
５区の小溝状遺構群	Ｖａ層上面	Ⅳ層上面	堆積土がⅣ層、調査区壁で確認	×　Ⅳ層畑の耕作によってⅣ層上面が攪拌された
５区の小溝状遺構群	Ｖｂ層上面	Ｖａ層上面	堆積土がＶａ層、調査区壁で確認	×　Ｖａ層畑の耕作によってＶａ層上面が攪拌された
５区の小溝状遺構群	Ⅵａ層上面	Ｖｂ層上面	堆積土がＶｂ層、調査区壁で確認	×　Ｖｂ層畑の耕作によってＶｂ層上面が攪拌された

表20　遺構の検出状況と掘り込み面

営まれる。開田の時期については弥生時代にまで遡る可能性はあるが確定はできない（後述する）。これらの３面の水田跡のうち最も上層のⅦa1層水田はⅥc層の堆積によって埋没している。

その後Ⅵb層・Ⅵa層・Ｖb層（Ｖb層畑の母材層）が堆積し、上面にはＳＩ１・ＳＢ６などの建物が造られ、Ｖb層畑が耕作されて集落が営まれる。ＳＩ１の時期は７世紀末～８世紀前半を中心とする頃と推定されるが、他の遺構の年代は明らかではない。

Ｖa層（Ｖa層畑の母材層）堆積後、上面にはＳＩ２やＳＢ４・５などの建物とＳＫ１が造られ、Ｖa層畑が耕作されるようになる。ＳＩ２やＳＫ１は９世紀後半頃を中心とする時期と推定される。

Ⅳ層（Ⅳ層畑の母材層）堆積後、上面にはＳＢ１・２・３・７などの建物が造られ、Ⅳ層畑が耕作されている。建物の時期は方向がＶa層上面の遺構群と類似することからＶa層上面の遺構群と近接する９世紀末頃と考えられるが、Ⅳ層畑の耕作土中に灰白色火山灰が含まれることなどから、畑については10世紀前半頃も耕作されていたことが判る。建物や畑の下限については不明であるが、これ以降に付近において集落が営まれることはなかったようである。

この他、Ⅳ層上面にはＳＤ10～13・16・18・19などの溝跡がある。これらの溝のプランはⅣ層畑の耕作によって乱されていないことから、溝の時期はⅣ層畑の耕作以降であることが明確であるが、具体的な年代については不明である。また、土地の利用形態もはっきりしない。

遺構の変遷

〔土砂の供給など〕	〔建物・溝・土坑などの遺構〕	〔水田・畑など〕	〔備　　考〕
Ⅲ層の形成	ＳＤ17		
		Ⅲ層畑耕作	
Ⅲ層畑の母材層堆積			
↑	ＳＤ10～13・16・18・19		
灰白色火山灰降下	↑	↑	灰白降下は10世紀前半頃
Ⅳ層の形成	ＳＢ１～３・７	Ⅳ層畑耕作	
↑			
Ⅳ層畑の母材層堆積			
↑	↑	↑	
Ｖa層の形成	ＳＢ４・５　ＳＩ２　ＳＫ１	Ｖa層畑耕作	ＳＩ２は９世紀後半～10世紀前半頃
↑			ＳＫ１は９世紀第３四半期頃
Ｖa層畑の母材層堆積			
↑	↑	↑	
Ｖb層の形成	ＳＢ６　ＳＩ１　ＳＤ20	Ｖb層畑耕作	ＳＩ１は７世紀末～８世紀前半頃
↑			集落の形成
Ｖb層層畑の母材層堆積			
Ⅵa層堆積			
Ⅵb層堆積			
Ⅵc層堆積			
		↑	
↑		Ⅶa１層水田耕作	古墳時代中期頃
Ⅶa１層水田の母材層堆積		↑	
↑		Ⅶa２層水田耕作	
Ⅶa２層水田の母材層堆積		↑	
↑		Ⅶb層水田耕作	古墳時代前期頃
Ⅶb層水田の母材層堆積			

Ⅲ層（Ⅲ層畑の母材層）堆積後の遺構はＳＤ17のみであり、Ⅲ層畑の範囲や周辺の状況、年代などについては不明である。

３．掘立柱建物跡について

P92で示したように古代の遺構は大きく３段階（Ｖｂ・Ｖａ・Ⅳ層段階）に分けられるが、そのうちのＶａ～Ⅳ層段階において倉庫を含む掘立柱建物跡が方向をそろえて出現し、しかも堀り方の規模が比較的大きな建物が３棟（ＳＢ１・４・５）伴うことが明らかになった。Ⅳ層段階の遺構の年代がはっきりしないが、Ｖａ層上面のＳＫ１は出土した土器群の年代から９世紀第３四半期と推定できたので、Ⅳ層をＶａ層段階に後続する近接した時期であると仮定すれば、大体９世紀第４四半期を中心とする時期と考えられる。つまり、Ｖａ～Ⅳ層段階の９世紀後半頃を中心として、規模の大きな建物を含む多数の掘立柱建物跡が企画性を持って建てられていることになる。当遺跡周辺では、北東1.5kmにある中田畑中遺跡（長島・青沼：1983）や南方３kmにある鶴巻前遺跡（大友：1993）で堀り方規模の比較的大きな平安時代の掘立柱建物跡が調査されており、特に中田畑中遺跡例と共通点が多く認められるが、その性格について明らかにすることはできなかった。

４．水田跡について

Ⅶa1層・Ⅶa2層・Ⅶｂ層水田跡と連続する３面の水田跡を検出したが、これらの水田跡は基幹水路が踏襲して使用され、区画方法も共通点があるなど、共に同じ構造を持っている。

水田跡の時期については出土遺物が限られるので確定できないが、以下の①～③の判断材料がある。

①最上層のⅦa1層水田跡に伴うＳＤ27から塩釜～南小泉式の土師器が出土している。

②最下層のⅦｂ層水田跡上面から塩釜式の土師器が出土しており、さらにこれらの中には塩釜式の中でも古い段階の遺物が含まれている。

③最下層のⅦｂ層水田跡の耕作土中からは土師器に混じって桝形囲式の弥生土器が出土している。

これらのうち①・②の事例から考えると、各水田跡それぞれの時期については細分はできないが、Ⅶｂ～Ⅶa1層水田跡を合わせた経営期間は上限を塩釜式期、下限を南小泉式期とする頃と考えられる。

なお、③によるとⅦｂ層水田跡の上限は弥生時代中期にまで遡る可能性がある。この状況は第２次調査のⅦ層水田跡と似ている（註６）が、基本層序の項で述べたように今回の調査区と第２次調査区との間で明確な層の対応ができないために両水田跡をもって互いに補完させることはできない。また、耕作土中の弥生土器は水田跡の上限を示すのではなく、水田跡によって弥生時代の遺構が破壊された結果を示している可能性もあること、さらに土師器に比べて該期の遺物の数量が圧倒的に少ないことから、Ⅶｂ層水田跡の上限は弥生時代にまで遡る可能性は否定はできないが、断定は避けておきたい。

（註）

１．報文によると底部の切り離し法と再調整技法の比率は、ヘラ切り無調整が69.8%、回転糸切り無調整が8.3%、切り離し後回転ヘラケズリ調整が14.4%、切り離し後手持ちヘラケズリ調整が5.2%である。

２．多賀城跡ＳＫ2270出土の土師器坏は口縁部が外反するものがやや多く、内面のヘラミガキの方向は放射状のものが98%を占めていることなど、当遺跡ＳＫ１の遺物よりも新しい要素が認められる。

３．本文中では触れなかったが、河南町須江関ノ入遺跡第11号窯跡（佐藤：1993）では、底部～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるⅢＢ類や回転糸切り無調整のⅣＣ類あるいはⅣＤ類などが本遺跡ＳＫ１のものと類似している。当遺跡の方が底径・口径比がやや大きい（関ノ入遺跡第11号窯跡のⅢＢ・ⅣＣ・ⅣＤ類共に底径・口径比の平均は0.52）点は異なるが、同窯跡ではヘラ切りのものが含まれるものの、主体は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されるものと、回転糸切り無調整のものであり、本遺跡ＳＫ１と共通する点が多い。

しかし、須江関ノ入遺跡第11号窯跡の年代は８世紀末～９世紀第１四半期と考えられており、この年代観をそのまま当遺跡ＳＫ１

に当てはめるとかなりのずれがあるが、県内の須恵器は各窯跡群によって回転糸切り技法の導入の時期が異なるなど、生産地の窯跡群によって異なる変遷をすることが明らかにされている（佐藤：1993）ので、ＳＫ１の須恵器の産地は須江関ノ入窯跡群ではなく、別の窯跡群と推定される。

４．小川：1987 、真山：1991 、柳沢：1991 など

５．近くでは名取市鶴巻前遺跡に類例がある。

６．第２次調査のⅦ層水田跡の時期は「平安時代中頃以前」とされており、弥生時代とは限定されてはいないが、水田外のⅦ層や水路から「弥生土器らしきものが１点」と「石鏃に酷似した打製石斧が１点」出土している。

引用・参考文献

赤沢靖章　1996「中在家南遺跡出土の弥生土器について」『中在家南遺跡他　仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第213集　仙台市教育委員会

氏家和典　1957「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

太田昭夫　1994『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第 182集　仙台市教育委員会

大友　透　1993『仙台東道路遺跡調査概報III』名取市文化財調査報告書第31集　名取市教育委員会

小川淳一　1980「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第71集　宮城県教育委員会

小川淳一他1987『五本松窯跡　都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第99集　仙台市教育委員会

岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ｉ』宮城県多賀城跡調査研究所

加藤道男・阿部博志　1980「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第72集　宮城県教育委員会

加藤正範　1982「後河原遺跡」『年報３』仙台市文化財調査報告書第41集　仙台市教育委員会

木村浩二他1982『郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報－』仙台市文化財調査報告書第38集　仙台市教育委員会

酒井清治・伊藤博幸編　1995『須恵器集成図録　東日本編II』雄山閣出版

斎野裕彦他1987『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1984『後河原遺跡－平安時代以前・中世の水田跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第71集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1998「畑跡の畝間と耕作痕について－仙台市域の考古学的事例から－」『人類誌集報　1998』東京都立大学考古学報告３　漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査グループ

佐藤敏幸　1993『須江窯跡群　関ノ入遺跡－陸奥海道地方最大の須恵器生産地－』河南町文化財調査報告書第７集　河南町教育委員会

佐藤智雄他1985『宮城県仙台市後河原遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第１集　埋蔵文化財発掘調査研究所　後河原遺跡調査団

篠原信彦　1993『大蓮寺窯跡－第２・３次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第168集　仙台市教育委員会

白鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所

須藤　隆　1984「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究１』清文堂

仙台市史編纂委員会　1995『仙台市史　特別編２　考古資料』仙台市

辻　秀人　1995「東北南部における古墳出現期の土器編年－その２」『東北学院論集－歴史学・地理学－第27号』東北学院大学学術研究会

中村　浩他1978『陶邑II』大阪府文化財調査報告書第29輯　大阪府教育委員会

中村　浩他1978『陶邑III』大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会

長島栄一・青沼一民　1983『中田畑中遺跡－発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第53集　仙台市教育委員会

丹羽　茂他1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ｖ』宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

丹羽　茂　1994「五万崎地区」『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1994　宮城県多賀城跡調査研究所

松本秀明　1994「臨海沖積平野と軟弱地盤」『仙台市史　特別編１　自然』仙台市

真山　悟　1981「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ｖ』宮城県文化財調査報告書第81集　宮城県教育委員会

真山　悟　1991「II　第60次調査」『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1991　宮城県多賀城跡調査研究所

村田晃一　1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会

柳沢和明　1991「III　第61次調査」『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1991　宮城県多賀城跡調査研究所

写　真　図　版

写真 1
Ⅶa1 層水田跡と
SD28 確認状況
（5 区・北から）

写真 2
Ⅶb 層水田跡検出状況
（3 区・西から）

写真 3　Ⅶb 層水田跡確認状況（3 区・北から）

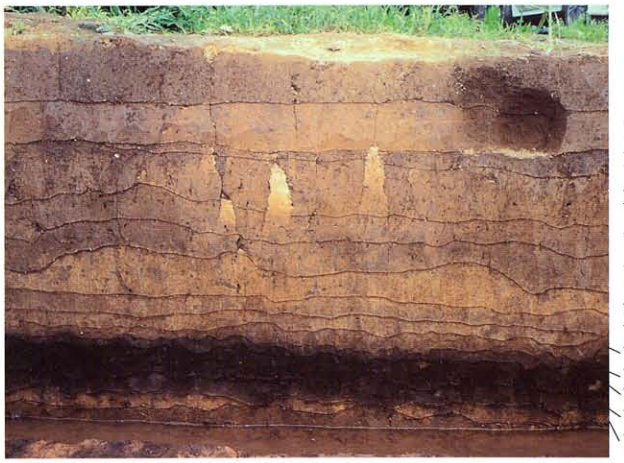


写真 4　5 区東壁（S29 ～ 32 付近）

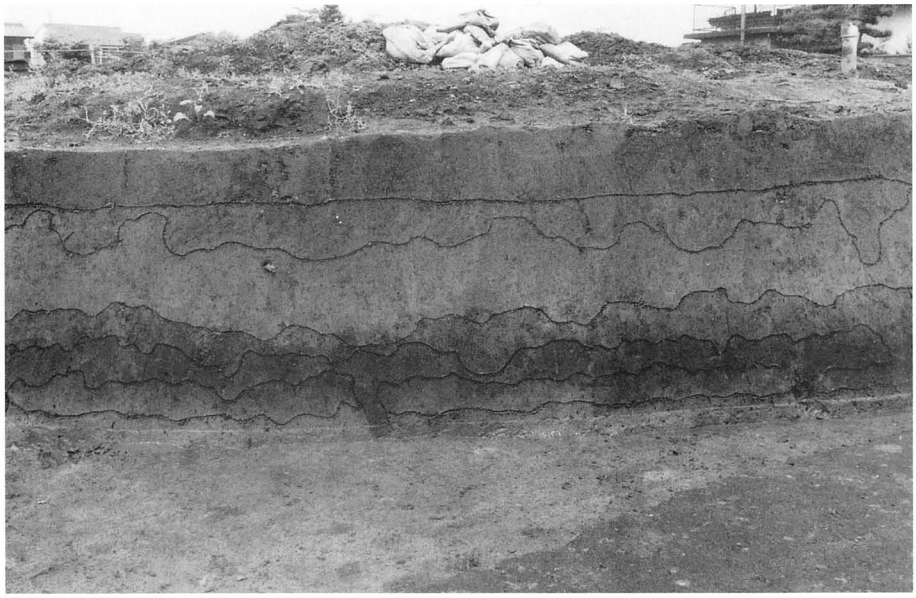


写真 5
2 区北壁（E6 ～ 9 付近）

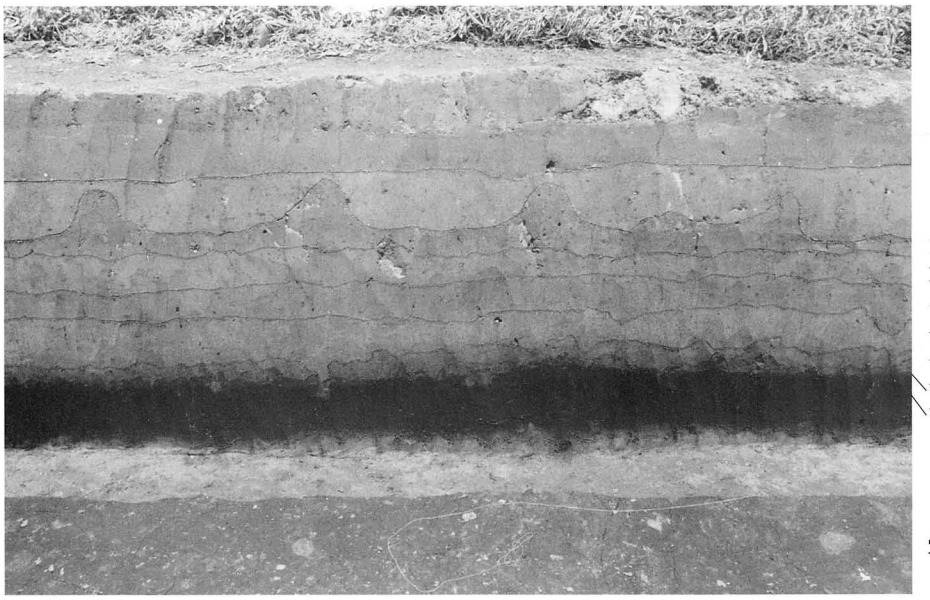


写真 6
3 区北壁（W 40 ～ 45 付近）

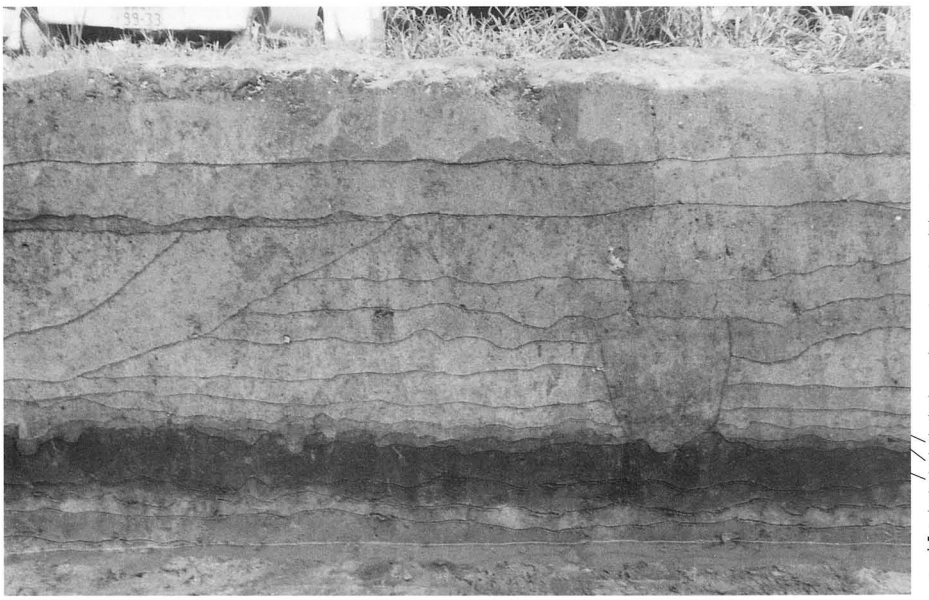


写真 7
5 区東壁（S27 ～ 30 付近）

写真 8
SI2 確認状況（西から）

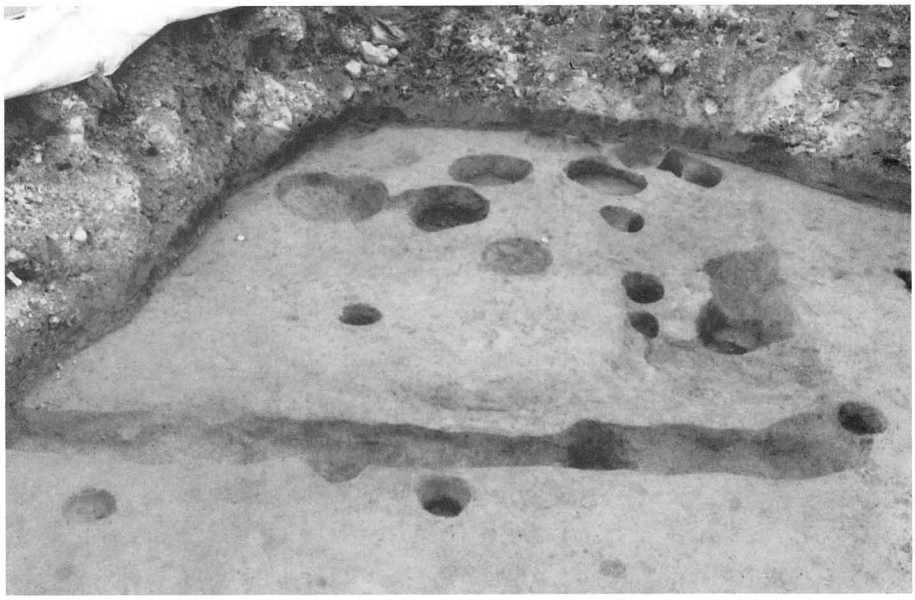


写真 9
SI2 完掘状況（西から）

写真 10
SB1 確認作業（西から）

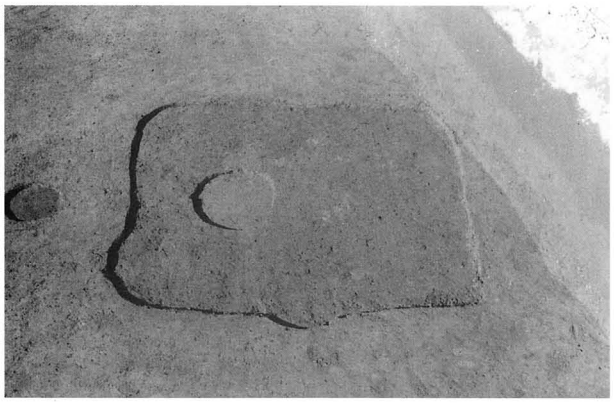


写真11　SB1-P58 確認状況

写真12　SB1-P 49 断ち割り状況

写真13　SB1 - P31 断面

写真14　SB1-P59 断面

写真15　SB1 完掘状況（1）、（西から）

写真16　SB1 完掘状況（2）、（西から）

写真17　SB1 完掘状況（3）、（北から）

写真18
SD1～3 確認状況
（東から）

写真19
SD1～3 完掘状況
（東から）

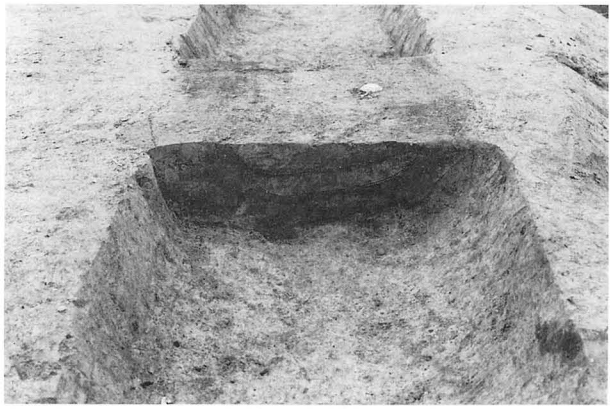


写真20　SD2 断面（東から）

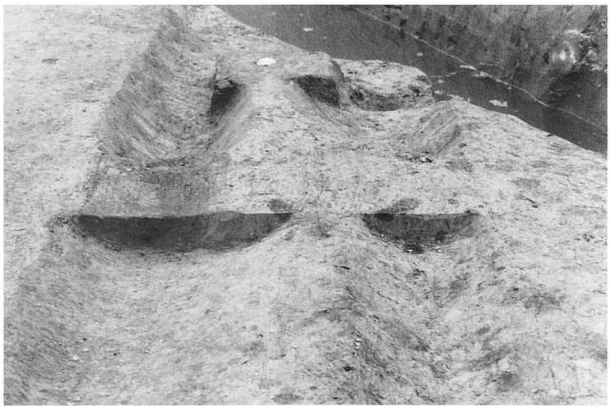


写真21　SD3 断面

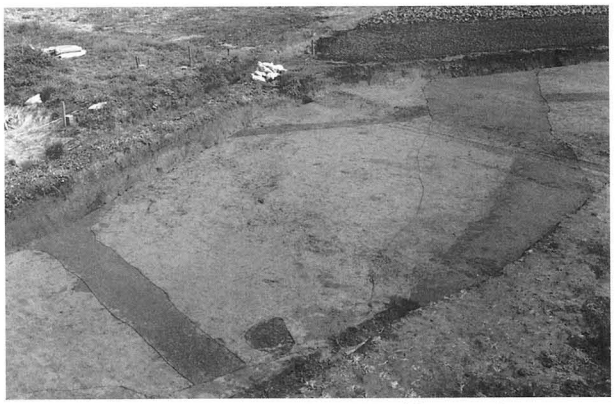


写真22　SD4～7 確認状況（南西から）

写真23　SD4 完掘状況（南から）

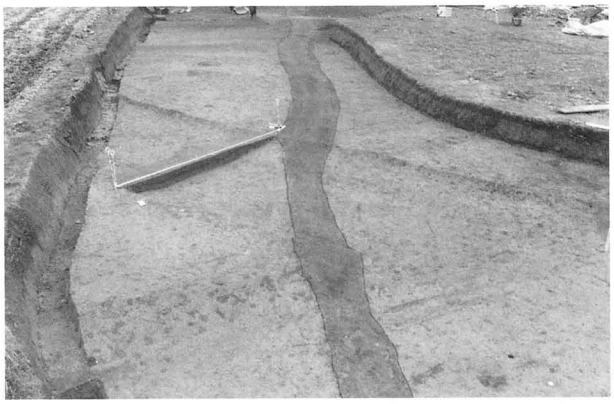


写真24　SD6 確認状況（西から）

写真25　SD6 完掘状況（東から）

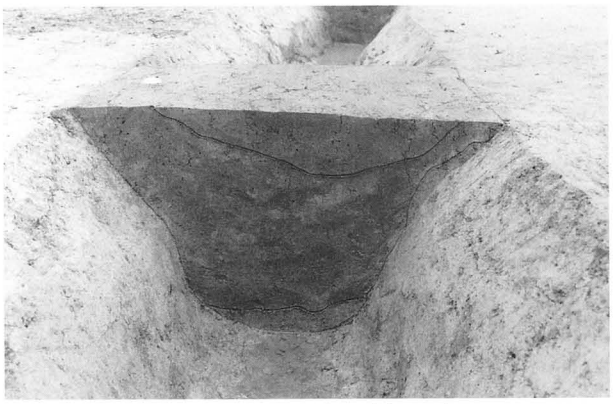


写真26　SD6 断面（東から）

写真27　SD8 確認状況（南から）

写真28　SD9 完掘状況（西から）

写真29　SD9 断面（東から）

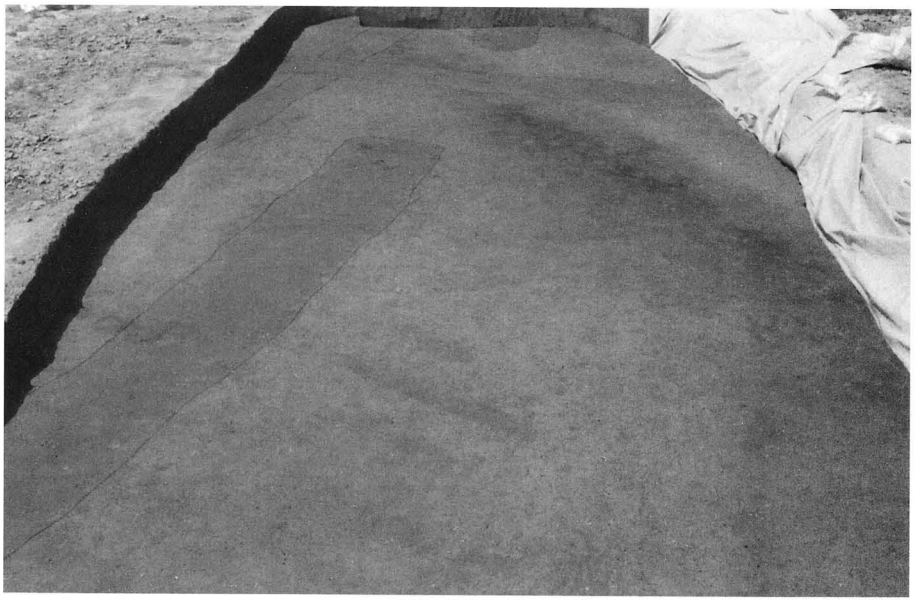


写真30
SD10～13 確認状況
（東から）

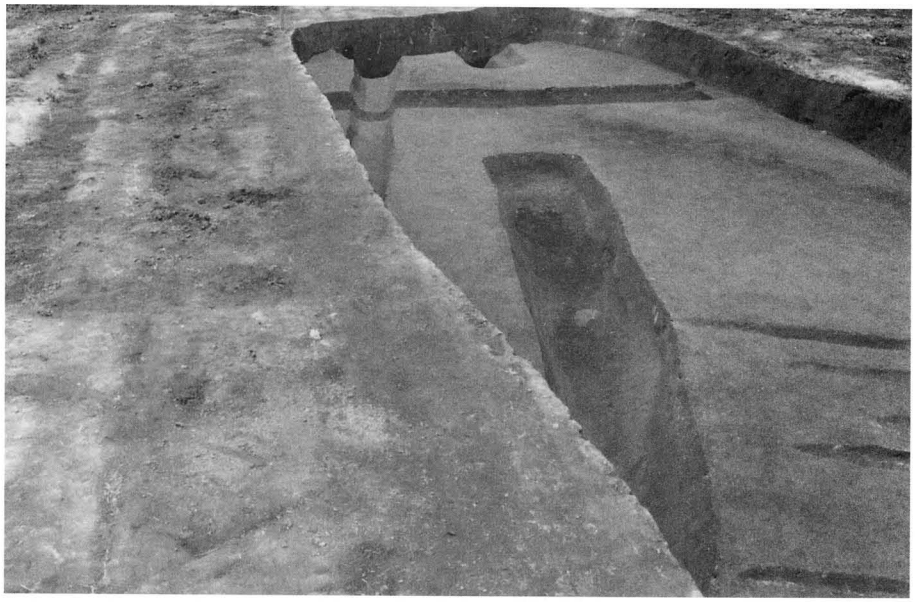


写真31
SD10～13 完掘状況
（東から）

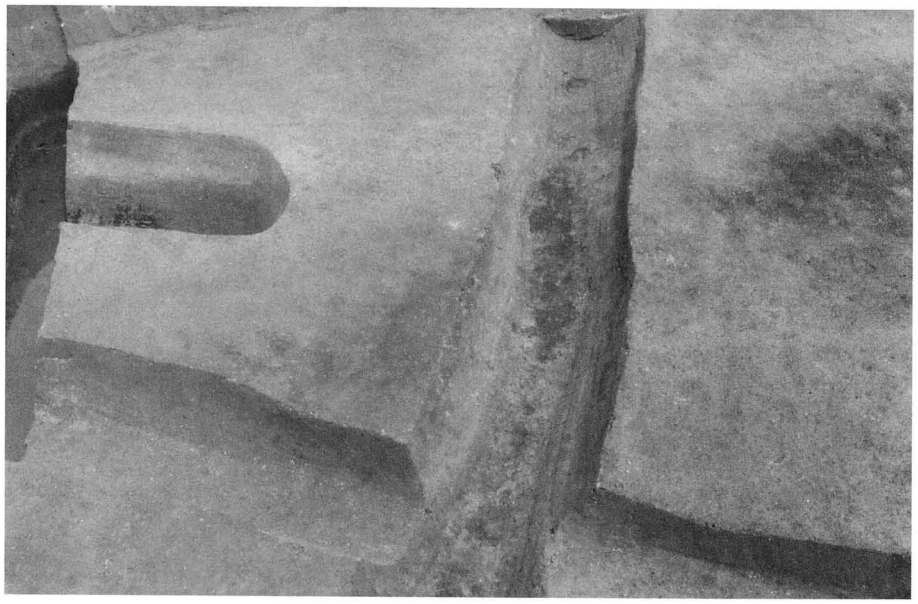


写真32
SD12 完掘状況
（南から）

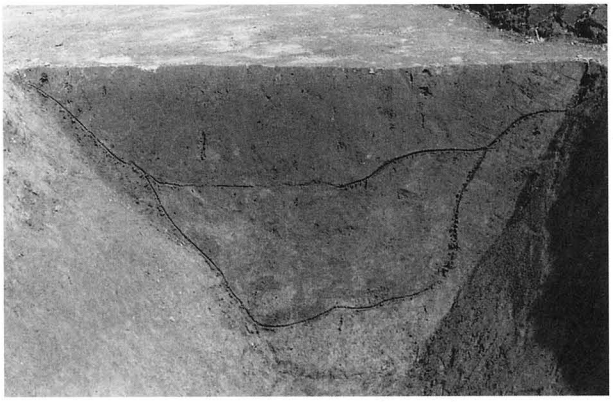


写真33　SD11 断面（西から）

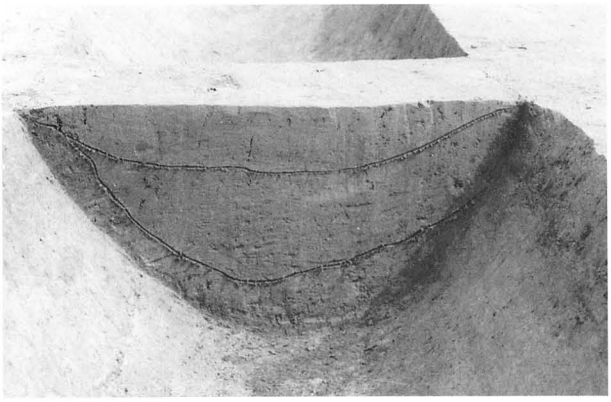


写真34　SD12 断面（南から）

写真35　SD14・15 確認状況（南から）

写真36　SD14 断面（南から）

写真37　SD15 断面（南から）

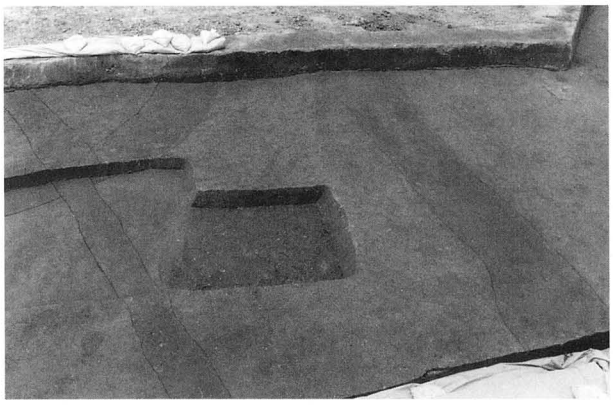


写真38　SD17・18 確認状況（東から）

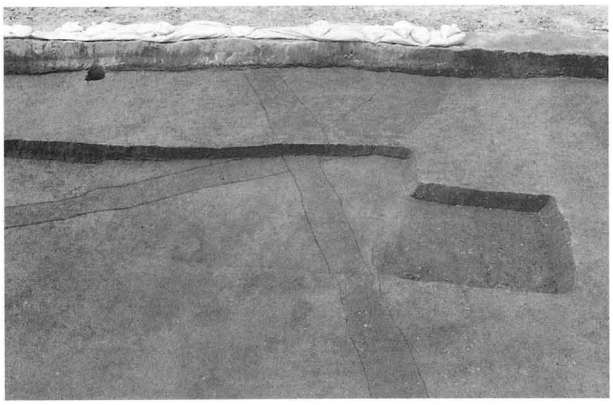


写真39　SD18・19 確認状況（東から）

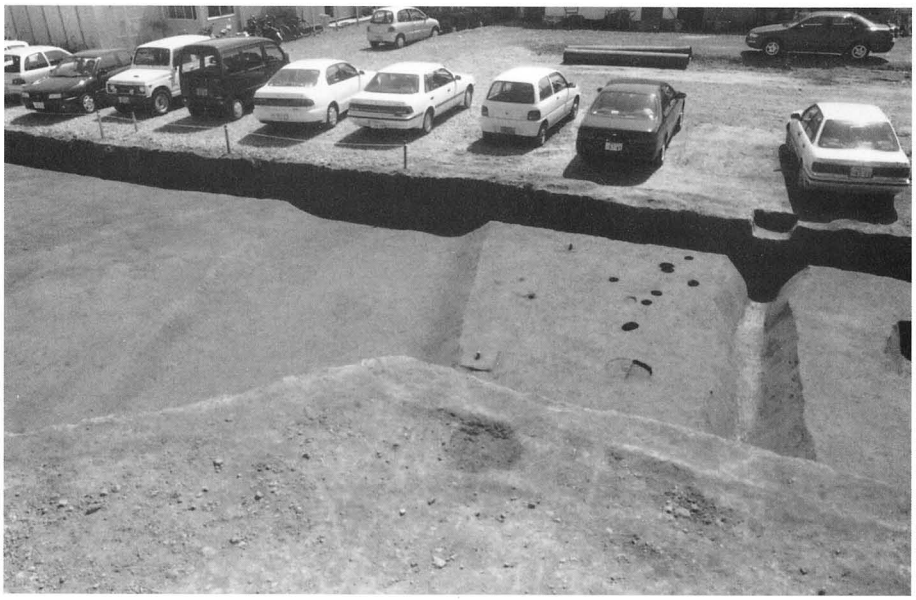


写真40
SD16・17 完掘状況
（西から）

写真41
SD17 完掘状況
（西から）

写真42
SD18・19 完掘状況
（北から）

写真43　SD21 完掘状況（南から）

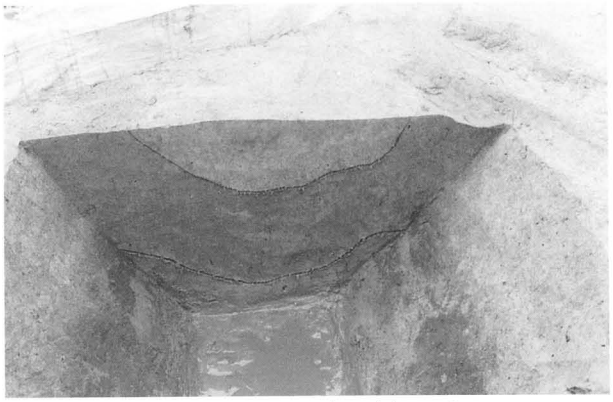


写真44　SD21断面（南から）

写真45
SD22 ～ 24・30 確認状況
（南から）

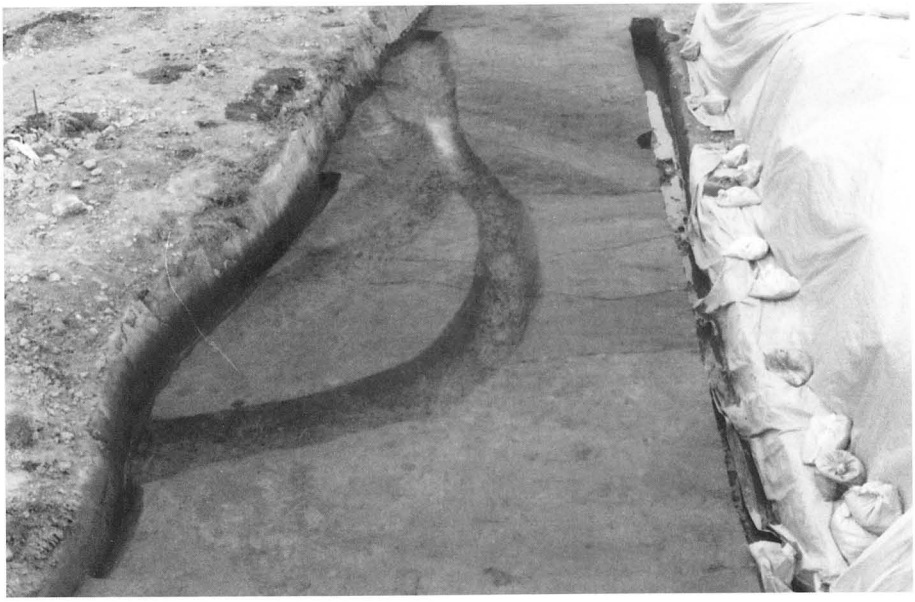


写真46
SD22・23 完掘状況
（南から）

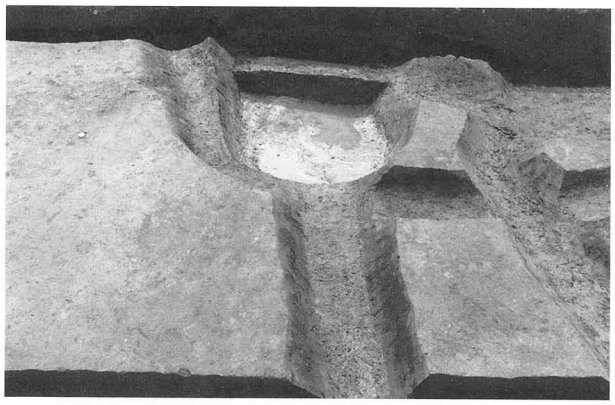


写真47　SD24 完掘状況（東から）

写真48　SD24 断面（西から）

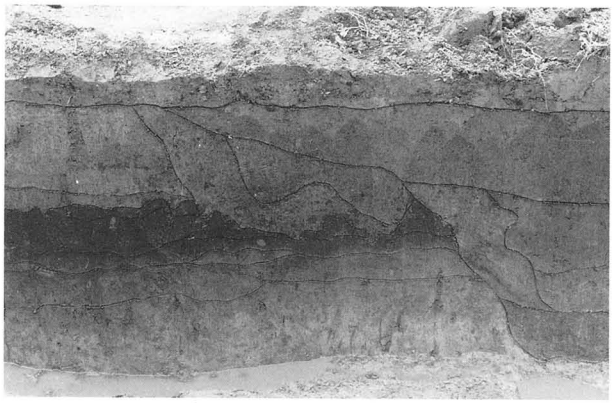


写真49　SD23 断面（東から）

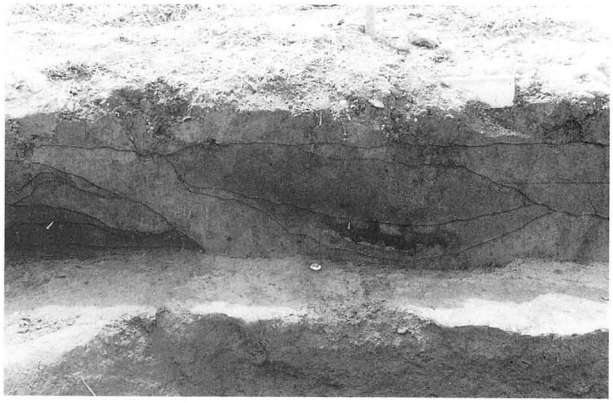


写真50　SD30 断面（東から）

写真51　SK1 確認状況（南から）

写真52　SK1 断面（南から）

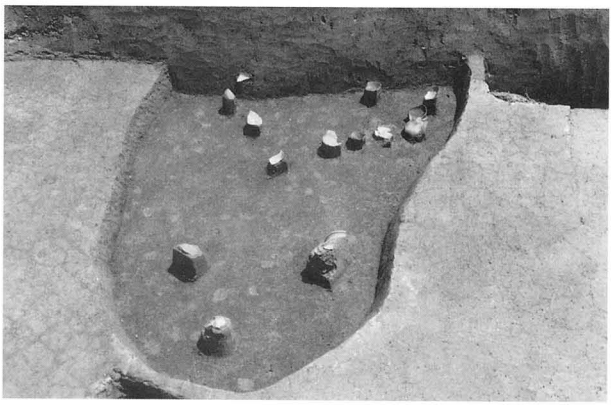


写真53
SK1 遺物出土状況（西から）

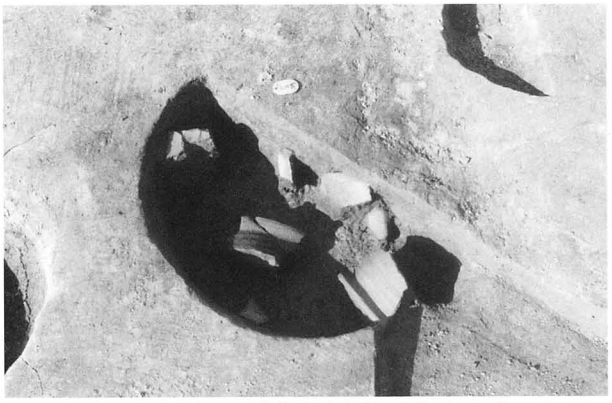


写真54　SK5 遺物出土状況（南西から）

写真55　SK9 完掘状況（東から）

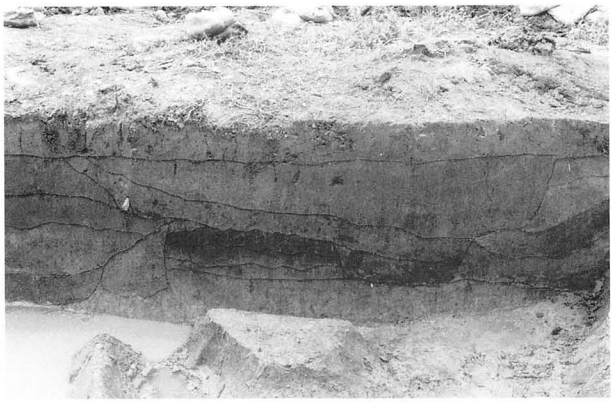


写真56　SK9 断面（東から）

写真57　SK10 完掘状況（東から）

写真58
Ⅳ層上面小溝状遺構群
完掘状況（3区・東から）

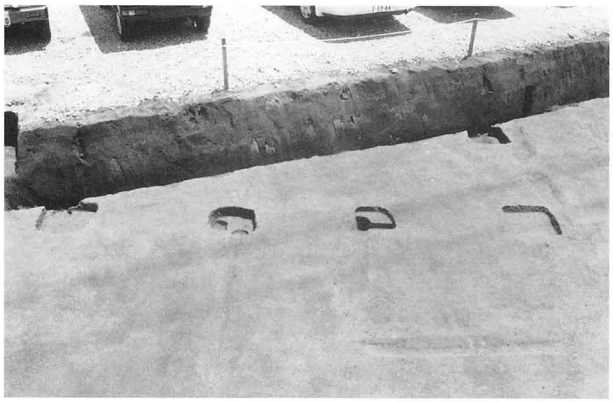


写真59　SB3 確認状況（西から）

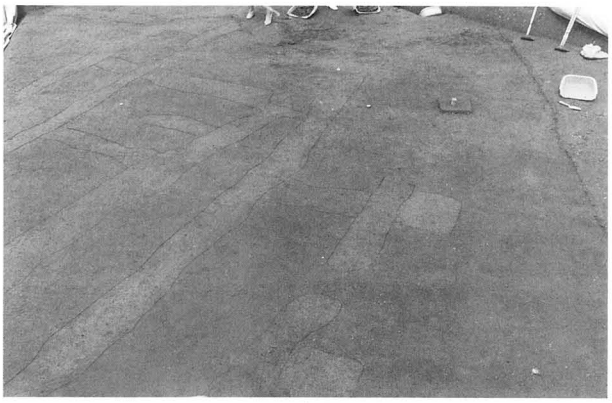


写真60　Va 層上面小溝状遺構群確認状況
（5 区 S20 付近、東から）

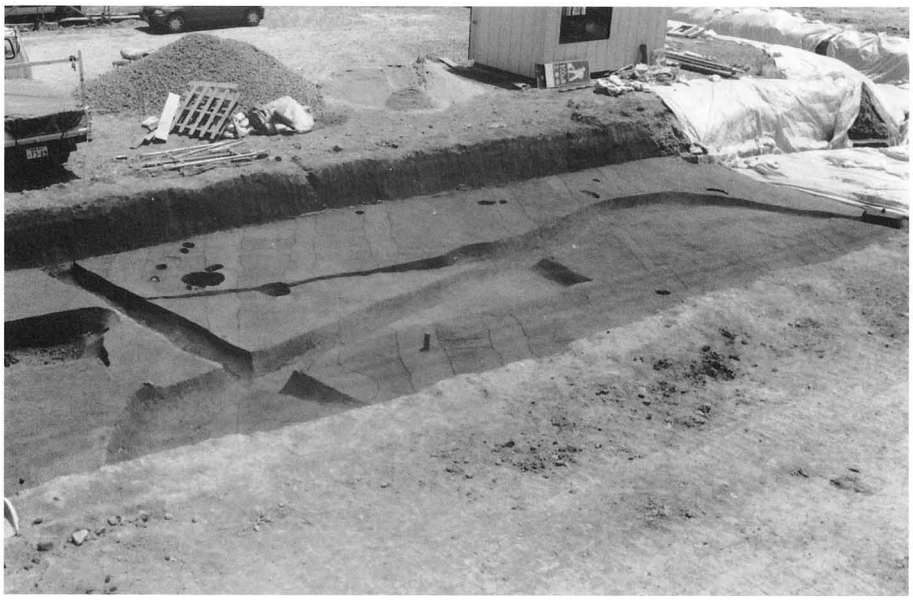


写真61
Va 層上面小溝状遺構群
確認状況
（5 区 S40 付近・西から）

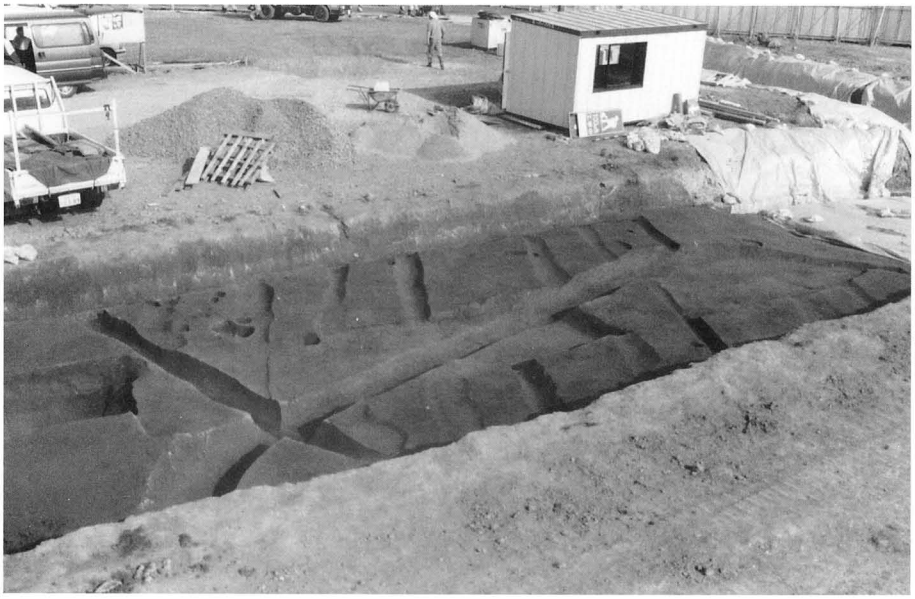


写真62
Va 層上面小溝状遺構群
完掘状況
（5 区 S40 付近・西から）

写真63
SB4 完掘状況
（北東から）

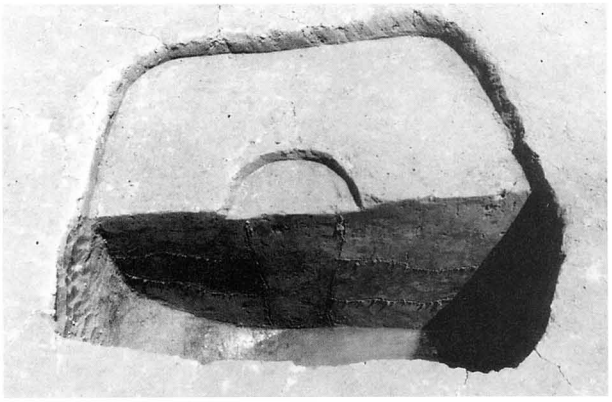


写真64　SB4 - P65 断面（南西から）

写真65　SB4 - P66 断面（南西から）

写真66
SB4 - P69 と SD17 断面
（東から）

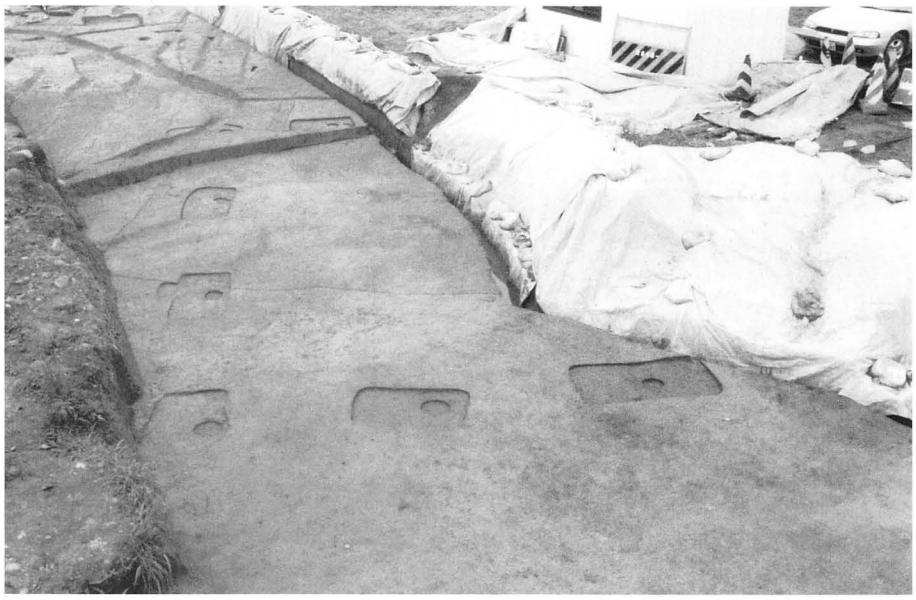


写真67
SB5 確認状況（1）
（南から）

写真68
SB5 確認状況（2）
（南から）

写真69
SB5 完掘状況
（南から）

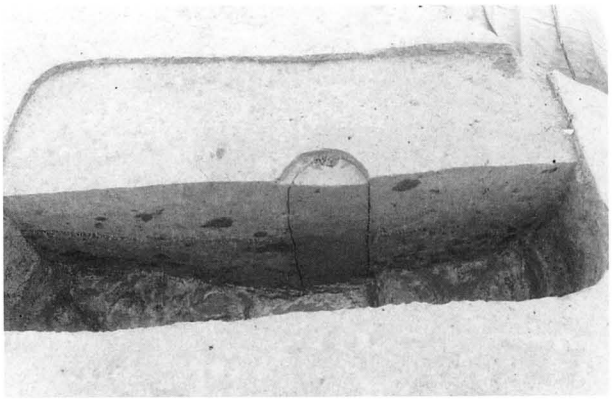


写真70　SB5 - P71断面（南から）

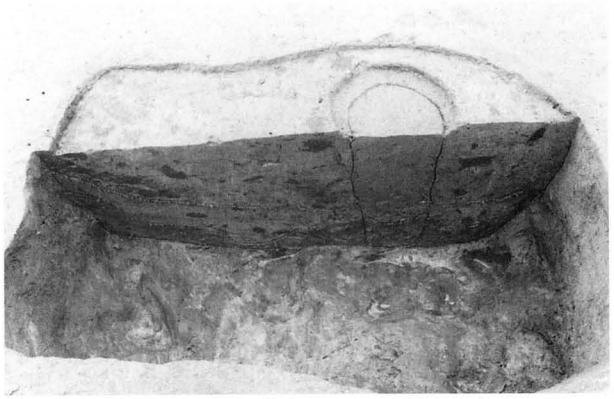


写真71　SB5 - P73 断面（西から）

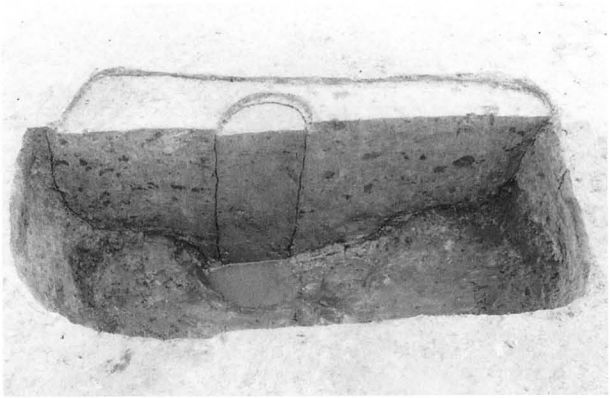


写真72　SB5 - P75 断面（西から）

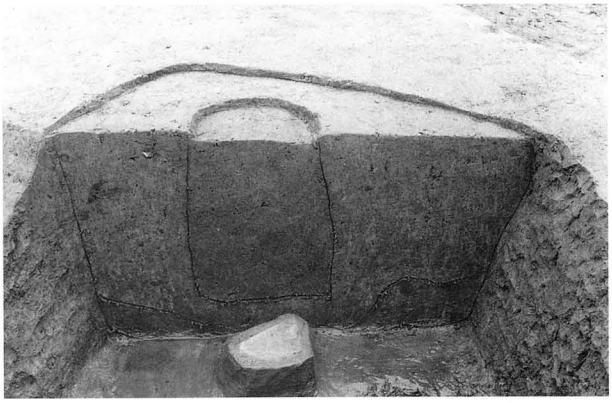


写真73　SB5 - P76 断面（西から）

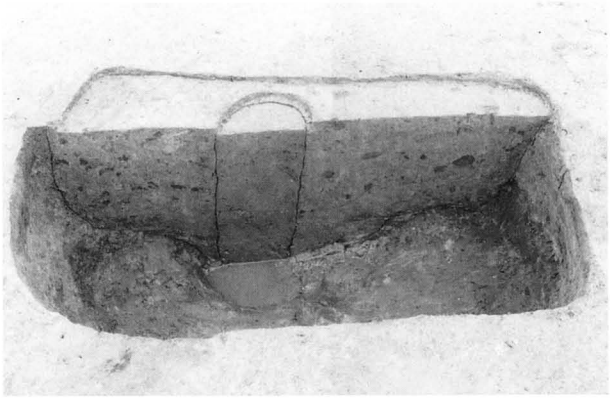


写真74　SB5 - P72 断面（南から）

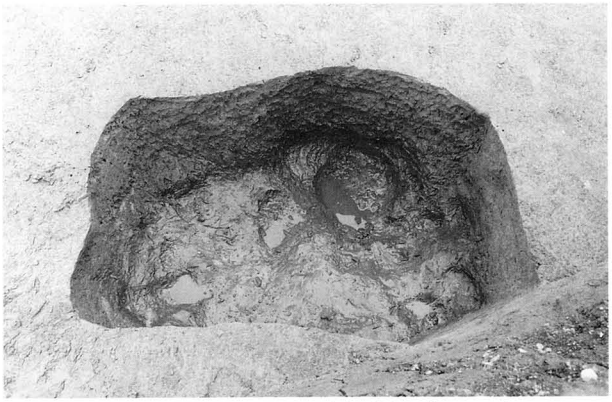


写真75　SB5 - P73 完掘状況（西から）

写真76　SB5 - P74 完掘状況（西から）

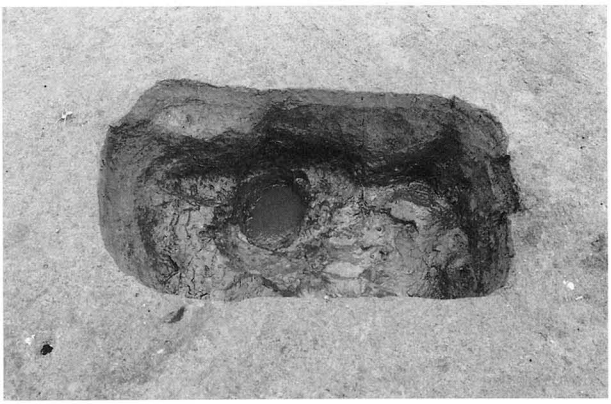


写真77　SB5 - P75 完掘状況（西から）

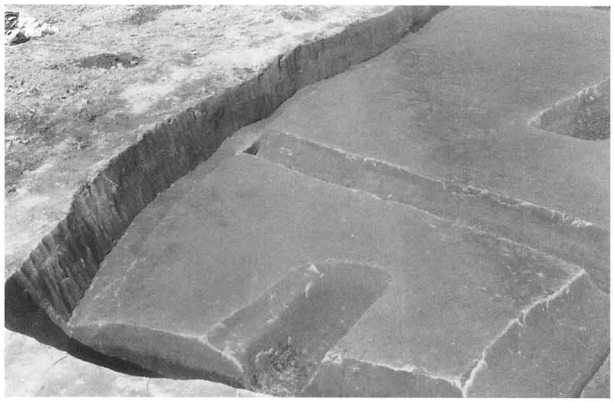


写真78　SD20と土手の確認状況（南西から）

写真79　SD20断面（南西から）

写真80
SD20完掘状況
（南西から）

写真81
Vb層上面小溝状遺構群
完掘状況
（西から）

写真82　SI 1床面検出状況（南東から）

写真83　SI 1カマド

写真84
SI 1床面の精査

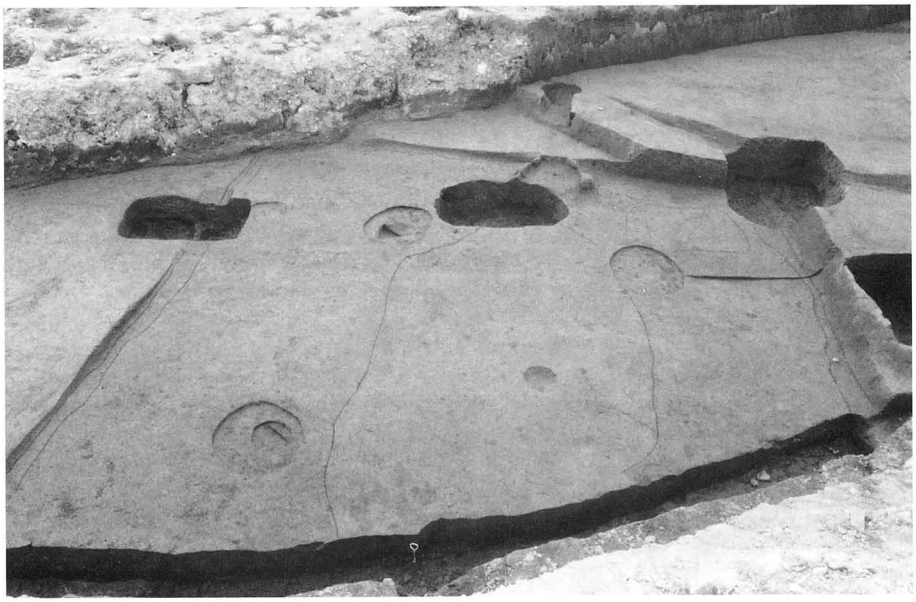


写真85
SI 1柱穴等確認状況

写真86　SI 1南北断面(1)（西から）

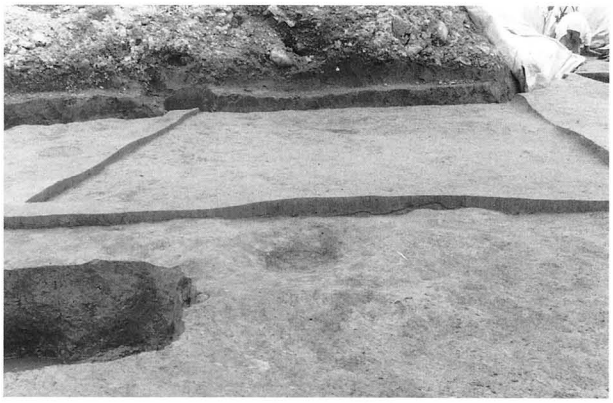


写真87　SI 1南北断面(2)（西から）

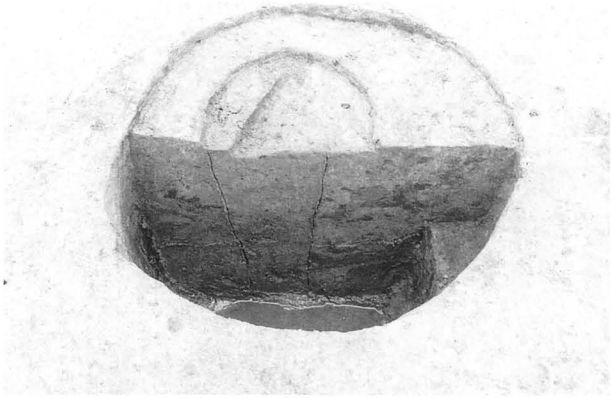


写真88　SI 1 - P3断面

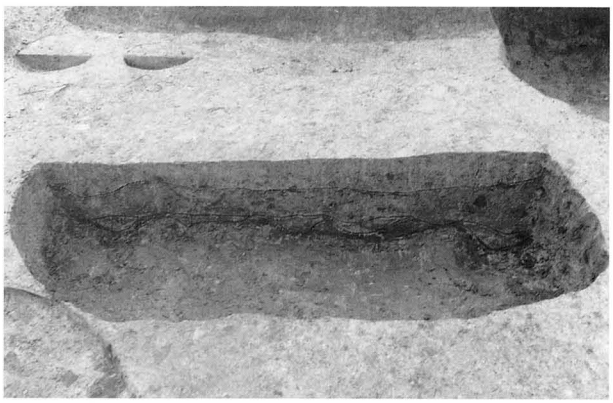


写真89　SI 1 - P8断面

写真90　SI 1完掘状況（南東から）

写真91
SI 1掘り方完掘状況
(南東から)

写真92
SI 1掘り方工具痕
確認状況(1)

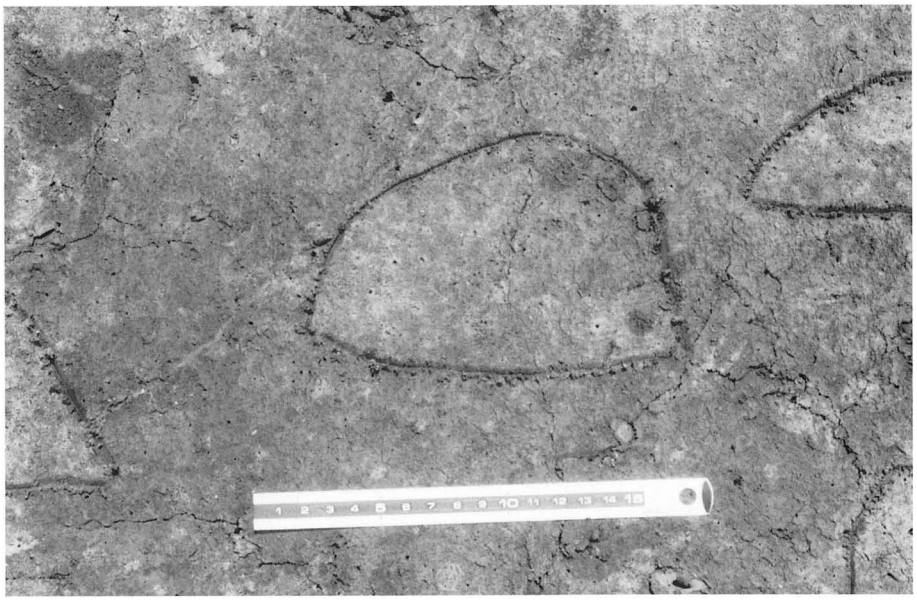


写真93
SI 1掘り方工具痕
確認状況(2)

写真94
SB6 完掘状況（1）
（南西から）

写真95
SB6 完掘状況（2）
（南西から）

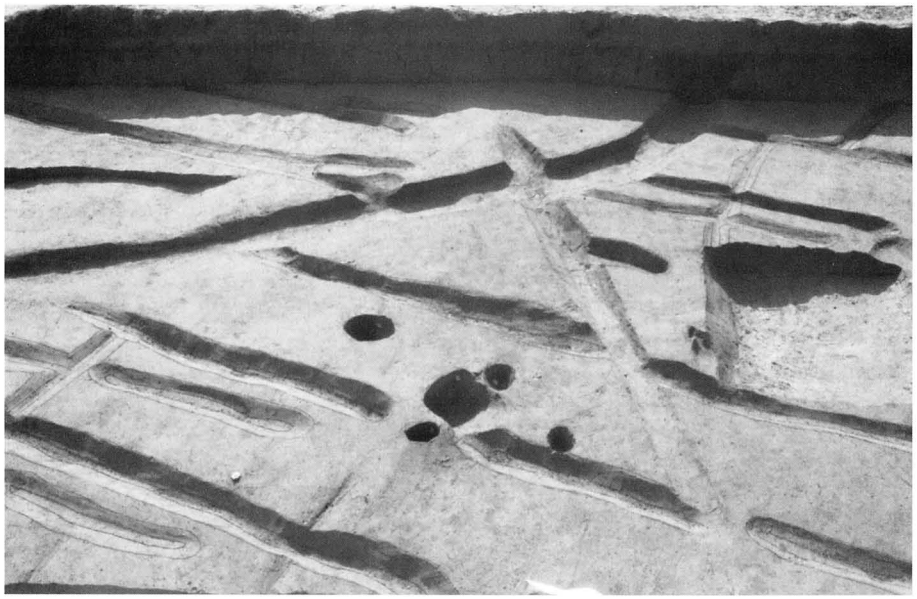


写真96
Ⅵa 層上面小溝状遺構群
完掘状況
（S40 付近、東から）

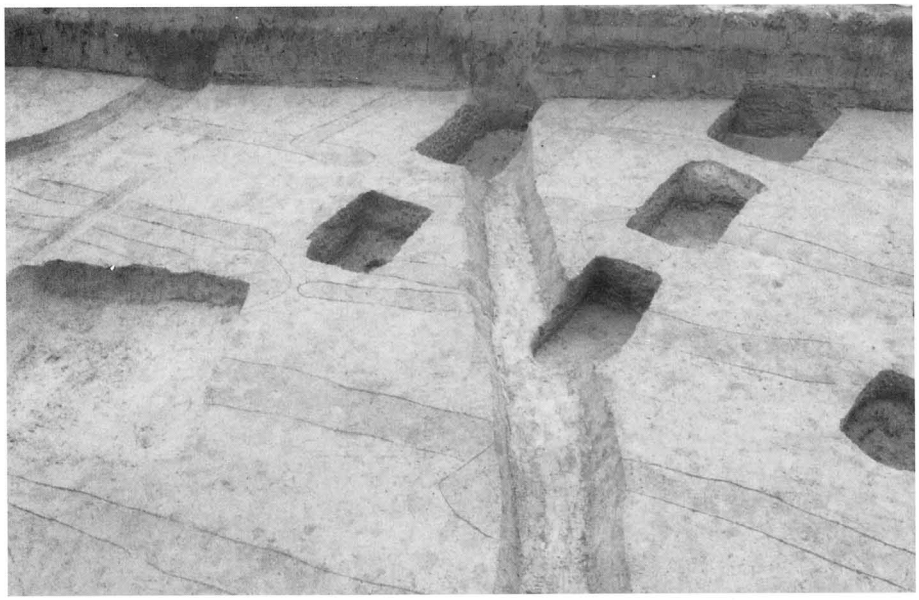
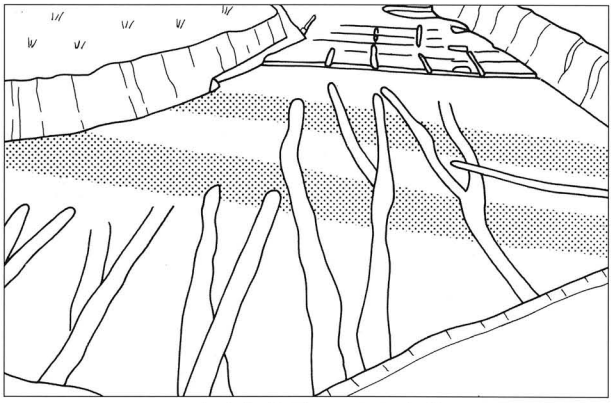


写真97
Ⅵa 層上面小溝状遺構群
確認状況
（S30 付近、東から）

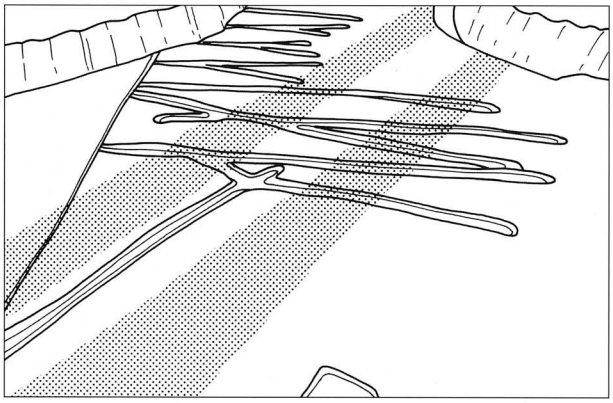
写真98
Ⅵa 層上面小溝状遺構群
完掘状況
（S30 付近、東から）

写真99
Ⅵa 層上面小溝状遺構群
完掘状況
（北東から）

写真100
Ⅵa 層上面小溝状遺構群と
SD28 の土手の確認状況
（南から）



アミ点部分が SD28 の土手



アミ点部分が SD28 の土手

写真101
Ⅵa 層上面小溝状遺構群の完掘
状況と SD28 の土手の確認状況
（東から）

写真102
Ⅶa 1 層水田跡
畦畔の確認作業
（3区・南から）

写真103
Ⅶa 1 層水田跡確認状況
（3区・西から）

写真104
Ⅶa 1 層水田跡検出状況
（3区・西から）

写真105
Ⅶa 1 層水田跡確認状況
（5区、南から、手前は検出状況）

写真106
Ⅶa 1 層水田跡検出状況
（5区、南から）

写真107
Ⅶa 1 層水田跡検出状況と
SD28 完掘状況
（5区、北から）

写真108
Ⅶa 1 層水田跡と
SD27 の確認状況
（5 区南部、北から）

写真109
Ⅶa 1 層水田跡検出作業と
SD27 の完掘状況
（5 区南部、北から）

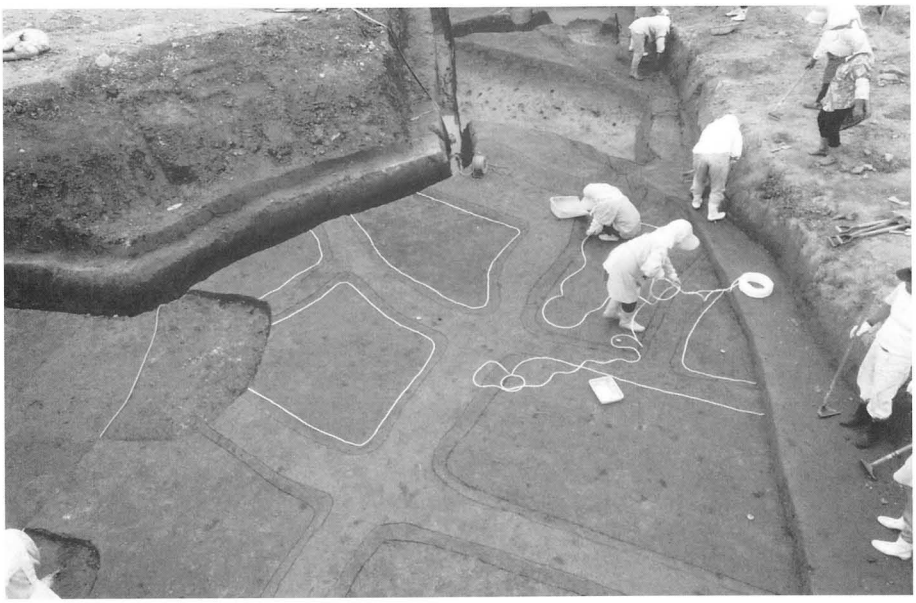


写真110
Ⅶa Ⅰ層水田跡の検出作業と
SD27 の完掘状況
（5 区南部、北から）

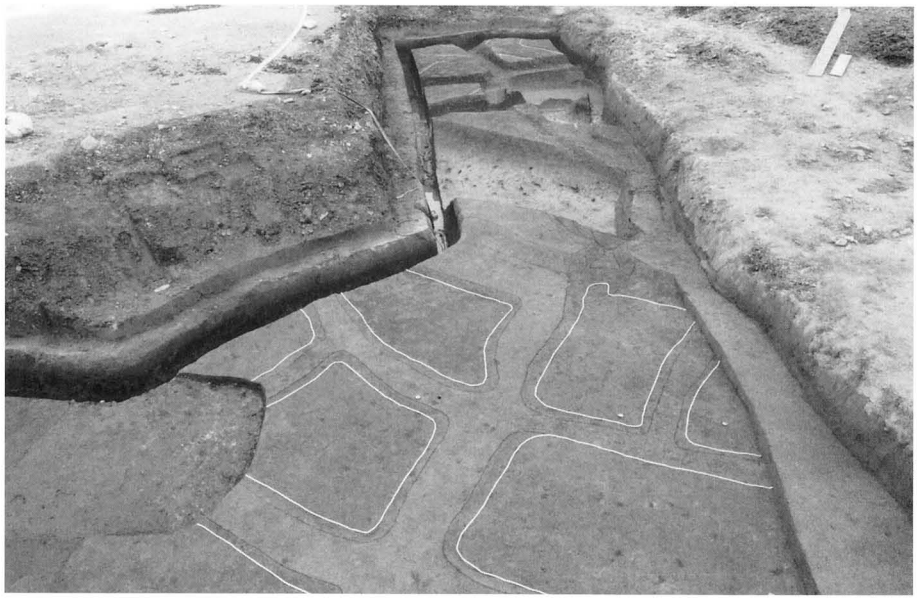


写真111
Ⅶa 1層水田跡検出状況と
SD27完掘状況
（5区南部、北から）

写真112
Ⅶa 1層水田跡確認状況
（4区、西から）

写真113
Ⅶa 1層水田跡検出状況
（4区、西から）

写真114
SD28 土手の確認作業
（5区、北西から）

写真115
SD28 土手とⅦa 1 層水田跡
確認状況
（北西から）

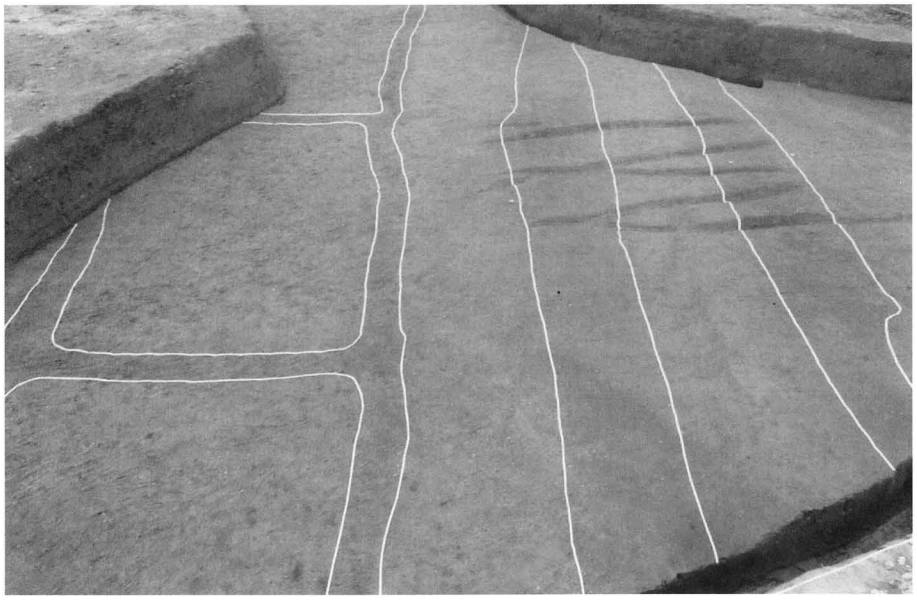


写真116
SD28 土手とⅦa 1 層水田跡
確認状況
（北西から）

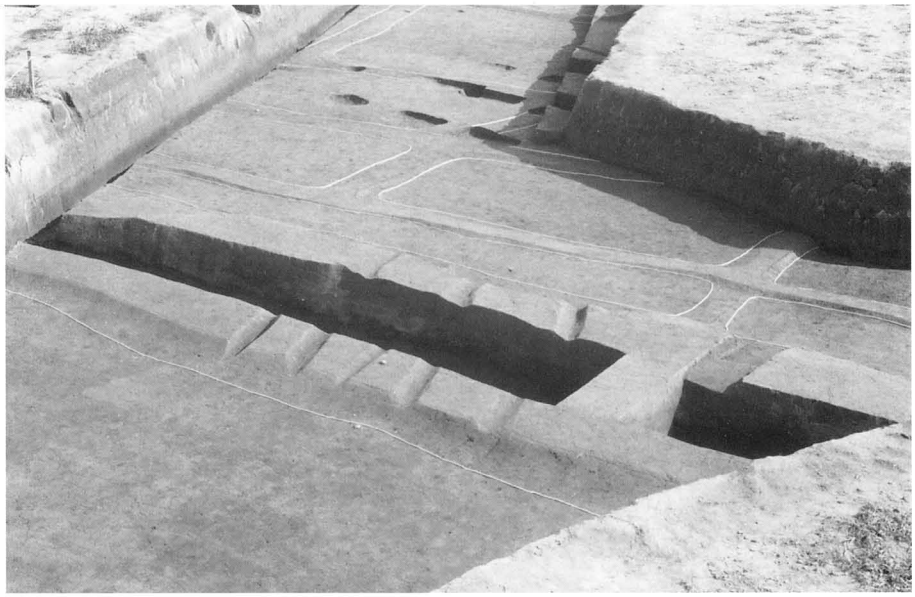


写真117
SD28 完掘状況
（北東から）

写真118
SD28 完掘状況
（西から）

写真119
SD28 断面
（西から）

写真120
SD27 確認状況
（北西から）

写真121
SD27 完掘状況
（北西から）

写真122
SD27 完掘状況と
Ⅶa 1 層水田跡検出状況
（北から）

写真123
SD27・30 断面
（西から）

写真124
SD27 北側土手の断面
（西から）

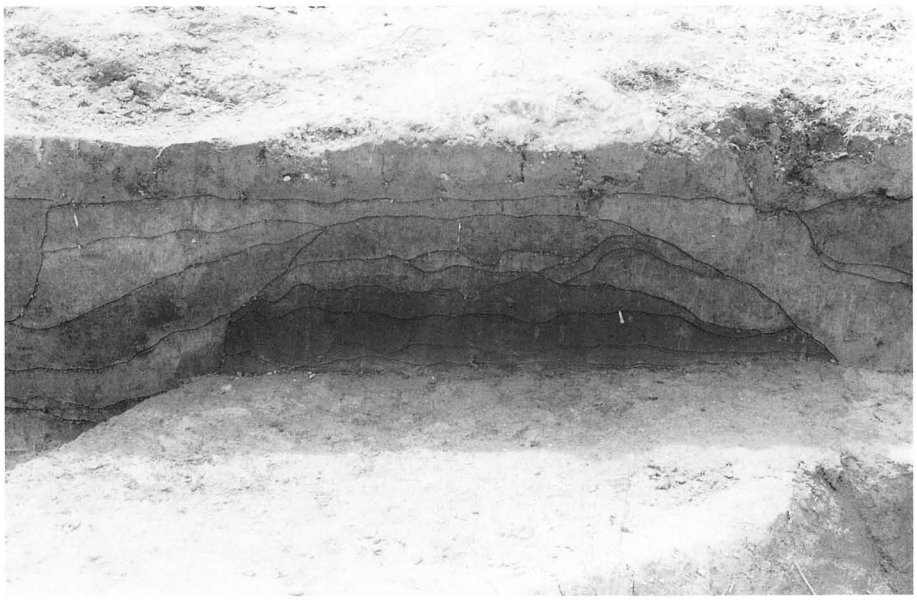


写真125
SD27 南側土手の断面
（東から）

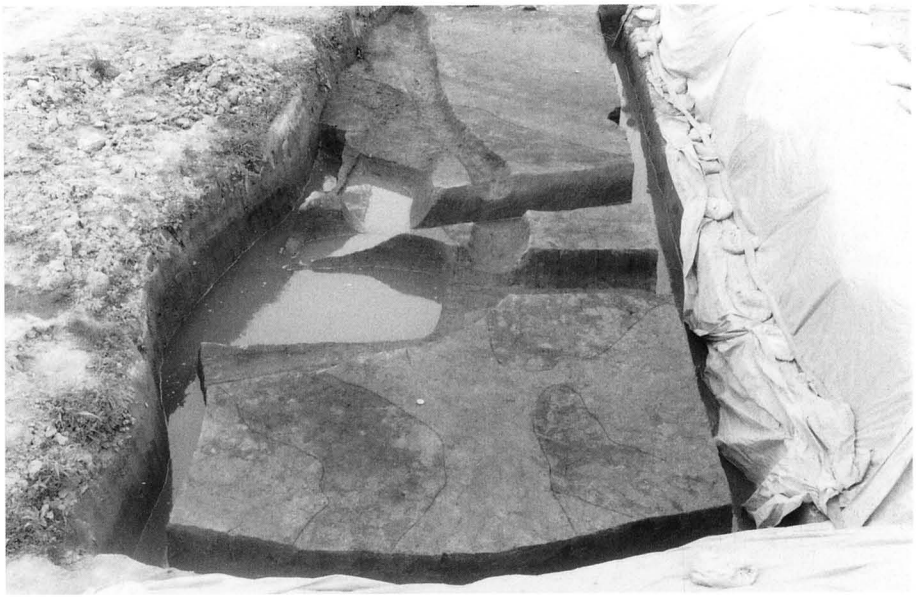


写真126
SD26 とVIIa 1 層水田跡
確認状況
（南から）

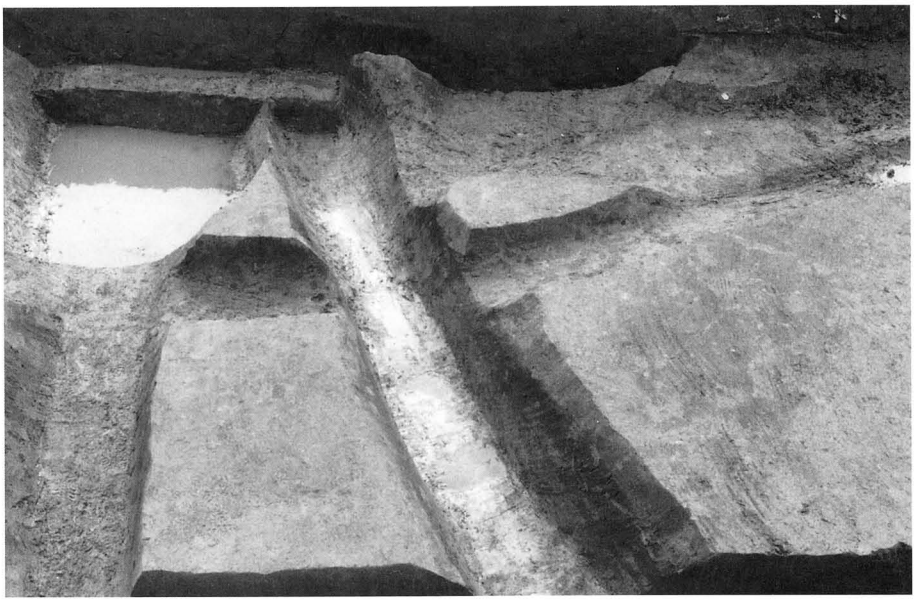


写真127
SD25 完掘状況
（東から）

写真128　SD25 断面（西から）

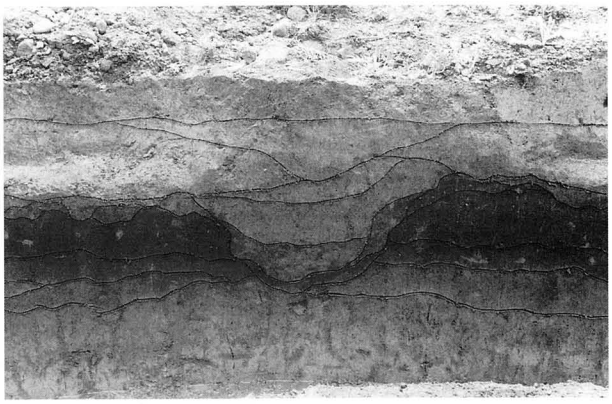


写真129　SD26 断面（北から）

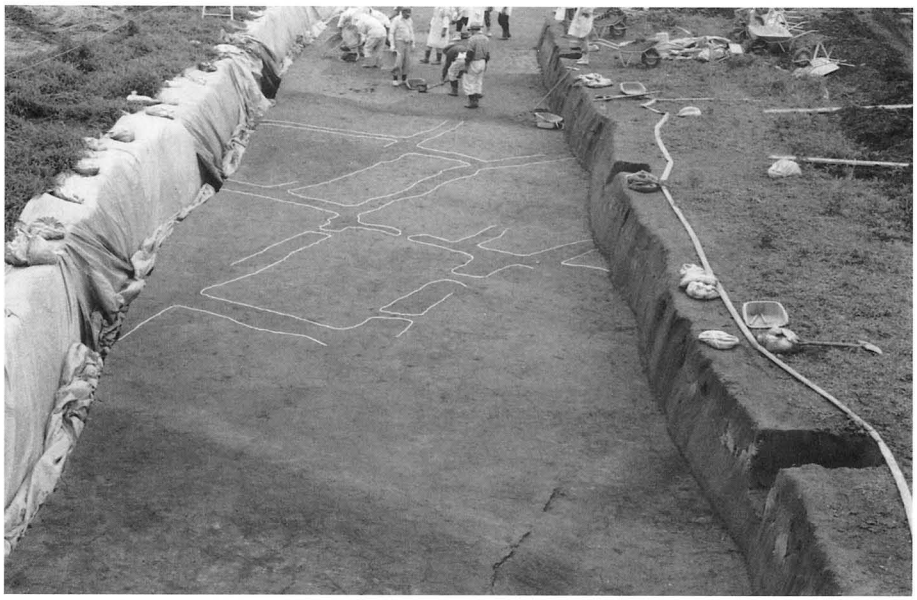


写真130
Ⅶa 2層水田跡確認状況
（3区、西から）

写真131
Ⅶa 2層水田跡検出作業
（3区、西から）

写真132
Ⅶa 2層水田跡検出状況
（3区、西から）

写真133
SD28 土手とⅦa 2 層水田跡
確認状況
（西から）

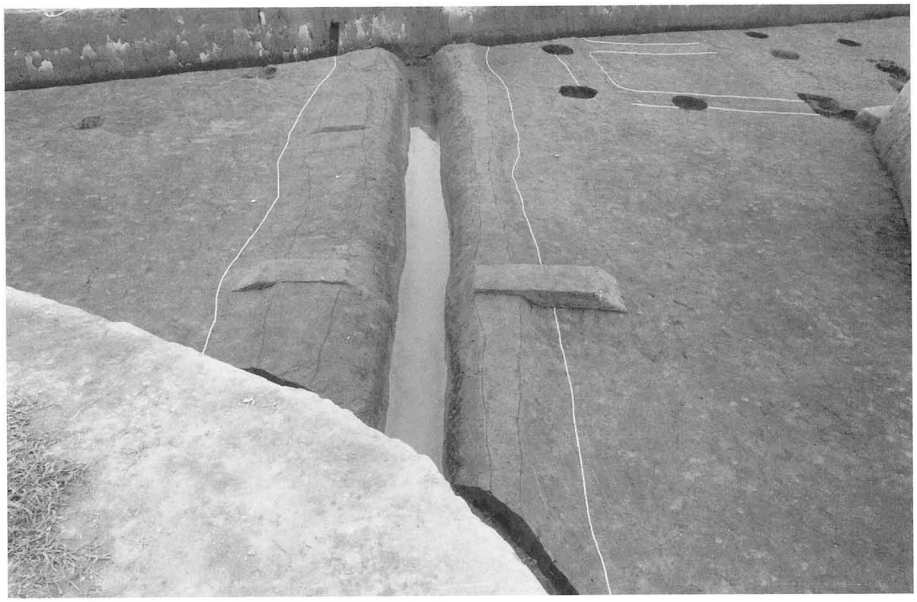


写真134
SD28 土手と
Ⅶa 2 層水田跡検出状況
（西から）

写真135
SD28 土手と
Ⅶa 2 層水田跡検出状況
（北西から）

写真136
Ⅶb 層水田跡確認作業
（3区、西から）

写真137
Ⅶb 層水田跡確認作業
（3区、西から）

写真138
Ⅶb 層水田跡確認状況
（3区、西から）

写真139　VIIb 層水田跡確認状況（3区、西から）

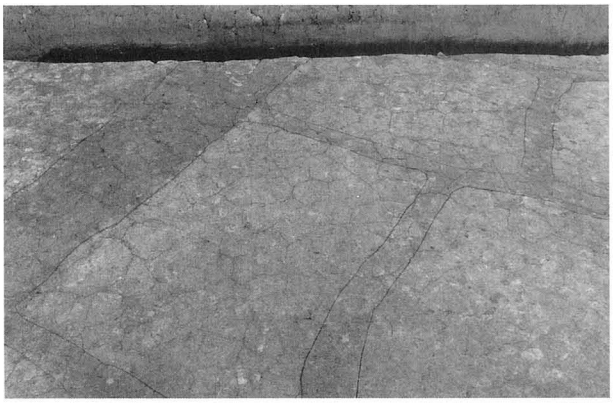


写真140　VIIb 層水田跡畦畔確認状況（3区、南から）

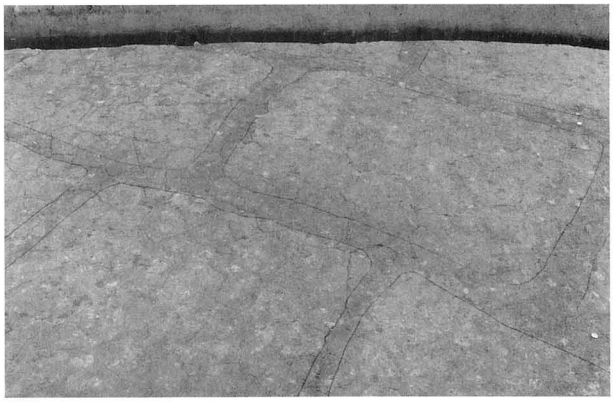


写真141　VIIb 層水田跡畦畔確認状況（3区、南から）

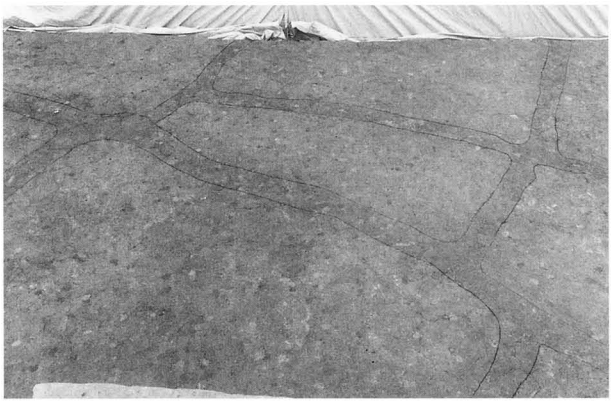


写真142　VIIb 層水田跡畦畔確認状況（南から）

写真143　VIIb 層水田跡畦畔確認状況（南から）

写真144　Ⅶb 層水田跡検出状況（３区、西から）

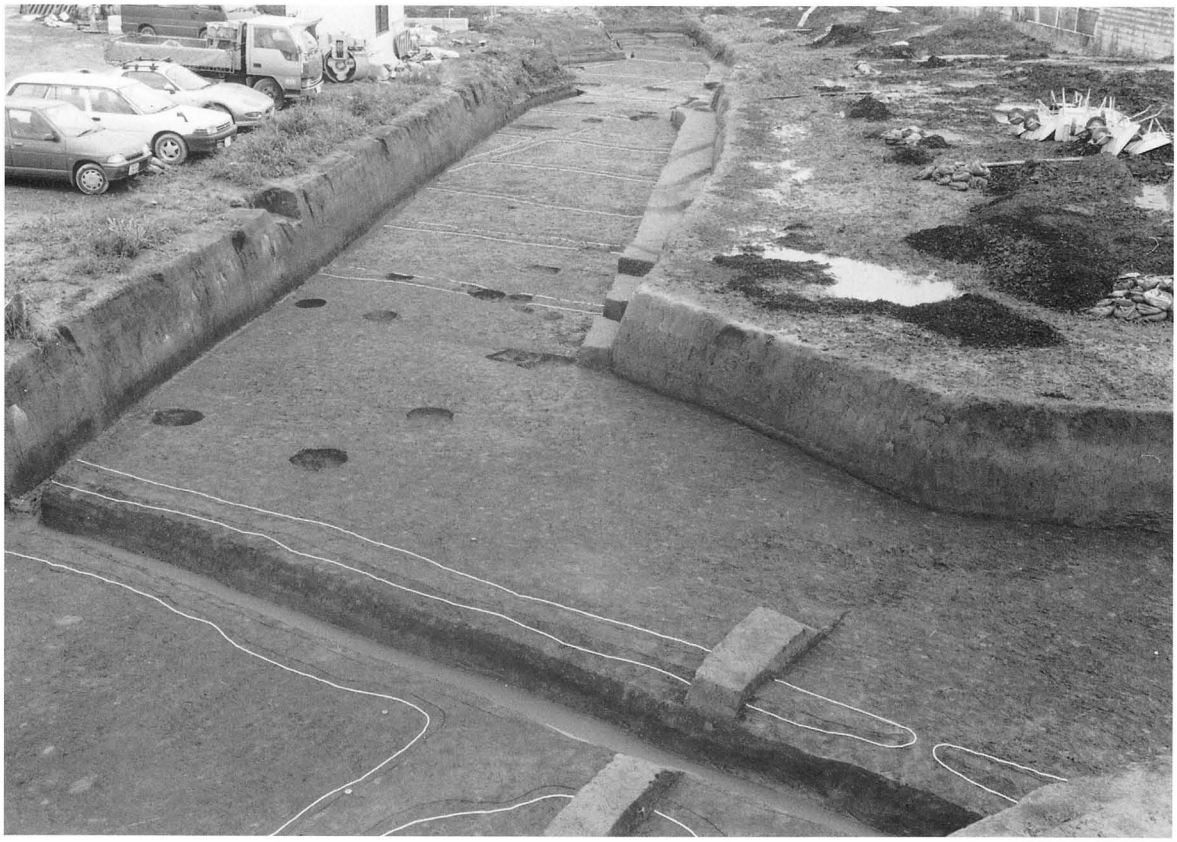


写真145　Ⅶb 層水田跡検出状況（５区、北西から）

写真146　Ⅶb 層水田跡畦畔確認状況（５区、西から）

写真147　Ⅶb 層水田跡畦畔確認状況（５区、西から）

写真148
Ⅶb 層水田跡確認状況
（４区、東から）

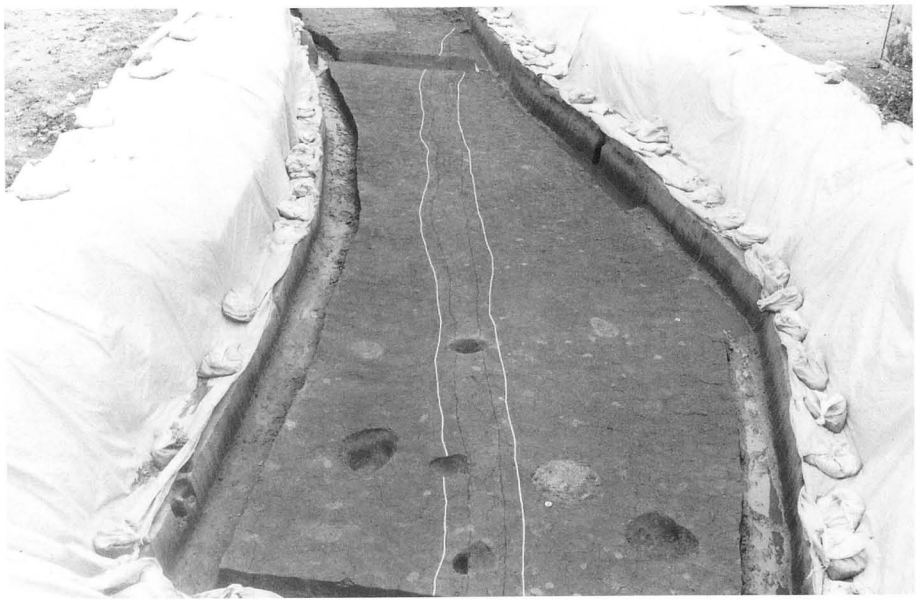


写真149
Ⅶb 層水田跡検出状況
（４区、東から）

写真150
Ⅶb 層水田跡検出状況
（5区、北西から）

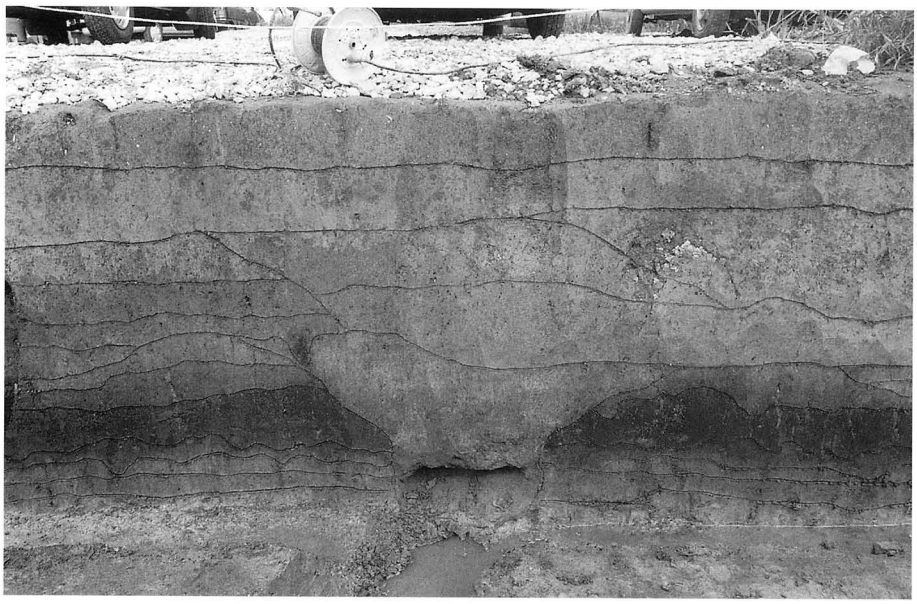


写真151
SD28 断面
（西から）

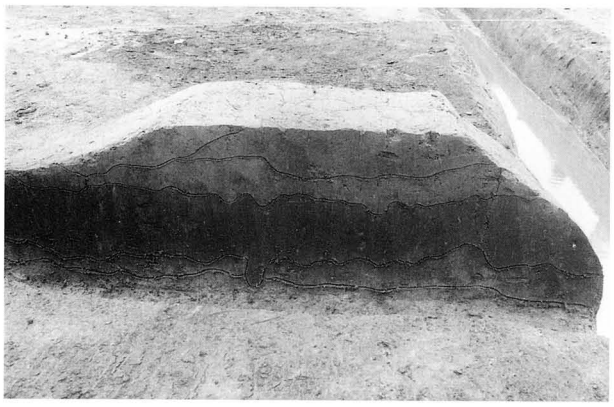


写真152　SD28 北側土手断面（西から）

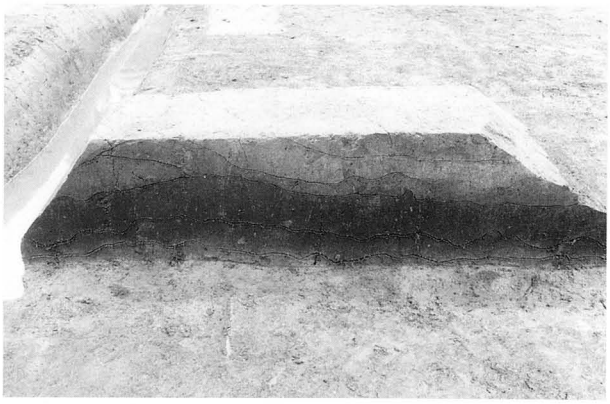


写真153　SD28 南側土手断面（西から）

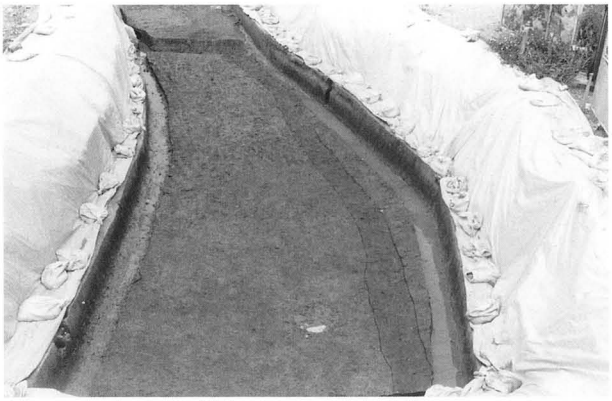


写真154　SD29 確認状況（4区、東から）

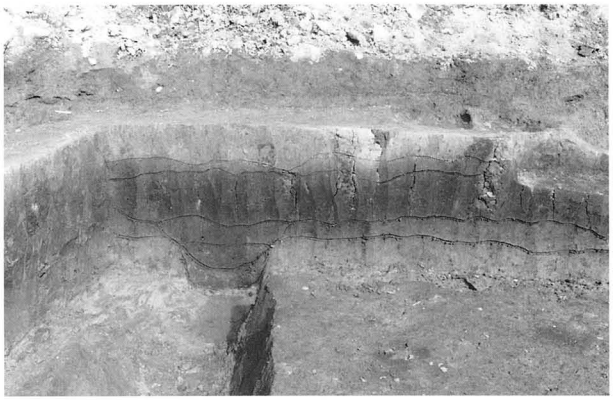


写真155　SD29 断面（西から）

写真156
SD29 完掘状況
（西から）

写真157
Ⅶb・Ⅶc 層除去後の状況
（Ⅷ層上面、5区、北から）

写真158　SI2 出土遺物

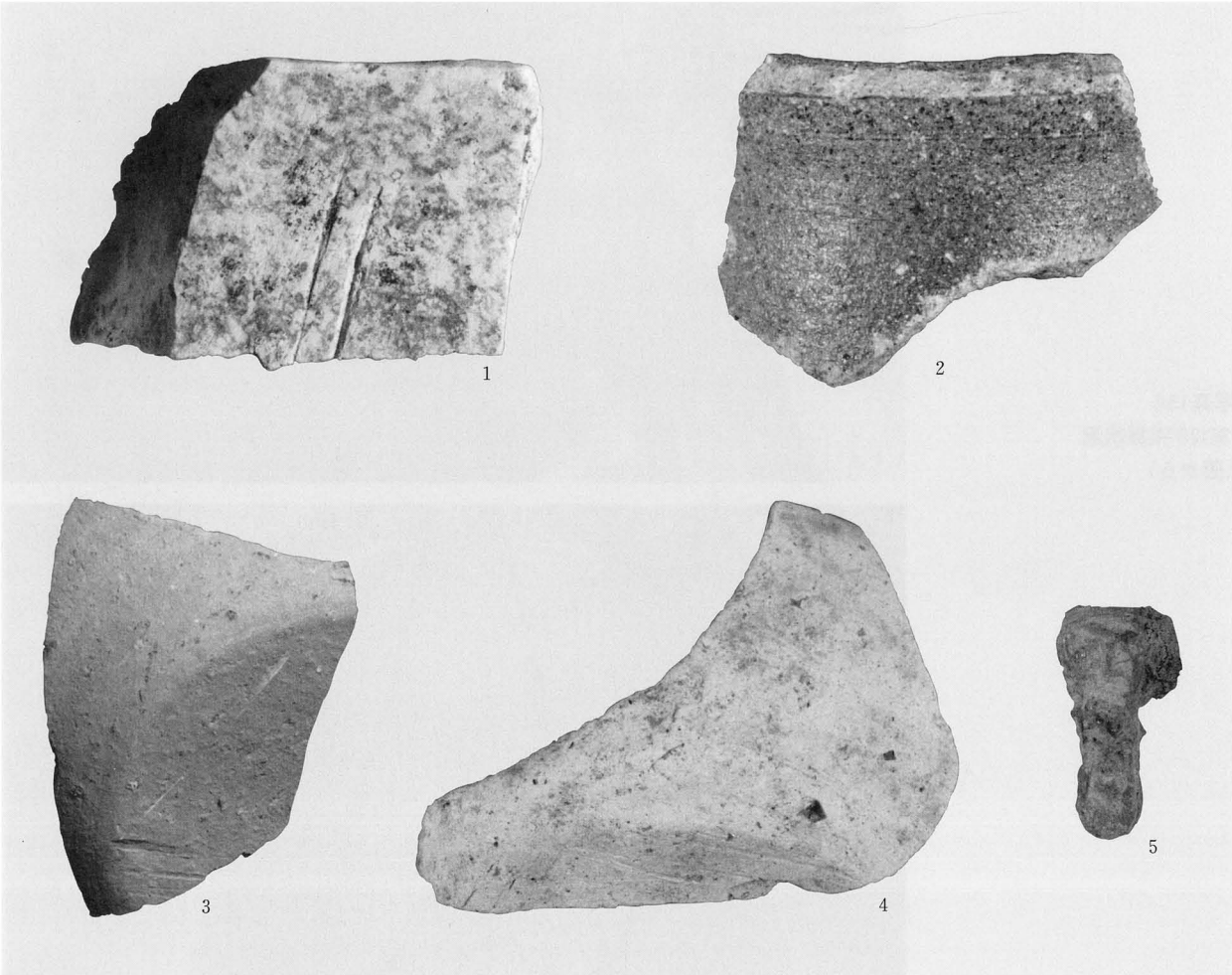


写真159　SD9・11・13・19 出土遺物　　1. SD 9　　2. SD11
3. SD13　　4・5 SD19

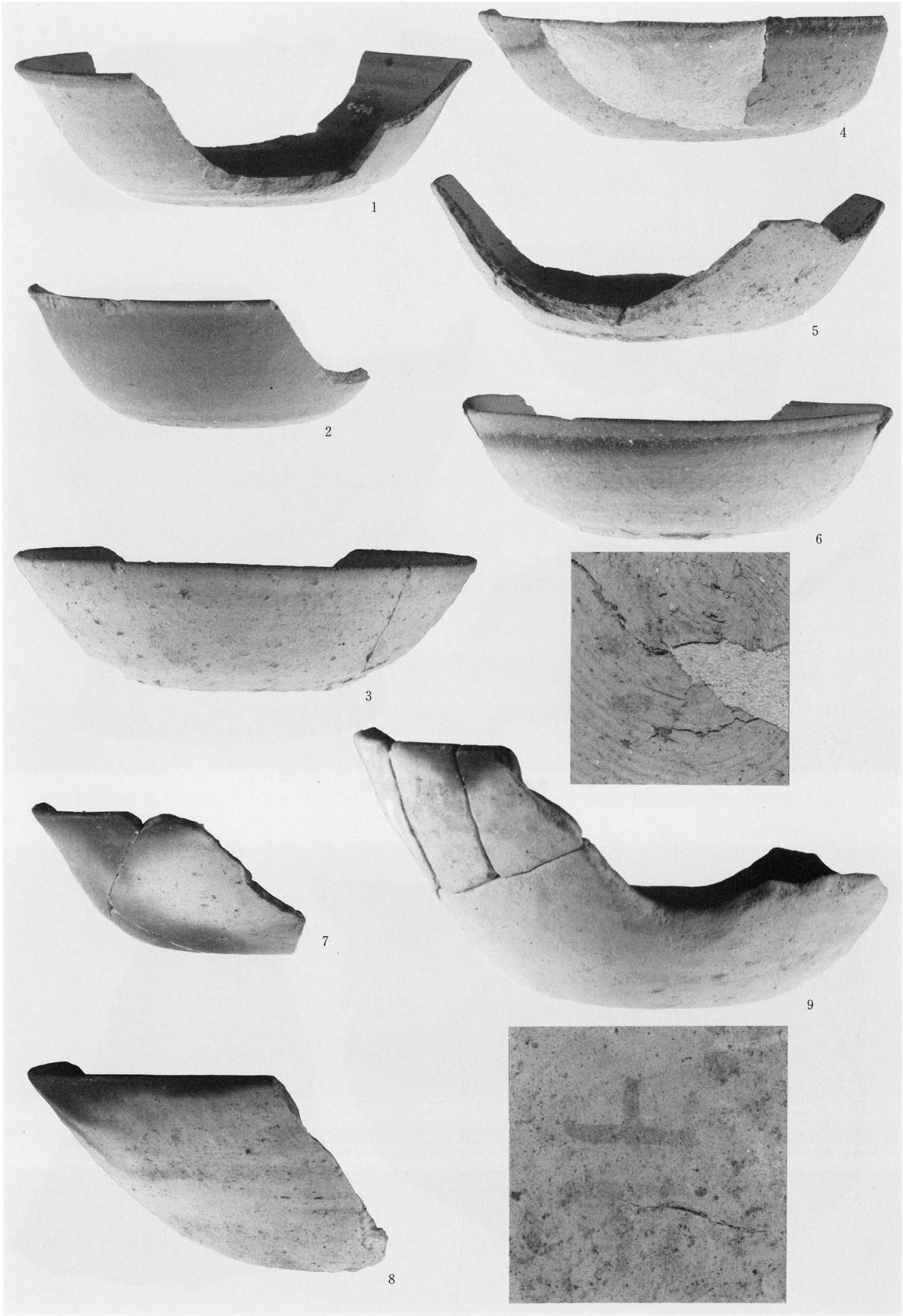


写真160　SK1 出土遺物（1）

写真161　SK1 出土遺物(2)

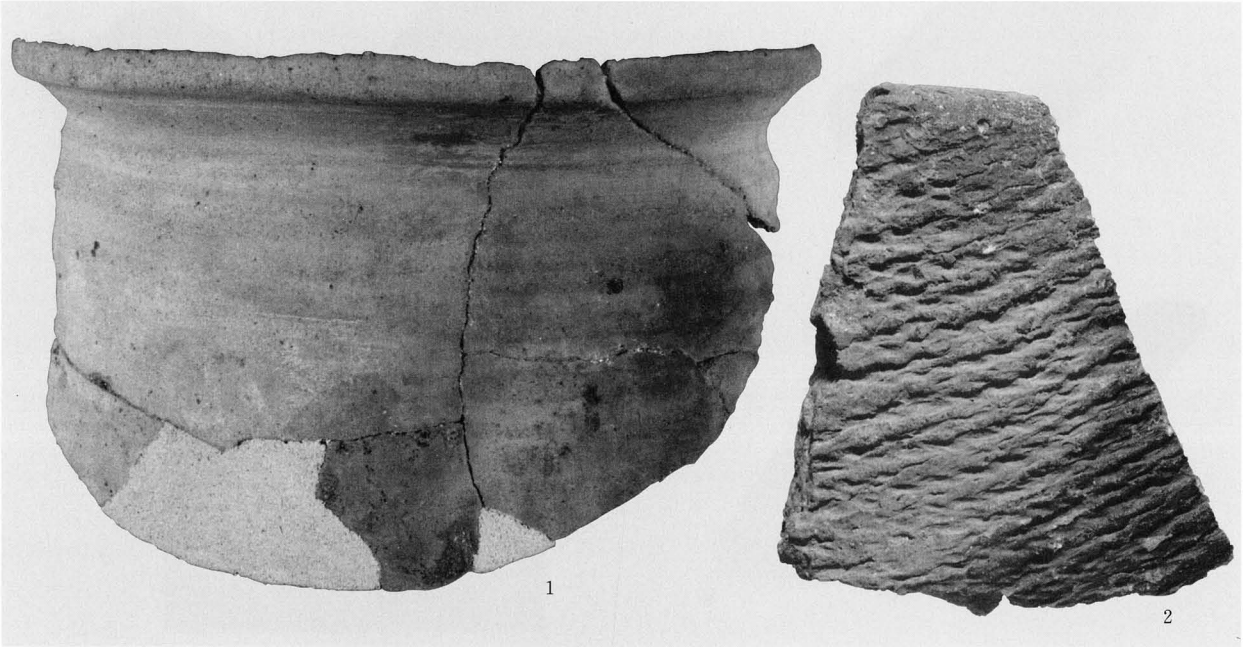


写真162　SK5・6 出土遺物　　1.SK5　　2.SK6

Ⅳ～Ⅹ層の遺物 4

写真163　SK10 出土遺物

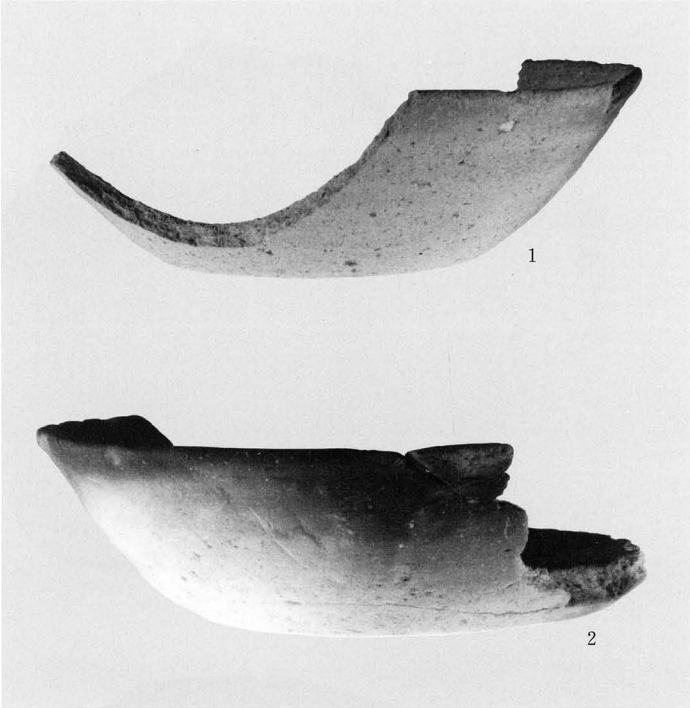


写真164　P5・P60 出土遺物　　1．P5
2．P60

Ⅴb・Ⅵa・Ⅶb・Ⅹ層の遺物

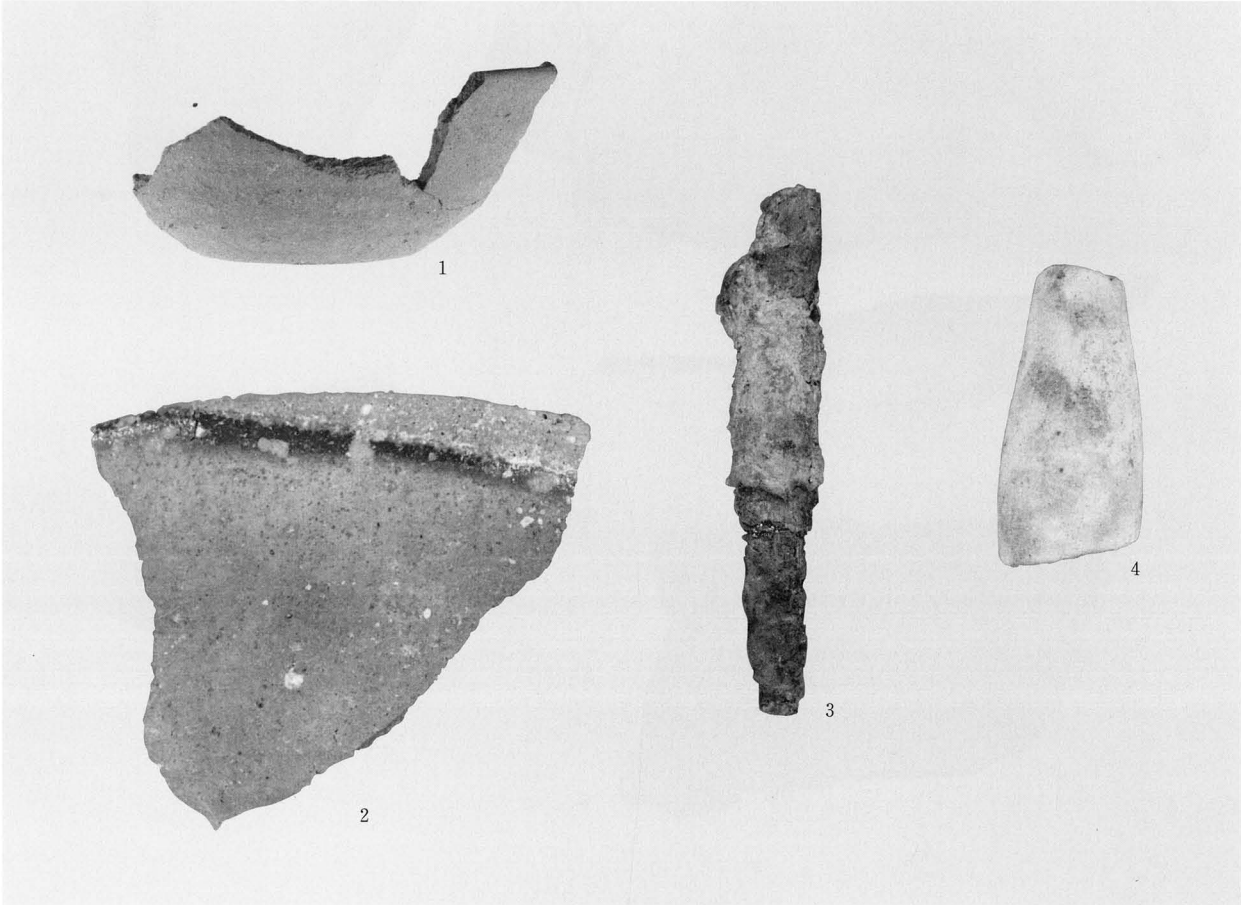


写真165　SB5 出土遺物

写真166　SI1 出土遺物

Ⅰ～Ⅹ層・その他の遺物

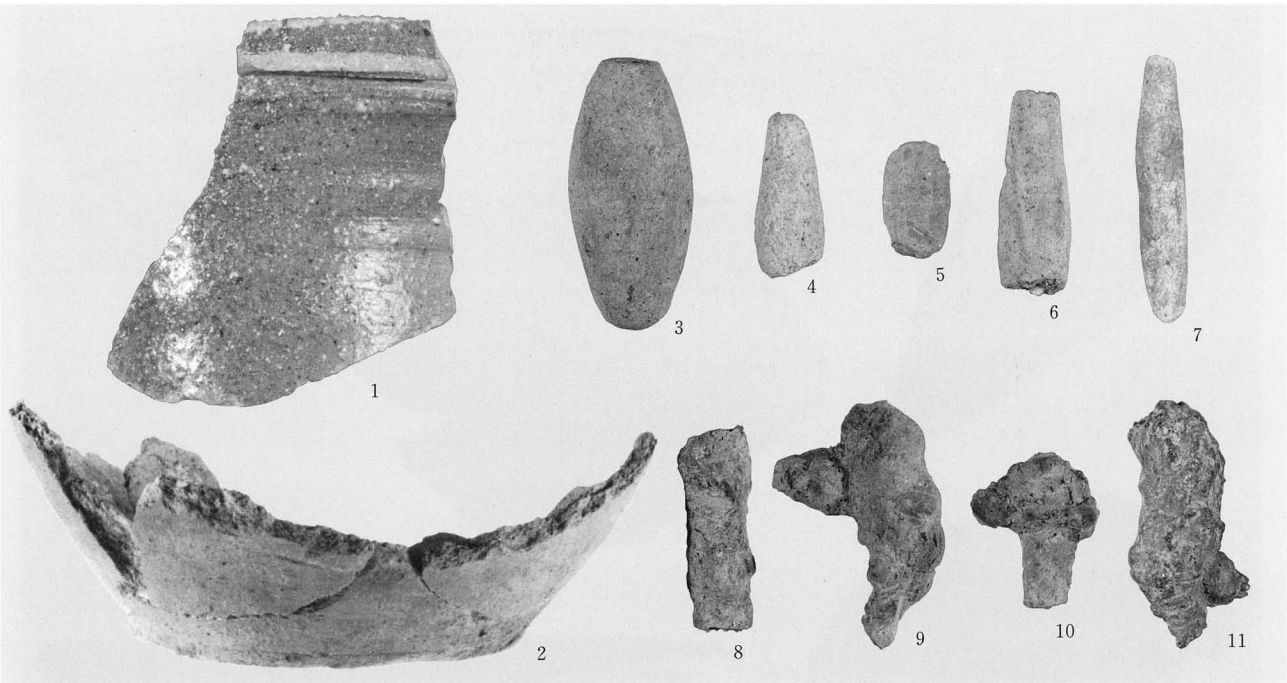


写真167　Ⅰ～Ⅳ層・その他の出土遺物

Ⅶａ１層の遺物

写真168　SD27 出土遺物

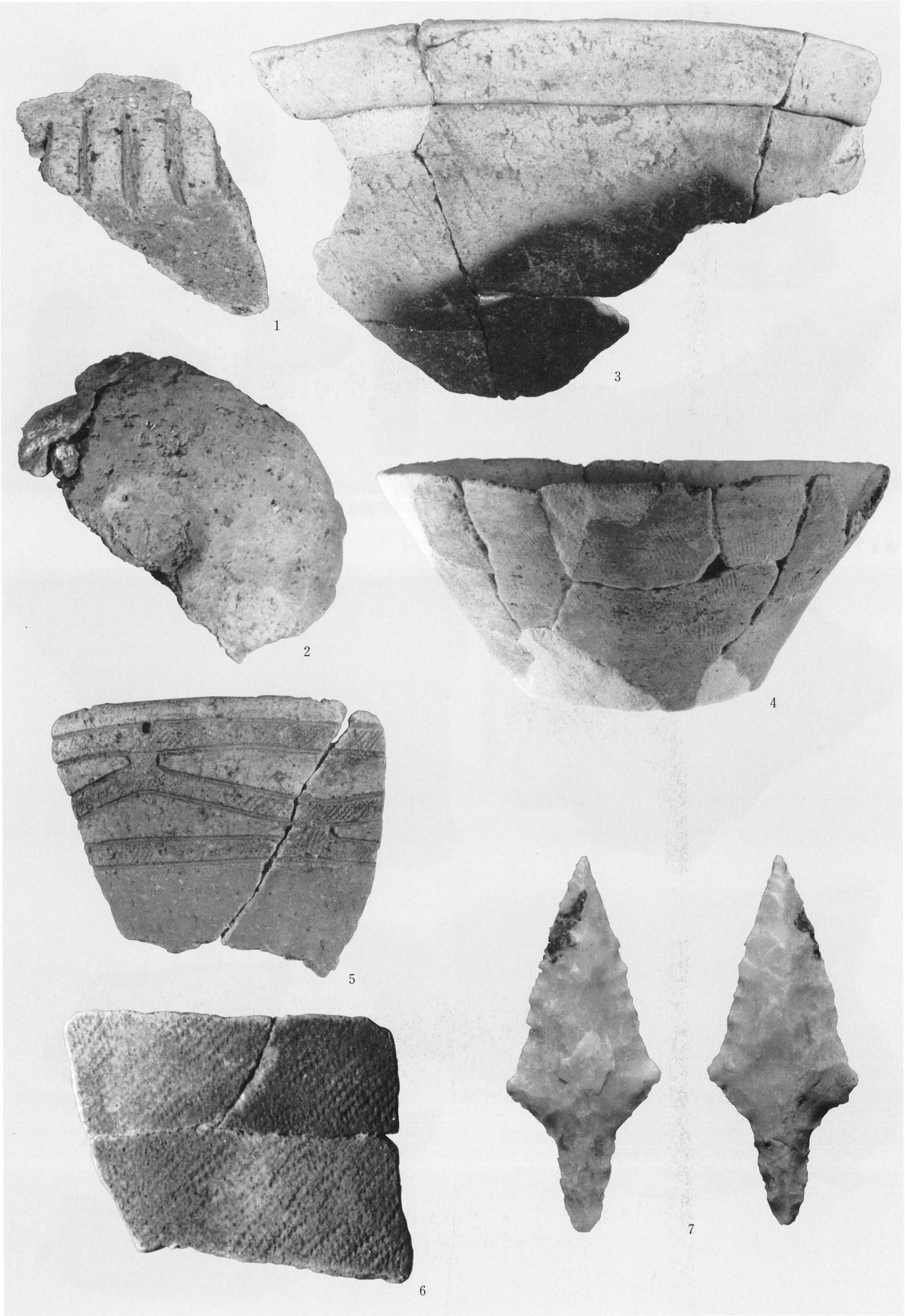


写真169　Ⅶb 層出土遺物

第２編　後河原遺跡第４次調査

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

平成９年、福仙興業株式会社によって、宅地造成の申請が出された。申請地は、後河原遺跡の範囲に隣接する地点に位置しており、遺構の続きが検出されることが予想された。そのため、協議を重ね平成10年３月に試掘調査を実施した。その結果、溝跡等の遺構が検出されたので本調査を行うこととなった。

第２節　調査要項

遺 跡 名：後河原遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－208、宮城県遺跡登録番号01273）
調 査 名：後河原遺跡第４次調査
所 在 地：仙台市太白区中田字後河原27－１、27－２
調査主体：仙台市教育委員会
調査担当：仙台市教育委員会　文化財課
　　担当職員　佐藤　洋　五十嵐康洋
調査期間：平成10年10月12日～11月18日
調査面積：約125㎡
発掘調査参加者

青木　吉次	浅見　禮子	阿部すえ子	阿部美枝子	阿部みのる	井筒　孝子
井深みつ子	大沼みさほ	小田嶋祥子	斎藤　慶子	佐藤とき子	菅井きみ子
須賀　栄子	鈴木　いし	竹森　光子	田中さと子	福山　幸子	山田千代子

整理作業参加者

相沢美佐子	佐藤　悦子	高橋　弘子	小泉　幸子	若生　洋子

第３節　遺跡の概要

地理的環境・歴史的環境

これらについては、詳しくは３次調査の第１章第３節を参照していただきたい。ただ、４次調査地点は微高地の縁辺に位置しており、微高地から後背湿地もしくは旧河道へと傾斜していく変換点にあたっていたことが調査の結果わかった。このことは遺構の検出、基本層位の認定において大きな影響を与えている。

第４節　調査方法

平成10年10月12日より現耕作土（基本層Ｉ層）を重機により排除し、宅地造成によって破壊される道路部分の計画に合わせて調査区を設定した（３次調査第３図）。今回の調査区は、後河原遺跡の範囲に隣接する地域であったが、試掘調査の結果遺構の分布が認められた地域である。また、今年度に調査を行った３次調査の北約50mの地点に位置している。調査区は東西約24m、南北約14m、幅約３ｍの「Ｔ」字状のものであり、調査の都合上調査区を「西区」、「中央区」、「東区」、「北区」と分けて調査を行った（第１図）。調査面積は、約125㎡である（第１図）。II層以下は人力による遺構検出に努めた。

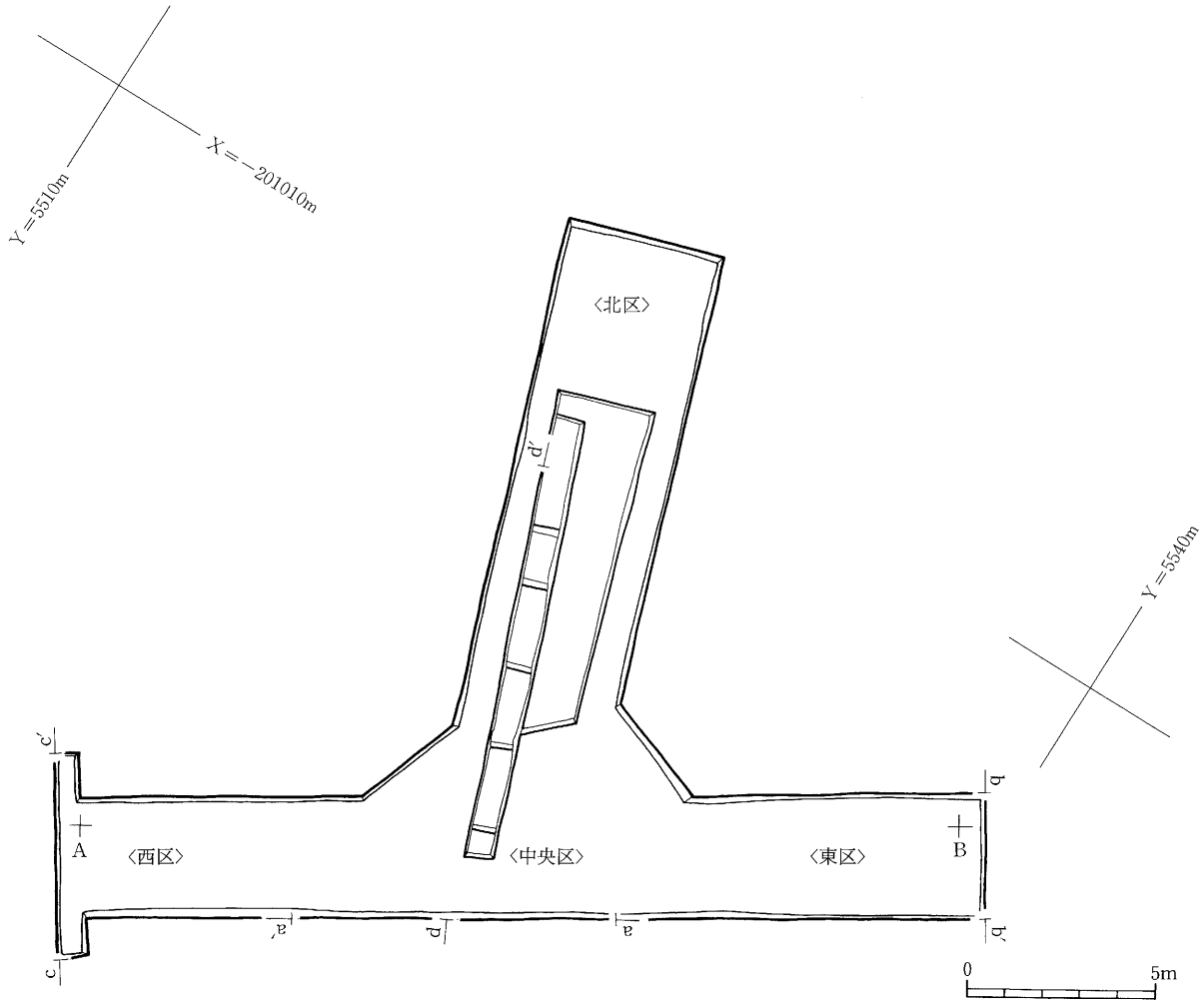
調査区内には測量用の基準杭（杭Ａ・Ｂ）を任意に設定し、その後杭Ａ・Ｂを国家座標（直角平面座標系Ｘ）に位置付けている（杭Ａ：Ｘ＝－201027.260m、Ｙ＝5519.305m　杭Ｂ：Ｘ＝－201015.664m、Ｙ＝5539.175m）。検

出した遺構については、随時１／40で図面の作成を行い、モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルム等で写真撮影を行い記録に努めた。すべての野外調査を終えたのは、11月18日である。

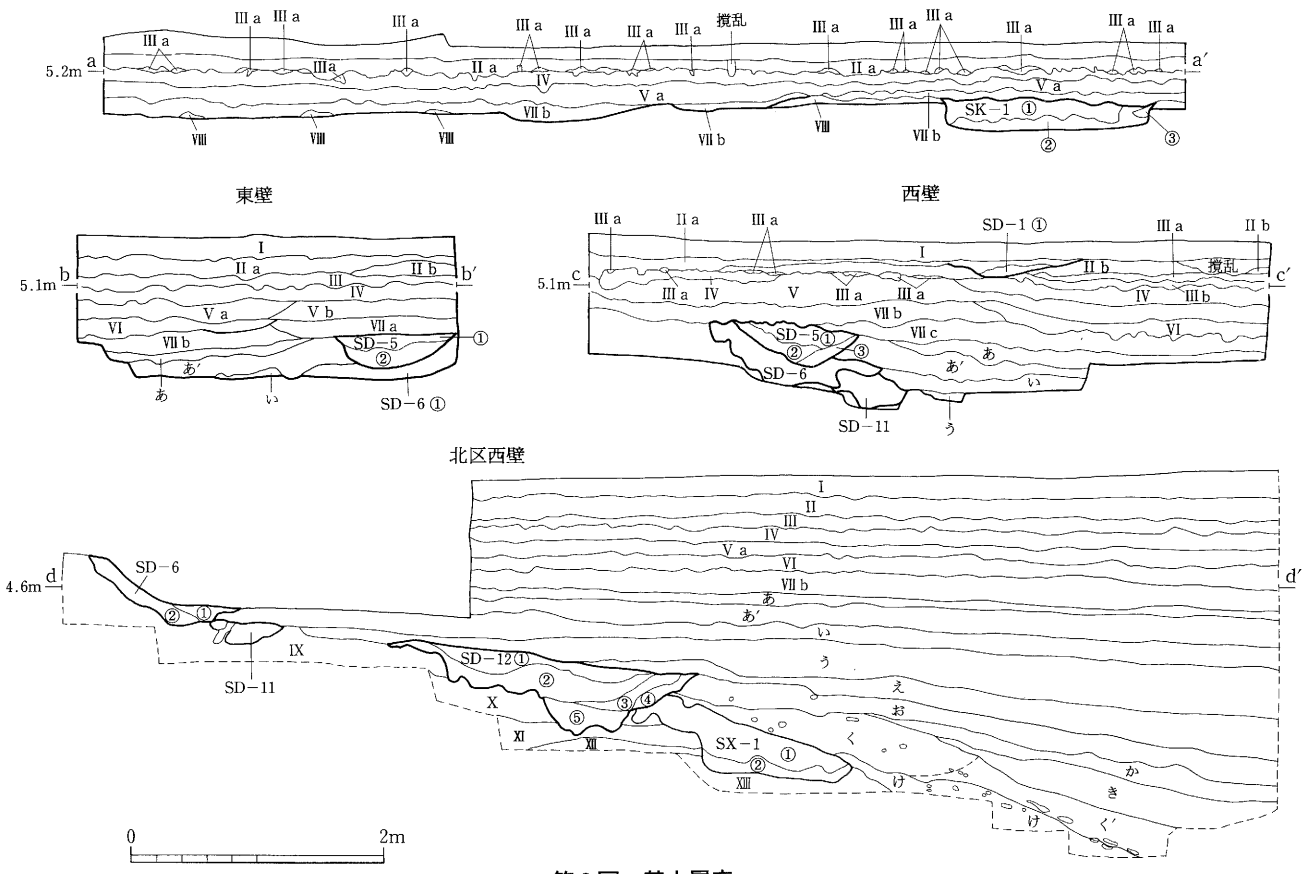
第５節　基本層序

基本層は調査区のほぼ全域にみられる層序で、大別13層、細別18層を数える（Ⅰ～XⅢ)。しかし、「北区」および深堀トレンチでは基本層にはみられない大別９層、細別11層の層序があり、これらの層序を基本層とは区別し微高地から旧河道にかけての傾斜部分にのみ堆積した層序と判断した（あ～け)。深堀トレンチで、標高約3.8mの「く」・「け」層から灰白色火山灰を検出している（第２図)。

層名	色	調	土性	特徴
Ⅰ　層	2.5 Y　3 / 3	暗オリーブ褐色	シルト質粘土	現代の水田耕作土
Ⅱａ層	2.5 Y　3 / 2	黒褐色	シルト質粘土	Ⅱａ層水田
Ⅱｂ層	2.5 Y　4 / 2	暗灰黄色	シルト質粘土	擬似畦畔にのみ分布
Ⅲａ層	2.5 Y　4 / 3	オリーブ褐色	シルト	



第１図　調査区設定図



第２図　基本層序

Ⅲｂ層	2.5 Ｙ　4 / 1	黄灰色	シルト	
Ⅳ　層	2.5 Ｙ　3 / 2	黒褐色	粘土	Ⅳ層水田
Ｖａ層	2.5 Ｙ　4 / 2	暗灰黄色	粘土	Ｖａ層水田
Ｖｂ層	2.5 Ｙ　4 / 2	暗灰黄色	シルト質粘土	部分的な分布
Ⅵ　層	2.5 Ｙ　3 / 2	黒褐色	粘土	主に調査区の南半部に分布、酸化鉄
Ⅶａ層	2.5 Ｙ　3 / 3	暗オリーブ褐色	シルト質粘土	
Ⅶｂ層	2.5 Ｙ　3 / 2	黒褐色	シルト質粘土	
Ⅶｃ層	2.5 Ｙ　3 / 1	黒褐色	粘土	
Ⅷ　層	2.5 Ｙ　5 / 3	黄褐色	シルト質粘土	
Ⅸ　層	2.5 Ｙ　5 / 3	黄褐色	粘土	細砂を多量に含む
Ｘ　層	2.5 Ｙ　4 / 2	暗灰黄色	砂	層の上面は粗砂
ＸＩ層	10 Ｙ　4 / 1	灰色	細砂	縞状に泥炭質粘土層を挟む
ＸＩＩ層	5ＧＹ　4 / 1	暗オリーブ灰色	粗砂	
ＸＩＩＩ層	2.5 Ｙ　3 / 2	黒褐色	泥炭質粘土	
あ　層	2.5 Ｙ　4 / 2	暗灰黄色	シルト質粘土	炭化物、酸化鉄を若干含む
あ′層	2.5 Ｙ　4 / 2	暗灰黄色	粘土	あ層よりも砂質分が少ない
い　層	10ＹＲ　4 / 2	灰黄褐色	粘土	炭化物、木片を少量含む
う　層	5ＧＹ　4 / 1	暗オリーブ灰色	粘土	¢１cm程のⅧ層ブロックを含む
え　層	5　Ｙ　2　/ 1	オリーブ黒色	粘土	

お　層	7.5 Y　2　/ 1	黒色	粘土	5GY4/1 粘土ブロックを多量に含む
か　層	2.5 Y　2　/ 1	黒色	粘土	5Y3/1 粘土ブロックを少量含む
き　層	10YR1.7 / 1	黒色	粘土	互層である。上部はかなり泥炭質である
	5 Y　3　/ 1	オリーブ黒色	粘土	
く　層	7.5GY 3　/ 1	暗緑灰色	粘土	強グライ化、層中に火山灰を含む
く′層	2.5 Y　3　/ 1	黒褐色	粘土	層下部に火山灰を帯状に含む
け　層	5 Y　4　/ 1	灰色	泥炭質粘土	未分解の植物を多量に含む

第２章　検出した遺構と遺物

第１節　調査の概要

検出した遺構は、調査区の制約もあり全容がはっきりとしないものが多い。遺構は、IIａ層、IV層、Ｖａ層で水田跡を検出した。また、VI層、VII層、VIII層で溝跡を検出した。前述したように傾斜の変換点に位置していることからVI層以下では北にむかい基本層にはあてはまらない層位が多くなる。そこで、「北区」に層位確認用の深堀トレンチを設定し地表から約３ｍまで掘り下げたが、湧水が激しくなったのでこれ以下の調査は断念した。

第２節　検出した遺構

（１）II層

IIａ層水田跡

IIａ層は、黒褐色のシルト質粘土層である。上層の水田耕作により削平され、層の遺存状況は良くない。畦畔も、既に削平されており、検出できたものは擬似畦畔Ｂ（斎野他1987）２条である。それと、擬似畦畔Ｂに挟まれる溝跡１条（ＳＤ１）である。

擬似畦畔Ｂ

擬似畦畔Ｂ２条は、いずれも東西方向で検出（Ｎ－60°－Ｅ）した（１・２）。１は、検出長約14mで、上端幅は１ｍ、下端幅は1.2m～1.4mである。しかし、東部分の一部は表土排除、および試掘の際に削平しており検出できなかった。２は、１と平行しており検出長約７ｍで、他の規模等は１と同様である。

水口と思われる部分を、１の途中で２箇所検出している。上端幅は、それぞれ50cm、60cmで、深さは２cm程である。堆積土は、上層のＩ層である。

水田区画に関しては、これら以外の擬似畦畔等が検出できなかったので不明である。

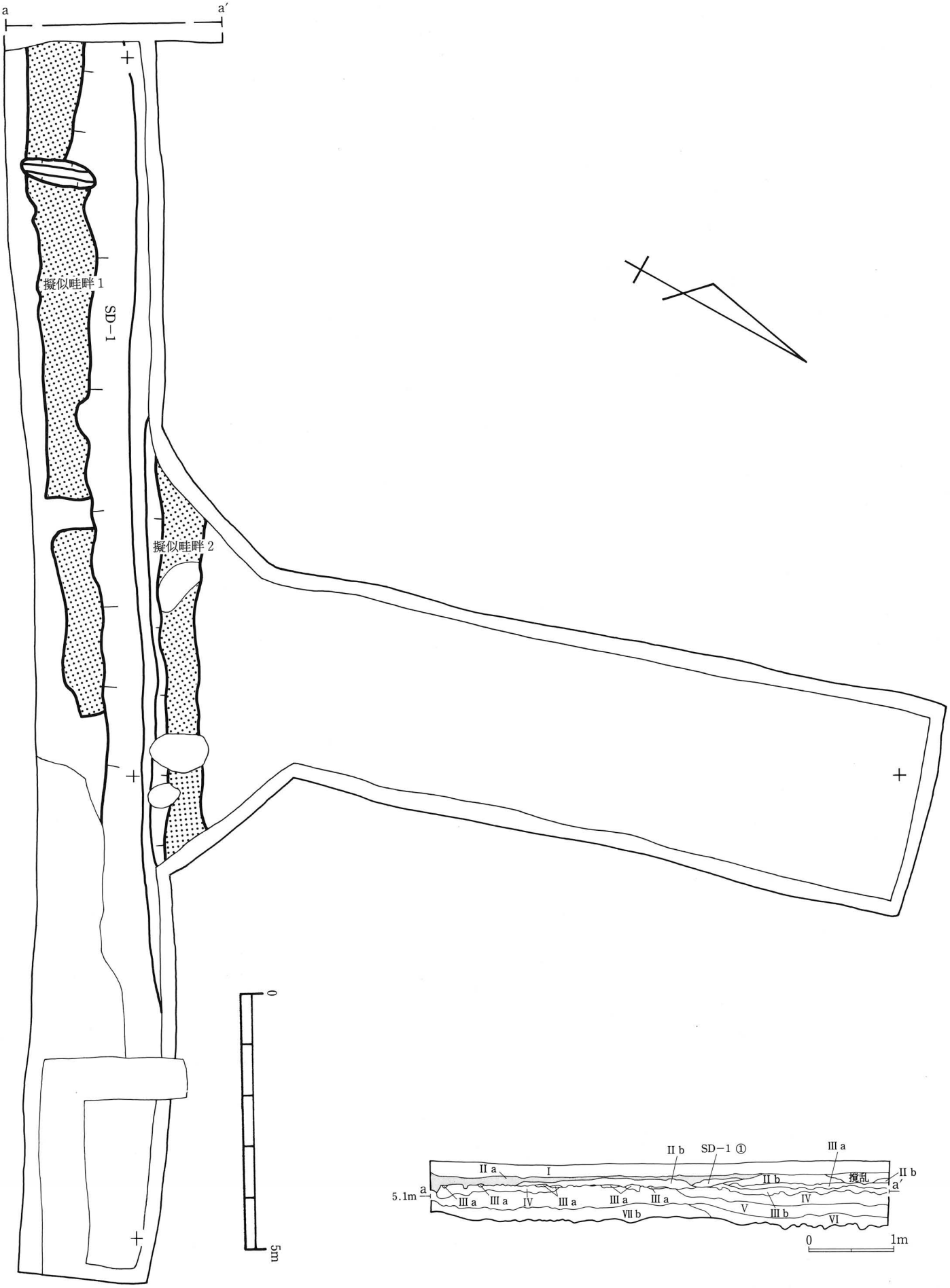
水田跡検出の遺物として、調査区の南壁付近で打ち込み杭（第10図14）を出土しているが、上層からの打ち込みの可能性も考えられる。また、作土中から瓦質土器（第10図７）を出土している。他には、写真図版で示したような陶磁器類が出土している。

ＳＤ１

ＳＤ１は、２条の擬似畦畔Ｂに挟まれる形に東西方向（Ｎ－60°－Ｅ）で検出した。これにより、ＳＤ１はIIａ層水田に伴う水路と理解した。検出長は、約19mである。上端幅は1.2m～1.4m、下端幅は20～40cmである。深さは５～10cmで、断面形は「皿」形である。底面は起伏があり一定しないが、大きくは東へ緩やかに傾斜している。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

（２）IV層

IV層水田跡



第３図　II a 層水田跡平面・断面図

Ⅳ層は、黒褐色の粘土層である。調査区の全域に分布し、層厚は10cm前後である。下面の乱れは少ない。畦畔１条と段差１段を検出した。また、畦畔の両側で足跡を検出している。

畦畔

畦畔は、東西方向で検出（Ｎ－60°－Ｅ）した。検出長は約20mで、上端幅は20～40cm、下端幅は80cmである。畦畔の高さは、残りの良好な部分で15cm程で、調査区の西に向かうに従い遺存状況は悪くなり５cm以下になるところもみられる。遺物は出土していない。

足跡は畦畔の両側で連続して検出し、特に畦畔の北側は残りが良く、13mに渡って「ハ」字状に連続している。２・３個掘ってみたが、足指の痕跡は確認できなかった。

段差

段差は、調査区の北区で検出（Ｎ－75°－Ｅ）したが、畦畔の方向とは若干のずれがみられる。遺存状況は余りよくなく比高差は２～３cm程である。本来はこの部分に畦畔があったものと考えられるが、削平されたものと思われる。

水田区画に関しては、南北方向の畦畔や段差も検出できなかったので詳細は不明である。ただ、畦畔の南北では比高差が大きく、これを境に北側に傾斜している。このために、水田区画内の比高差が大きくなると、段差を設けることにより修正をはかっていたものと考えられる。このことは、これ以前の水田跡でも同様の傾向がみられる。

（３）Ｖａ層

Ｖａ層水田跡

Ｖａ層は暗灰黄色の粘土層である。調査区の全域に分布し、層厚は20cm前後である。比較的下面は乱れている。畦畔１条と段差２段を検出した。畦畔の北側部分で、掘りすぎによりＶｂ層が露出してしまった部分（第５図スクリーントーン部分）があるが、基本的には北に向かうに従い10cm程の比高差をもって傾斜していることがわかる。この傾斜の変換点に段差が取りついている。

畦畔

畦畔は、東西方向で検出（Ｎ－75°－Ｅ）した。検出長は約20mで、上端幅は70cm～1.4m、下端幅は1.2～２mである。畦畔の高さは、あまり遺存状況が良くなく２～４cmである。また、畦畔にはこれに取りつき南北方向に延びると思われる畦畔の一部が２条確認できたが、いずれも20cm以上の延びは検出できなかった。

段差

段差１は、東西方向で検出（Ｎ－60°－Ｅ）し、検出長は約3.4mでやや湾曲している。比高差は２cmである。段差２も、東西方向で検出（Ｎ－62°－Ｅ）し、検出長は約3.2mで直線的である。

水田区画に関しては、畦畔と段差の間隔が一定でなかったり、南北方向の畦畔もはっきりとしないので不明である。

遺物は、弥生土器、動物の歯（馬？）、焼骨（人骨の可能性）等が出土しているが、図示できるものはない。

（４）Ⅶａ層

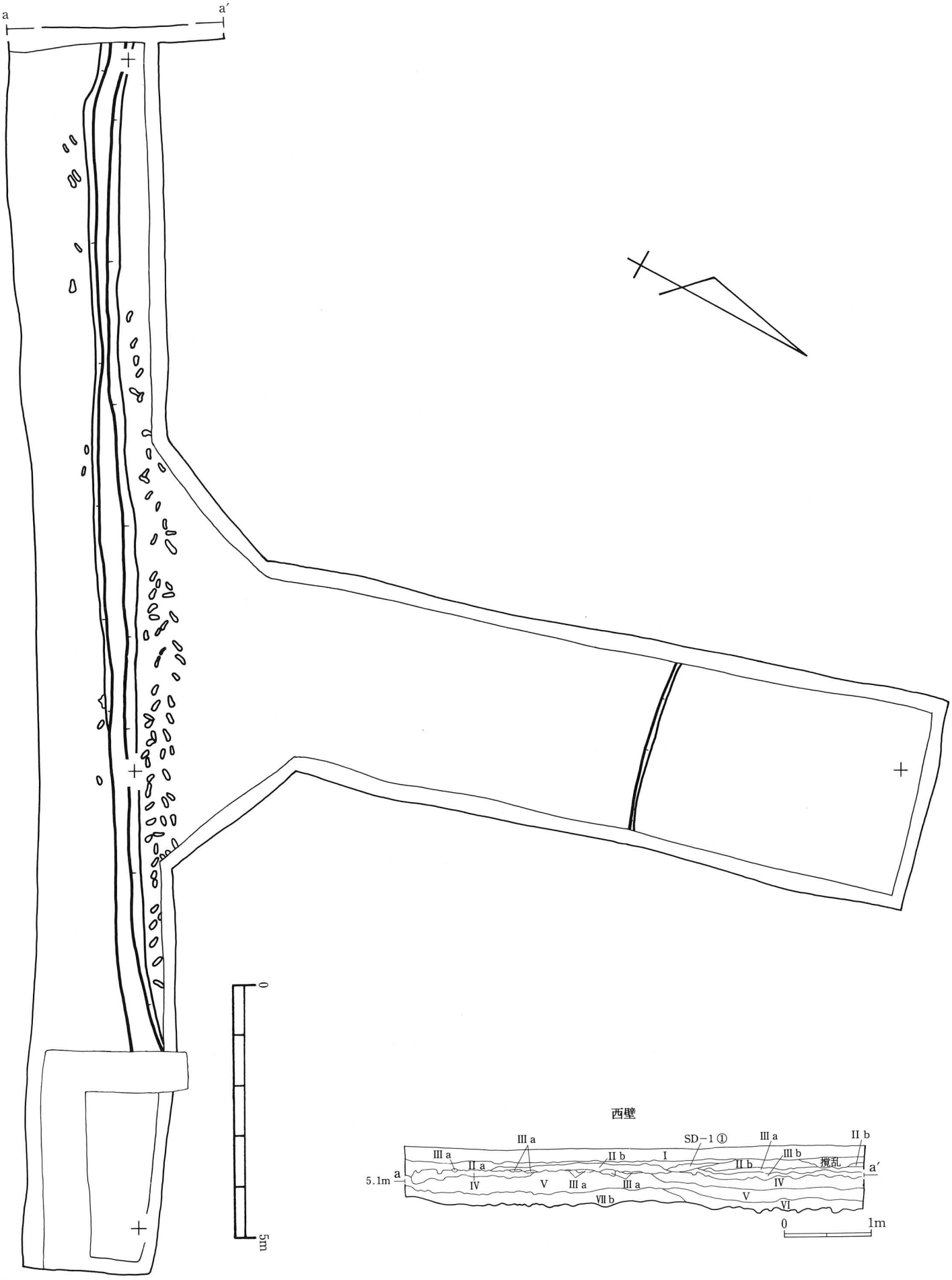
Ⅶａ層は暗オリーブ色のシルト質粘土層である。調査区の南半部に分布し、層厚は10cmである。溝跡１条と段差１段を検出した。

段差

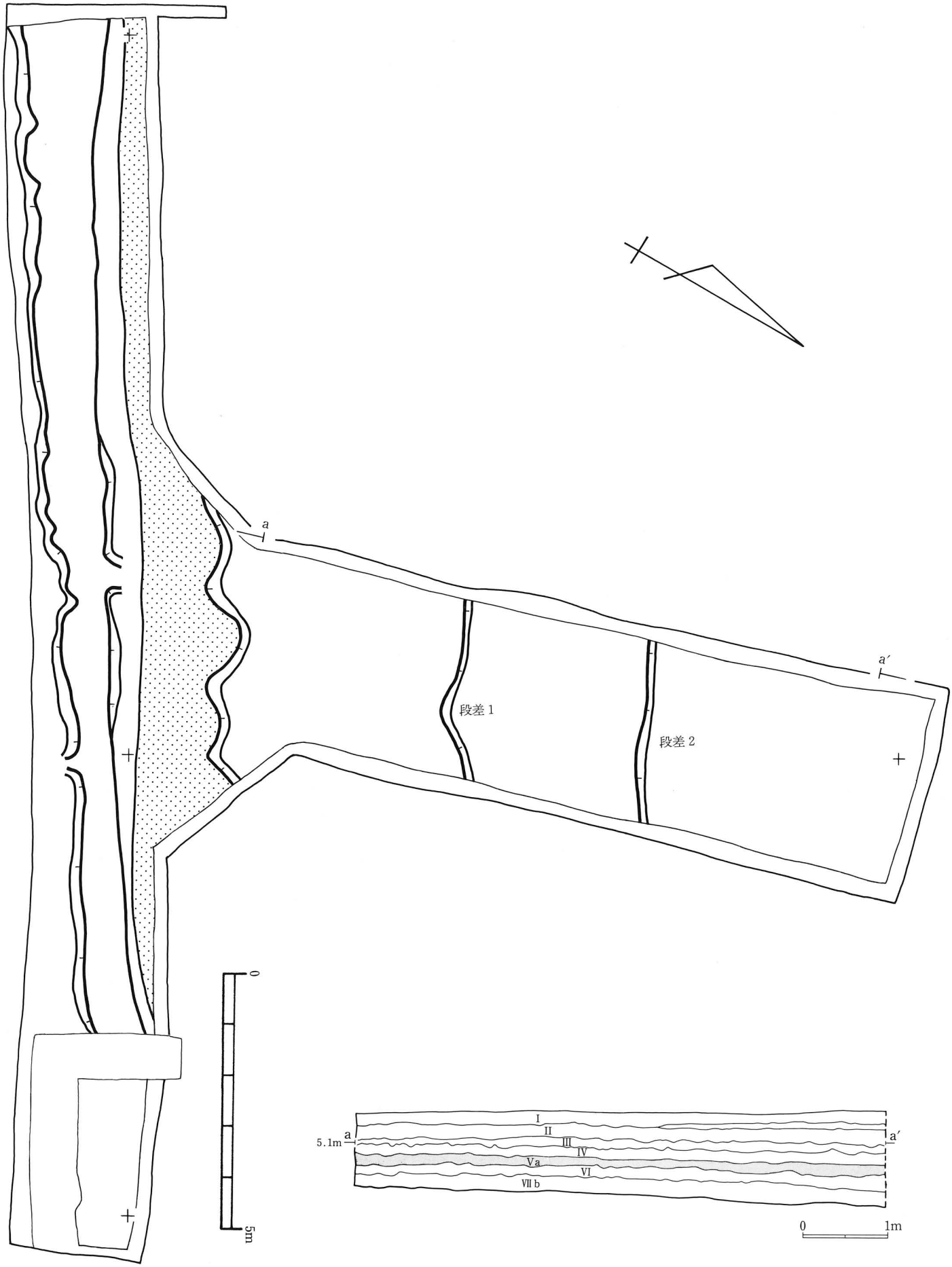
段差は、調査区の南壁から1.8m離れたところで検出した。比高差は30cmで、1.2～1.4mぐらいの平場を持ち、そこから先は北に向かいさらに下がっている（この平場上でＳＤ２を検出した）。

ＳＤ２

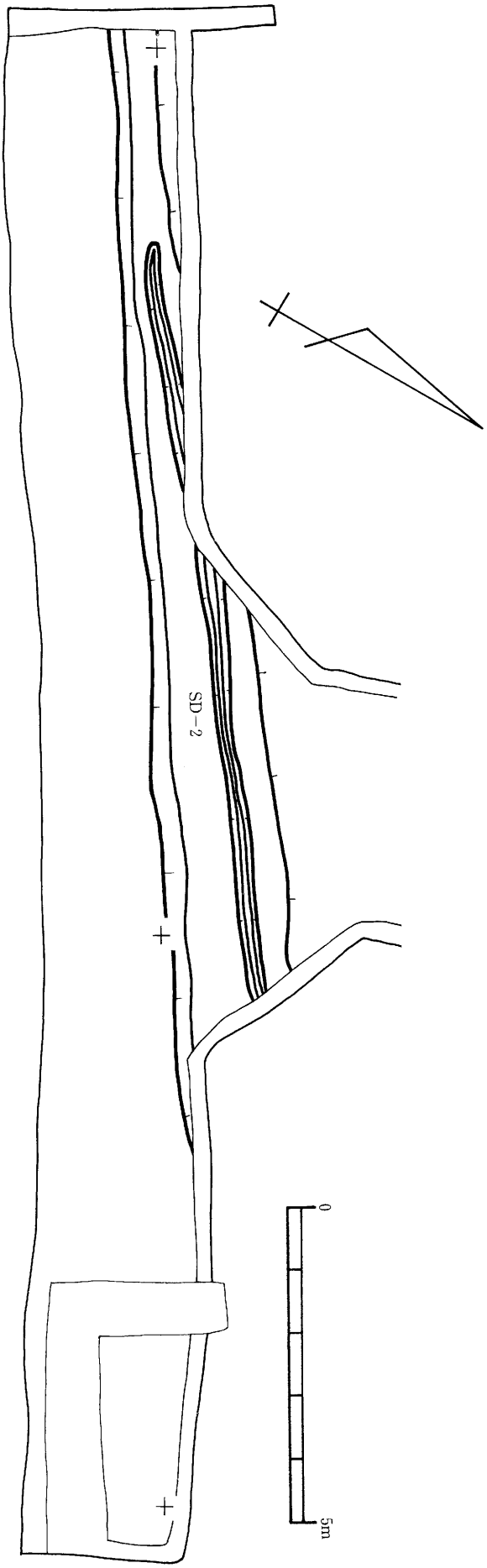
東西方向で検出（Ｎ－80°－Ｅ）し、検出長は12mで、調査区の西端までは延びていない。上端幅は20～40cm、



第４図　Ⅳ層水田跡平面・断面図



第５図　Ｖａ層水田平面・断面図



第６図　Ⅶａ層上面

下端幅は10cmである。深さは２cmで、断面形は「皿」形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は１層で、基本層のⅥ層が堆積している。遺物は出土していない。

（５）あ層

Ⅶｂ層は、黒褐色のシルト質粘土層である。この層位あたりから平面的に精査をしていくと、調査区の北部には旧地形にのみ堆積している層序が現れてくる。遺構を検出したのは、「あ」層上面である「あ」層は暗灰黄色のシルト質粘土である。溝跡３条（ＳＤ３～５）と土坑１基（ＳＫ１）を検出した。これらの遺構の重複関係は、ＳＤ４がＳＤ５を切っている。また、ＳＫ１をＳＤ３が切っている。ＳＤ３とＳＤ４との間には重複はなく、同時に存在していたものと考えられる。ＳＤ５とＳＫ１とをみた場合、両者にも直接的な重複はなく新旧関係はつかめない。しかし、平面的にみるとＳＤ５がこの面では一番古いものであろう。

ＳＤ３

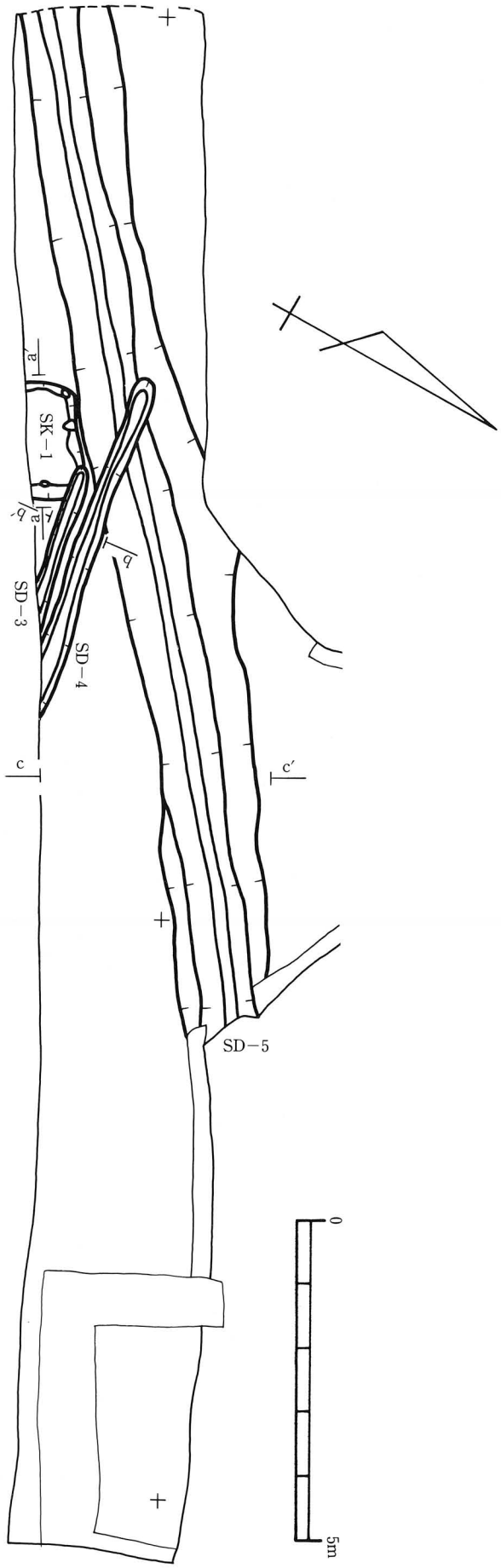
東西方向で検出（Ｎ－80°－Ｅ）し、検出長は４ｍ程である。上端幅は60cmで、下端幅は10cmである。深さは５cmで、断面形は開いた「Ｕ」字形である。底面は北に向かって低くなっている。堆積土は１層で基本層のⅦｂ層が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＤ４

東西方向で検出し、ＳＤ３に平行している。検出長は9.4mである。上端幅は60～70cm、下端幅は10cmである。深さは５cmで、断面形はＳＤ３と同様に開いた「Ｕ」字形である。底面の様子、堆積土共にＳＤ３と同様である。遺物は少なく、図示したものは木製品（第10図12）である。

ＳＤ５

東西方向で検出（Ｎ－46°－Ｅ）し、検出長は16mで直線的である。上端幅は1.6～1.9m、下端幅は20cmである。深さは40cmで、断面形は北に緩く傾斜の変換点を持つが、開いた「皿」形である。底面はやや凹凸があるが、全体的には東に傾斜している。堆積土は３層で、自然堆積である。遺物は弥生土器、土師器、石製品（砥石）、焼骨（人間の頭蓋骨？）、歯（人間）等が出土している。このうち図示したものは、土師器（第10図４）・石製品（第10図11）である。



ＳＫ１

平面形は、さらに調査区外へ延びているので全容ははっきりしないが、ほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。長軸長は3.5m、短軸長は1.6m である。深さは30cmで、壁は角度を持って立ち上がる。堆積土は２層で、Ⅷ層がブロック状に入り人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

（６）Ⅷ層・「い」層

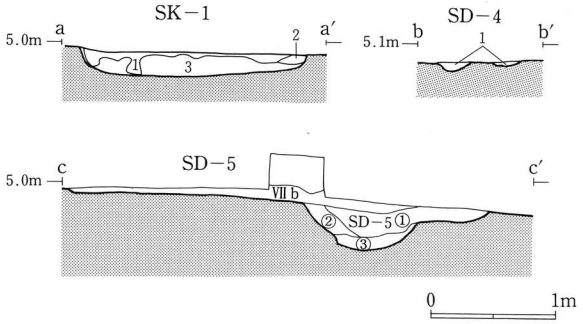
Ⅷ層は黄褐色のシルト質粘土層である。「い」層は灰黄褐色の粘土層である。Ⅷ層・「い」層上面で溝跡５条（ＳＤ６～10）と土坑１基（ＳＫ２）を検出した。これらの遺構の重複関係は、ＳＤ６とＳＤ７～10とは同時期に存在していたと考えられる。次に、ＳＤ６はＳＫ２を切っている。また、ＳＤ８とＳＫ２は接しているが、直接的な重複はみられない。しかし、他の遺構との関係から考えると、ＳＤ８が新しいものと思われる。

ＳＤ６

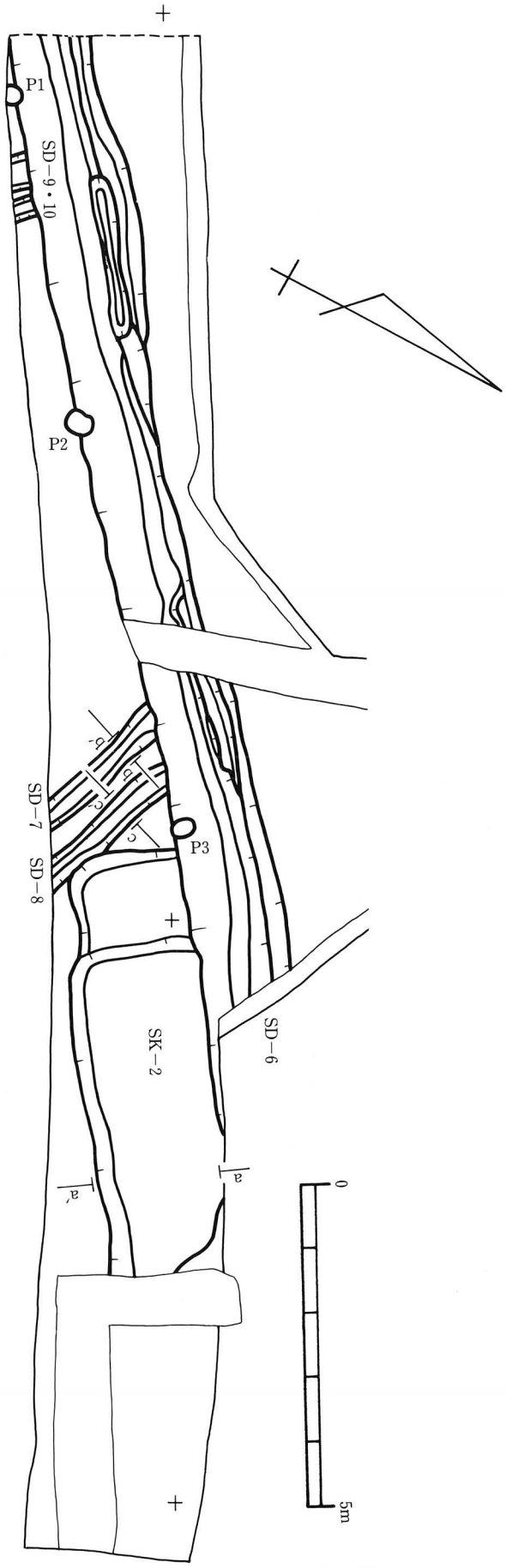
東西方向で検出（Ｎ－48°－Ｅ）し、検出長は15m である。上端幅は1.2～1.3m、下端幅は10cmである。深さは50cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は１層である。遺物は、馬の歯、須恵器等が出土している。図示したのは須恵器（第10図１）である。南辺に３基のピット（以下Ｐと略す）を検出した。Ｐ１・２間の間隔は5m で、Ｐ２・３間は6.4m とやや広い。平面形はいずれも30～40cmの円形で、深さがＰ１：40cm、Ｐ２：20cm、Ｐ３：50cmである。

ＳＤ７

北西方向で検出（Ｎ－45°－Ｗ）し、検出長は2.8m である。上端幅は50cm、下端幅は10～20cmである。深さは



第７図　SD－３・４・５　SK－１平面・断面図



3 cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のⅧ層である。遺物は出土していない。

ＳＤ８

北西方向で検出（Ｎ－45°　－Ｗ）し、検出長は３ｍである。上端幅は50cm、下端幅は15～20cmである。深さは３cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のⅧ層が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＤ９

北西方向で検出（Ｎ－14°　－Ｗ）し、検出長は30cmである。上端幅は56cm、下端幅４cmである。深さは３cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のⅧ層である。遺物は出土していない。

ＳＤ10

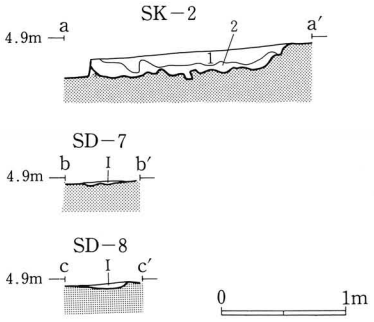
北西方向で検出（Ｎ－16°　－Ｗ）し、検出長は40cmである。上端幅は34cm、下端幅15cmである。深さは３cmで、断面形は「皿」形である。底面は平坦である。堆積土は基本層のⅧ層である。遺物は出土していない。

ＳＫ２

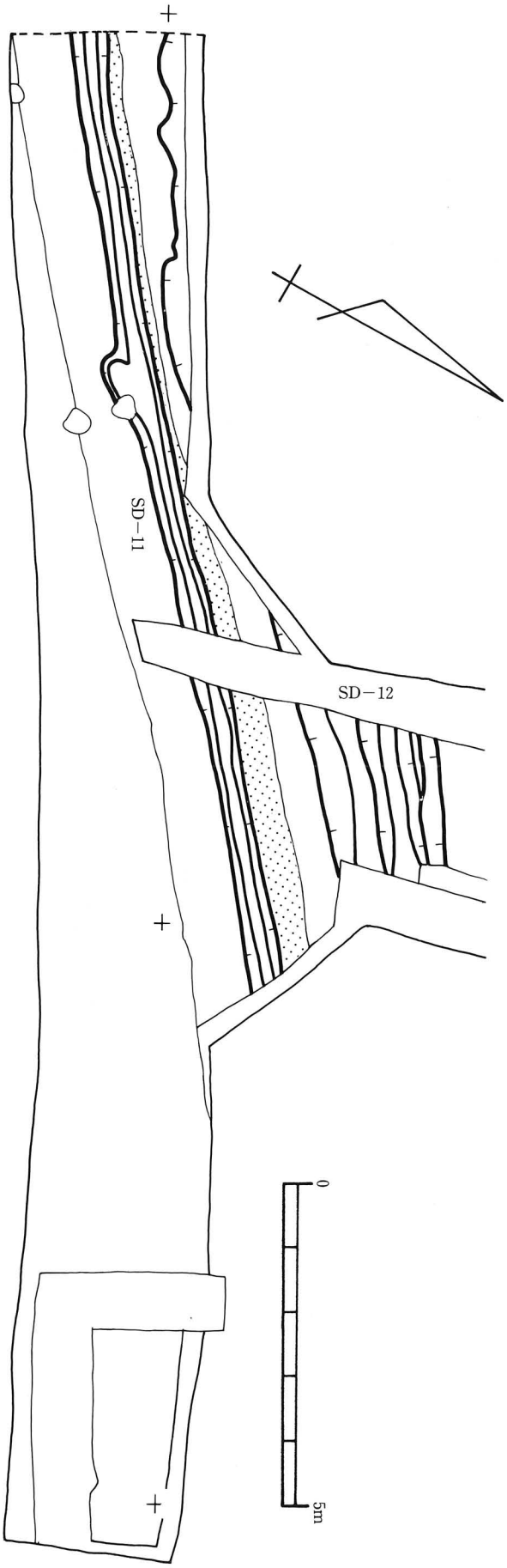
調査区の東部分で検出したが、ＳＤ６に切られており全体の形ははっきりとしない。また、試掘トレンチによってすでに失われた部分もある。検出できた部分での大きさは、長軸長約6m、短軸長約3mで隅丸長方形の平面形を呈し、西側に段を持っている。堆積土は２層で基本層Ⅷ層が上部に堆積している。遺物は弥生土器、土師器等が出土しているが、図示できるものはない。

（７）Ⅷ層・「お」層

Ⅷ層と「お」層上面で溝跡２条（ＳＤ11・12）と性格不明遺構１基（ＳＸ１）を検出した。これらの遺構の重複関係は、ＳＤ12がＳＸ１を切っている。



第８図　SD－６・７・８・９・10　SK－２平面・断面図



第９図　SD－11・12平面図

ＳＤ11

東西方向で検出（Ｎ－50°　－Ｅ）し、検出長は15.8mである。上端幅は40～50cmで、下端幅は10～20cmである。深さは12cmで、断面形は「Ｕ」字形である。底面は、凸凹しており傾斜は一定ではない。堆積土は１層で、基本層のⅧ層をブロック状に含んでいる。遺物は、土師器、須恵器等が出土している。図示したのは、須恵器甕？体部（第10図９）である。

ＳＤ12

深堀トレンチで確認しているので規模等の詳細は断定できないものが多い。調査区の西で、北側に下がる傾斜を検出しており、これがＳＤ12の延長である可能性も考えられる。ここまで延びた場合検出長は、約13mになる。トレンチ部分での確認状況は、方向はＮ－50°　－Ｅで、検出長は2.4m、上端幅は1.8m、下端幅は80～90cmになる。深さは70～90cmで、断面形は南側に段を持ち起伏のみられる「Ｕ」字形である。底面は、湧水が多くはっきりしないがほぼ平坦であると考えられる。堆積土は５層で、樹木片や基本層Ⅷ層のブロックを含んでいる。遺物は土師器、須恵器、種子等が出土している。図示したのは、須恵器坏（第10図６）である。

ＳＸ１

ＳＸ１は、深堀トレンチの断面で確認した遺構で平面的には確認できなかった。遺物等も出土せず詳細は不明である。

第３節　出土遺物

遺構から出土した遺物は第10図に示したとおりである。この他に、遺構に伴わず基本層中から弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、古銭等が出土している。しかし、遺構出土の遺物同様に細片が多く図示できるものは少ない。そのうち、主な陶磁器については、写真図版に掲載してある。

第４章 まとめ

（１）今次調査区は、微高地の縁辺から後背湿地もしくは谷地形に傾斜していく地形の変換点に位置していることがわかった。

（２）検出した遺構は、Ⅱａ層、Ⅳ層、Ⅴａ層で畦畔（擬似畦畔Ｂを含む）と段差、溝跡である。Ⅶａ層で土坑１基と溝跡１条、「あ」層で土坑１基と溝跡３条を検出した。Ⅷ層・「い」層で土坑１基と溝跡５条、Ⅷ層・「お」層で溝跡２条と性格不明遺構１基を検出した。

（３）Ⅱａ層から出土した遺物は、陶磁器、瓦質土器、自然遺物（種子）等である。このうち、年代のわかる陶磁器をみると、14世紀から18世紀にかけてのものがみられる。Ⅱａ層水田跡は近世（17世紀後半以降）に位置付けられる。

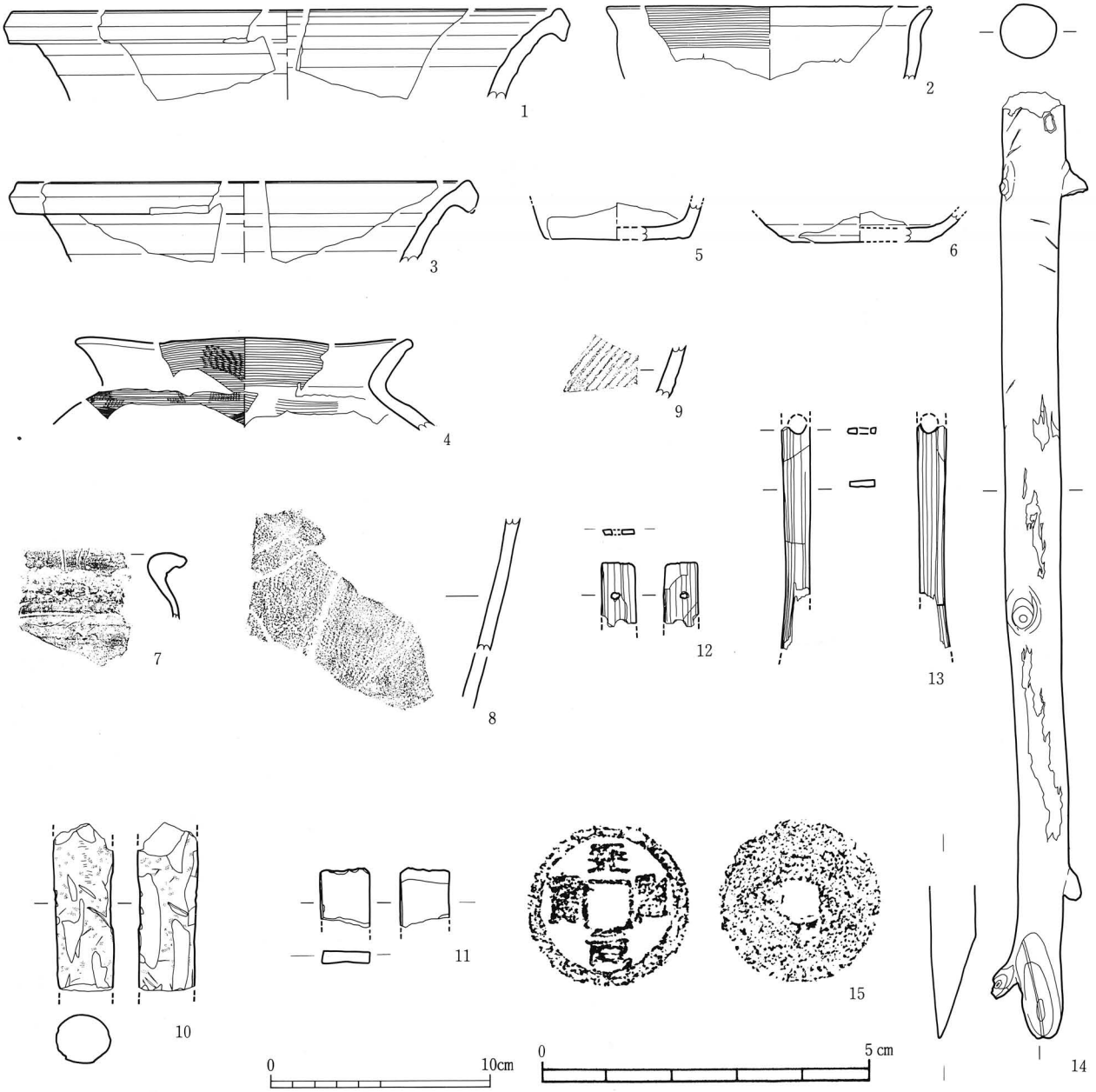
（４）Ⅳ層から出土した遺物は、磁器、自然遺物（種子）等である。このうち、年代のわかるものは肥前産の白磁のみである（17世紀から18世紀）。これ１点のみで年代を決定することは難しいが、Ⅳ層水田跡も近世（17世紀以降）と位置付けることが妥当であろう。

（５）Ⅴａ層から出土した遺物は、弥生土器、陶器、自然遺物（動物骨、種子）等である。このうち、年代のわかるものは、在地産と考えられる陶器である（13世紀～14世紀頃）。Ⅴａ層水田跡は中世（Ⅵ層中から初鋳年1023年の「天聖元宝」が出土しているので、すくなくともこれよりは新しい）と位置付けられる。

（６）Ⅶａ層で検出した溝跡は、遺物が出土していないことから年代は判断できないが、層位の関係からみて古代から中世（どちらかと言えば中世に近いか）にかけての時期といえよう。

（７）「あ」層とⅧ層・「い」層で検出した溝跡は方向・規模ともに似ている点が多いので時期的には近接した時期のものであろう。これらの溝跡の機能を考えた場合東西方向に比較的幅の広い溝を作り、これに接続する形で平行する２本１単位の溝を取り付けている。主水路とそこから水を給排水するために設けた水路の可能性が考えられよう。これらの溝跡の時期であるが、やはり年代を決定するような遺物の出土はみられず、上下の層位との関係から見て古代から中世にかけての間におさまるものと考えられる。

（８）Ⅷ層・「お」層で検出した溝跡は、出土遺物や灰白色火山灰（仙台平野において、10世紀初頭に降下したものと同様のものと考えられる）を含む層を切っていることから平安時代頃（火山灰降下以降）に属するもの考えられる。また、性格不明遺構は、大きくは平安時代に属するが、これらの溝跡や灰白色火山灰を含む層の下位に位置することからこれらよりは古いものと考えられる。



図版番号	遺構・層位	種　別	内　面	外　面	法　量			備　考	写真図版
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第10図－１	ＳＤ６	須恵器	ロクロ	ロクロ	(25)	—	—		17－１
第10図－２	Ⅷ層	弥生土器？		ヨコナデ	(14.8)	—	—		17－６
第10図－３	あ層	須恵器	ロクロ	ロクロ	(20.6)	—	—		17－３
第10図－４	ＳＤ５	土師器	ヨコナデ、ヘラナデ	ハケメ、ヨコナデ	(15.4)	—	—		17－７
第10図－５	Ⅶａ層	弥生土器			—	(6.2)	—		
第10図－６	ＳＤ12	須恵器	ロクロ	ロクロ	—	(6.2)	—		
第10図－７	Ⅱａ層	瓦質土器	ロクロ	ロクロ	—	—	—		17－２
第10図－８	Ⅶｂ層	弥生土器		単節ＬＲ	—	—	—		17－５
第10図－９	ＳＤ11	須恵器	当て具痕	平行タタキ	—	—	—		17－11

図版番号	遺構・層位	種　別	特　徴	石材・材質	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径(cm)	写真図版
第10図－10	Ⅶａ層	石製品	柱状石斧の破片？	流紋岩	75.6	(7.6)		径：(2.7)	17－８
第10図－11	ＳＤ５	石製品	砥石（荒砥）	安山岩	3.8	(2.7)	2.2	0.6	17－15
第10図－12	ＳＤ４	木製品			—	(2.95)	1.6	0.2	17－９
第10図－13	Ⅲ層	木製品	上下欠損、孔内面焼け？		—	(10.2)	1.3	0.3	17－10
第10図－14	Ⅱａ層	木製品	先端を斜めに加工		—	43.2		径：2.5	17－14
第10図－15	Ⅵ層	金属製品	北宋銭「天聖元宝」初鋳年1023年	銅	2.7			径：2.6	17－16

第10図　出土遺物

写真１　Ⅱａ層水田検出状況（西より）

写真２　Ⅱａ水田確認状況（西より）

写真３　Ⅳ層水田検出状況（西より）

写真４　Ⅳ層水田確認状況（西より）

写真５　Ⅳ層水田足跡（南より）

写真６　Ｖａ層水田確認状況（西より）

写真７　SD3･4･5 SK-1 完掘全景（西より）

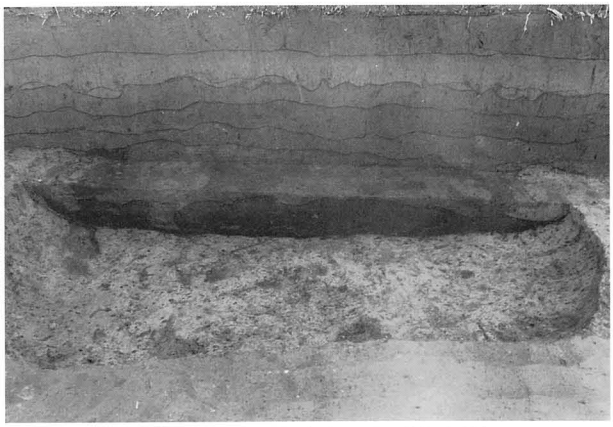


写真８　SK-1 セクション（北より）

写真９　SD-6～10完掘全景（西より）

写真10　SD-12完掘全景（西より）

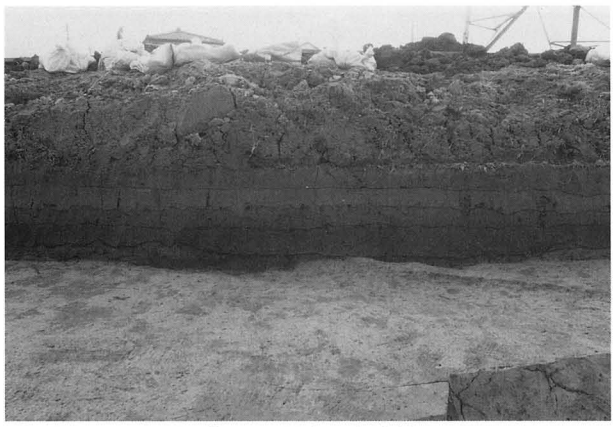


写真11　調査区南壁断面

写真12　調査区南壁断面

写真13　調査区東壁断面

写真14　深掘トレンチ西壁断面

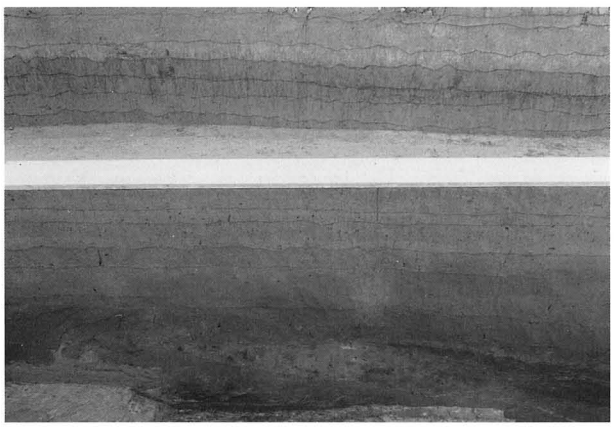
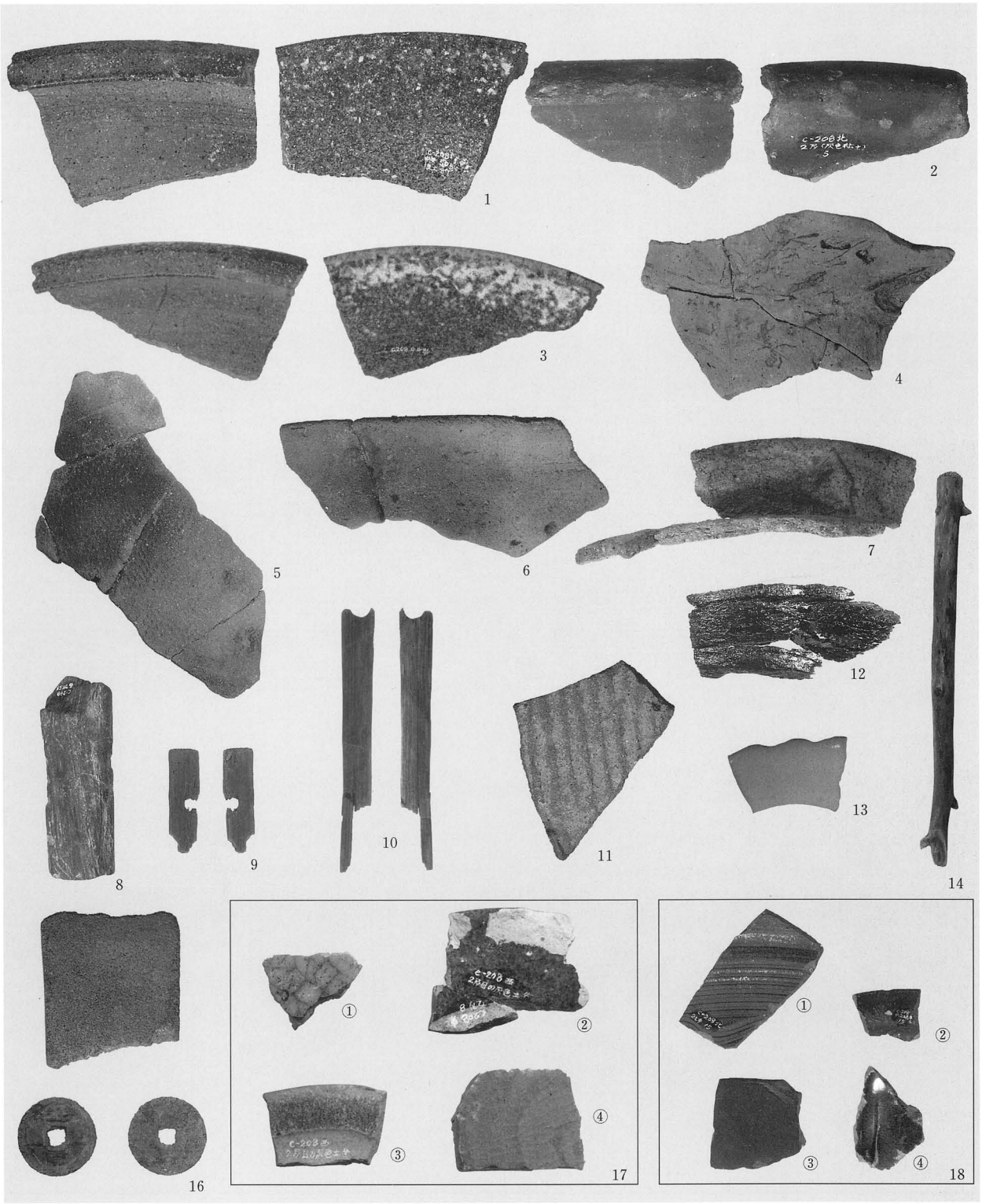


写真15　深掘トレンチ西壁断面

写真16　調査区西壁断面（最深部）



写真図版	遺溝・層位	種　　別	産　　地	年　　代	備　　考
17－12	Ⅵ　層	漆器・椀			外面に漆絵あり
17－13	Ⅳ　層	磁器・皿	肥前	17C～18C	白磁？輪花皿
17－17－①	Ⅱa層	陶器・皿	志野美濃	16C末～17C初（大窯Ⅴ期）	
－②	Ⅱa層	陶器・皿	古瀬戸	15C？	鉄釉、見込は無釉
－③	Ⅱa層	陶器・皿	古瀬戸	14C？	緑釉
－④	Ⅱb層	磁器・皿	龍泉窯系	13C～14C	青磁、割画文
17－18－①	Ⅱa層	陶器・鉢	唐津	17C後半	
－②	Ⅱa層	陶器・皿	唐津？	16C～17C	鉄釉、折縁
－③	Ⅱa層	瓦質土器・鉢？			
－④	Ⅱa層	陶器・鉢？	大堀相馬？	18C～	灰釉

写真17　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うしろがわらいせき
書名	後河原遺跡
副書名	第3次・4次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第236集
編著者名	平間亮輔、五十嵐康洋
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1 TEL022-214-8893～8894
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
後河原遺跡 第3次 第4次	宮城県仙台市 太白区中田町 字後河原	04100	01273	38°11′20″	140°53′48″	19980413～19980806 19981012～19981118	宅地造成 宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後河原遺跡 第3次 第4次	生産跡 集落跡	弥生・古墳 奈良・平安	水田跡・畑跡 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡・土坑	弥生土器 土師器 須恵器	古墳時代前～中期の水田跡と水路 古代の集落と畑跡 堀り方規模が大きな掘立柱建物跡群

仙台市文化財調査報告書第236集

後河原遺跡

—第3次・4次発掘調査報告書—

1999年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課 022(214)8893～4

印刷　株式会社東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
TEL 263-1166